仙臺叢書

奥羽觀蹟聞老志　上

觀迹聞老志

洞巖佐久間義和直書
觀蹟聞老志鹽釜記事拔寫

此歌能寫得江月之寒夜雪之潔而可謂絶唱也与後醍醐帝雲雨遺紅土御門帝緑葉見春之歌作倶須相頡頏矣

鈴木省三所藏

洞巖佐久間義和畫併書

詩聖杜少陵圖像

仙臺　大内源太右衛門氏藏

杜少陵詩云

國破山河在。城春草木深。感レ時花濺レ涙。傷レ別鳥驚レ心。

烽火連二三月一。家書抵二萬金一。白頭搔更短。渾欲レ不レ堪レ簪。

奥羽觀蹟聞老志解題

本書は。初め伊勢齋助氏の編輯せる。補修奥羽觀蹟聞志老の原稿を請ひ受けたれは。一時は其備にて。直ちに印刷に附する事となりしも。本會幹部諸氏の意見に依り。原本と補修篇と二部に分割するに決したりしを以て。今回は先つ其原本の方を印刷し。次て補修篇に及ほす事となりたり。抑佐久間義和は。學は和漢を兼ね。識は古今に渉り。加ふるに博覽强記にして。精力絶倫。八十四にして世を下りしことなれは。各種の著述は固より身に等しきは。人の周く知る所なるが。其中に就て尤も其心血を注きたるは。本書に若くはなし。蓋し本書は。其著書中の白眉にして。又郷土史の大成したるものなり。且これは仙臺藩第四世の主なる。伊達綱村朝臣（肯山公）の嚴命を奉じ。親しく百萬提封内の名勝舊蹟を踏査し。之を古文舊記に徵して其實を得之を書に筆して輯錄したるもの十五策なりしが。寶永四年。火災に遇て悉く烏有となれるなり。依て寶永七年再ひ稿を起して。若干卷を得たれとも。公務に忙殺せらるゝのみならず。又老て病み荏苒として。日月逝くもの九年なり。享保四年に至て。編集の功成るもの凡そ二十卷。此書卽ち是なり。大著述といふ可し。然るに肯山公は。此年六月二十日館を捐られしに。此書の成りしは七月にして。捐館に後るゝ實に一ケ月なれは終に供覽に及はれさるへし。遺憾の極といふへきなり。左はあれ。此書一たひ成り。來學を惠し後生を益すること。甚た大なりしは。肯山公好古の德と義和編集の賜ものなりとす。傳へいふ義和か。人の此書を求むるあれは。金貳分を以て謄寫して。其需めに應したりと。世に希れに其自筆の佳

本を見るは。之が爲めなり。余が藏す所の二十巻中。其十四巻は。實に義和の自筆なれは。聊か文苑の遺珠といふへきか如し。此書成書の後は。皆謄寫本のみを以て。世に行はれたるもの。殆と二百年。明治十六年十二月。我か宮城縣は。官版として發刊せられたり。事は時の宮城縣令松平正直氏の序文中に詳なり。本會が。本書を刊行するに當り。又此官版を本とし。伊勢氏の本と。余が藏本とを以て之を訂正したれとも。猶烏馬魯魚の誤りは勿論。行文の間にも。或は錯誤なきを保せす。そは原著者の罪にあらすして。余等編集者の罪なれは。大方の諸君子請ふ諒察をたまへ。

奥羽觀蹟聞老志序

余令宮城縣之明年使僚屬檢廳中之圖書。既而得佐久間洞巖所著奥羽觀蹟聞老志。即繙閱之。自國郡官使土貢。至名蹟故事。旁搜博索毫靡漏。實爲可供經世考古之用矣。顧當時昇平無事徒以文墨彌縫一世者何限。獨洞巖以雄藩耆宿。著此有用之書。其志洵可嘉焉。凡斯文之顯晦。未必不由時運之隆汚也。且其道固有忽於往而貴於今者。有行於遠而止於近焉。洞巖之歿。已百有餘年。而後大顯於今。所謂行於遠。而止於近者耶。明治維新。奥羽分割爲七州。而屬我縣治者。概居其一。地理風俗之沿革。戶口物產之盛衰。可徵於古昔者往々取信於斯書焉。其益後人。豈淺鮮哉。剏原本係其手蹟。筆致溫秀。古雅可愛。乃其人精神所注。藹然不可掩也。因命謄寫刊

行以頒同好者。蓋亦成洞巖之志也。

明治十六年九月

松平正直撰

觀蹟聞老志序

自古稱勝地名區。傳古蹟舊墟者。倭漢人賞書載焉。特中華之人。因詩而著。依文而述。且於地理方角書。雖代々不乏近世如大明一統志・方輿勝覽・廣輿記等盡之。其中記勝地名區而佳觀者。如西湖遊覽志是也。精其事詳其蹟也。足以娛其心志矣。於
我日國亦歌人采之詠藻。詩客擧之唫章。其佗出乎傳記集錄者惟多。唯其所編集者不博所記錄者不備焉。故縱有稱其國者。或不分郡縣有擧其地者。或不審方角。是以欲窮其詳審微細豈可得哉。若風土記遺編。比之中華之地志。則是亦疎闊闕略。不以足徵之。剩所欠失者多而纔餘二十篇。可謂憾之甚者也。吾奥州者扶桑之大邦。名迹勝地亦甲於圖國矣。然古來記錄者不傳。集說者亦不備焉。不

肖適生乎斯東鄙。而性僻愛丘山。故平素玩好欲履太史公之迹儌謝康樂之志。又幸遇前大守君好古之盛擧。屢蒙嚴命巡視封疆之舊地也。直視親見觸目者維多。是以前年輯錄者。已十五策罹丁亥之災而爲烏有矣。爾後欲尋而輯之備觀覽便遺忘焉。寶永七年庚寅。起翰艸稿若干。然其間公務紛々。且加旃以老病。而不堪參考纂輯之勞。仍不果厥夙志者九稔于茲。是歲稍成編集之功。凡十八卷。比諸舊本則簡帙益重大。於是用舊書題號。曰之觀蹟聞老。蓋取之班孟堅之西都賦也。

享保四年己酉孟秋星會日五城樓下　微臣　容軒源義和序于家塾獻翠亭。

東奥州觀蹟聞老志凡例

一凡此書例始擧一國郡縣次敍官使次記土貢是乃欲令視者概見奥羽之曠濶歷代之人物土地之便利焉次之以名跡而詳地理之考證次之以故事而考古今之治亂次之以遺事而知東國之舊說終之以東遊而証其事實也

一輯名迹例聊據西湖遊覽志之例先擧一郡事實首是及郡中之名區勝迹也

一記事例擧地理方角于其下附之以里人鄕俗之說焉然後及傳記雜錄而或擧舊說或載古歌其旨可視

一書中雖鄕談村語野話街說於可証者則不拘卑猥瑣碎之拙采而載之於其眞僞虛實邪正得失則欲令視者折衷而用捨之擇其可否而取其義焉

一書中附愚按且收辨論者其旨趣不一焉或使考案或備事証或正謬誤斷是非或解昏惑或質妄說或闢異端或改習染者往々

一有雖一事數說者纂載之不厭重復并出焉令視者有便參考也

一引古書者有載其全書者有收其本文者或有假古意而新作者或有除鄙俗而易意詞者

一此書卷數若干簡帙重大其事多般而聞見亦乏豈堪老拙愚昧能遑衰力以悉詳審微細哉故不欲就有道因先覺而一々改正其謬語差舛固多抵牾錯亂者矣庶幾後君子加芟削于彼遑質正于此而歸其至當矣是乃予微意也

奥羽觀蹟聞老志目錄

標葉郡　宇多郡（相馬領）

卷之十二

行方郡　階上郡　色麻郡　新田郡

長岡郡　葛岡郡　丹取郡　小田郡

志波郡　富田郡　耶麻郡（一作耶磨）　糟部郡（一作糟）　肥内郡　和我郡　稗縫郡（稗繼稗貫）

磐手郡　津輕郡

卷之十三

羽州

出羽國府

飽海郡　田川郡　平鹿郡　山本郡

秋田郡　仙北郡　最上郡　遊佐郡

村上郡　雄勝郡

卷之十四

故事類

卷之十五

故事類

卷之十六

故事類

卷之十七

故事類

卷之十八

故事類　義經事實考附錄

卷之十九

遺事類上

遺事類下

卷之二十

東遊類上　東遊類下

奥羽觀蹟聞老志卷之一

仙臺　佐久間義和著

國郡州縣略考

國號陸奥

按續日本記三十八代齊明帝五年三月記作道奥又七月記作陸道奥

隋書云日本在百濟新羅東南其地類琵琶地勢東高西下東西數千里南北數百里九州居西爲首陸奥居東爲尾山城居中乃彼國之態也

大明一統志日本部曰土產金東奥州出細絹花布硯等亦有之

按細絹花布亦多般蓋花布謂狹細布歟

已下五十四郡考

按古稱奥州乃五十四郡其說不詳今以見國史及舊記而榘之以記焉

三十二代用明朝定五畿七道

四十二代文武朝分六十六國

拾芥抄曰和銅五年始割陸奥二郡置出羽國

按和銅乃四十三代元明年號

或書云大寶元年辛丑始置出羽國（四十二代文武年號）

又曰一條院御宇藤原實方貶奥州尋阿古野松而無知人有一翁曰阿古野松在出羽國奥羽昔一州而今分爲二

續日本記曰元明帝和銅五年秋九月己丑太政官議奏曰建國辟疆武功所貴其北道蝦夷遠憑阻險縱狂心屢驚邊境望置一國奏可之於是始置出羽國焉

冬十月丁酉朔割陸奥國最上置賜二郡隷出羽國焉

又曰同六年冬十二月辛卯乃建陸奥國丹取郡也

又曰同七年冬十月丙辰割尾張上野信濃越后等國民二百戸配出羽柵戸

又曰靈龜元年夏五月庚戌移相摸上總常陸上野武藏下野六國富民千戸配陸奧焉
又曰四十四代元正帝靈龜二年秋九月以陸奧置賜最上二郡及信濃上野越前越後國百姓各百戸隷出羽國
又曰同三年夏五月乙未割常陸國之石城標葉行方宇太曰理菊多六郡置石城國割白河石背會津安積信夫五郡置石背國
按右十一郡共是陸奧國郡也然則常陸蓋誤奧陸字可視也或曰石城近乎常陸故舉此乎
又曰同五年冬十月戊子柴田郡置苅田郡
又曰四十五代聖武帝神龜五年夏四月丁丑陸奧國請新置白河軍團又改丹取軍團爲玉作軍團并許之
又曰四十八代稱德帝神護景雲元年冬十月乙巳置陸奧國栗原郡本是伊治城也
右書中所記者如此且夫世之沿革亦其不詳者多可見如今言其郡縣並記于書者則延喜式神名牒源順倭名集拾芥抄簡用集等也仍今互舉參考則其郡員之多少亦可怪故記諸下以備其考索云

延喜式神名帳陸奧國一百座 大十五座 小八十五座

白河郡七座 大一座 小六座

都々古和氣神社 名神大
伊波止和氣神社
白河神社
八溝嶺神社
飫豐比賣神社
永倉神社
石都々古和氣神社

苅田郡一座 大

苅田嶺神社 名神大

名取郡二座 並小

多加神社

佐具叡神社
宮城郡四座 大二座 小二座
伊豆佐賣神社
志波彥神社 名神大
鼻節神社 名神大
多賀神社
黑川郡四座
須伎神社
石神山精神社
行神社
鹿島天足別神社
賀美郡二座 並小
飯豐神社
賀美石神社
色麻郡一座 大
伊達神社 名神大
玉造郡三座 並小

溫泉神社
荒雄河神社
溫泉石神社
亘理郡四座 並小
鹿島伊都乃比氣神社
安福河伯神社
信夫郡五座 大一座 小四座
鹿島天足和氣神社
鹿島神社
黑沼神社
東屋沼神社 名神大
東屋國神社
白和瀨神社
志太郡一座 小
敷玉早御玉神社
磐城郡七座 並小 磐城作石城 見靈龜二年記
大國魂神社

二俣神社
温泉(ユノ)神社
佐麻久嶺(ミネ)神社
住吉神社
鹿島神社
子鍬倉神社

標葉郡一座 小 標和名集訓志波俗稱志波根

苕野(クサノ)神社

牡鹿郡十座 大二座 小八座

零羊(ヒツジ)埼(サキ)神社 名神大
香取伊豆乃御子神社
伊去(サリ)波夜和氣命神社
曾波神社
拜幣志神社 名神大
鳥屋(トリヤ)神社
鹿島御子神社
大島神社

久集比奈(クスヒナ)神社
計仙麻(ケセマ)神社

桃生郡六座 大一座 小五座

飯野山神社
日高見神社
二俣神社
石(イハカミ)神社
計仙麻大島神社 名神大
小鋭(ヲト)神社

行方郡八座 大一座 小七座

高座(タカクラ)神社
日祭神社
冠嶺(サカミネ)神社
御刀(ミトノ)神社
鹿島御子神社
益多嶺(マスタミネ)神社
多珂(タカ)神社 名神大

押雄神社

栗原郡七座 大一座 小六座

表刀神社

志波姫神社　櫻田村

雄鋭神社　一迫築館村

駒形根神社　三迫沼倉村

和我神社　一迫荻澤村

香取御兒神社　一迫築館村

遠流志別石神社

膽澤郡七座 並小

磐神社

駒形神社

和我叡登舉神社

石手堰神社

膽澤川神社

止々井神社

於呂閉志神社

新田郡一座 小

子松神社

磐瀨郡一坐 小

桙衝神社

會津郡二座 大一座 小一座

伊佐須美神社 名神大

蠶養國神社

小田郡一座 小

黃金山神社

耶磨郡一座 大小無

磐椅神社

斯波郡一座 小

志賀理和氣神社

氣仙郡三座 並小

理訓許段神社

登奈孝志神社

衣太手神社

安積郡三座大一座　小二座
宇奈己呂和氣神社名神大
飯豐和氣神社
隱津島神社
柴田郡一座大
大高山神社
宇多郡一座大
子眉嶺神社名神大
伊具郡二座並小
熱日高彥神社
烏屋嶺神社
磐井郡二座並小
配志和神社
儛草神社
江刺郡一座並小
鎭岡神社
出羽國九座大二座　小七座

飽海郡三座大二座　小一座或曰郡下記二並小一而大物忌月山下記二名神大一蓋記錄之誤乎。
大物忌神社名神大
小物忌神社
月山神社名神大
田川郡三座並小
遠賀神社
由豆佐賣神社
伊氐波神社
平鹿郡二座並小
鹽湯彥神社
波宇志別神社
山本郡一座
副川神社
右陸奧國凡三十一郡　出羽國四郡兩國三十五郡大社十七小社九十二
按所記神社索之封疆及佗所強半失其神號而不詳其地者多其實皆出自神道忘其職而失其傳記來由浮屠混神宮而雜佛宇遂傳後

世無據尋其迹考其原也可𦤶而歟識有志之
君子有爲之人主悉正其名詳考其址以復諸
古昔則庶幾國豐民安而歸其神德乎識者辨
焉
源順倭名集類聚國郡部東山道第五十四曰
陸奥 三知乃於久
陸奥國　國府在宮城郡　鎭守府在膽澤郡
行程上五十日下二十五日
按國府鎭守府始見于此宜閲古制之證
管三十六田五萬千四百四十町三段九十九
步　公八十萬三千七百五束五把　本頴貳
百三十八萬六千四百三十二束　雜頴九十
七萬九千七百十五束九把五分
白河 之良加波 國分爲高野郡今分爲大沼
河沼二郡 磐瀨 伊波世 國分爲伊達郡
會津 阿比豆 耶麻 山 安積 阿佐加 安達
安多知 信夫 志乃不 國分爲伊達郡 刈
田 葛太 柴田 之波太 名取 奈止里 菊多
木久多 磐城 伊波岐 標葉 志波 行方 奈
女加多 宇多 宇太 伊具 以久 亘理 和多
里 宮城 美也木 黑川 久呂加波 加美 訓欠和
色麻 志加萬 玉造 太萬豆久里 志太 之多
栗原 久利波良 磐井 伊波井 江刺 衣佐志
膽澤 伊佐波 長岡 奈加乎加 新田 邇比太
小田 乎太 遠田 止保太 氣仙 介世 牡鹿
乎志加 登米 止與米 桃生 毛牟乃不 大
沼 於保奴萬
今按本郡三十五郡　分屬四郡 合三十九郡
出羽國 以天波 國府在平鹿郡
行程上四十七日　下二十四日
管十一　田二萬六千百九町二段五十步
正二十四萬四千二十束　公四十萬束
本頴九十二萬七千七百十二束　雜頴二十
八萬三千三百九十二束

最上 毛加美　村山 牟良夜末　置賜 於伊太
三雄勝 乎加知　有城謂之答合　平鹿 比良加
山本 也末毛止　飽海 阿久三　河邊 加波乃
倍田川 多加波　出羽國府　秋田 阿伊太
有城企治

同書陸奥國第九十四

白河郡
大村　丹波(ニハ)　松田　入野(ニフノ)　鹿田(シヽタ)　石川
長田　白川　小野　驛家　松戸　小田(ヲタ)
藤田　屋代　常世　高野　依上
磐瀬郡
磐瀬　推會(アンエ)　廣門　山田　餘戸　向方
驛家
會津郡
伴々　多具　長江　倉精　菱方　大島
屋代　大江　餘戸
耶麻郡

津部　量足(カスタリ)
安積郡
入野　佐戸　芳賀　小野　丸子　小川
葦屋　安積
安達郡
小倉　曰理(ワタリ)　鍬山　靜戸　伊達(イダテ)　安岐
岑越　驛家
那田郡
篤借(アツカシ)　那田　坂田　三田
柴田郡
柴田(シハタ)　衣前　高橋　溺城　餘戸　新羅
小野 今存小野村　驛家
名取郡
指賀 今志賀村有　井上 今有井土々上宇相似
名取　磐城　餘戸　驛家　玉前 今岩沼本郷ニ玉
崎有
菊多郡

酒井　河邊　山田　大野　餘戶
磐城郡
蒲津　丸部(コロヘ)　神城　荒川　和(ヤマト)　磐城
飯野　小高　片依　白田　玉造　楢葉(ナラハ)
標葉郡
宇良　磐瀬　標葉　餘戶
行方郡
吉名　大江　多珂　子鶴　眞歛　眞野
宇多郡
長伴(トモ)　高階　仲村　飯豐(トヨ)今相馬領治府稱中村是歟
伊具郡
杵葉(キネヘ)　廣伴　靜戶　麻績(ヲウミ)　餘戶
曰理郡
曰理和多利　坂本今存　望多萬宇多
菱沼比志奴萬
宮城郡
赤瀨　磐城　科上(シナカミ)　丸子　大村　白川

餘戶宮城　多賀今存　柄屋
星河郡按星當作黑傳寫誤之
新田(ニフタ)　白川　驛家
賀美郡
川島　磐瀬　餘戶
色麻郡
相模　安蘇　色麻之加萬　餘戶
玉造郡
府見　玉造　信太(シノタ)　餘戶
志太郡
酒水　信太　餘戶
長岡郡
長岡　溺城
栗原郡
栗原二迫　淸水一迫　仲村今中村有
會津安津
磐井郡

丈几　山田也萬多　砂澤マスサハ今増澤有仲村
奈加無良　磐井　磐本　驛家

江刺郡
大井　信濃　甲斐　槁井カレキ

膽澤郡
白河之良加波　下野シモツケ　常口　上忠　餘戶
白馬　驛家

新田郡ニイタ
山沼　仲村　貝沼　餘戶

小田郡
小田　牛背平太　石毛　賀美　餘戶

遠田郡
清水　餘戶

登米郡メ
登米トヨメ　行方ナメ奈女加多　前條郡名

桃生郡
桃生モナフ　磐城　磐越　餘戶

氣仙郡
氣仙　大島　氣前

牡鹿郡
賀美　碧河アヲナ　餘戶

邪麻郡
分會津郡　日量

出羽國第九十五

最上郡
郡可　山方今城府　最上　芳賀ヘカ　八木ヤキ　山邊
梁田ヤナタ　大倉　村上　長岡　大山　福岡

村山郡
大山　長岡　村山　大倉　梁田　德有トコアリ

置賜郡
置賜　廣瀬　屋代　赤井　宮城ケ　長井
餘戶

雄勝郡
雄勝　大津　中村　餘戶

平鹿郡
山川　大井　邑知　山本　塔用御船訓不詳
鎰刀　餘戸
河邊郡
川合　中山　邑知　田郡　大泉　稲城
芹泉　餘戸
田川郡
田川　甘禰　新家　那津　大泉
出羽郡
大窪　河邊　井上　大田　餘戸
秋田郡
添川　率浦　方上　成相　高泉

拾芥抄諸國郡數并名

陸奥大遠三十六郡
白川　磐瀬　會津　那麻　安積　安達
信夫　那田　柴田　名取　菊多　磐城
標葉　行方　宇多　伊具　曰理　宮城府
黒川　賀美　色麻　玉造　志太　栗原
登米　桃生　氣仙　牡鹿　長岡　新田
遠田　磐井　江刺　膽澤　和我　蘇縫
斯波　磐手　高野　小田
奥四道已上四郡不入田四萬五千七十七町

出羽上遠十一郡
最上　村山　置賜　雄勝　平鹿　山本
飽海　川邊　田川　出羽府　秋田
田三萬八千六百二十八町五反

節用集曰人王三十二代用明帝定五畿七道四十二代文武分六十六个國東山道八之一陸奥州奥大管五十四郡五十四郡文字見職原和抄東西六十日昔與出羽一國市城宮室不可勝計仙窟已具鳥獸充繞以漆爲貢大大上上之國也
白川　黒川　磐瀬　會津　那麻　小田
安積　安達　柴田　刈田　遠田　名取

信夫　菊田　標葉　阿會沼　行方
磐井　和賀　河內　稗縫　高野　日利
玉造　大名門　加美　志太　栗原
江刺　江差　膽澤　長岡　登米　桃生
牡鹿　郡栽　鹿角　階上　津輕　宇多
伊具　本吉　石川　大沼　色摩　稻我
行波　磐前　金原　葛田　伊達　牡鹿
閇伊　氣仙

出羽國（羽州）上管十二郡東西五十日暖氣早而耘厚犬上上國也

飽海　河邊　村上　置賜　雄勝　平苅
田河　出羽（府）秋田　由利　山之　最上
山本

奥羽郡數多少異同考（合考延喜式拾芥節用和名抄四本）

延喜式神名帳陸奥國三十一郡
考順倭名集五十四國郡部載安達菊多長岡新田遠田登米大沼七郡而爲三十六郡
除刈田信夫斯波三郡
拾芥抄中末載那麻安達那田菊多登米長岡遠田和我蘇縫磐手高野十一郡而爲三十九郡
除苅田小田那磨三郡
環翠軒節用集載那麻安達遠田菊田阿會沼磐手和賀河內稗縫高野大名門江差長岡登米郡栽鹿角階上津輕本吉大沼稻我行波磐前金原葛岡伊達閇伊二十九郡而爲五十六郡
除岩城新田那磨斯波四郡
源順倭名集國郡部三十六郡
考同書九十四郡里數載那田標葉那麻三郡而爲三十五郡
除信夫刈田大沼三郡
拾芥抄載蘇縫和我斯波磐手高野五郡而爲三十九郡

除刈田小田大沼三郡

節用集載標葉阿曾沼和我河內稗縫高野大名門江差郡栽鹿角階上津輕本吉石川稻我行波磐前金原葛岡伊達牡鹿閇伊二十二郡而爲五十六郡

除若城一郡

拾芥集

多於延喜式十一郡

除三郡倶詳于前下做此

多於和名集五郡

除二郡

節用集載小田刈田阿曾沼河內稗縫大名門江差郡栽鹿角階上津輕本吉石川大沼稻我行波磐前金原葛田伊達牡鹿閇伊二十二郡而爲五十六郡

環翠軒節用集五十六郡

右郡名重出者有之且誤字者亦多矣故辯其義于下焉總論

安積古稱阿久標羽古稱染羽加美古稱神野

宇多古稱浮田伊具古稱伊久後來改其字稗縫一作蘇縫古書河地蘇字乃稗字之誤繼字亦縫字之誤皆依草書而誤其字于傳寫者也縫亦後改貫字訓以相似也仍今[illegible]稗貫是也江刺又作江差按今刊本舉兩名而爲二郡矣是乃所以拘刺差異文字而分之也以其音同訓同而考之則實一郡而妄分之今所呼乃江刺之字也然則須江差乃除之而可矣牡鹿一作杜鹿以其字體相似而是亦誤二其郡焉皆傳聞書寫之誤也其餘同名同字之類多除之則尤合五十四郡之數矣故後世稱之曰五十四郡也其中亦後世廢除者多若色麻新田長岡葛岡岡字誤作田或曰川田字也小田等今已爲邑也色麻今作四竈爲賀美郡邑新田亦分上。邑而在同郡相傳往昔足利家分流下中三斯波源家兼爲陸奧探題以新田而爲治府焉以爲其名近仇家之氏於是改之曰大崎是也仇字乃新田氏也葛岡今爲玉造郡邑岡作田字誤也或曰是乃古之刈田字也非誤之小田今併在牡鹿郡事詳于牡鹿郡高野今號田村比內作河內非也古贅柵地今號二戶糟部今號九戶三戶今屬岩手郡是古昔海上郡是也

右多取之白石先生奧州五十四郡考

延喜式神名帳出羽國四郡

考倭名集國郡部載最上村上置賜雄勝河邊出羽秋田七郡而爲十一郡

考郡里數則又除山本飽海而爲九郡
考拾芥抄則除山本而爲十郡
考節用集則載由理山之二郡而爲十三郡
考羽州地圖則載楯引遊佐豊島檜山四郡而
爲十三郡除飽海河邊二郡
我太守封疆郡數凡二十一郡
刈田　柴田　伊具　曰理　宇多　名取
宮城 國分庄 高城庄　黑川 大谷庄　志田 高倉庄 松山庄
加美 田河庄　玉造　遠田 岡田庄　栗原 金屋
庄庄 一迫庄 三迫庄　二迫　磐井 西磐井庄 流庄　膽澤
江刺　登米　氣仙　本吉 氣仙沼　桃生 深谷
庄　牡鹿 遠島　村落凡千十八邑
奥羽名區異同考
歌枕名寄東山部陸奥
陸奥山　金山　深津島山
安積山 石井 沼里　會津山 嶺 河關　信夫 山岡 浦原 渡杜 里
安太多良嶺　安達 原野 黑塚　松山 末之松山

栗駒山　奈古會 山關　二方山
不忘山　白河關　衣關 河
憚關　下紐關　宮城 野原
眞野萱原　市師原　山榴岡
片戀岡　荒野牧　武隈
阿武隈 河　稻葉渡　名取河 郡里 御湯
玉川 里　野田玉川　玉造江 河
袖渡　緒絶橋　戸綱橋
朽木橋　小河橋　面和久橋
栗原 姉場松　阿古耶松　標葉堺
壷石文 碑　狹布　淺香潟
素都濱　十符浦　興井 都島
小黑崎 美豆小嶋　多湖浦島
松島 浦島　小島　松浦島
血鹿鹽竈 或千家浦　浮島
籬島　凡五十有三區
同書出羽

最上川　戀山　宿世山
伊那無耶關　阿保登關　澄田河
平賀　奈曾白橋　蚶方神
袖浦湊　可保湊　鶴島
別島　凡九十有二區

八雲御抄名所部

山部
あさか山尾張或伊勢國又在陸奥陸奥は安積山也紅葉ふかつし
ま山陸こかねはなくあつまなるさかな山
みちのく山
同金山は秋山なとよめりしたひかは下になくとりあさか山同倭類はあさくはは
といへるに病ならしゆへに濁りてあさゝか山といふへしと倭成は不可然也かけさへ
みゆる山の井は此あさか山也にこりていふへきなりあいつの山陸
後撰滋靜女末の松山同古今奥風松山とも浪こゆるしのふ
山乾同伊勢物かたり

根部
あいつね奥萬三ヶ國の際也あさくらね同

隈部
さいのくま大和範兼抄さゝのひのくま川といへるは奥州の事なりた
けくま陸後撰二木松

原部
しのふか原陸萬しめゆふなゆめまのゝかや原
同万葉みちの國あたちの原同拾兼盛みやきか原陸千匡房
みやきの原同事也みやきのゝ同

牧部
をふちの牧陸

關部
なこその關陸師賢後衣關同後白河の關陸拾兼盛
はゝかりの關同後撰いなむやの關出羽むや
むやの關同名也
異說とや〳〵とりのむや〳〵の關鷹をいふせは
すゝかといふ不用也

橋部
とつなの橋陸親隆手綱く渡る也非誠ノ橋りてとたへの
橋是只よめる又名所歟

杜部
しのふの森陸千隆房

温泉
なとりのみゆ陸大和物語

沼部
あさかの沼陸古はなかつみあさかの沼に詠菖蒲ひかこと也かの國
に無菖蒲仍かつみを吾もふくやと在俊頼抄

川部
ひのくま川河内萬是みちの國のあふくま川をいふといへるもの一説也
あふくま川陸古あふくまにといへりなとり川
同忠岑古あい津川同白川同衣川同拾玉川野田の玉
川とも續俊頼能因つの國とも有

島部
野しま近萬は有也陸奥にも野しま範兼抄淡路也えそが千島陸千

浦部
しほかまのうら陸古今神御在所とふの浦同新古爲仲
しかのうら肥前道信歌

海部
おくのうみ萬陸奥國海也　凡四十有區

色葉部
國〻の中に所〻の名あり古より讀置聞なれたるは

山部
奥州　あさか山末の松山　あいつ山千とせ山　青葉の山

松部
陸奥　たけくまの松　出羽　あこやの松

野部
陸奥　みや木の萩有安達のへ　ひろ野　眞野

關部
陸奥　衣手の關白河の關　なこその關手まの關　岩手の關
出羽　いなやの關

川部
陸奥　合曲川白川　名取川　會津川　衣川

出羽　最上川　はやくて稲舟登りわつらふ

浦部

陸奥　しほかまのうら　信夫のうら

出羽　そてのうら

島部

陸奥　松しま　をしま　松かうら島
籬のしま　つねにうき〳〵へたゝれり

出羽　野しま　花しま　なき名しま

橋部

陸奥　小田邊の橋　とつなの橋　つなてをくりてわたるなり

郷部

陸奥　あさかの里　名取の里　奥の井の里
いはての里ハ紀伊ト有

社部

陸奥　しほかまの明神　凡三十有九區

類字名所和歌集

陸奥

磐手　憚關　十綱橋

千賀鹽竈　十府浦　小川橋

緒絶橋　雄島　小黒崎

加島　玉川　武隈

玉造江　袖渡　壷碑

名取　奈古曾關　浮島

奥海　尾駮御牧　興井

朽木橋　黒塚　山井

松島　籬島　眞野萱原

松賀浦島　狹布　衣關

衣河　夷　安積

會津山　阿武隈　安達

會瀬川　佐波古御湯　宮城

美豆島　都島　信夫

鹽竈浦　白河關　下紐關

末松山　凡四十有六區

出羽

袖浦　戀山　象潟

最上川　凡四區

夫木集

陸奥

武隈　白河關　黒塚
安達　野田　岩手關
名社關　信夫山　籬島
浮島　磐手里　玉田横野
淺香沼　衣關　淺香山
末松山　檜隈川　雄島
名取川　松島　鹽竈浦
宮城原　松浦島　千家浦
山榴岡　信夫岡　岩井
磐手森　木下　興井里
會津山　鴨河原　伏拜
山井　小黒崎　宮城野
岩手野　夕葉山　青羽山
栗駒山　阿武隈川　信夫浦
奥海　衣川　野田入江

玉造江　音無山　不忘山
片岡山　金山　瞿麥山
秋田山　立野（駒）　阿武隈山
衣々山　陸奥山　磐手岡
片戀岡　緒絶橋　十綱橋
戸絶橋　小川橋　面和久橋
姉歯橋　抑關　名社山
會津關　岩手野　津輕野
八十島　千島夷（出羽又奥州　慈鎮歌）
美豆小島　都島　玉造川（或攝州）
玉星川　昔川（栗原）　野田玉川
會瀬川　袖渡　綾瀬
名無沼　十府浦　雄島浦
水江浦　外濱　泊磯
鹽竈磯　籬渡　音無瀑布
牧荒駒　十符菅薦　奥郡
狹布郡　衣里　夷里

會津里　信夫里　壷碑
信夫文字摺　信夫衣　水江島子爲相卿歌
伊賀保沼上野又陸奧　凡一百二區
出羽
最上川　象潟　板敷山
夕葉山　袖浦　伊奈無耶關
野島　八十島　津輕濱
凡九區
松葉集奧羽部
陸奧國
磐手杜岡關里山　磐井里　市師原藻鹽
稻葉渡藻鹽　憚關類字　十綱橋類字
十符浦類字　戸絶橋藻鹽　千家鹽竈類字
小川橋類字　緒絶橋　雄島浦磯
小黑崎　抑關池藻鹽　不忘山濱藻鹽
片戀岡　加島　霞谷
金山　玉造江　武隈

多湖浦島藻鹽　多波志根山　玉川類字
玉星河夫木　袖渡類字　素規濱藻鹽
壷碑　山榴岡　名取里川郡御湯
名無沼　奈古曾關類字　昔河藻鹽
浮島神類字　野田入江一橋　奧海類字
奧牧　尾駮　御牧類字　興井類字
於母和久橋藻鹽　起居里八雲御抄
藥田　栗駒山　栗原藻鹽
朽木橋類字　黑塚類字　山井類字
耶麻郡和名　松島橋浦　籬島
眞野萱原　松賀浦島　狹布郡渡
二方山名寄　深津島山藻鹽　小鶴池和名當國行方
郡　衣河藻鹽和名磐井郡　衣關類字
夷類字　朝香山沼原類字淺香郡
阿也瀨夫木　吾田多良　阿武隈川藻鹽安達郡
姉葉松藻鹽一阿爾葉松　安達野原
會津山根河里關類字會津郡　會瀨川類字

秋田山 藻鹽　荒野牧 藻鹽　波佐古御湯 類字
衣々山 類字 藻鹽　都島 類字　美豆小島 類字
美津江浦 藻鹽　陸奥山 八雲御抄　御浦崎 藻鹽
宮城野原 類字 宮城郡　峯越山 藻鹽 安達郡
下紐關 類字　鹽竈浦 磯沖 宮城郡　信夫山岡浦原里杜
白河關 類字　篠塚驛 藻鹽　標葉堺 藻鹽
物思山 藻鹽　末松山　凡八十有六區

出羽

板敷山 藻鹽　顏湊　袖浦
鶴島 藻鹽　月之山 藻鹽　霞島
津輕島 野邊　奈曾白橋　八十島 八雲
戀山 類字　出羽關　阿保登關 藻鹽
阿古耶松 藻鹽　象潟 神類字　最上川 類字 最上川
宿世山 藻鹽　無耶無耶關 八雲御抄 或うやむやの關 或いなむやの關 或もやもやの關
凡十有七區

奥羽觀蹟聞老志卷之一 終

奥羽觀蹟聞老志卷之二

仙臺　佐久間義和著

官使類

此篇欲輯歷代官使征東使以後人知往昔防禦武備如此矣

職原

鎭守府將軍 居陸奥平違勅者後陸奥守兼之

陸奥出羽按察使府

按察使 相當從四位下 唐名都護 近代納言已上兼之

記事 唐名都護府事

鎭守府 見武官下

將軍　副將軍　軍監　軍曹

陸奥者上古以來爲邊要爲其國境廣元明天皇和銅五年九月分置出羽國元正天皇養老二年置按察使令監察兩國事聖武天皇二年陸奥國內又置鎭守府府國相並行國事

云々

秋田城

介 爲出羽介者兼之除目不任之被宣下也

又武官部

聖武天皇御宇陸奥國置鎭守府初任將軍遣之若是本朝置軍府之初歟

又鎭守府部

將軍一人 相當從五位上 唐名鎭東將軍

古來尤爲重寄非武畧之器者不當其任仍代代稱將軍者鎭守府將也中古以來爲陸奥守者多兼鎭守不可必然事歟守者宜擇吏幹之才將者須用藩鎭之器故也

又昔並置府國依恐于地廣而在邊要也以信夫郡以南租税充國府之公廨以苅田以北稻穀充鎭守府之兵粮云々見格又邊要之中以陸奥爲最仍此國昔置五千人兵也是皆可屬鎭守爭建武三年勅三位已上爲當府將軍者可加大字者云々是依國司請奏被下宣旨也將軍相當五位也三位已上位高職下依之中加大字而已

副將軍二人 中古以來不任之

軍監 相當正七位下 唐名兵曹參軍事

軍曹 相當從八位上 唐名上鎭錄事

堪武勇之士可補此職歟近代於軍曹者公卿給之時間申之無其謂事也

傔仗二人

擇重代武士補之將軍判授之官也凡傔仗者陸奥守給二人按察使給四人云々

征夷使

大將軍一人

征夷者始於日本武尊每有兵事遣將軍也粗見舊記未置鎭守已往東征人或爲按察使或爲鎭守將軍文屋綿丸以來有征夷將軍之號云々愚按於鎭府者已有鎭將依之重遣將師

之日臨時加征夷號歟坂上田村丸者稱征夷將軍平將門叛亂時參議右衛門督藤原忠文朝臣任征東大將軍其弟仲舒源經基爲副將軍發向其後征夷號久以中絕

職原私抄

本朝置鎭守府人王四十五代聖武天皇御宇陸奥國難治依之置此府治之鎭守彼國也

陸奥出羽按察使府

分國之時地平而境不分國之奥而陸地無高下此故號陸奥分郡于五十四郡

按五十四郡郡數之出所是亦一證也

人王四十三代元明天皇御時彼國地廣而因難治於其國端如鳥翼之地分出和銅五年九月曰出羽國

四十四代元正天皇御時養老二年太守之外置按察使官令監察兩國依之曰陸奥出羽按察使以帝都以大納言兼官之人治之

四十五代聖武天皇置鎭守府將軍于彼國設左文右武以守其國信夫郡以南充租稅于國府公廨官家刈田郡以北充稻穀于鎭守府

又建武三年勅屬五千兵于鎭守府

拾芥抄 百官部

陸奥出羽按察使 養老元年十月始置之

官位相當部

中納言兼左近衛大將從三位行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣 弘仁格

大納言正三位兼行左近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房 貞觀格

從三位守大納言兼左近衛大將行春宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣宣國 延喜格

歷代補任考

人王十代崇神帝朝

豐城命

帝四十八年四月丙寅令治東

十二代景行
御諸別王
五十六年八月詔領東國子豐城玄孫彥狹島王
十七代仁德
田道
五十五年令擊蝦夷敗死伊寺水門後化蛇蝎害賊
三十三代崇峻
宍人臣雁
二年七月壬辰朔近江臣滿爲東海道使
三十五代舒明
大仁上毛野君形名
九年三月拜形名爲將軍令討蝦夷
三十八代齊明
阿倍臣
四年四月伐蝦夷連年不息
四十三代元明

巨勢朝臣麻呂 左大辨正四位下
和銅二年三月壬戌爲陸奥鎭東將軍
紀朝臣諸人 將軍內藏頭從五位下
同時爲副將軍
上毛野朝臣安麻呂 從五位上
同年七月爲陸奥守 按當國守權輿
藤原朝臣房前 從五位上
同年九月己卯撿察海東山開剗
四十四代元正
上毛野朝臣廣人 正五位上
陸奥按察使 爲蝦夷所殺 按陸奥按察使始見此時也
多治比眞人縣守 正四位下
養老二年九月丁丑爲持節征夷將軍
下毛野朝臣石代 左京亮從五位下
同時爲副將軍
阿倍朝臣駿河
同時爲持節鎭狄將軍

多治比眞人宗主 正六位上
出羽國司
四十五代聖武
佐伯宿禰兒屋丸 從六位上
陸奥國大掾 爲夷所殺
藤原朝臣宇合 式部卿正四位上
神龜元年三月丙申爲持節大將軍
高橋朝臣安麻呂 宮內大輔從五位上
同時爲副將軍 兩人共征夷使
大野朝臣東人 從四位上按東人征東奥屢々有功
陸奥守鎭守將軍按察使
藤原朝臣麻呂 兵部卿從三位
天平九年正月丙申爲陸奥將軍大使之陸奥
佐伯宿禰豐人 正五位下
同時爲副使
坂本朝臣宇頭麻呂 從五位上勳六等常陸守
同時爲副使

大伴宿禰美濃麻呂 正六位上
判官
日下部宿禰大麻呂 正七位下
大掾
紀朝臣武良士 從七位上
判官帥使 美濃丸大丸武良士同時蒙命
田邊史難破 正六位下
出羽國守
犬養德守
天平十一年四月壬午授從四位上爲陸奥國
按察使兼守鎭守府將軍
東人 勳四等 再任重出人惟書名而不記姓氏下傚此
同日授民部卿春宮大夫
巨勢朝臣奈氐麻呂 從四位下
同日攝津大夫
大伴宿禰牛養 從四位下
同日授式部大夫

犬養宿禰石次 從四位下
同日爲參議 東人已下五人依功勞于東征而有叙爵
石川朝臣年足 正四位下
天平十八年四月己卯爲陸奥守
藤原朝臣仲麻呂 正四位下 參議式部卿
同日爲兼東山道鎭撫使
百濟王敬福 從五位下
同年九月癸亥爲陸奥守
天平二十一年二月丁巳授從三位
佐伯宿禰全成 從五位下
陸奥國介 同年五月甲辰授從五位上
大野朝臣横刀
同時爲鎭守判官
余足人 六位上大掾上
同時授從五位上
四十六代孝謙
敬福 從二位

天平勝寶二年五月辛丑爲宮内卿
石川朝臣豐成 從五位下
同六年十一月辛酉爲東山道使
大伴宿禰古麻呂 正四位下 左大辨
天平寶字元年六月壬戌爲陸奥鎭守將軍
又爲陸奥按察使
全成 從五位上 有内藏忌寸全成蓋同人乎
陸奥守同日爲副將軍
藤原朝臣淨弁 正六位下
同二年正月戊寅爲東海東山道使
石川朝臣公成 從五位下 仁部少卿
同四年正月癸未爲東山道使
藤原惠美朝臣朝獵 正五位下
陸奥國按察使兼鎭守將軍同月丙寅授從四
位下
百濟朝臣足人 從五位上
陸奥介兼鎭守副將軍

小野朝臣竹良 従五位下
出羽守
百濟王三忠 正六位上
出羽介 右三人同日進二階
葛井連立足 正六位上
鎭守軍監
玉作金弓 正六位上
出羽掾
大伴宿禰益立 從六位上
鎭守軍監 右三人同日進二階
韓袁哲 從八位上
鎭守軍曹
益立 從五位下
同五年正月壬寅爲陸奥鎭守府將軍
朝獵 從四位下
同年十月癸酉爲仁部卿陸奥出羽按察使如
故 同十年丁酉爲東海道節度使

田中朝臣多太麻呂 從五位上
同六年四月庚戌爲陸奥守
益立 從五位下
鎭守府將軍 同時爲兼介
朝獦
同年十二月乙巳爲參議
多太麻呂 從五位上
同年閏十二月己亥爲陸奥守兼鎭守副將軍
藤原朝臣田麻呂 從五位上
同七年七月乙卯爲陸奥出羽按察使
多太麻呂 從五位上
同八年四月戊寅爲陸奥守 九月癸亥爲兼
鎭守將軍
四十八代稱德
淡海眞人三船 正五位上
天平神護二年九月丙子爲東山道使
道島宿禰三山 外從五位上

神護景雲元年七月庚戌爲陸奥小掾
石川朝臣名足正五位下　備前守
同月丁巳爲兼陸奥鎭守副將軍
多太麻呂從四位下
同年十月辛卯授正四位下
名足正五位下
同授正五位上
益立正五位下
同前
上毛野朝臣稻人
大野朝臣石本共從五位下
同授從五位上
三山外從五位下
同前
吉彌候部眞麻呂外從五位下
同授外正五位
道島宿禰島足正五位上

同年十二月甲申陸奥國　大國造
三山從五位上
同前　共依造伊治城之功也
田口朝臣安麻呂從五位下　陸奥介
同二年二月癸巳爲兼鎭守副將軍
三山從五位上　大掾
同爲兼軍監
名足正五位上　大和守
同年九月庚戌爲兼陸奥鎭守將軍
三山從五位上
同三年二月甲辰爲陸奥員外介
坂上大忌寸苅田麻呂正四位下
寶龜元年九月乙亥爲陸奥鎭守將軍
四十九代光仁
佐伯宿禰美濃從四位下
同二年閏三月戊子爲陸奥守兼鎭守將軍
笠朝臣道行從五位下

同年七月丁未爲陸奥介
粟田宿禰鷹主 從五位下
同三年正月壬午爲陸奥員外介
佐伯宿禰國益 正五位下
同年九月癸卯於東山道分頭覆損
大伴宿禰駿河麻呂 從五位下
同月丙午爲陸奥按察使授正四位下以老辭之勅而强授之　四年七月甲寅爲陸奥鎭守將軍按察使及守如故
上毛野朝臣稻人 從五位上　稻人從五位上見于前
五年正月甲辰爲陸奥介
百濟王武鏡 從五位下
同日爲出羽守
紀朝臣廣純 從五位下
同年七月庚申爲兼鎭守副將軍　六年九月甲辰爲陸奥介鎭守副將軍如故
駿河麻呂 正四位下
同年十一月乙巳授正四位上勳三等
廣純 從五位上
同日授正五位下勳五等
百濟王俊哲 從六位上
同日授勳六等
石上朝臣家成 正五位下
同七年正月戊申爲東山道使
佐伯宿禰久良麻呂 從五位上 近江介
同年五月戊子爲兼陸奥鎭守權副將軍
駿河麻呂 正四位上
參議陸奥按察使兼鎭守將軍勳三等　同年七月壬辰贈從三位
大伴宿禰眞綱 從五位下
同八年正月戊寅爲陸奥守　同十一年呰麻呂之亂開圍而去
廣純 正五位下
陸奥守　同年五月丁丑爲兼按察使

久良麻呂 從五位上　近江介
同年十二月辛卯爲鎭守權副將軍
廣純 正五位下勳五等
同日授從四位下勳等
久良麻呂 從五位上勳七等
同日授正五位下勳五等
吉彌侯伊佐西古 外正六位上
九年正月庚子授外從五位下
伊治公呰麻呂 第二等
同前　陸奥上治郡大領也
俊哲 勳六等
同日授勳五等
廣純 正五位下勳五等
同年六月庚子授從五位下鎭守權副將軍
十一年三月丁亥爲呰麻呂被殺
久良麻呂 從五位上勳七等
同日授正五位下勳五等

伊佐西古 外正六位上
同日授外從四位下
呰麻呂 第二等
同前
石川淨足
陸奥掾　十一年呰麻呂之亂與眞綱出于後
門去
藤原朝臣繼繩 從三位中納言著續日本記人也
同十一年三月癸巳爲征東大使
益立 正五位上
紀朝臣古佐美 從五位上
同日爲副使
眞綱 從五位下
同月甲午爲陸奥鎭守副將軍
安倍朝臣家麻呂 從五位上
同日爲出羽鎭狄將軍
益立 征東使

同日爲兼陸奥守　後爲陸奥持節副將軍
佽哲 從五位上
同年六月辛丑爲陸奥鎭守副將軍
多治比眞人宇美 從五位下
同日爲陸奥介
藤原朝臣黑麻呂
天應元年正月庚午爲兼陸奥按察使右衛士督 常陸守如故
藤原朝臣小黑麻呂 參議陸奥按察使正四位下
同年五月乙丑爲兼兵部卿
按黑麻呂小黑麻呂本一人乎同年六月記曰參議持節征東大使兵部卿四位下兼陸奥按察使常陸守藤原黑麻呂並常陸守及兵部卿則蓋一人乎可並考
古佐美 從五位上
同月乙酉爲陸奥守
內藏忌寸全成

多朝臣犬養
同年六月共爲副使
小黑麻呂 正四位下
同年七月丁卯爲民部卿陸奥按察使如故
八月辛亥授正三位
全成 正五位下
同月癸亥爲陸奥守
古佐美 從五位上
同月丁丑授四位下勳等 己下凡十人同時敍爵
佽哲 從五位上
正五位上勳四等
全成 正五位下
正五位上勳五等
犬養 從五位下
從五位上勳五等
海 乃前所載之宇美也從五位下
從五位上

紀朝臣大津爽 並正六位上

日下部宿禰雄道

百済王英孫

各従五位下

阿部猨島臣黒縄 正六位上

外従五位下勲五等

入間宿禰廣成

外従五位下

益立 征東副使

同月辛巳授従四位下 此時益立憚征期仍令小黒麻呂代之且削其爵位

全成 正五位上 陸奥守

同年十二月乙酉為兼鎮守副将軍

五十代桓武

大伴宿禰家持 従三位春宮大夫

延暦元年六月戊辰為兼陸奥按察使鎮守将軍

大伴宿禰弟麻呂 従五位上

同二年十一月乙酉為征東副将軍

宇美 従五位上

同四年正月辛亥為陸奥守 二月丁丑為陸奥按察使兼鎮守副将軍國守如故 同甲辰授正五位下且賜彩帛十匹絁十匹綿二百把

紀朝臣指長 従五位下

五年八月甲子遣東山道

佐伯宿禰葛城 従五位下

六年二月庚申為陸奥介且為兼鎮守副将軍

藤原朝臣葛野麻呂 従五位下

同月庚辰為陸奥介

俊哲 正五位下 陸奥鎮守将軍

同閏五月丁巳坐事左降日向権介

宇美 正五位下 陸奥按察使守

七年二月丙子為兼鎮守将軍

黒縄 外従五位下

同日爲副將軍
多治比眞人濱成 従五位上
同年三月己巳爲征東副使
紀朝臣眞人
葛城 共従五位下
同前
廣成 外従五位下
同前八年六月庚戌爲副將軍
古佐美 正四位下兼春宮大夫中衛中將
同年七月辛亥爲征東大使 八年記持節征東大將軍
葛城 従五位下征東副將軍民部少輔兼下野守
八年率軍入征途中而卒五月丁卯贈正五位下
池田朝臣眞牧 従五位下
同年征伐爲左中軍別將
黒繩 外従五位下

同時前軍別將 文部善理 高田道成 會津壯丸 安宿戸吉 大伴五百繼 右五人同時戰死故附于此 出雲諸上 道島御楯 右二人同時逋去
巨勢朝臣野足 従五位下
同年十月辛卯爲陸奥鎭守副將軍
濱成
九年三月丙午爲陸奥按察使兼守
藤原朝臣眞鷲 従五位下
十年正月己卯遣東山道閲兵征夷
文室眞人大原 従五位下
同月癸未爲陸奥介 二月辛亥爲兼鎭守副將軍
弟麻呂 従四位下
同年七月壬寅爲征夷大使
俊哲 正五位上
濱成 従五位上

坂上宿禰田村麻呂
野足 共從五位下
同日右四人爲副使
俊哲 正五位上
同年九月庚辰爲兼陸奥鎭守將軍
藤原朝臣仲成 從五位下
同十一年二月乙未爲出羽守 十四年二月
庚子從五位下鎭守府將軍兼陸奥介授正五
位下
俊哲 鎭守將軍
同年八月辛未卒
田村麻呂 從五位下 越後守
同十五年正月戊午爲陸奥出羽按察使兼陸
奥守
野足 正五位下鎭守府將軍兼陸奥介
同年十月甲申兼下野守
田村麻呂 從五位下陸奥出羽按察使

同年同月爲兼鎭守府將軍
古佐美 大納言正三位
十六年四月乙未薨
田村麻呂 從四位下
同年十一月丙戌爲征夷大將軍
三緒朝臣綿麻呂 從五位下近衛將監
二十年閏正月甲子爲兼出羽守
田村麻呂 征夷大將軍
同年二月丙午賜節刀 十一月乙丑授從三
位爲非參議
野足 正五位下 兵部大輔
同月授從四位上 出羽守
綿麻呂 五從位下
同月授正五位上
田村麻呂 非參議從三位征夷大將軍近衛權中將
同年十二月轉正三位 二十二年七月癸亥
爲兼刑部卿

五十一代平城

藤原朝臣葛野麻呂 參議從三位見延曆六年

同二十五年五月丁亥爲東海道觀察使大

同二年三月丁巳爲中納言

藤原朝臣長因 從四位上

同年任陸奧大掾

藤原朝臣緒嗣 畿內觀察使從四位上

同三年五月庚寅爲兼陸奧出羽按察使

安倍朝臣兄雄 東海道觀察使正四位下

同月己酉爲畿內觀察使

五十二代嵯峨

藤原朝臣藤嗣 從四位上右大辨

大同五年八月戊寅爲陸奧出羽按察使

文室朝臣綿麻呂 參議正四位上

弘仁元年八月癸丑爲兼大藏卿陸奧出羽按察使

大伴宿禰國道

同二年正月丙午爲陸奧少掾 遣唐使正四位下古麻呂孫左少辨從五位下繼人男延曆四年坐父事配流佐渡國二十四年有恩敕入京

田村麻呂 大納言

葛野麻呂 中納言

眞道 參議

同二年正月乙卯右三人共奉詔饗渤海使於朝集院賜祿

綿麻呂 正四位上

同年七月乙亥授從三位

國道 陸奧少掾

同月庚午爲權介

清原眞人長谷 陸奧大掾

同三年三月丁卯爲雅樂助

綿麻呂 從三位上

同四年五月辛巳爲征夷大將軍

小野朝臣岑守 從五位上左馬頭

同六年正月壬午爲陸奧守

小野朝臣石碓
同年爲征東使
甘南備眞人高直
同年叙從五位下累任陸奥上野介 承和三年四月丙戌終散位四位下身長六尺三寸少爲文章生能属文巧琴書
藤原朝臣冬嗣 權中納言從三位兼左大將
同八年正月辛未爲兼陸奥出羽按察使
岑守 從五位上陸奥守
同十年正月丙戌授從五位下 天長七年三月壬戌卒五十三終參議從四位上征夷將軍永見三男也
良岑朝臣安世 中納言從三位
同十二年二月辛未爲兼按察使
五十四代仁明
物部匝瑳連熊猪 陸奥鎮守外從五位下勳六等
承和三年三月辛酉改連賜宿禰 又改本居貫附左京二條昔物部小事大連賜節天朝出征坂東凱歌以歸報此功勳令得於下總國始建匝瑳郡仍以爲氏是則熊猪等祖也

藤原朝臣良房 權中納言從三位
同六年正月甲子爲陸奥出羽按察使
御春朝臣濱主 從五位下
同七年正月丁未爲鎮守將軍
藤原朝臣高房 從五位下
同日爲出羽守
良岑朝臣高行 正五位下
同八年正月癸巳爲陸奥守
藤原朝臣大津 從五位下
同九年七月壬申爲陸奥守
小野朝臣信道 從五位下
同十三年正月乙卯爲陸奥守
安倍朝臣安立 從五位下
同日爲出羽守
藤原朝臣富士麻呂 從四位下
同年九月壬子爲相摸守陸奥出羽按察使如故 嘉祥三年二月乙丑卒高野天皇御宇參議從三位式部卿巨勢麻呂朝臣曾孫從五

位上頁作孫正五位下村田之第二子也少遊大學頗涉史漢天性溫雅兼便弓馬天皇在東宮之時稍蒙恩遇久在宿衞能得士卒之歡心天皇謂有將帥之才天長十三年出爲陸奧出羽按察使趣任天皇引於清涼殿恩詔鄭重賜被衣袴綵帛有數嘉祥二年又有勅還京六年春疽發背卒人皆悲惜之時年三十七

坂上大宿禰尙宗 從五位下

嘉祥元年九月辛巳爲陸奧介鎭守將軍如故

五十五代文德

藤原朝臣良相 陸奧出羽按察使

嘉祥三年九月壬寅爲左大弁春宮大夫左近衞中將

小野朝臣篁 參議正四位下從父知奧州

仁壽元年正月甲申爲近江守

坂上大宿禰常岑 從五位下

同時爲出羽守

藤原興世 從五位下 見元慶元年

同年二月辛亥爲陸奧守

良相 正四位下

同年十月壬寅加從三位即日爲權中納言

和氣朝臣巨範

同三年七月庚戌爲陸奧介

文室朝臣道世 右近將監正六位上

齊衡元年八月己巳授從五位下爲陸奧鎭守將軍

良相 權中納言從三位

同日爲大納言按察使如故

阿倍朝臣安仁 中納言正三位

同二年正月丙辰爲陸奧出羽按察使民部卿如故

道世

同日爲下野權介鎭守將軍如故

藤原朝臣弘道

同年六月戊戌爲出羽守

紀朝臣永直 從五位下

同三年正月丙辰爲陸奧守

文室朝臣有眞
同年二月庚辰爲陸奥守
小野朝臣春枝
同日爲鎭守將軍
有眞 従五位下
従五位上
紀朝臣興我業 従五位下
同年十月辛卯爲陸奥權介
坂上大宿禰高道 従五位下
天安二年正月己酉爲陸奥介
按桃生郡樫崎村有高道石墳石上題曰高道墓貞觀五年五月日此役不見三代實錄然存其古墳記年日則此人戰死于此地者不可疑焉仍擧此以備參考
藤原朝臣大瀧 従五位下
同年三月己巳爲陸奥權介 同六月辛卯卒従五位下今川之孫正六位上清名之長男也少遊大學爲文章生承和十五年爲民部少丞左衛三年正月叙従五位下爲武藏介爲刑部少輔天安元年爲大學頭遷爲宮内少輔二年三月遷爲陸奥權介不之任卒時五十六
按大瀧此之時謂武官考之于傳記則始遊大學而勤學中爲文章生後遂爲大學頭是知由來決有傑出之才也以此一人推知往古選國守擇領主帥師將兵者多出自學士文官中矣後世徒選武事專勇敢而與用夫無學文盲之人而備警衛遠戍之任疎不廣之固者同日而論之哉其餘細考國史雖或答勅符或奏叛逆之續密或募兵請救之倉卒或攻城野戰之危急渾以文簡著述而往反之地悉矣然則上代政治之取人豈是崇道重學於其選擧亦左文右武擇才量調官吏亦就彼一人而可推識焉故記此傳而以論其大概云

五十六代清和

安倍朝臣安仁 正三位右近衛大將民部卿大納

陸奥出羽按察使　天安二年八月乙卯奉於
皇太子直曹　十一月戊戌抗跡請解大將曰
安仁材非九德藝謝七功猥蒙先　皇帝之恩
假以大將軍之節辭不獲命僶俛須事猶輪深
哀欲訴非據而奄然崩殂哀號無及今　聖上
承緒鴻化推新含瞬懷肝孰不仰屬安仁委贄
先朝雖無一介之善蹟誠　今上豈思累葉之
恩所以鞠躬刻心志報效而此職任當股肱寄
重爪牙警衛勤處事功夙夜況復整爲合之衆
必資膂力統鷹揚之師宜精驍雄安仁蒲柳秋
衰昏耄日追雖欲自勉力不從心擁雲旗而慚
威稜佩霜劍而愧匪懈恐老病潛發坐嚴陣乞
收將軍之印綬保殘生於桑楡臣解此職而所
帶猶多於效治塵豈謂無地伏願曲垂優恤鑒
其所敢欲而許之不任懇款之至不聽十一月
十一日重上跡曰安仁近歷請款伏侍乾照而
還旨中深未垂矜許魂影畏迫無以自居臣耄

年既及慮散命阽危尙監帶衆官久革謗議而
鴻恩未答纖效無聞居當勵己未能抑辭竊以
將軍之職寄重責深禦侮防非唯力是視假臣
壯年猶尸素況茲暮齡攬同敗荷是以抽丹瀝
懇誓祈久遠伏願天恩無偏特垂監許則備方
理順庸臣獲所不任恩憕之至許之同月十七日
坂上大宿禰當道介從五位下左近衛少將備前權
貞觀元年正月庚午爲陸奥守
安仁
同年四月戊申薨治部卿東人孫太宰大貳寬
麻呂子也齊衡二年領陸奥出羽按察使拜權
大納言志尙謙虚愛公如家時六十七
當道從五位下行陸奥守
同年五月甲戌爲兼當陸權介
平朝臣高棟正三位行權中納言
同年十二月壬寅加陸奥出羽按察使
橘朝臣信蔭散位從五位下

同二年正月丁卯爲出羽守
小野朝臣春枝 從五位下
同年二月乙未爲鎭守府將軍
文室朝臣甘樂麻呂 散位從五位下
同五年二月己酉爲陸奥介
高棟 兼陸奥出羽按察使
同六年正月甲申上表奉賀 帝元服辛巳爲
大納言
安倍朝臣比高 從五位下行武藏介
同日爲出羽權介
源朝臣融 正三位行中納言
同年二月甲午加陸奥出羽按察使
甘樂麻呂 從五位下行陸奥介
同七年正月丁未爲鎭守府將軍
伴宿禰春宗 散位從五位下
同月乙酉爲陸奥介
比高

同日爲陸奥守
御春朝臣能 陸奥權介 木脫峯守 以未篇考之則臣能間
同八年正月甲申授從五位下
可樂麻呂 從五位下鎭守將軍
同月庚寅爲上野權介將軍如故
良岑朝臣經世 從五位上行少納言兼侍從
同九年正月己酉爲陸奥守三月内寅授正五
位下
多治眞人高棟 大藏少輔從五位下
同月己酉爲出羽守 一作同十年
藤原朝臣基經 中納言右近衞大將從三位
同十一年正月辛未加陸奥出羽按察使餘官
如故
春枝 散位從五位上
同十二年正月戊寅爲陸奥介三月己卯爲權
守
能 鎭守府將軍從五位下

同日爲介將軍如故(是乃前所記御春朝臣能同人前脫峯字)

安倍朝臣貞行(正五位下行陸奧守)

同十四年七月辛巳詣闕拜舞引升殿上賜酒醉後賜御衣物而罷(十五年十二月記請三事見土貢部)

基經(從三位守大納言兼左近衛大將陸奧出羽按察使)

同年八月癸亥進階加正三位

五十七代陽成

源朝臣多(大納言正三位兼行陸奧出羽按察使)

元慶元年二月辛未爲左近衛大將餘官如故

四月戊寅奉敕付二省行之

興世(從五位上行出羽守)

同年十一月戊午會百官而廣燕賜祿各有差

同日授正五位下

忠宗朝臣是行(外從五位下行大外記)

同二年正月丁未爲出羽介

藤原朝臣統行(散位從五位下)

同年二月辛巳爲出羽權介

坂上大宿禰好蔭(散位從五位下)

同年四月丁亥爲陸奧權介

藤原朝臣保則(從五位上守右中辨)

同年五月己亥授正五位下即拜出羽權守

小野朝臣春風(散位從五位下)

同年六月壬申爲鎭守將軍(事詳故事部)

源朝臣恭(正五位下行陸奧守)

同年八月丁丑爲兼常陸權介

春風(鎭守府將軍兼相摸權介)

平朝臣季長(左近衛權少將兼陸奧守)

同六年正月庚戌並授從五位上

藤原朝臣良世(陸奧出羽按察使)

同日詣闕上表奉賀天皇加元服

五十八代光孝

安倍朝臣三寅(從五位上行左馬助)

同八年正月甲寅爲鎭守將軍(一曰三月九日)

坂上大宿禰茂樹(從五位下行式部大亟)

仁和元年正月壬申爲出羽守
在原朝臣行平 正三位行中納言兼刑部卿
同年二月丙午爲陸奥出羽按察使任官如故
安倍朝臣清行 正五位下守右中辨
同二年正月丙申爲陸奥守
紀朝臣益國 散位從五位下
同日爲陸奥介
御春日朝臣種實 散位從五位下
同日爲鎭守將軍
行平 正三位行中納言兼民部卿陸奥出羽按察使
同年六月癸酉行平等十二人爲右司
源朝臣是忠 參議正四位下陸奥出羽按察使
同三年六月丁卯爲左司
六十一代朱雀
藤原朝臣忠文 參議
天慶三年二月爲征夷大將軍
藤原朝臣忠舒 忠文弟

源朝臣經基
同日爲副將軍
七十代後冷泉
源朝臣頼義
永承五年爲陸奥守兼鎭守府將軍
高階朝臣經重
康平五年爲陸奥國司
頼義
同五年二月叙正四位下任伊豫守代經重
源朝臣義家
同日叙從五位下任出羽守
源朝臣義綱
同日爲左衛門尉
清原朝臣武則
同日叙從五位下任鎭守府將軍
七十一代後三條
源朝臣頼俊

延久三年爲陸奥守
七十三代堀河
義家
寛治五年十一月爲鎭守府將軍兼陸奥守
八十二代安德
藤原秀衡
嘉應二年五月二十五日叙從五位下爲鎭守府將軍養和元年八月二十五日叙從五位上爲陸奥守
八十四代順德
北條義時
建保五年十二月任陸奥守
九十五代後醍醐
北畠朝臣顯家
延元元年三月任中納言兼鎭守府將軍

附錄

記國史之外或任刺史至東奥或爲遠客想西都之徒有往々出于歷代撰集之中者矣證之互擧其時之人而叙之各類聚其氏而不擇前後又有得其人于倭字者則擧其間以族正字又未得其姓氏者亦輯載諸此後人庶幾考之云

源信明
玉葉旅部 見中務公歌一首 又新勅撰四 有詠籬島以贈忠義

源重之
玉葉別部 有寄能宣歌

むねちか
重之之子見家集 死于奥州有重之哀傷吟

源賴淸 陸奥守
後拾遺別部 有相摸寄末松山而賀轉任歌

源滿仲
見名寄歌枕歌林良材袖中抄武隈松部

平兼盛
拾遺旅部見詠白河關山歌並大和物語
平よりすけ陸奥守
貫之集見橘すけなは兵衛督等送行歌
藤原元善陸奥守
後撰雜三有詠武隈松歌
藤原爲頼
拾遺別部有謝餞別于三條大政大臣歌
藤原基頼
新古今別部有藤原基俊得基頼歌而隔會面歎以此考之則同根之人乎
藤原實方
新古今及新後拾遺別部有中納言隆家送行歌並花山帝御製送歌
藤原倫寧
後拾遺別部有入道攝政贈答歌倫寧乃右大將道綱外祖父
藤原兼時陸奥守
藤原ありとき　陸奥守
貫之集見宰相中將送行歌

藤原冬嗣出嵯峨弘仁八年陸奥出羽按察使
本朝文粹第八書序部見野相公令解序
藤原定國
同見藤原時平延喜格序
藤原兼三
同第六奏狀中見小野道風狀
藤原佐世兼陸奥守
同
橘道眞眞或作貞陸奥守
詞花別部見和泉式部詠衣關歌又後拾遺別部有赤染贈式部歌
橘爲仲陸奥守
詞花別部見太皇大后宮甲斐送行歌又金葉別部有藤原實綱歌同集有定送行歌又雜部有藤原隆資歎轉任歌
橘則光陸奥守
新古今別部見藤原輔尹送行歌又後拾遺別

部有中納言定頼送行歌又金葉別部有途中詠吟贈京師歌

橘則長

後拾遺雜二以相摸歌考之則則光之子也

橘季道

後拾遺雜四有訪則光于東奥而詠武隈松歌盖則光同姓之親戚乎

小野永見　征夷副將軍

見岑守凌雲集

小野千古　陸奥介

古今別部有其母送行歌

桑原官作　陸奥少目

見凌雲集

これとも　陸奥守　己下未得其姓氏

拾遺別部有戒秀法師送行歌

範季　陸奥守

風雅旅部有従三位頼政送行歌

孝義

見歌枕良材袖中鈔

宮内卿師綱　陸奥國司

見袖中鈔勝見部

たゝのふ　陸奥將軍

見大和物語以歌考之則客死于道路者也

朝光　按察使

續後拾遺雜上想像除目詠末松山贈答左近大將濟時

奥羽觀蹟聞老志之卷二　終

奥羽觀蹟聞老志卷之三

仙臺　佐久間義和著

庸貢土產類上

夫奥州者大國也往古以庸貢土產而獻之天子出史錄傳記者往々有之或又其事實見于歌書等者亦多爾後王道衰禮樂征伐出于將軍朝貢亦止焉其間雖不盡與于此稱之佗邦賞之通國者亦有之仍輯之以便觀覽云

日本風土記曰宮城郡貢杉樟檜樫黃櫨茯苓松狐狸猿兎鱒鮭鱈鮎等亦出怪石奇菜桑麻白綿紙墨等

按梓黃櫨茯苓奇菜之外今皆所產也但製墨之事不聞古制

又曰躑躅岡在府之西（非今治府乃指古多賀國府）出紅躑躅官以之摺衣號都都茲摺

按今無此摺矣讀此更知雅物之生于斯地今不傳最可惜猶信夫之於文字摺宮城之於萩花摺也

又曰名取郡貢杉柏檜桐栗梨梅紅花熊鹿猪狐之革猿兎之膽準鷹牧馬鸛鶴雁鷗鴴鵠鷲鷙鱒鮭鮎及海鮮等

按讀此三條審往古之朝貢且知往時此郡中有牧馬今無知其處者實可惜也

又名取川貢鱒鮭鯉等又出怪石水材奉官家

按今此川不出鯉且水材乃今稱之沈木焉是乃和歌所詠埋木是也土人取之或用之器物或燒而用香爐炷香尤奇也世人賞之埋木灰或稱之流木見從三位氏久之詠矣仍舉古歌及乎此者以證之云

古今戀三　よみ人しらす

名とり川せゝの埋木あらはれはいかにせむとか逢見そめけむ

新古今戀一　攝政太政大臣
なけかしよいまはたをなし名取川瀨々の
埋木くちはてぬとも

新後撰春下　定家朝臣
名取川春の日數はあらはれて花にそしつ
む瀨々の埋木

菅原伊長朝臣
憂身よに沈はてたる名とり川又埋木のか
すやそふらん

續古今戀　源　時清
みちのくにありてふ川の埋木のいつあら
はれてうき名とりけん

源三位爲繼
名とり川瀨々にあるてふ埋木も淵にそし
つむ五月雨のころ

津守國明女
埋木のいさやくちなん名とり川あらはれ
ぬへき瀨々は過にき

續千載　少將内侍
いかにして朽たにはてん名とり川瀨々の
埋木あらはれぬ間に

平　政長
うしとてもあふにしかへはなとり川よし
あらはれよせゝの埋木

續後拾遺　從三位氏久
名取川あふせによとむ流木のよるかたし
らてぬるゝそてかな

新千載戀　贈從三位爲子
あらはれてくやしき物はなとり川たへた
る中の瀨々のうもれ木

續後拾遺雜　藤原眞忠
なとり川いかなる瀨にかあらはれて身の
埋木の人にしられむ

新拾遺　前大納言爲定

なとり川瀬々の埋木うきしつみあらはれてゆくさみたれのころ

名所百首　定家

名とり川心にくたすうもれ木のことはりしらぬ袖のしからみ

同　定隆

なとり河心のとはゝ埋木のしたゆく浪のいかゝこたへん

かきりなく忍て人にしらせさりけ人に

家集　定家

せきわひぬいまはたおなしなとり川顯れはてねせゝの埋木

返し

名取河ゆくての浪にあらはれて淺くそ見へむ瀬々の埋木

九月十三夜水無瀬殿歌合河邊戀

なとり川わたれはつらし朽はつる袖のためしの瀬々の埋木

入道攝政歌合に

同　家隆

よしさらはあふ瀬にみへよなとり川つけのまくらのせゝの埋木

河邊に見螢といふ事を

夫木集　式部卿爲相卿

埋木の心もしらすなとり河さもあらはれて飛螢かな

仙洞三首河邊杜鵑　少將内侍

時鳥をのかさ月のなとり河はや埋木のあらはれてなけ

文永二年歌合　前大納言資季卿

くもりなきこよひは秋の名とり河月にや見へむ瀬々の埋木

弘安元年百首　後九條内大臣

埋木もしは紅葉のなとり河あらはれて
ゆく冬のあらしに
　　　　　　　　従二位範定卿
名取川底の埋木あらはるな紅葉はうへの
色に出つとも
　　　　　　　　圓觀法師
みちのくのうきなとり川流れ來てしつみ
やはてん瀬々の埋木

四十二代文武帝大寶二年夏四月壬子令筑紫七國及越後國簡點采女兵衛貢之但陸奥勿貢

四十三代元明帝和銅六年夏五月癸酉令陸奥貢白石英雲母石硫黄

按白石英俗所謂水晶者是也封内處々出之刈田郡出紫石英其色紫艶最可愛硫黄亦多出焉但未聞出雲母也

四十四代元正帝靈龜元年冬十月丁丑陸奥蝦夷須賀君古麻比留等言先祖以來貢獻昆布常採此地（香河村）年時不闕今國府郭下相去道遠往還累旬甚辛苦請於閇村便建郡家同於百姓共率親族永不闕貢並許之（今以出于松前而爲上品）

四十五代聖武帝天平二十一年二月丁巳陸奥國始貢黄金於是奉幣以告畿內七道諸社事詳牡鹿郡金華山下

大明一統志日本部曰土產金東奥州出細絹花布硯等亦有之

四十九代光仁帝寶龜十年九月癸巳勅陸奥出羽等國用常陸調絁相摸庸綿陸奥稅布充渤海鐵利等祿

東史曰奥州磐井郡毛越寺本尊丈六藥師乃基衡乞支度於佛工雲慶雲慶註出上中下之三品基衡令領掌中品運功于雲慶所謂金百兩鷲羽百尻徑七間半水豹皮六十餘枚安達絹

千匹希婦細布二千端糠部駿馬五十匹白布三千端信夫毛地摺千端等也又稱別祿生美絹積船三艘送之按安達絹希婦細布信夫毛地摺此時猶足備寄贈矣然考袖中抄顯昭時毛地摺世上已少見之者也如今基衡所贈如此其多何哉且細布亦其所傳說未分明其義亦可疑

八十二代後鳥羽帝文治二年夏四月廿四日陸奥守秀衡入道請文參着貢馬貢金等尤先可沙汰進鎌倉可令傳進京都由載之云々是去比被下御書御館者奥六郡主東海道摠官也尤可成魚水思也但隔行程無所欲通信又如貢馬貢金者爲國土貢印爭不管領哉自當年早予可傳進且所守勅定之趣也者上所奥御館云々

五月十日陸奥守秀衡入道有送進貢馬三匹竝中持三棹等其馬一兩日飼勞則相副件使者可進上京師之由被仰左衛門尉朝家云々

冬十月朔陸奥國今年貢金四百五十兩秀衡入道送獻之二品可令傳進之故也

同四年夏六月十一日泰衡進貢駿馬黄金桑麻等于京師昨日至大磯驛可召留歟之由義澄申之泰衡同意與州之間二品依令憤申給度々被尋下去月又被遣官使畢就之言上歟然而其身雖與反逆有限公物難抑留之由被仰出云々　北東史

武藏國住人つゝきの平太經家は高名の馬乘馬飼也けり平家の良等なりけれは鎌倉右大將めしとりて景時に預られにけり其時陸奥より勢大にしてたけき悪馬を奉りたりけるをいかにも乘者なかりけり聞へある馬乘ともに面々にのせられけれとも一人もたまる者なかりけり幕下思煩ひてさるにても此馬に乘者なくてやまむ事口惜

き事也いかにすへきと景時にいひ合けれは東八ヶ國に今は心にくき者候はす但囚人經家にて候と申けれはさらはめせとて即召出されぬ白き水干に葛の袴をそ着たりける幕下かゝる惡馬有つかふまつりてんやとの給ふけれは經家かしこまりて馬は必す人にのらるへき筈にて候へはいかにたけきも人に隨はぬ事や候へきと申けれは幕下入興せられけりさらはつかふまつれとてすなはち馬を引出されぬけに大いに高くしてあたりをはらつくはねまはりけり經家水干の袖くゝりて袴のそはたかくはさみえつうしかけして庭におり立たるけしき先ゆゝしくそ見へにけるかねて存知りたりけるにやくつはをそ持せたりけるそのくつはをかけてさし繩とらせたりけるを少も事ともせすはねはしりけるをさし繩にすかりてたくりよせて乘にけるやかてまりあかりて出にけるを少しはしらせて打とめてのと〳〵とあゆませて幕下の前に向て立たりける見る者目を驚かさすといふ事なし能のらせて今はさやうにてこそあらめとのたまはせける時おりぬおほいに感し給て勘當免されて厩別當になされにけりかの經家か馬飼けるは夜半はかりにおきて何にかありけんしろき物を一かわらけはかり手つからもて來たりて必飼けりすへてよる〳〵はかり物をくはせて夜あくれははたけ鬣ゆはせて馬の前には草一把もをかすきは〳〵とはかせてそありける幕下富士川會澤の狩に出られける時は經家は馬七八疋に鞍置て手綱結て人もつけす打放ちて侍けれは經家か馬のじりに隨て行けりさて狩庭に

て馬のつかれたる折にはめしに隨てそまいらせけるかように傳へたる者なし經家いふかひなく入海して死にけれは知ものなし口惜き事也

著聞集馬藝部

袖中抄顯昭云けふの細布とはみちのおくに出くるせはき布也せはけれは狹布と書てやかて音にけふとよみて訓にほそぬのとよむ也

其音訓を合てけふの細布といふ也

綺語抄にはみちのくのみつき物とてはたはりせはくしていやしき布ありといへり

無名抄云此けふの細布と云はみちのおくに鳥の毛して織ける布也多からぬ物にて織る布なれははたはりもせはくひろも短かけれは上にきる事はなくて小袖なとのやうに下にきる也されは背計をかくしてむねまてはかゝらぬよしをよむ也

奥義抄云けふの細布とはみちの國のけふの郡より出くる布なりはたはりせはき布なれはむねあはすとはいふ也

私に云鳥の毛して織らむ事さもや侍らむ物に書て侍れは件の布は兎の毛を物のふたにいれて尻にほそき穴をあけてそれより苧を通して引出せはそれにかのものつきて出るをねりつけて織布也うるさくわつらはしき物なれはせはくほそき也たてには例の苧をして其毛をはぬきにするよし侍りき武則眞人歌云

しつのめかしつはたぬのゝぬきにうつ
兎の毛の布の程の狹さよ

又けふの細布とはみちのくのけふの郡より出くる布と奥義抄に侍る是古義也みちの國の郡ともの中にけふと云郡なしとふ

の菅薦とふの郡に有こもをいへりそれも
さる郡なししのふもちすりのみそ信夫の
郡は慥に侍るかゝる義いはんには郡とは
いはてたゝ夷か住家にけふと云所ありと
そいふへき

顯昭か云信夫もちすりとはみちのくの信夫
郡と云所にもちすりとてみたれたるすり
をする也考るに伊勢物語云おとこのきた
りける狩衣のすそをきりて歌を書てやる
その、おとこ信夫摺のかり衣をなむきたり
けり

無名抄云しのふもちすりとはみちのくに
信夫の郡に亂れたるすりをこのみすりけ
りとそいひつたへたる所の名とやかてそ
のすりの名とをつゝけてよめる也遍昭寺
の御簾のへりにそすられてありしを四五
寸はかり切とりて故師大納言の清和院の

御簾のへりにまねはれて有しかは世人見て
興せし此頃は皆やりとられて失にけるにや

童蒙抄云文字摺とは陸奥國の信夫の郡にす
り出せる也うちゝかへて亂れかはしくすれ
り遍昭寺のあしすたれのへりにてあり私云
先年に民部卿成範卿左京太夫脩範卿なとに
誘はれて西山の寺めくりし侍りしに遍昭寺
に詣て侍りしかはかの母屋御簾はみくりの
つると申物にて忍ふすりのへり皆失て侍り
さりしにをの〳〵みすを折つゝこそもてか
へり侍りしか又中納言大將兼長冬の春日祭
の使にくたり給し供に人々色々の小花を折
りてきらめきける中に前馬介範綱か子清綱
か信夫摺のかり衣を着たりけるか心有て見
へけれは故左京兆次日範綱かもとへ
きのふ見し忍ふのみたれ誰ならん心のほ
とそかきりしられて

顯昭云とふのすがこもとは編を十してあみたる也すかこもとは菅にてあみたるこも也菅笠菅簑菅枕すかわられなといふかことし薦はおほやうは菰蒋にてあみたれは本の名に隨てこもとはいへり藁にて編たるをわらこもといひ菅にて編たるをは菅薦といふ也十符あらん事はひろからん料也

綺語抄にはとふとは十符あみたるをいふといへり又みちの國とつゝくるは此ひろきこもの奥州にあるなめり是は人をおもふ心にて七ふには君をねさせ三ふには我ねむとよめりそれを童蒙抄綺語抄なとにみちの國にとふの郡よりとふ編たるこもの出くるよしいへる心しれす奥州の郡の内にまたくとふの郡なし又とふあみたるはさて侍りなんとふの郡より十符あみたるこもいてくといふ事けにときこへす又とふの郡と云所に生ふるこもの十節有といへるもいはれすこもの節いかゝ十節あるへきたゝ十符あみたるこそいはれたりまた十節有菅とこそいふへけれ薦といふはいはれす此とふの郡のとふあめるこもの義極て手つゝ也

又十符あまん事は外にもありなんといふ難はいはれす何事もやすき事なれとも國々に好むことかはりたれは陸奥國にとふのすかこもをこのむにこそ又あなかちにこのますともさやうに編いてたる歌あれはやかてそれをみちのくのとふのすかこもとよむ也

按國中素無十符郡者也自古所稱十符池者今宮城郡今市河北有古館址稱之多賀國府是乃往昔遷多賀城于茲者也其山下西南民舍屋後有小池是所謂十符池也池中生菅草今猶存焉相傳往時貢薦出于此地又古館東北村落謂之利符利字倭俗別訓謂之登若上

野利根川訓之而謂登爾川是讀利而訓登字之證也然則十與利元訓相通譯之登音亦有之據此說則鄉俗誤而訓里字者亦未可知焉於是却知今里婦之音乃誤古之十符者乎固雖非郡縣名其鄉黨之地亦曠遠而佗誤稱之郡縣來賦故舊記數引稱郡縣者亦不審矣然則古之十符實今之利符也後人詳此焉但惜古貢薦不傳今已無所考之況製作之法亦絕無知之者也自是考之則十符池亦其地近乎利符又其邊有菅谷村者然則其名之所據亦皆出于此義乎

顯昭云萩の花すりとは催馬樂の更衣の歌心也衣かへせんやさ君たちや春かきぬれは野原篠原萩の花摺やさ君達や綺語抄云萩の花をもて衣をする也

或曰是乃宮城野古昔以紫萩摺之絹而爲紋理供庸貢者也今考之古歌以其意而詠諸宮城野者尤多據此說則或然乎故擧古人之詠吟與乎此者而以證之識者考之

續千載雜躰　前大納言爲氏

露なから色もかはらすすりころも千種の花のみやき野の原

玉吟　家隆

宮城のゝ露わけゆけはかり衣忍ふもちすり萩か花すり

夫木集　同

光明峯寺入道攝政家歌合野邊早秋

はつ花のひとはなすりの旅衣露けき物はみやきのゝ原

同

宮城野の野守か庵に擣衣萩か花すり露やそふらん

新後拾遺秋下　前參議忠定

宮城野の露分衣あけたては忘れかたみの萩

か花すり

新拾遺旅　さくら色に春立そめし旅衣けふみやきのゝ　有家朝臣
はきの花すり

同秋　法印隆淵
宮城野の露わけ來つる袖よりも心にうつる
萩か花すり

安達原白眞弓(シラマユミ)
相傳斯地往古出良弓而或備朝貢或用兵家且夫和歌者流往々詠之托物比興之情可視於實方之歌則實見寄贈此物也但今不聞制之者焉尤可惜剩鄕俗絕無説其事實者可謂遺恨也一説曰古來稱之者非良弓之義原上有白檀樹枯槁已久如今化爲石猶存焉云且古人直爲樹而讀來者亦多故末篇擧以備參考云

大歌所御歌

古今
みちのくのあたちのまゆみ我ひかはすゑさ
へよりてしのひ〳〵に

小一條右大將になつき給ふとてよみてそ
へて侍りける

後拾遺　陸奥のあたちの眞弓ひくやとて君に我身を　源重之
まかせつる哉

かたらひける人のもとにみちの國より弓
をつかはすとてよみ侍ける

陸奥の安達の眞弓君にこそおもひためたる　藤原實方朝臣
事もかたらめ

寶治百首歌奉りける時寄弓戀

續後拾遺戀　みちのくのあたちの眞弓末終にあらぬかた　後深草院辨内侍
にもひく心かな

風雅　三條院藏人左近

是やこの安達の眞弓今こそはおもひためたることもかたらめ

光明峯寺入道前攝政家十首の歌合に

新拾遺　人はいさあたちのまゆみ押返し心の末をいかゝたのまむ　後堀河院式部卿典侍

我になひく契なりとも頼まれしあたちの眞弓あたし心を　中國入道前太政大臣

同　かひなしやはや七十にみちのくのあたちのま弓はるに逢とも　法印守遍

今はたゝ安達の眞弓引手にもかはるこゝろのほとそしらるゝ　藻壁門院但馬

最勝四天王院名所御障子阿立原　從三位家隆

獵人の安達の眞弓末たはみよるや小鹿の秋かぜそふく

みちのくの安達の原の白まゆみ心こわくもみゆるきみかな　よみ人しらす

名所百首　家隆

ものゝ夫のあたちの原の白まゆみ引手もやすく暮る歳かな

按法印守遍及二首雖假詞于原上其意趣乃取弓之義故藏于玆云

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事を

詞花秋　關こゆる人にとはゝやみちのくのあたちのまゆみ紅葉しにきや　堀河右大臣

續後拾遺秋　嘉元百首歌奉りけるとき　贈從三位爲子

名殘なき安達の原の霜枯にまゆみちりゆく頃のさひしき

健保三年名所百首歌

同　正三位家衡卿

しぐれ行安達の原の白檀しらす木の葉は散はてぬらん

新撰六帖　光俊朝臣

朝霧のたな引みれはあたちの丶檀色つきしくれさへふる

名所百首　定家

そなたより霞や下にいそくらむあたちの檀春はとなりと

順德院

霜はけさあたちのまゆみちりはて丶のこらぬ色を何たのむらん

右六首共以麻油美字而用之檀樹之證

安達駒

以歌考之則往古以駿馬而爲朝貢每年獻之京師者也今不詳其地是亦可惜矣此歌亦爲往時朝貢之證也

八月駒むかへをよめる　源縁法師

みちのくのあたちのこまはなつめともけふ逢坂の關まては來ぬ

吾田多良弓（一作安太多良安達原之名也）一說曰安田々良ハ乃略俗謂之二本松嶽此地往古出良弓或曰其岳麓乃二本松治府也其城東乃安達原也然則吾田多良眞弓安達眞弓元同鄕所出也未知是否

寄弓

萬葉七

陸奥之吾田多良眞弓著絲而引者香人之吾乎事將成

陸奥國譬喩歌

同十四

美知乃久能安多太良末由美波自伎於伎氐西

良思馬伎那婆都良波可馬可毛

尾鮫駒井眞弓　駒一作レ牧ニ見ニ歌枕名寄ニ

顯昭云みちのくのをふちのこまは彼國より出くる小斑のこまを云也後撰にも

逢坂の關の杉村ひくほとはをふちにみゆる望月の駒

是は杉間の月のかけにうつりてちゐさくまたらなるやうに見ゆるなり

奥義抄云をふちのこまとはみちのくにゝをふちといふ所よりいてくる馬をいふ也曾丹歌に

枕なるをふちのまゆみ見る時そいもか手かせはいとゝ戀しき

此歌にてもをふちは所の名ときこへたりあたちの眞弓と云かことし私に云みちの國にをふちと云所の名きこへす慥に尋ぬへし只馬は何の國にもあれとも陸奥國馬とていみしき物にすれはみちのくにのをふちのこまとよむにこそ

みちのくのあたちのこまはなつめともけふ逢坂のせきまてはきつ

是は安達と云所のあれはあたちの駒ともまゆみともよむ也それもみちのくのいみしきによりて名たかく聞ゆるなりみちの國にをふちといふ所たにあらはうたかひなし

荒野牧

千五百番歌合　釋　阿

みちのくのあら野の牧のこまたにもとれはとられてなれゆく物を

奥牧

拾玉　慈　鎭

東路のおくの牧なる荒馬をなつくるものは春の若草

夫牧之爲レ言養也育也飼也畜也周禮所レ謂校

人掌王馬之政文牧師孟春焚牧地以除陳生新草卜式所謂牧惡者輙去毋令敗群者是也然我邦俗群馬自然產于原野之地謂之牧尾鮫荒野奥牧等或安太多良安達糟部之地皆古昔出馬焉如今生馬之地絕無唯相馬領原町驛西有間曠之地稱世米古來產馬仍年々有驅牧之設聞之鄉俗國守相馬侯隔年閱之以擬觀兵事其制夏五月中旬以申日卜驅馳時皆是所以閱武觀兵之遺法也前日黎明巨家高族服半臂帶兵器而進備槍弓銃而步兵尽隊行前驅此時國守鑾行出于原町驛家臣扈從各立旗旄建器械就營而宿至申刻而國守出於驛亭巡閱定原上之屯營然後還旅館明日爽昧家臣戎衣各停馬群乎營中而待國守出爲早且國守經行復閱於營地於是放鉦銃先是措假屋于世米設帷幕于山椒搆國守憩息地仍國守率諸卒而入於此然後脱兜鍪解鎧手是乃欲單身而捷行也豫立旗設表自山下至海濱各隔一步列卒圍繞而衞之自是諸士擊鉦鳴鼓皆有節制而入于林藪分合進退各驅牧馬於曠野追隊隨行漸次集莅于妙見社前明日早旦各朝服閱之捕馬者六七十人揚鯨波而追之其式各有差是古例之大略也唯牧馬之遺事其存者此一舉而已

雙背蛤　事見宇太郡

みちのくの宇太のおはまのかたせかひあはせてみはや伊勢のつま白　よみ人しらす

鷲翅

當國之佳品也多出于松前者爲上品

深山の鷲

藻鹽草

しのふやまこさはのおくてかふわしのその羽はかりや人にしらるゝ　よみ人しらす

跡みへてきりふにのこるえくひにそとやなるわしの人をじもしる

いてはなるひらかのみたか立かへりおやのためにはわしもとるなり

此歌の心はむかし出羽の平賀より逸物なりとて鷹を帝へまいらす此鷹はなれて常に八幡（ヤハタ）へまいりて鳩のいくらもある中にましりてつれあるきけり後には鳩も鷹とつれてうせにけり其後日數へて此鷹内裏へ參りたり通身に血つきたり其後月をへて出羽より註進しけるは先年内裏へまいらせたりし鷹巣おろしの鷹なりしか子を取て後其母わしにくはれたりしか今年の頃此鷹鳩とつれて出來り此母とりし鷲の栖山に入て鳩と相共に此鷹かの鷲をくゐころして失たりと申すそのゝちいく程もなく鳩もやはたへかへりけり此鷹をその後鳩屋と名つけさせ給ひて鷹飼にあつけさせ給けるなりといへり

安方鳥（ヤスカタ）　方或潟字或号善知鳥（ウトウ）

相傳是所産于外濱（ソトノハマ）也近來春夏之交商賈賣之其大似小鳧而通形淡黑長首尖觜々脚共黃色但自頷下至下腹純白商人曰之善知鳥食之則有脂甚美其好味不減綠頭鴨此鳥實不審眞僞焉然以歌謠所述之趣而考之則其肉足以供鼎實其味足以養脾胃故業之者亦貪多務得而至專害生致殺如此之酷與識者詳焉

そとの濱

藻鹽草　　　　よみ人しらす

子をおもふなみたの雨の笠のうへにかゝるもわひしやすかたの鳥

大神宮へ勅使下りてうとふやすかたと云鳥を取て三角柏と云樋に備て神供に奉ると也此鳥取者は簑笠をきてとるなりその

ゆへは砂の中に子を生てかへしたるを母鳥のうとふか眞似をしてうとふうとふとよへはやすかたといひてはい出るを取と也其時母空にかなたこなたへつきてあるきて鳴泪の雨のことくに血にて降るあいたその涙かゝりて身そんするゆへにみのかさをきるといふ

陸奥紙

是乃當國所出檀紙古往稱之陸奥紙也今俗曰之引合者是也

源氏末摘花にみちのくに紙のあつこへたるにゝほひはかりはふかうしめ給へりといようかきおほせたり歌に

から衣君か心のつらけれはたもとかはくそそほちつゝのみ

又玉かつらに御文にはいとかうはしみきちのくにかみのすこしとしへあつきかは黄みたるにいてやたゝそへるはなか〳〵にこそきて見れはうらみられけりから衣返しやりても袖をぬらして

又胡蝶にさすかにおやかりたる御ことはもいとにくしと見給ひて御返りこと聞へさらんも人めあやしけれはふくよかなるみちのくに紙にたゝうけたまはりぬみたりこゝ地のあしく侍りけれは聞へさせぬとのみあり

又橋姫にかへり給ひてまつ此ふくろを見給へはからの浮線綾をぬひて上といふ文字をういにかきたりほそきくみして口のかたを結たるに彼御名の封つきたりあくるもおそろしう覺へ給色々の紙にてたまさかに通へける御文の返事いつゝむつそ有さてかの御手にて病はおもくかきりになりにたるにまたほのかにもきこえん事かたくなりぬるをゆかしう思ふ事はそひにたり御かたちも

かはりておはしますらんかさま〳〵かなしきことをみちのくに紙五六枚につふ〳〵とあやしき鳥のあとのようにかきて

めのまへに此世をそむく君よりも余所に別るゝ玉そ悲しき

又寄生に一日の御事はあさりのつたへたりしにくわしく聞侍りにき御心のなこりなからましかはいかにいとおしくとおもひ給へらるゝにもおろかならすのみなむさりぬへくはみつからもときこへ給へりみちのくに紙にひきもつくろはすまめたちてかき給へるもいとおかしけなり

宇治拾遺物語に水干のあやしけなりけるかほころひたえたるをきりかけのうへよりなけこして高やかにこれかほころひぬいておこせよといひけれはほともなくなけ返したりけれは物ぬはせ事さすときくかけにとくぬいてをこせたる女人かなとあらゝかなるこゑしてほめてとりて見るにほころひはぬはてみちのく紙の文をそのほころひにもとにむすひつけてなけ返したりけりあやしとおもひてひろけて見れはかく書たり

われか身は竹のはやしにあらねともさたかころもをぬきかへるか那

世繼物語におとゝ北の方車にのせ給ひし程に下かさねのゑりとりて御車に入るようにて平仲よりてかきつけておしつけてさりにけりおとゝは見給はす成にけり北のかた又見けるに袖の下にみちのくに紙をひきやりてをしつけたるをあやしとおもひて見れは忍ふる人の手にて

物をこそいはねの松の岩つゝしいはねはこそあれ戀しき物を

となん有ける車に乗し程下かさねのゑり入

れゝは是にこそ有けれとおほしける
三代實錄清和紀貞觀十五年十二月廿三日甲寅正五位下陸奥守安倍朝臣貞行起請三事其一事曰爵祿之興爲優功績然則授叙之事當必其人而比年國司不依勞効任意授爵由是預祿者衆調物減耗所司勘出歷代不絶望請夷俘位階每年立叙法選有功之職隨年々死之闕叙補二十人已下太政官處分依請其二事曰國中之政莫重收納然則分配之吏可勤其事而任用之官未必其人或被誘郡司稅帳納藁爲稻或見賂富饒酋豪以虛爲實須據旨必科其罪而備偏貧俸斷不畏有罪望請爲致虛納欠損國司之公廨先補所欠然後科責若欠物巨多公廨數少長官已下相共塡納
延喜式廿二民部上曰陸奥出羽兩國便納當國
凡朝集使終事還國者令二寮勘合官舍溝池桑漆種麥陸田鷄補設等帳然後移送式部省。

凡陸奥出羽兩國朝集使雖濟朝集政無調返抄者不移式部省
凡諸國健兒皆免徭役畿內用桑田地子餘以國營健兒田充之出羽國出業給之
仕丁名簿先附大帳使進省但志摩飛驒陸奥出羽佐渡隱岐長門太宰管內並不在點限
凡出羽國放生田一町割乘田永充之
凡文章博士職田五町算博士四町
凡陸奥鎮守太宰等國府掌各二人每人給職田二町
民部下凡計帳者陸奥出羽兩國太宰府九月卅日以前申送餘國如定　往古置義倉見于此
凡義倉及官田地子等帳並附正稅帳使
年料別貢雜物　陸奥國筆一百管　零羊角四具　出羽國零羊角十具
交易雜物　陸奥國鹿革　鹿皮　獨犴皮數隨得　砂金三百五十兩　昆布六百斤　細昆布

一千斤　出羽國熊皮廿張　鹿革　鹿皮　獨犴皮數隨時

同廿四主計上曰凡諸國輸庸輸二分調之一

陸奧國（行程上五十日下廿五日）調布二十三端自餘輸狹布米穀庸廣布十端自餘輸狹布米

出羽國（行程上四十七日下二十四日海路五十二日）調庸輸狹布米穀以此二條當往時知行程之日子

同廿五主計下凡勘大帳者皆據去年帳勘其書入

同廿六主稅上凡勘稅帳者先據去年帳勘合今年帳凡勘租帳者皆據當年帳卽通計國內十分以得七分已上爲定若有不堪佃者聽除十分之一

陸奧國正稅六十萬三千束　公廨八十萬三千七百十五束

國司料六十四石一千貳百束　鎭守料十六萬二千五百十五束　祭鹽竈神料一萬束

學生料四千束　救急料十三萬束

出羽國正稅廿萬束　公廨卅四萬束

月山大物忌神祭料二千束　健兒粮料五萬八千四百十二束　修理官舍料萬束　池溝料三萬束　救急料八萬束　國學生食料二千束

按延喜式記往時稅法貢料等如此仍知有祭祀料學生料救急料足食料之制也皆是崇神養人備國用利農業厚恤民專教育之急務也於是欲特表之敎後人知往時有此善政焉下倣此

凡按察使及記事季祿衣服廝下衣服以陸奧國正稅交易充之（遙授之人不在給限）凡諸國司賻物以正稅給之　凡陸奧國兵士間食料米二千八百八十斛（人別日八合）割年中所輸租穀內每年充之

凡陸奧國七團軍穀主帳卅五人粮米准太宰府統領以正稅給之

祿物價法

陸奥國絹百六十束　綿十三束　絲十五束
庸布卅束　鐵十四束　調布五十束
出羽國絹百五十束　綿十五束　絲十五束
調布五十束　庸布卅束　鐵十四束

驛馬貢法

陸奥國上馬六百束　中馬五百束　下馬三百束
信濃出羽二國上馬五百束　中馬四百束　下馬三百束

驛馬死損

出羽等五十國十分許損二分
陸奥等十四國十分許損一分

諸國運漕雜物功賃

陸奥國二百十束　出羽國百卅一束
凡一駄荷率絹七十匹絁五十匹糸三百約綿三百屯調布卅端庸布卅段商布五十段銅一百斤鐵卅廷鍬七十口
同廿八兵部省陸奥出羽等十七國郡司書生等並聽帶仗

諸國健兒

陸奥國三百二十四人　出羽國一百人
凡鎮兵陸奥國五百人　出羽國六百五十人

諸國器仗

陸奥國甲六領　横刀二十口　弓六十張　征矢六十具　胡簶六十具　右每年所造具依前件其様使者色別一々附朝集使進之

諸國驛傳馬

陸奥國驛馬　雄野　松田　磐瀬　葦屋　安達　湯田　岑越　伊達　篤借　柴田　小野各十匹　名取　玉前　栖屋　黑川　色麻　玉造　栗原　磐井　白鳥　膽澤　磐基各五匹　長有　高野各二匹　傳馬　白河　安積　信夫　刈田　柴田　宮城郡各五匹

出羽國驛馬　最上十五匹　村山　野後各十匹　蚶方　由理各十二匹　白谷七匹　飽海　秋田各十匹　傳馬　最上五匹　野後三匹　船五隻　由理六匹　避翼一匹　船六隻　白谷三匹　船五隻

同卅一宮内省凡踐祚大嘗會、夜輔二人於廻立殿下候之、天皇御悠紀主基殿、各分左右膝行且鋪御前、道薦、還御廻立殿亦如此

諸國例貢、御贄陸奥昆布　縒昆布

同卅三大膳、下諸國貢進、菓子出羽國甘葛煎二斗　甘葛煎直藏人所

同卅七典藥寮　諸國進年料、雜藥

陸奥國六種　甘草十斤　秦膠四十斤　大黄百卅斤　石斛八十斤　人參四十五斤　附子百卅斤　猪脂二斗

出羽國二種　甘草五斤　羚羊角四十具

同卅九内膳司年料陸奥國　索昆布四十二斤　調細昆布百二十斤　廣昆布三十斤

土產類下

上篇廼以出古書舊記者而擧之爲證焉下篇ハ廼以當時所用之土物分數而記之其他有未悉及聞見者則闕而不載焉將來須聚之以漸矣視者詳之

貨財

夫貨財之於天下也一日亦不可無之至寶也

且夫我神州之出黄金也始開其氣於此國古之小田郡陸奥山（今並之牡鹿郡山亦稱金華山）其也幸在于封内爾來其華盛于天下其澤及于後世白銀赤銅之類亦相尋而興于封疆、山谷焉是豈非天寶之物華萃於我國乎故略擧其地以記神秀之異于他邦也

伊澤郡津山（金山）　栗原郡細倉山（銀山）　玉造郡尿前（銅山）　加美郡檜澤（銀山）　刈田郡關山（銀山）　同郡雙森（フタツモリ）　玉造郡熊澤（兩地共銅山）　刈田郡黒

森 銀山　其他往古生于黄金白銀銅鐵鉛錫者多

衣服

筋紬　出于伊具郡金山邑以五綵縷而爲縱横經緯俗謂之島紬其好品者直尤貴贈他邦以寄投焉人謂之仙臺紬以賞之

紙絹　出于刈田郡白石城邑倉本村尤爲上品以柿汁染紙纖而揉之俗謂之紙絹用之服以能避寒尤足以防風其淡赤色或淡紫色近代有染而成文者又所出于相馬其制堅强以克堪多年而賞之擔株

紙布　是亦白石之産也其制縷紙而織之綿密如練綸其精白者如絹素是亦搢紳之徒侯伯之族尤所賞用也

馬鞦　出于磐井郡千厩驛驛婦揔以織之而爲業焉十歳已上之小女織之尤巧其具也立一枝木于盤上繋其細索于枝上梭小竹針而左右織之如織之傘須臾成一鞦是亦或献幕下或贈之侯伯染而用之

飲食

糗糒　出于仙臺治府市店純粹精白者非他邦之制所及也其麁者爲上細者爲次如粉者爲下世謂之仙臺糒上自王公下至士庶甚賞之故年々我太守以土用之節而献之將軍家及公卿且贈侯伯士大夫賜市人等

秔稻　糯米　封内俱多嘉禾上品者

糖圓　出于宮城郡松島海濱蜑家以此爲業鹽釜次之兩地經過遊歴之客必齎之以還家包之以竹皮但近年味稍惡所以其制踈而貪利亦多也

簿脫　是亦所出松島絶品也以秔粉而爲餌利豆粉而爲團推之如麪其薄如紙徑已七寸餘其色青黄味亦甘美他所倣之不成

火米　以速稻熬而舂之志田郡米倉村邑出之尤魁于他村已可三旬乃薦之於一宮及宗廟而告

新穀之成然後頒之

雲麵　乾饂飩　雲麵出于刈田郡白石乾饂飩出于南部及仙臺城市

謝東奥友人遺白石雲麪　物茂卿

誰採玉女洗頭盆中有千絲白髪存不知仙人憂底事將憂相送到護園

禽獸

華蟲　以所出于玉造郡爲佳品其味殊于他此郡中田野闊土地肥故啄紅稻及雜穀而肉厚肌膏是以滋味大異于他所

鸛鶴鴻鵠鳧鴨　所獲于封内郡縣村邑者尤多

駿馬　封内之產尤多且畜養馴致調良而鬻市者年々聚之栗原郡岩崎驛司廐者擇其善良駿足者以季冬而獻之將軍家南部領主亦爾

封熊豪豬麋鹿羚羊獼猴走兎豺狼亦多或用其肉或用其皮或用其膽或用其毛以充其用

魚蝦

鯨鯢　設巨船其制如繫小縄于尖刀而投之魚身刺焉俗謂之設利殺漁人有遇游鯢之浮于碧海則率徒衆而向其地以尖刀而投擊者數百繩遂殪之後斷其魚肉而運送之江濱熬煎之以爲膏鬻之則其利巨萬一鄉一邑依此而致富

鮭魚　其佳品大異于他邦牡鹿郡石卷及横川本吉郡葦澤膽澤郡衣河名取郡名取川亘理郡逢隈河等水濱各出之其中有子籠鹽引漬滷割鮭鮭鱁等多品其制見于下

腹鰤鮭　乾鹽鮭　漬滷鮭　割鹽鮭　鱁鮭

以鮭魚而滷鹽汁醃魚子于腹而乾之者俗謂子籠無子者曰鹽引滷之久而濕者曰漬滷割之滷鹽乾之者曰割鮭利鹽而置筱中者曰之鮓字書所謂以鹽米釀魚爲葅熟而食之者是也腹鰤鮭乾鹽鮭之制石卷横川爲上品漬滷葦澤爲佳割鮭衣川爲佳各因地而其制有巧拙其味有好惡年々寄之江都京洛而獻于大樹博陸贈搢紳侯伯

年魚　名取郡人來田設魚梁或網之而捕焉其大者尺餘其地乃兩區白石氣仙及衣川南部和我共出嘉魚或膾之或炙之以爲盛饌具或乾之或鮓之而爲嘉賓好又以其魚腸爲鱁者曰之醢（此字俗所用不出字書焉）以其魚子盛腹者曰之子籠

河鰈　其狀與比目魚少異也出於石卷川孟秋漁人叉之于水底而取之或膾之或炙之以用之其味殆不可勝言但經宿久則易魚餒而肉敗也故不堪達之他方尤可惜

鮭魚（不見字書乃俗字）自春夏之交至初冬未得之捕及中冬而初獲之以出于前濱爲嘉（近郊外水濱俗謂之前濱遠郊外者謂之遠島）氣仙海濱遠島浦上所出爲次魚腹有奇腸其狀淺白若疊雲凝雪俗謂之雲腸或又謂之菊花腸其鮮明疊襞如菊花相重也以捕之始而獻之大樹焉或涵鹽乾之包之以葦者俗謂之簀卷鮭其新鮮者風味非他邦之所及也

金海鼠　其狀似海鼠而稍圓也裏面有腸其色濃黃似雞卵子仍謂之金海鼠以出于金華山下海底者爲佳焉相傳是金氣之所化也邦內他海畔無此物也故土人誇之乾者乃以爲遠方嘉賜

王餘魚　所謂鰈魚也出于氣仙者爲上品其味勝于他濱其品類有青眼石鰈赤鰈鷹翼黃鰈紫鰈各以其形狀名之鷹翼已下爲下青眼無毒其他因病而忌之青眼赤鰈自二月至四月而味甚美石鰈自十月孕而至中冬其味不可勝言和其子而調之國俗謂之子膾而爲珍羞焉殆可愛

並眼　國俗土人謂之扉板以其形廣平而似戶扉稱之以鄙名但與江都所用大同小異也季夏之際多捕之然國俗以其魚多其價廉而賤之不上貴族饌焉且有毒故當忌幼子孕婦金創多病者

鱸魚　至季夏土用節膏腴殊美諺曰鱸魚之於口腹也直季夏而爲佳也嘗所觸之石亦宜以養脾胃矣張翰松江之事亦可併考

平魚　世所謂鯛魚也自初夏至中夏捕之甚多仍

價亦廉也往時秋冬得之尤少近年老釣者自紀州來教於是邦內漁者四時釣之不息盛饌之珍羞不待夏日然其佳味以初夏以後爲上品

鮪魚　其大者一丈餘或七八尺俗呼之爲五駄負荷之以用五馬也或分之以割五段也其小者三四尺以其短少者爲上品先是自季春結網于海底數十里其設也立四柱於海上可據之地以巨石繫其柱礎而搆望樓子四柱頭令老漁坐於樓上而窺隊魚之入網裏四面皆布魚網而待魚之輻輳暮春或初夏從南風面滿網口樓上人臨視其魚隊之多而呼之告于江村漁家於是群漁催漁舸數十艇棹之機巧圖其網口舟行逐之時大魚活々潑々漁者以魚叉而登之舟中乃取之先側其魚鼻以食之是捕鮪者古意也此魚也會惡暑故過時經宿則必傷人

章魚　文字或作鮹或鈎之或網之其大者四尺餘秋冬出之市與江都所鬻少異大同

鰊魚　俗訓之賀登其貌似鰯魚而幾尺季冬孟春取之甚有膏而美

金鯽　所出于志田郡大崎沼自古爲佳品其長充尺其沼水涸而爲田野不出此魚尤可惜但品井沼蕪栗沼廣淵沼大湖皆生鯽魚

石決明　俗所謂鮑也其鹽者曰卜貝或有丸乾串貝熨斗等皆以氣仙所出而爲佳品特唐爾海濱尤好以腸而和藏者謂之鮑醢

鰻魚　河海所出多以產河水而爲上品以名取郡井戶濱而爲佳焉

鰹魚　盛夏釣之其味甚美乾而束脩焉氣仙所出者爲上品作醯亦佳也

海栗　稱之宇爾是亦氣仙爲佳

海鼠腸　出于氣仙分濱者爲佳乃聚海鼠之腸以作之微少不易作之故佳客酒徒以爲珍羞

牡蠣　牡鹿郡渡波宮城郡寶國島亘理郡鳥海等其地而大如白柿季冬春初甚肥大

白魚　所出于名取郡井戸濱尤佳也牡鹿郡石巻中秋漁者網鮭魚此魚屬網下而至者不知幾千萬數江童川兒以鹿布而取之

海苦瓜　無處而不佳是亦他方海中尤少

鮏魚　鰊子　俱是出于松前者鮏魚俗訓之似身乾鰊也鰊子乃其子也

焦石鯨　是乃所出于蝦夷是亦名産也

菜蔬

蕎麥　二迫文字村東山鬼首篠谷湯原等山谷之間尤爲上品

茄子　以廣湍川以南爲佳其所出早於他所其形質與武州江城所産異也

熱瓜　以名取郡北目村所産爲佳品有白瓜謂之梵天（俗曰常帛而稱梵天取其潔清純白呼瓜亦愈）或有青碧而黄筋者謂之筋好瓜近年以他邦種植之往時有名護屋種爾後有淺碧瓜近歳用伊具郡佐倉種其色青黒而有緑筋細點者其味有破霜嚼氷之美曰之幾都又有黄色青筋而短小者謂之扶籥尤好瓜也人以爲其種子自尾州来然考之夫木集則府中古之好瓜名仍擧其事實于此以證焉

夫木集夏部　讀人しらす

山城のとはにかよひて見てしかなうりつくりける人のかきねを

此歌に大君家集大監物なりける時内侍のすけにみかき申しに大舎人ひきくまたるにある人内侍のすけしるやうありてそこにありけるをさとにありけれはまへにありけるふちふといふ瓜を黄なる紙につゝみて大舎人といふ翁にこれ奉れとてとらせたりけれはくらつかさにつけてそこよりをくりけると云々

松露　城外以東海濱松根必多此物又所出于宮城郡松森地尤爲佳

牛房　所出于宮城郡袋原尤長大

萊菔　俗所謂大根也是亦產同村者爲佳松森所出亦可矣
薇蕨　所生于玉造郡大口村田切邑尤佳其長三尺其莖如矢
蕨粉　所出于栗原郡鬼首村尤好
芋子　俗謂之鄕芋宮城郡多湖村所出爲上品比之他鄕則其味大異而其美殆差別也
薯蕷　俗謂之山薯以出于名取郡爲佳
椎茸　以氣仙郡所出爲佳牡鹿郡加美郡亦出之
海苔　以氣仙所出爲嘉品
黃精　以南部所出而賞之
柹實　有多品名取郡多出之特中田驛畔頗佳自城下北地不宜柹樹故以南方地出好柹
林檎　宮城郡松島地所出尤佳品其子圓大始甚靑黃染來以臙脂焉其味甘美與他方大殊
梨子　城北地宜于梨實尤有多品名松尾醍醐初雪者爲嘉品炭燒龜子次之

器用

引合　芳章　共磐井郡東山刈田郡白石兩地所出其制與越前好紙精好不相減古人所謂陸奧紙是也仍稱壇紙乃引合是也芳章之制白色外有五綵色其風流雅趣足以用書翰詩箋之料也是以他邦好事之人欲之者多
椙原　是亦出于同地多品其中亦有施五采而淡色者且有設文理者稱之文椙原其亦與尋常異不許市人賣買是亦足以用會紙詩箋矣尤雅騷之具也又有濃藍布玉者其美艶更絕妙
料紙　是乃所用平生書通有小大俗謂之寄紙蓋以寄呈友生而述其情實也有上下中三品膽澤郡東山刈田郡白石伊具郡丸森地出之
鼻紙　俗間蓄懷中而具津液唾涕之用者謂之鼻紙又有同名而具國主之用者其制似料紙而精好與和州芳野所出同其雅物而非野州宇都宮常州水戶產之所及也名取郡茂庭村所出爲上

品同郡柳生亞之又有稱封紙者是乃具通信封
緘之用又有稱白石鼻紙者出于刈田白石甚足
資用矣昔疊紙也

莚席　俗謂之疊乃居家之席也是亦有多品名取
郡所出以中繼者為上焉稍似備後之制是乃莚席之極
品者栗原郡三迫所出為中品膽澤郡東山所出為
下品然久用而不敗又有入間田莚又有菱莚織
之以染茅而經緯其黑白雜之以紅紫而為其華
紋或有嘉賓上客則所以易瓊筵擬綺席而饗之
也

埋木灰　燒沉木而為香爐灰也其色赤黑名取川
為名品此河流常假水勢而下之薪木而備資用
其重者或沉水底而歷年也久土人取而燒之則
其氣尤淡是以能貯火而不滅故賞翫殊甚在他
邦亦公伯之徒及士大夫之族得而珍之

牙刷木　刈田郡湯原村所出為佳桃生郡笈入村
為次

石硯　桃生郡雄勝濱所出為上其色淡黑堅剛能
磨墨但以出海底而値盛夏則墨亦易腐桃生郡
小船越所出為次其石色紫而尤佳也

土器　其制尤多其器肌滑澤者為上品俗謂之肌
滑土器用獻盃之具也

飯器　會津所出多品又江刺郡所出謂之正法寺
椀朱內漆外或畫鶴鴒或蒔花草飾之以金箔其
朱色煒爗好事者為茶享之飯器其雅物可愛然
如今省古制與往年大異

蠟燭　會津所出其絕品冠于他邦

漆木　以所出于同地而為佳

水晶　是乃非水晶實石英者也出于南部封內及
氣仙郡刈田郡此地所出紫石英尤為佳品

紅花　是乃臙脂也特以所產于羽州最上郡者為
上品

紫草　以所出于秋田而為佳分散之他邦而鬻之
染工

藍草　所出之地最多是亦分之屬于染工
苧草　以出于秋田地而爲佳
材木　南部爲上又氣仙郡有檜山金花山中多欅
樹其木理皆成疊雲聯璧之象俗謂之玉木理
笠　栗原郡澤邊驛以此爲業焉其制冠于多方
然如今以貪利而失古制略其機巧

補遺

黄鷹　或網之或覆巣而捕之其他亦多氣仙郡檜
山所產鷹兒特好
鶻鵃　捕于牡鹿郡遠島者謂之島兒捕于栗原郡
宮澤者謂之川兒
胡獱　膃肭臍　倶出于松前
海獺　出于氣仙郡海島
水豹皮　出于松前地

孟子曰諸侯之寶三土地人民政事寶珠玉者
殃必及身夫人君之於身也位在崇高而專安
富尊榮焉居則有大廈高樓出則有車馬旗旄
窮無數之富麗極無量之娛樂是以其平居也
肥甘足於口輕煖足於體采色足視於目聲音
足聽於耳便嬖足使令於前諸臣皆足以供之
菽粟布帛奉于身體者也鳥獸魚鼈養于脾胃
者也果蓏菜蔬資于口腹者也其他供給之周
資具之多倶是日用之不可欠者也且夫言其
極則皆所以生于山出于海成于人者取而不
盡用而不竭其本也總是造化之功用天地之
嘉貺也然有之於己而輻輳于一身者人中之
天幸不可不愼焉是以大學傳有言曰君子愼
于德有德此有人有人此有土有土此有財有
財此有用德者本也財者末也外本内財爭民
施奪又曰生財有大道生之者衆食之者寡爲
之者疾用之者舒則財恒足又謂長國家務財
用者必自小人魯齋許氏曰地方之生物有大
數人力之成物有大限取之有度用之有節則
常足取之無度用之無節則常不足生物之豐

歟由天用物之多少由人又曰天地之間爲物皆有分限分限之外不可過求亦不得過用暴殄天物得罪於天此數說是乃天地自然之理財成輔相之極致而全天賦之術大學所述之外更無餘法也後世不知有此理唯務便利而專掊克遂戻天理而賊人主之德者古今幾多哉自是視之則土地之於財用凡主國之君庶幾乎日恐惧修省而不可不重焉

奥羽観蹟聞老志卷之三　終

奥羽観蹟聞老志卷之四

仙臺　佐久間義和著

名蹟類一

自此篇已下至第十卷俱太守封疆之名區勝蹟而取古往所出于國史傳記與今來所傳于俗談口碑者乃分郡縣以各記其名之下欲令後人便于觀覽考索焉下倣此

苅田郡

續日本記作苅字蓋字之誤也當作刈東史或作葛田

人皇四十四代元正帝養老二年冬十月戊子柴田郡置苅田郡出續日本紀下各條多擧國史倣此

按先是未見擧此郡斯時始分而兩之

四十八代稱德帝神護景雲三年春三月辛巳陸奥國苅田郡人外正六位上大伴部人足賜姓大伴朝臣是大國造道島宿禰島足之所請也

寶龜元年秋九月乙亥正四位下坂上大忌寸苅田麻呂爲陸奥鎭守將軍

八十二代後鳥羽帝文治五年秋八月奥羽領主藤泰衡築壘於刈田郡引柵於名取廣瀬拒幕下頼朝卿東征事逐條詳于下

延喜式神名帳曰苅田郡一座大苅田嶺神社名神大

按延喜式擧列國宮社而記其神號以爲神名帳二卷徵諸天下後世焉然王道衰神道廢來上自天子至庶人壹是皆浸淫蒙昧無意憤激之復故之遂以佛法混神道藏佛像以易神號竊宮社而爲堂舍焉自是上代神號拂地者多然鬼神不致崇聖主不加誅於是乎爲已有以不懼焉可痛恨之甚者也故每郡擧之郡下而欲令後人知上世有此神號而後世蔑之以廢棄之至茲嗚乎有爲之英主有志之君子因茲求之上世革之後代則可謂實崇神道守王法者也

五十六代清和帝貞觀十一年十二月辛卯授陸奥國正六位上勳等苅田嶺神從五位下

同月戊申授陸奥國正五位上勳九等苅田嶺神從四位下按自八日辛卯至廿五日戊申十有四日其間加階之義不見爰記正五位上遽加從四位何夫急哉疑此間脱其事實乎

不忘山

土人呼曰藏王嶽以山上有藏王權現神祠也廼神名帳所謂苅田嶺神社是也山下有寺曰金峯山藏王寺烏帽子形屏風岳熊野峯杉峯箕輪魔魂山諸山相環遶而犬牙攢峯羅列裁河原劍峯斷崕高壁相峙焦焰騰處謂之竈口飛灰積處謂之灰塚下有川謂之三途多以冥府地名而呼之此地出丹土而河水紅也仍擬之流血焉其峻嶮嵩高者謂之不忘山是乃邦内大嶽濕雲埋山冥露鎖巒山巓長戴雪峯巒常帶烟登者艱覩者驚若東奥有凶事則發揚焦炎而示其孽以宗久詞

考之則唯匪一國之凶事耳寛永元年晝夜鳴動而不熄炎赫殊甚矣於是我黄門政宗君令明人王翼卜而祀之又數第十子右衛門大夫宗高主其祭事宗高君未幾而逝又寛文九年復焦炎尤甚降灰及刈田柴田名取數郡而頗害稼妨農果有逆臣原田宗輔事

峻嶽以東萱峠（俗呼山脊而謂之峠）山路謂之一鳥井又荒澤山前有二喬松謂之鳥井松土人稱夏四月八日謂之開扉以山頂雪解道路始開不妨登山之行客而喜之冬十月八日謂之鎖扉以岳麓雪稍深道路頗難登山之行客鮮少而憂之斯日也鄉黨設烝飯置濁酒而賀其時修其祭事云

みちのくのあふくま川のあなたにそ人わすれすの山はさかしき

右歌見六帖及八雲御抄以耳會而作耳耶

又夫木集山部に題不知わすれずの山は陸奥よみ人不知と有

宗久紀行に白河の關を過て廿日あまりにも成しにひろき河のほとりにいたりぬ是なんあふくま川なりけりみやこに迄遠く聞わたりし所なれはかきりなく遠く來にける程もしらるわたし守舟さしよせて道行人ともいそきのりて出侍りしに水上遠く見わたせば重なる山のうちにけふりの立のぼる所ありしを舟子ともに問侍りしかは元弘の世のみたれに鎌倉のほろひしより此けふりたちこめていまに絶ぬなりと語りしよりいとふしきなりし

元政隱逸傳宗久者平吉氏筑紫人也性好和歌吟風弄月遂厭世爲僧乃辭九州萬里雲遊六十餘州足迹殆遍嘗寓止于大江山之下觀應中又出丹陽行至東奥松島自記所遊歷爲一卷藤公良基讀之嗟嘆之餘爲之跋尾所詠和歌見于新拾遺而下三代撰集

青根溫泉 東北有古溫泉曰女御湯

在今柴田郡前川村溫泉乃其地東面湯舍牖下望之名取大倉山大森館等入座上來屋下設湯舍東西六間南北二間有半板其半下廼湛湯之處也其上頭可三間有溫泉而湧出於山間自是設木筧長短四架其二長筧直達舍東而流落左右短筧亦令其落湯舍又去湯舍二間許有土橋令木筧通于橋下而至下流又去此可三間自玆別設長筧橫三架而旋之及下湯舍方四間其筧流噴吐而落舍下病頭風者受之則忽得其驗自泉源至此凡二十間又自座下設小廊至湛湯舍此處禁雜浴而不許焉其下乃衆人群集雜浴惟多

妖魅石

去青根以南原野茫々草莽蓁々左邊有一巨石其狀似鬼物鄉人言往昔有山鬼捕人而喰於是路上行人已絶其妖鬼後化石便此巨石也故謂之妖魅石其地謂鬼石原

岩崎金窟

近于湯刈田往時金山之古窟也其石岩堅剛如銅如鐵其石色朱紫黑碧靑黃相雜慶長中出黃金有水脉而息是乃鑿師之所穿縱橫屈曲上下相貫左右相通奇巧妙術彷彿蜂房相聯而恰如神

湯刈田 山北有溫泉

山岳尤峻嶮荒栗大森大刈田甘塚諸山相竝其北有溫泉能治瘡毒癩病等仍謂之湯刈田

鳥井松

荒澤山前有一長松而相並是乃藏王道路土人謂之鳥井松

泰衡城址

在中目村相傳藤泰衡往昔居此城爾後結城七郎朝光相尋居焉城下有廢池土人呼泰衡池

無根藤蔓 西湖遊覽志北山勝跡神尼舍利塔下有無根藤地以可玆見

在圓田村西如今爲農家墻外乃最上道路也古老曰源賴義營于斯地戯執藤鞭而植銀杏樹下去其藤遂生根株枝葉蔓衍土俗謂之無根藤此地東史所謂金十郎等進兵之地也事見于下篇屋後有善逝堂々前存喬銀杏屈蟠暢茂尤舊物也郷人曰是則往昔立藤策之地也其藤蔓則今也已亡

江都葛西八幡故事曰文治中幕下賴朝東征路經武州葛西郡八幡神祠禱東夷征討之事自執榎鞭植之祝曰此役有利則生活焉無利則須枯試之數日而不萎遂生根發芽長枝展葉神人以告之奥州於是甚感其嘉瑞云

神社啓蒙藤崎八幡下云肥後國熊本城中所祭之神中應神左住吉右神功皇后也諺曰當社鎭座之日勅使三段所持之鞭埋當郡三所云神所應之地必有瑞也此地所埋之藤鞭經宿枝葉生故名曰藤崎宮

又曰曾根天神在播摩國曾禰海濱所祭之神一云里諺曰菅家左遷之日於此地折松枝而埋土中矢曰若帝悟讒臣之僞予有歸洛者敢勿枯遂生長而枝葉生也仍作神籬曰天神

右三說事實頗相似雖妄誕難信載之以爲參考之資云

亢塚

去四方坂以南二里餘路上東畔有一小石郷人相傳往昔賴義朝臣東戰之時瘞貞任親族某首于此矣乃其石墳也

一戰場

去同郡猿鼻村五六町有高陵其下有數十畝田郷人謂之一戰場去圓田村亦十八町餘事見于下

四方坂古壘

去同所驛一里在平澤小紫兩村間北及柴田郡川崎路傍有一山截然高大四面皆如坂道歛故後人曰四方坂古壘猶存焉其地方一町餘文治

之古戰場也
東史曰文治五年泰衡將金十郞勾當八赤田次郞等四方坂壘鎌倉兵安藤四郞飯富源內已下屢攻之不克城兵拒之甚仍進兵於無根藤四方坂之間（是地乃戰場）凡七面以三澤安藤兵略遂擊金十郞捕勾當八赤田次郞等三十餘人

白崩叢祠

在曲竹村相傳埋錦戸太郞國衡屍仍後人立叢祠以祀之

花楯城

在圓田村相傳佐藤莊司叔父河邊太郞高綱古城也爾後小原善閑者居之未詳何人也

築館城

在同村鄕人傳曰佐藤太郞居城也太郞乃河邊太郞高綱之事也後世砂金又七郞者居之

刈田神社

鄕人謂之刈田宮社去宮驛北已二町餘宮社乃南面有寺曰寶池山蓮藏寺相傳五十一代平城帝時建之神名帳所謂刈田峯神社者非不忘山神實此宮社也其說尤多擧之下
吉川氏所記宮社緣起曰所祭白鳥明神乃日本武尊也又曰白鳥明神人王十二代景行天皇第二皇子日本武尊也東征之後薨乎勢州能褒野乃化白鳥飛揚去所止建祠祀之曰之白鳥明神大和琴彈原鳥陵等是也神號起于茲自是處々建社者多
按白井宗因說曰日本武尊化爲白鳥之義似未可信焉盖氣聚則形成而生氣散則形化而死魂無不有之魄無有之若彼寃死則鬱結不散之氣憑乎物附乎人爲祟爲妖乎而斃者無之佛者所謂人化爲佛尙所在不顧也況人化爲禽也於日本武尊不取焉甚矣人之好怪也此說得之
鄕黨相傳此神乃用明帝之后妃薨化白鳥土人

建祠祀之水旱疾疫必祈而有驗

神道家説曰刈田宮乃所祭用明帝之后妃也

按今稱白鳥明神而所祀之者柴田郡中村田邑芦立村平村竝斯地而渾四區其説不同焉記諸各區之下考之地理事實則投兒水投櫜等地相近于宮社與郷説頗合然則后妃之説近乎是乎然神名帳乃古書載來久不可誣焉又吉川氏亦專門家姑可信歟后妃舊説妖妄無稽難盡信矣識者辨之

片桐祠 此地多菊面石

在大町村相傳往昔瘞安倍頼時季子白鳥八郎行任屍仍郷人建祠祭之 此義又見村田宮社下

老翁坂

在大綱村中至不忘大岳道路羊腸嶮隘其長七八町人勞馬瘁坂上登覽無處而不入乎吟眸也帽形翠屏雙嶽兩峯銅窟聳于東北巖泉嶺亦見西南其山陰乃相馬地東南乃伊具亘理正東刈田宮驛木末荒濱海濱洋々而入于目下郷人謂登登之勞苦也鬢髮忽爲素故稱之老翁坂

兩峯銅窟

在不忘大岳以南巡行之次視其鑿開之狀先令鑿師穿山闢土設架自是隨地勢高低而上下左右詰曲縱横出沒鑿開覓其鑛土取所堀土而投之數口釜中而鎔爛了又設一烘爐而烹其所鎔之鑛漫火而銷爍去於是始爲銅再鍛錬而爲珍時山司長説其略曰因鑛之美惡而有所得之多少一日所銷爍已及三百六拾且得鑛如此而不息一歳之間縄々致成功者謂之一枚此尤上品也 枚者謂所得之利數字書曰枚凾也數物曰枚者是也 故曰所得之數或三枚或五枚者爲極品也鑿司曰穿徒各入坎中時前路幽暗不能進入焉故預截細竹急炊之而設之炬料入坑者燃之則壙中煒燁光能照之有風而不滅得通行其黒道矣且祭后土以祈其利也

釜崎溫泉

在八宮以西覓取之山間能治諸證是以佗方久病廢疾者不遠千里而輻湊得驗而歸者亦多封內之名湯也湯舍上有善逝堂

硯石嵓

過河原子村而登猴萱坂上則路傍有巨石石上有小泓其水雖炎旱紅暑未能嘗乾焉鄉人相傳往昔賴義朝臣東征之時用此水而作家書也後人稱之硯水石

大頭山銅窟

在不忘山南斯亦有藏王祠山下有銅窟謂之熊澤山前廣平地謂之橫平澤其廣遠地平々渺々更如長堤青草離々遠相連其南曰鎖鑰岩下有沼其以東乃遊女峯侍婢山峙其前樋澤山陰乃銅窟之山口也下有川曰橫川

三岳祠

在關宿驛畔是地往昔有古關號急瀨關有寺曰金寶山圓藏寺有上棟文記曰百六代後奈良帝天文廿四年乙卯（是歲改元弘治元年）七月十日伊達家臣中野常陸宗朝二瓶縫殿助久所建也

大關古館

在關宿驛後西南曰之八幡館是乃大關山城守故墟也其西有一古杉一根而三株鄉人相傳伊達九世之遠祖大膳大夫政宗君妹公庵室址往昔有故縲居焉爾後落飾居此山麓

磐神峯

在神原西山頭多巨石相並如神仙像其佗奇形怪像殆非凡境焉鄉人曰之巖神仙半腹翠微深處有一大石曰之犬石相傳往昔有地仙時々出沒于人間平日所養之犬化石云

東光寺

在湯原驛口號鹿園山寺中安前政宗君及夫人之牌子

八幡神祠

同所有上梁文記曰百四代土御門帝明應九年

庚申八月十四日伊達十三世尚宗君所修造也爾後百六代後奈良帝天文五年丙申八月十八日十四世稙宗君世子晴宗君再興家臣濱田伊豆宗景監造百七代正親町帝天正十九年辛卯八月十四日十七世政宗君世子國千代君重修之濱田伊豆監造

玉木古城址

在玉木山西是乃前代政宗君之城墟也鄉人相傳自沼邊村董神至此地往昔政宗君戰鬪之地也

東光寺址

往年在故舘畔後遷之湯原驛口先是夫人陵墓亦在古舘邊隣境出黃金鑿師穿之及陵墓遂失其地也云

仙翁嶽屋代峠

斯地奥羽之封疆去湯原驛一里餘崚極神秀最大嶽也其下曰仙翁峯鄉人言往古一地仙遊于此時々有人或見之者魁岸異相也其地也幽谷深澗斷岸巳萬丈翠檜綠篠怪松高樹森々鬱々其西嶺米澤地其北大岳曰大安邇小安邇是亦屬米澤岳麓澗底有小橋々西則米澤地以兩地相迫而俗呼謂之踵合（足跟曰之踵言以其相迫若合背後並足跟而名之）右邊有屈曲羊腸登々五六町左邊臨不測峯謂之七曲坂是古所謂屋代坂也往昔九世政宗君率兵屢軍於此或冒深雪或遇幽霧常嗜倭歌肯耽雅騷忽發感興逈朗吟曰

なか〳〵につゝらおりなる道絶て雪にとなりのちかき山さと

山あひのきりはさながら海に似て濤かときけは松かせのをと

今也古松盡而新松少非往年鬱林松濤之態然聞鄉人之談或有時黃霧埋幽峯溪風起松濤深雪路絶白屋爲隣者多皆彷彿乎政宗君吟詠之象

按世有稱菅原眞公百首和歌者偶見後一首有以佐奈加良四字而作阿志多能字然則本菅相公之歌而先君邂逅朗吟乎此歟

地藏巖

渡瀨以北在小梁澤中石色淡碧高一丈許其形象如石佛相並之狀鄉人曰之地藏岩

不動巖

在渡瀨以東斷岸千尺古樹萬株岩下細路石逕殆非人境焉斷巖縮々然若綺縠若疊襞紋理密察尤可愛嵓上石面印些赤色土人以爲往古不動飛來着此岩上之處是乃不動焰光之所現恐怖信仰岩下設堂置木佛謂之依視不動山頭巖樹翁鬱青松亦相連緣葉交翠朱實結子向東嶺而相峙其奇狀不可勝言鄉人呼其斷岩曰縮岩

屋料巖

向不動巖西北立兩地俱在小原村相傳大古有飛驒工匠者術壓魯般欲營不動堂舍於雲雨之間而誇其奇巧妙術焉於是斧斤鑿斫不管停手時會夏漏甚短未幾而夜既白憤其功之不立疾其志之不成而廼舉其所斧鑿之材木而舍之壑以彼精神之至誠也皆化爲石材鄉人謂之材木巖如今所存之狀有如柱梁桁板者數萬片相似屋料之並峙東方第一曰茆蓋第二曰貫材第三曰角柱第四曰上鴨居第五曰敷板其餘箇々片々認之則尽彷彿其象而不知其幾萬片幾千重焉一片剝落去則復有一片巖底未詳其幾重疊也廣狹長短巨細大小咸隨其入用猥闐坫楔渾如其所欲而其巖面東南已三町餘實希世之壯觀也溪水奔流遶其下石巖歷年崩墜者一歲凡不知幾千萬累有洪水則必激流去然一片不流出于隣境焉鄉人相誇曰是山神愛惜而不出是亦可怪也

按飛驒內匠一宵斧鑿之說妄誕之甚者豈夫然耶實造化之妙用自然之神作也常人未識

有此理故往々驚奇愕變信其怪誕可勝嘆哉
嚮依命巡行于其地自渡湍圯上望前程則兩
石巖嶙峋相對滿行色樹間細路倚巖畔石徑
斜囘巖邊處出堂舍簷牙半翠松一兩株落木
三四根下流石伏巖崎落々磊々行人隱見於
樹間驛馬出沒於巖畔幽致高趣殆如對妙畫
神手嗚乎令好事之徒風藻之客而熟視于此
好勝則須若干之名文幾首之絕唱發于茲也
實希代之壯觀哉

鑿開關

去不動巖三町餘巨石壁立斷岩兩分相傳往古
道路狹隘行人客子甚艱行路時鄉黨有力人稱
大骨善左衞門膂力勇敢冠于常人聞其事自出
力而排石門於左右而劈開焉自是往來更安其
手痕今現存于石上

黒峯銀窟

在上戸澤以南有一山曰黒峯頭年出銀鑛焉因
山司鑿匠設其具而貪得又出戸澤驛六七町濟
幽泉澗畔登雜佩坂々上亦有古金窟是往時出
金之山也

兒坂嶺

坂上已二十三町縈回九折巳亦十有八曲俗謂
之大坂嶺乃我太守封疆之地也坂口有堂舍置
不動像相傳佛工春日之作也鄉人稱兒安坂往
時貝田驛有孕婦偶上下此羊腸俄爾臨大期忽
及開胎于坂上平安而無恙仍稱曰兒安坂以臨
嶮難而開胎之平也家有孕婦者或補其小石懷
其方土而歸蓋欲慣彼平安也坂頭望南天則伊
達安達江山村落盡來於目下

阿津賀志山 或作安津賀志厚樫

有兩說一曰貝田東山也一曰過越河鄉說曰秦衡欲拒幕下引百川而爲要害故幕下直不得歷道路而進兵于此地濟山涉水而勞苦至關門仍其地曰越
河封疆石數町路傍東山曰之阿津賀志也舊此
地在伊達郡今屬刈田郡故有此兩說是古之所

謂關門之地世稱伊達大城戸者是也八首戀相亞之其山陰湯倉山大峯山也

文治五年己酉藤泰衡以異母兄錦戸國衡及金剛別當秀綱等守此城壘且搆湟於國見宿（國見宿未詳其地今貝田以南有一高山稱之國見山蓋指此山麓村落乎想夫今之貝田便古之國見宿與）與阿津賀志間引逢隈河流而爲要害欲先遣秀綱等拒幕下于阿津賀志山前

同年八月八日幕下先鋒畠山重忠及小山朝光加藤二景廉工藤行光祐光等昧爽來襲秀綱敗走而退于大城戸

同月九日夜三浦義村葛西淸重工藤行光祐光狩野親光藤澤淸近河村千鶴丸七士潜相議終夜踰嶮岨昧爽戰於大城戸行光最先登乃獲泰衡兵將伴藤八者東奥力人也

左近將監能直宮六傔仗國平討佐藤三郎季員倶有功

同十日幕下賴朝帥師攻阿津賀志有安藤次者昨夜誘小山朝光紀權守波賀三郎大友某等自爲郷導潜出營陣自藤田宿歷會津路踰土湯嶽鳥取越黎明不意出于城壘後山於是城中擾亂奥兵盡潰棄甲曳兵敗走國衡亦單騎而逃亡獨主將秀綱子下須房太郎秀方留在城中不敢降自奮戰而不屈遂爲行光臣藤五所討死時十有三歳父秀綱亦爲朝光所討

此役也七子之勇敢安藤次之奇計可謂冠諸士然後世有追之者也如夫秀方幼齡未及成童能憤城兵之恥獨留于敗走擾亂之後自奮起于堅甲利兵之間屢當屢戰而不屈遂守死善道以己一人之勇而雪東奥數輩之懦實古今之美譚也其事載在東史之中然後人未能偏觀而盡識也故特出于此而欲斯人乃知後世幼冲之模範且凡禀生于士林者千載之下雖幼孩庶幾能勵其志能傚此人則發揚家聲于子孫嗚乎奇哉

經岡

土人未詳其地以東史考之則阿津賀志山頭其故址矣

文治之役泰衡族臣佐藤莊司家信與叔父河邊太郎高經伊賀良目七郎高重構兵于伊達郡石郡坂時八月八日常州伊佐爲宗爲重資綱爲家四君據同郡澤原邊攻家信家信屢拒之不克遂城陷四君獲莊司已下酋長首十八級梟諸厚樫山上經岡四君吾太守遠祖宗村君之子幕下之親戚仍勃興有此功

封疆石　龜井泉　偏葉蘆

立石于茲而界伊達刈田地山下有幽泉號龜井泉々傍生葦葦其葉皆偏生鄉人稱偏葉蘆

馬形湖

妙道山中有湖水相傳往昔田村麻呂所駕良驥誤墜于池中其湖似馬形仍土人謂之馬形湖鄉俗誤呼馬牛湖

破鐙坂

齋川以西羊腸維石巖々嚼足毀蹄一高坂也是以馬憂虺隤人痛嶮艱王勃所謂關山難踰者於是乎可信矣仍土人稱破鐙坂

古將堂

破鐙坂東有一堂中置二女影身着戎衣服頭戴烏帽子右方執弓矢左方撫刀劍相傳所祭田村麻呂鈴鹿神女也有寺曰遊王山高福寺斯地往昔有妖魁害人延曆十四年乙亥坂上田村麻呂東征之次欲擊而殪焉彼素神變妙用或竄于叢莽或潜于洞窟不能容易討之田村憂之而禱之鈴鹿神於是神飛揚來戮力僇之遂獲其首瘞之一堆塚一鄉盡安仍建祠合鈴鹿神而祭之故謂之將軍堂或古將堂或說曰往古惡路王赤頭等凶屬文身黃土丹砂化鬼物屢害人實皆盜賊之徒也斯地亦以惡路王遊旋之故而號遊王山

按田村討凶賊于茲之事載籍無所見矧又鈴

鹿神乃所祭伊裝册尊也豈與田村合祭之耶
且其像倶女粧也何與于此矣尤不足信焉
鄕俗曰山頭有叢祠乃所祭刈田麻呂也刈田麻
呂乃稱德帝寶龜元年九月乙亥任陸奥鎭守將
軍仍慕其勇壯建祠以祀之如今所祭二女佐藤
次信忠信之婦也倶孝順于舅姑佗時兩婦嬰疾
疫舅姑憂之祈之叢祠病忽愈後人感生前純孝
貞潔建二女廟以爲脇護神廼其影也

無影池

在中目村有寺曰威德寺々畔有汚池水色醮藍
漣漪疊鱗環寺而皆山也青巒翠峯臨其池塘然
自古無山影之浮水上矣不詳何故焉人以爲奇
異之事仍有此名

白石城

往時長尾宰相景勝属城以其部將甘糟備後而
居于此會津保障之要害也慶長五年備後令其
甥登坂式部留守城中有故歸于會津是歲七月
二十四日先君黄門政宗卿依神君之命而急攻
之城已陷以先登之功而同七年壬寅十二月與
諸亘理城主片倉小十郎景綱然後以亘理城而
與伊達安房成實自是景綱子孫世々居此城而
司大守軍行前鋒

調子山

白石城邑東南有小岳謂之調子岳是乃白石之
役伊達安房成實所屯之地事見于下

一本樹

白石城西地謂之一本木往昔白石之役片倉小
十郎景綱所屯也相傳此役也望先登而立功乎
茲者多特成實景綱一時豪將每々爭雄較功仍
此役亦相分于東西而謀敵瞯城然後各進兵攻
之城兵大亂景綱察守備之虛單騎着城下後門
徒步攀城屏時一旗士從後蹐高壁而入於城中
取其旗而急立之勵聲呼先登成實望見之歎曰
已矣乎我功已空黄門君於是以城池而賜之景

綱以顯其功績傳今至後裔其勳業之立也實始
乎此一本樹

三株怪松

白石川北路傍有古松一根三株鄉人相傳慶長
中白石之役虬枝鶴骨如怒若奔勁節似奮以資
先君之兵氣人或以爲甲兵襲來之狀也
按往昔秦王堅與陽平公融登壽陽城望之見
晉兵部陣嚴整又望見八公山草木皆以爲晉
兵謝玄渡水擊之秦兵遂潰玄等乘勝追擊秦
兵大敗自相陷籍而死者蔽野塞川其走者聞
風聲鶴唳皆以爲晉兵且至丁南湖曰草木也
而爲晉兵乎風鶴也而爲晉師乎天奪秦人之
魄是以驚怖而眩惑如此也此事偶與三株松
事合是併先君得天幸而增意氣兵勢之兆也
豈不奇哉

投兒川

去宮驛六七町有小川是乃往昔乳母投用明帝
皇子之地即化白鳥之河流也鄉人謂之投兒川
事詳柴田大高下

投嚢邑

鄉人曰之長袋村投嚢長袋訓相近也故誤呼之
此村落也緣竹猗々產名竹之地是亦用明帝后
妃徒步疲勞之餘投所裹之餱糧乃謂之投嚢見
大高下

新熊野祠

未詳其地
土御門帝正治二年五月廿八日陸奥國葛田郡
新熊野社僧論坊領境請果斷於畠山重忠重忠
辭謝焉仍賴家把筆而抹墨於地圖之中緣茲是
非已決

柴田郡 東史作芝田今從正史

四十四代元正帝養老四年十月戊子柴田郡置刈田郡

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國柴田郡人外正六位文部島足賜姓安倍柴田臣 同郡人從八位大伴部福麻呂賜大伴柴田臣是大國造道島宿禰島足所請也

五十六代淸和帝貞觀八年三月癸酉陸奧國柴田郡大領外正八位上阿波陸奧臣永宗授借外從五位下

八十二代後鳥羽帝文治五年八月十日和田義盛射國衡于柴田郡大高宮前詳于大高下

八十三代土御門帝正治二年九月十四日宮城四郎討芝田次郎詳于柴田城下

神名帳曰柴田郡一座大 大高山神社名神大

韮神山

在船迫大河原道間沼邊村磊落崔嵬臨行路山上多黃韮鄉人以爲山神之靈也謂之韮神峯岩畔生石澗檜人或采栽之庭除以愛之此邊皆古戰場也

輝井墓

右山頭西北有古石墳相傳藤泰衡家臣輝井太郎高直戰死于文治之役瘞屍于茲山下有小橋謂之輝井橋往時高直接兵之地也

洗元水

同所在山陰藪澤中相傳高直戰死從者藏主元于山畔小池人知之得之于池中洗之其血淋漓池水已紅至今其水色猶往日

戰士塚

在同村距韮神西南三十餘町文治之役瘞戰死士卒之地往年墳墓累々今也犁爲田鄉人呼舊名稱之千塚

右三條不見東史雖俗談亦高直無死於此之說最可疑

淺間社

在同村往昔葛西紀伊守者建之

芝田古城 乃柴田古城也文字依事實而從東史

鄕人曰舟岡城或號四保館是乃芝田次郎故墟也其牙城方四十間二郭三十間遶七十間三郭方七十間其地勢峻嶮東南有大湖西有並倉湖東有內湖北湛阿武隅河可謂鍾地利之美者也鄕談數說雖不可信古今往々傳來而遺于口碑故舉此而記之

相傳芝田氏往昔全盛之時倉在一囊粟食而雖竭簞有一片帛裁而無盡庭有一甘泉汲而不涸

又曰城上有一古井出鮫綃裁之累年不斷城主性貪婪而無饜佗日怪其無盡藏令人結之驥尾而馳驅繞於井上其長二三百丈許鮫綃稍盡有青小蛇附綃尾而出走去失所在自是無其物有也或曰向所記粟米布帛亦出於井庭者也

又曰城上有小池以晚春廿日每歲天女降舞于池上不期而見之者多

按右數說奇怪妄談豈夫然耶姑記此以備事實

東史曰羽林源賴家屢召芝田次郎稱病不至於是正治三年九月四日令宮城四郎攻芝田城時工藤行光從者藤五藤三者之東奥而還于鎌倉偶聞之白河關往援宮城兵拔其城壘大有戰功云

按芝田古壘如今望之城非不高也池非不深也兵革非不堅利也米粟非不多也然今宮城氏一舉而盡之何哉先氏有言曰域民不以封疆之界固國不以山谿之險宜哉芝田氏至以不臣而亡滅之速也然則所以地利不如人和也吳起曰在德而不在險烏乎信夫若其怪誕則吾斯之未能信

船迫驛

如今道路驛店是也

東史曰文治五年八月十一日幕下宿船迫驛是時畠山重忠獻昨日所獲錦戸國衡元幕下殊賞其功和田義盛在傍是向臣之所射而非彼之功臣昨夜黄昏追國衡于大高宮前回騎互相支注之國衡未發臣先射而集其肘彼也着緋甲駕驪馬請以物色而質之因令人點撿之果如其言其鏃留在背後詰重忠重忠對曰臣時進兵在後軍麾下兵大串三郎者獲其元以爲自所討也仍所以獻呈也義盛止其所爭

又曰河村千鶴丸其年纔十有三歳私從軍此役而前日與三浦義村等同立功于阿津加志此是山城權守秀高第四子也千鶴兄義秀與大場景親困幕下於石橋撥平之後千鶴落魄變姓名寄身于母氏潜居于鎌倉焉其志所以欲一味得時運而揚家聲謝亡兄之罪也仍此役也雖幼冲與先輩俱勵勇功乎此焉幕下賞其功且問其先其宜之於是倍奇之令加賀美二郎長清加冠焉賜名字四郎秀清以一片之赤心而永續父祖之英名贖亡兄之罪戻上下感彼夙志賞其功勞云

鐵佛堂

舟迫驛西四五十歩許有農家鄕人曰寺屋敷家主曰彌次右衛門屋後有小堂々中有鐵佛四軀蓋舊時安五智如來而中欠其一者也各南向高可三尺俱並座第一胸間有文字消爍不詳蓋書辟支佛字者乎左右綿字欠上下文字不知其由也第二有山字其下字滅下有法師字左記文永三年丁子十月三日第三左有氏字右有行阿彌佗佛字不知何年何人安置之文字多爛滅屢過回祿者矣其西有寺曰松光山神宮寺修眞言彼佛像亦往時寺院舊物歟彼白綿各佛頂間之曰毎年竈事畢而奉之因想第一佛胸下綿字有故而書因竈農家寄附而告竈成之事乎

按文永三年八十九代龜山帝七年是歳無丁子丁丙寅至今幾四百八十餘年爛滅亦宜哉

白幡寺

自視樹驛數町右傍有神祠祀正八幡有寺曰成就山白幡寺相傳往昔源義家朝臣東征之日立白幡于此寺以南曰白旗屋敷

柏葉巖

去白幡寺數十町有土堠相距又三十餘步路傍有白碧巖劃之則片々盡有紋理皆木葉之鮮明者也鄉人曰之柏葉石風流雅物尤可愛

按神社啓蒙曰御崎在出雲國出雲郡出雲鄉也天下地主神也社記曰八束水神名神記曰八握髮尊者素盞烏別稱也蓋八握髯生之緣矣間當宮有紋石者石面有柏葉如良工彫刻而雖爲數片其紋猶存也相傳稱神紋是也否曰按名神記出雲國日崎山有柏葉紋形石神代昔平國而後登龍成峯而爲柏占曰吾欲往於柏葉之所止也遂隨風止於此地故至今示其幽契此事實聊相似仍記備參考

大佛巖

在富澤村山下巖面彫佛像長八尺左傍有六字名號右旁有嘉元四年丙午卯月二日爲椿父焉不詳何人也

大高宮　或作大鷹

在平村韮神西南有岑鬱地松杉羣深村落路遠是其神祠之在處也延喜式所謂大高山神社是也緣起說曰芝田郡平村大高宮迺人王三十三代欽明天皇第四皇子橘豐日尊乃用明天皇也夙齡奉勅遠遊於東方諸國而黜檢庸貢賦斂之事是以出於皇都久在于東藩而寓居于斯山中其際深慈愛厚恩澤施仁心于民於是人懷民化而親附愛護仰慕皇子猶幼兒之於父母皇子有妃號玉倚姬歲餘而孕焉皇子曰今於懷胎無乃其有所感與曰妾前宵夢白鳥東方來入于懷抱然後有身皇子曰愈我在東藩來禱白鳥神久矣想夫神之所化乎后妃產兒容貌端正有異相皇子相喜

寵異尤深後皇子依命將還于京師臨別慇懃寄言曰吾將迎小君于皇州夫人諾焉相待已三歲遂絕其音耗夫人日夜相思不息焉瞻戀日久遠望斷腸終發疾將死乳母看疾之革不耐悲痛之情抱幼兒而臨河畔垂涕說兒曰母后眷戀父君今將殞命焉君若神明之所化則須令身代母后死而遂雙親再會之志矣言訖投之水中時幼兒化白鳥飛揚去后妃亦未幾而薨乳母不堪悶絕之至輾轉而死鄉人葬之近村山丘植樹而去爾後前之白鳥集于樹上日夜悲鳴不去鄉黨怪之以狀聞諸皇都皇子聞訃哀痛慘怛不可抑焉悲嘆之餘使侍臣遺天旗雄劍龍蹄戎具樂器等于此地官使至於墓陵而述天意言未終有白鳥白一作鷹揚於陵上翻然乎空中官使歸奏于皇子仍命建白鷹社重使侍臣遺玉机寶鏡筆硯樂器袍袴等號曰大鷹宮後皇子繼寶祚爲天子崩御之後奉謚謂之用明天皇

所賻之征鞍今猶存形制高大異今制以螺鈿而彫櫻花前無手形者有古鐙朱內鋏外有鋏坐徑一寸長可五寸兩郭各以鋏板蔽之或曰手形者古制不設之平治之役士卒遇大雪龜手甚不堪磬控馳驅焉於是鎌田正淸始制之以至今

金瀬市人總兵衛者傳襲玉笛一管來彼祖某一日伐喬木于林下枯朽已久半空洞伐之而仆焉中獲一古篴長一尺二寸九分處々漆卷藤笛頭彫菊花紋尤舊物也鄉老曰是乃往昔山路所用之牧笛也故其家世藏櫃而猶存焉乃帝所賻樂器之一也

世稱用明帝少時欲得豐後國眞野長一女玉世姬仍變姓名號山路爲彼家牧奴常好弄笛我州人以爲東奧刈田大高故事用明本記兩無所見矣且治世纔二年無德行善政之可稱也疑後人以臆計弘計王任播磨細目之事牽

合附會傳之乎
按國史二十四代顯宗帝諱弘計履中天皇孫市邊押磐皇子第三子仁賢天皇弟也安康三年十月父押磐誅死其帳内日下部連使主與其子吾田彦竊奉億計弘計避難于丹波國余社郡仍恐見害更逃往播磨國縮見山石室使主私自縊死弘計勸億計赴明石倶就仕縮見屯倉首海部造細目吾田彦未嘗離王固執臣禮清寧二年十一月播磨國司山邊連先祖來目部小楯親辨新嘗供物于赤石郡適會縮見屯倉首設宴累日首令弘計居竈傍秉燭夜深酒酣次第儛訖首對小楯特稱億計弘計兄弟德行小楯撫琴命兄弟起儛億計儛訖弘計亦起儛既而數闋小楯深異而令稱其族弘計謂押磐皇子裔也小楯大驚離席再拜欽伏承事於是悉發郡民不日造宮以聞京師天皇命小楯持節將左右舍人至赤石奉迎養爲皇子遂立爲太子不幾而天皇升遐太子億計與皇子弘計相讓不即位由是百官大會太子亦推讓之皇子益固辭太子慷慨流涕皇子自知不終居而恐逆兄意即聽之而不御世大臣等強請登祚皇子即位於飛鳥八鈎宮天皇久居邊裔悉知百姓憂苦恒見枉屈布德施惠恤貧養孀天下親附

神社説曰敏達天皇元年壬辰勸請于大鷹宮於平村

又曰崇峻天皇二年己酉聖德太子分侍臣於四道贈一級於諸國神社時合祭用明帝后妃于一宮今大高宮是也山稱大鷹山寺曰大林寺爲之新宮村田白鳥神社乃所祭日本武尊而爲之本宮也

按神社啓蒙曰白鳥明神日本武尊歸自東征而至伊勢能褒野崩時年三十仍葬能褒野陵其神化白鳥出指倭國而飛群臣開棺見之空

留明衣白鳥停于倭琴彈原仍造陵其處白鳥更飛至河內留舊市邑亦造陵故三陵曰白鳥陵然遂高翔上天從葬衣冠

一說曰讚岐國有白鳥明神是倭武尊也自伊勢國差西飛去止于此國云又云倭武尊化爲白鶴西飛止讚州

又曰大鳥神社在和泉國大鳥郡一宮記曰日本武尊也卜部兼凞說曰昔有白鳳飛來止是處天照大神所化也故名大鳥

大林寺住僧某說曰前村田定龍寺上京撰村田平村緣起二本來其志則好然旨趣之所歸着實主村田神祠而次平村立言曰當社便指村田明神所祭乃日本武尊神靈故爲本宮平村所祭用明皇子宮故爲新宮某謂是皆異我宮社所傳之說也當社便指平村神祠所祭廼用明帝神名帳所謂大高山神社刈田峯宮所祭乃后妃靈村田宮號皇子宮芦立宮稱乳母宮也又大高往古宮址在小柴村去社北可二里昔有用明帝在藩故墟鄉人相崇建社于其地祭之曰大高宮爾後敏達帝時移社于今平村見于篇下本故鄉俗指舊地而稱皇墟是乃所以爲帝子故都而稱尊之也然則指村田而爲本宮平村爲新宮者亦未爲得其說焉且夫神社之於緣起豈假浮屠佛氏之手成之耶某宿志壹在欲族神道家之正說而修之故村田所藏緣起吾未能信用之也

社中有古鰐口徑二尺四寸五分有文字曰正應六年癸巳三月五日御子息延命諸願圓滿所勸進沙門法橋玄應相傳爲舊物焉

正應六年乃九十一代伏見帝永仁元年也

藏鋏鉢徑九寸高四寸六分有文字橫書曰永觀十一年巳辰十月一日奉掛於明神松丸上之

按永觀十一年廼六十六代一條帝正曆四年癸巳也永觀舊六十四代圓融帝年號二年而

改元于六十五代花山帝永延乙酉無十一年並己辰松丸未詳何人蓋東國幼冲之者乎想夫在邊鄙而未知改元之行妄用其舊號乎有鉄塔相傳和泉三郎忠衡所獻鹽釜亦有之有破鐘一器平村邑中在富田地去社東南數十町相傳元祿十五年夏鄉有與摠兵衛者屢聞地中有鳴號之聲怪而穿土則得鬼鐘一器然犂齒破之文字半滅所殘者有永承十二年十一月朔丸字藏之社中今猶存

按永承適丁七十代後冷泉帝天喜四年丙申而無十二年是亦遠國不知改元者也此時賴義朝臣專東征之年也此一器可謂舊物也

前件用明帝在于東藩之事不見國史無徵德行之可舉矧又即位未幾而崩乎尤可疑若有之則與殷高宗爲王子時其父小乙欲其知民之艱苦故居民間之義同日之譚而尤可好也

修禊湖

去社西二町餘有一舊湖往昔大高神輿修禊地也鄉人曰之御洗沼

沒馬田

去社北四町餘在福田村中其北阜山下田畝是往時沒馬之田國衡戰死之地也

東史曰文治五年八月十日厚樫已陷主將國衡駕駿馬單騎逃亡欲踰大關山是乃有也無也關山而之出羽日既薄桑楡行路更黑揚鞭走和田義盛追之及于宮前田畔國衡回轡而注義盛先射之徹肩而鏃及背畠山重忠將大兵而襲來義盛欲再發機國衡恐惧忽沒傍田泥中加鞭不敢上遂爲重忠從者大串三郎所討獲其乘馬歸是乃邦內之良驪號曰高館驪雖一日三登于峻嶮不背屈今日用於此峻巡而不進遂陷水田後人謂之獲馬水一鄉爲間田而無耕芸

邑中有老農名助八郎相傳其先近江人猪早太

後裔仍藏一刀于家其作小鍛冶宗近是乃往昔所刺鵺之名刀也

善逝堂 古墳

去平村七八町路傍有古宇置藥師右畔有古石墳仆倒而半毀裂高九尺濶二尺六寸首圖圓相中有九圖各書梵字其下書元亨元年辛酉臘月十五日其下施主敬白四字兩行書皆楷法也圓相右下有諸行無常是生滅法八字左下有生滅滅已寂滅爲樂八字各書草法其字態不凡頗好草書也左方下有慈母妙蓮大姉六字是亦草字也其餘多古石墳石面爛腐文字消滅

元亨元年辛酉丁九十五代後醍醐帝三年

村田白鳥神社

在村田驛北三町餘神社以南有寺曰大宮山定龍寺

釋寛深緣起曰是乃所祭日本武尊故爲之本宮大高社僧某曰寛深說與舊說不合焉其所祭乃用明天皇皇子也故建乳母宮于近郷芦立是其證也

舊說或曰此神安倍賴時季子白鳥八郎行任靈也以爲祟而郷人建祠以祀之

緣起說曰源賴義義家父子東征之日臥神宮忽夢有一甲士執弓矢佩雄劍而左右于一白衣冠白言曰是乃日本武尊左右乃大津武日命宿禰吉備武彥命也宜以吾神德而加兵威于士卒也明日有白鵝一雙白鳥一翼飛揚于旗旄上矣自是官兵益張兵威遂斃逆徒焉康平六年癸卯二月賴義新經營宮社以賽于神云

康平六年癸卯丁七十代後冷泉十八年

世人呼白鵠而號白鳥毛羽純白特稱來久是以白鳥明神亦實白鵠也因敬崇白鵠恰如神也觸之則身體痛馱之則牛馬汗食之則人忽死是以村田平村刈田等神同稱白鳥則其神廻爲白鵠無可疑是以柴田刈田兩郡及建白鳥神祠地俱

尊敬恐怖白鵠殊甚故子々孫々不得喰其肉焉對飛翔則羅拜會割烹者袂而逃避之

予向蒙台命南行之次作忌鵠解其詞曰

予南行之時訝柴田郡長曰我聞柴田刈田兩郡自古酷崇敬白鵠焉是以忌喰其肉而恐惧怖畏恰若神是神名依有白鳥之號也鄉俗以爲白鳥使指白鵠雖白禽惟多世人唯以鵠而呼白鳥其佗白羽者直指示其名故神號亦爲白鵠然則白鵠正爲神體也不可疑焉是以食者必有罰故崇敬恐惧也如是我今解之以明辨矣曰是乃無智妄作之甚者何奚夫然耶唯非庸俗恐怖雖壯士書生生乎此地者不脫其忌怖也甚矣乎哉是非徒失愚昧却害靈威神德亦於是乎瀆不可不審也夫白鳥者素禽之通稱如今以白鳥而爲神號者乃日本武尊之所化考諸日本書記及神書等唯書白禽而不言白鵠書紀元非庸凡記焉舍人親王豈略其實記而惑後世哉至不指言其鳥却言白鳥則有微意而愈蓋武尊之靈豈屑々變化某鳥而驚人之視聽哉想夫唯言白鳥則其狀亦非鵠非鶴非雉非雞非雁非鷺非鳩非鵝者可觀矣白鳥非白鵠之實考此亦其旨顯然（前件曰作白鵠又曰化白凰或謂大鳥或謂大鷹其說不同焉於是亦考證之一也）然世俗固無智文盲愚蒙擬騃白鳥不解謂凡鳥之白者妄立私習偏泥鵠之白毛而當其神號白是以降襄謬傳誤至以固惑乎後世於是愈不辨白鳥之爲素禽之通稱謾以日本武尊而實爲白鵠焉夫武尊之神靈以化白禽而須指白鵠直爲神體而加恐惧崇敬則凡世間素氅繡羽者皆可崇敬矣然則得白色而稟生者於禽部豈獨白鵠而已哉如白鶴白鷺白鷹白鷗白雉白雞白鳥白鷳白雀白燕者白羽翮之白言之則渾皆可謂之白鳥而推爲鬼神皆加敬貴重不可喰焉然獨取彼而舍之偏致崇敬乎白鵠而遺其餘獨何哉縱

令神靈之所化曰實白鵠也則其祟矣獨加於兩郡而其罰不敢及於他郡異鄉白鵠實有神靈則雖他邦之人食之者須齊加其神罰得其祟也然其祟唯嚴乎兩郡之產而鄉人喰之則倏忽嘔血而死驛馬負之則俄爾發汗而僵其著見明顯如此乎兩郡何哉以素爲神體則胡鵠獨貴而雞鶴鷺雁之屬却賤乎若謂此等之屬本微物輕賤不足擬神體且非有神智者唯以形質之大羽翮之鮮明而爲貴則白鶴與白鵠揭滅其貴重皎潔哉於其生稟之靈亦可相輸贏夫神明者天地共公之理也今以鵠實爲有神靈則胡奚私其靈威于兩郡而却不施公于佗方耶想夫自古不辨白鳥乃素禽之通稱妄染俗習以白鵠而當之爾來鄉黨之祖先一直怖之一味重之俾子弟幼冲之徒愚蒙不肖之輩慣聞隨見荏苒信其虛誕而感格其氣類自是以來崇敬惧怖亦自然與性成而遂致此弊矧又有生之始也稟其氣類而生有生之後也拘其氣習而長令兩郡之產盲聾乎此迷惑于彼蒙昧顚沛殊如此可謂冥晴無智之甚者也且夫至令神號違其實神靈失其德乎悲夫若卓越之才大膽之量出而獨立勇猛說破其固滯洗濯其舊染闢惑革謬永除彼之弊則神靈著於此而其疾威之應亦無窮郡長於是唯而去

雙龍樹

白鳥宮前有喬木藤蔓不知經幾星霜焉相傳往時康平之役逆賊侵官兵大掠宮社燬發寺院時兩樹忽化二龍偃蜒追兵彼逆賊恐怖退其樹今猶存焉

乳母祠

去白鳥神祠十二三町路右東山乃芦立村有一叢祉所祭用明皇子之乳母也有寺曰護福山袋原寺事見大高寺谷由近此

星野城址

去神祠西北十五町餘有古館往昔星野志頭摩舊墟也

按志頭摩者未詳時世人物也

火雨坂

去楊枝阪北西二町餘有羊腸屈曲嶮隘石巖點點其細穴如穿鄉俗謂之火雨坂相傳太古一日火雨降石岩焦爍雨痕悉鑿去山半有石其形如龍子謂之石鼓岩

八幡神祠

在村田村相傳藤原朝臣政望嗣子久重者百三代後花園帝永享三年辛亥九月重陽日建之落成焉古鍔口今猶存

坼石神祠

在葉坂村未詳祭何神相傳往古其神坼石巖而出仍鄉黨建祠祀之其所破裂石巖今猶存

高木古刹

在堰場村號無畏山靈感寺相傳五十一代平城帝大同年中所建有大悲像釋空海所造有古鳧鐘記曰九十九代後光嚴帝應安七年乙卯奥州柴田郡高木鄉無畏山靈感寺住僧得秀所寄附也

憂思山

出河崎驛六七町西北有崔嵬鄉俗謂之涙顏山一鄉將雨必陰雲先昏山頭故鄉人豫知必雨仍名其山呼涙顏後惡其訓之不好改之曰憂思山蓋比人有思則催涙顏之義此山在砂金村中

八幡窟

憂思山南有大山岑鬱蒼翠南曰東松嶺北曰鬱林峯其下聳巉岩數十丈下有巖洞相傳往歲源義家朝臣東征經過山下忽遇暴雨避于岩下古窟如今猶存焉後人呼之八幡窟義家小字八幡太郎武毅勇敢冠古今是以戎狄聞其名而惧武威故世以此號而遂稱英雄仍後來適而有此美

名今亦洞中容二十餘輩而不爲狹焉

古骨銅山

鬱林峯以南跨西南者謂古骨山往時出銅其時穿獲巨人朽骨於地下其長一丈餘後人曰朽骨鑿空穿穴址猶存

有也無也關山

鄉俗謂之篠谷關於東史稱大關山者是也在歌詠而謂有也無也關其說詳于下其地也去篠谷驛已二里餘經截撐鳴駒鹿角三羊腸而登左右皆大山其一曰貍峯其二曰前鋒鏑其三中岳其四大岳其五外岳皆鋒鏑岳屬嶺也其六曰神仙岳外岳山陰乃兩關封疆也鋒鏑神仙兩大嶽半跨于羽州

關山大悲閣

踰前三羊腸而登擂盆坂左旁有起雲疊雪峻嶺登伏越高坂東望寸眸甚杳仙臺城邑及太白龜山諸山献翠東溟海濱島嶼汎青盡在目下山勢高峻可察乎此自是過朴木坂西北凋西北陵登堂前坂稍至大悲閣古稱關山地無也觀音是也有寺曰東奥山仙住寺本尊相傳釋行基作也斯地緣篠幽邃故鄉俗稱篠谷山左畔起雲嶺橫臥閣外右邊向仙岳及鋒鏑四山崢嶸峋嶙其奇絕不可勝言

神仙嶽

在大悲閣西北冠衆岳而鍾秀之神蹤也山下有巖窟可容三四十人左邊溪流澗泉沈々發清響濺々作琴聲西畔半腹多碧洞蘚室幽戸邃扉其西南翠篠青々芳草離々前程如展青氈其山巓嶺雲溪霧搖曳靉靆殆異人境鄉老曰曩昔有羽客地仙之徒而出沒山間栖遲岩洞隱見有無或有見之者也如今所存者往々皆其舊墟故址也仍鄉人曰之仙人嶽

薩埵原

悲閣以西已二町餘立石地藏而曰薩埵原此佛

本在地府而好導冥路能救夭殤仍立于此寓導
引行客來往之意呼此地曰賽河原此地名屬三
途川皆本冥府之號也故經歷者聊累細石而擬
其事實焉左旁地曠濶平遠謂之蓬原古詩所謂
原野蓬生古戰場之意也此地以爲奥羽封疆焉
自是望于最上領則月山湯殿山相連以南旭
日山其高嶽峻嶺四時戴雪常時帶雲其前山
長谷堂山往年最上義光朝臣與會津上杉景
勝接兵之地也（詳最上記）其下廻山形城邑其南山
陰峠一青山是自古所稱千代山其下所謂阿
古屋松是也其北山曰蜂澤山其地有大悲閣
曰唐松山觀音是所謂有也觀音也
古稱關山往古有山鬼伏山間闞行客之來往捕
之爲食時山中有一雙鳥人或不知山鬼之害而
過關山則神鳥謀山鬼有無或呼有也或呼無也
故識有無而人避其鬼脫其害也自是曰有也無
也關或曰關山觀音化神鳥鳴而告之令人覺彼
有無以脫其難後人建二關於兩地稱有也無也
觀音
按薩埵化鳥救世之術可謂慈愛尤深也釋氏
嘗誇言此佛也本具三十三身應變之德無處
而不普其救也若厭說則可謂無盡藏之妙矣
然惜先以其奇術而用或禁錮或虜殺則不遂
有無啞々之勞而行人自安矣奚夫迂耶佛氏
說專誇言而却不知失本旨遠也甚
鄉人話曰此地隆冬寒候殊甚岳雪尤深故預
每歲初冬設假屋而防護至來歲仲春而撤之
其屋也架數十材以茆蓋之四壁皆兪曰之雪
架篠谷以東皆有此設三冬所積之雪高於屋
上故穿積雪而取容光于座間且設竇徑而通
達于行路及比隣若行人旅客偶有來往則聽
人語跫聲于屋上綫如涉于頭上故屋中晝暗
日中多用燈火繼晷以資其明云
東史曰文治五年八月十日大木戶戰敗主將國

衡欲踰大關山而之于出羽
又曰同六年正月泰衡家臣大河次郎兼任欲歷川北秋田城踰大關山赴多賀國府而到于鎌倉焉先出於秋田城臨志加渡口履氷而往時堅氷條泮溺死者五千餘人

八雲御抄又良哉

ものゝふのいつさいるさにしほりするとや〳〵とりのむや〳〵の關

ものゝふとはたけき人也たゝ遠國の者をはいふ也陸奥出羽の中に行かよふ山あり木しけくしてゆきゝにたやすからすよつてしほりうちしてたとりゆくされはとや〳〵とほりといふなりむや〳〵はかの山口にある關の名なり出羽のうたにあり又關部にいなむやの關出羽むや〳〵の關同名也異説とや〳〵とりのむや〳〵の關鷹をいふ關はすゝかといふ不用也

歌枕名寄に　伊那無那關　布那布那關
伊那有那關　無那無那關　母那母那關

古歌

武夫のいつさ入さにしほりするとや〳〵とりのむや〳〵のせき

こしやせむこさてやあらんこれそこのとや〳〵とりのもや〳〵の關

むつの國思ひやるこそ遙なれとや〳〵とりのもや〳〵のせき

今案八雲御抄云陸奥出羽中に行かふ山は木茂くして往來たやすからす仍しほり打してたとりゆきされはとや〳〵とをりといふ也むや〳〵はかの山口にある關の名なり出羽の歌にありと云々

藻鹽草關部前説に同又有耶の關ともいふ也又いなむやの關　むや〳〵の關同事也

八雲御説

色葉集に云ものゝふとはたけき人を云なり上にいふかことし出さ入るさとは出さま入さま也しほりとは歸らんみちのしるしに木の枝をおりかけてゆく也しるしにおるといふことなりみちの國と出羽國との中に行かよふ山あり常に人もありかすして木茂きにしほりをしつゝありくなりされはとや〳〵とりとはとや〳〵とをりと云也ふや〳〵の關とはその山の陸奥國と出羽國方にある關をいふ也立文字をはからには布とよむ又はともよめはむやむやと云り又もや〳〵ともいへり日本紀云不便と書てもや〳〵とよめりされはそこともさゝすたよりならすとゝこほる所をいへるなるへし

永久四年百首隔遠待戀いなむやの關出羽

夫木　俊頼朝臣

すくせ山なといなむやの關をしもへたてゝ人に音をなかすらむ

久安五年七月山路歌合雪

同　大宰大貳重家卿

布るゆきにし津のしほりもうつもれてたつきもしらぬむや〳〵のせき

同　よみ人しらす

東路のとや〳〵とりの明ほののにほとゝきす鳴むや〳〵の關

御集名所戀部　土御門院御製

たのみ來し人の心もかはるやと問ても見はやうやむやの關

千首　宗良親王

霧ふかきとや〳〵とりの道とへは名にさへまようむや〳〵のせき

柵箱石

去金瀬驛五六町路傍有巨石形勢如累葛籠以葛

蓋造之納服器旅裝駄馬而用之俗曰之蒭籠相對者四塊目之柳箱石

臥牛石

柳箱石南一町餘有石似臥牛鄉俗曰臥牛石在中國亦有石牛故事其詩擧于此

石牛　　羅一峯

怪石巉峨伏似牛形容不倦幾春秋枯桑覆地如毛潤細雨淋身若汗流芳草縱多難下口長鞭任打不回頭幾回天晚人遙見問是誰家牧不收

烏帽子石

去伏牛石半町餘巨石有五六區其一高一丈餘次者一丈五尺濶二間有半其三者二丈五尺餘其面一丈五尺廣五六間向午未之間其際空濶望之西北則第三石頭可六尺如戴巾其下亦空洞高可八尺廣二間有半石面淡碧如立烏帽形第四石高一丈二尺廣可四間仍曰之烏帽子石其下有古窟封狐潛此土人以爲稻荷神也立叢祠祭之人或薦雞兒而牲焉其石前通幽徑青松六七株長杉兩三根插小路而立

首飾石

去寄石可半町西北有石高二間有半石頭廣二間下乃可二間石陰又有立石相連如人首加冠笄土人號曰冠笄石

槻木驛

往時驛口有雙槻樹以星霜久枯槁已甚一日有霹靂于樹頭而燒却了植新樹而繼舊名

平古城

在平村相傳芝田四郎子城也然考之舟岡事實則蓋其支城乎

小山田古館

在小山田村相傳小山田筑前故墟也筑前伊達家臣天正十六年掌麾于師山之役武毅出于衆自以手鎗刺敵滿地宿雪誤陷馬於泥中遂爲敵所討

沼邊城

在沼邊村沼邊玄蕃居館也

村田城

在村田村伊達十四世左京大夫稙宗君庶子村田萬好居館也

宇多郡　或作宇太

神名帳曰宇多郡一座　大　子眉嶺神社　名神大

子眉嶺神社

在菅谷鄉駒峯古老說曰古昔有異産者馬首獸身父母怖而棄諸壑時飛猿沐猴嚼葛葉而食之遂得生育矣此人死後鄉人建社而祀之如今呼其地而稱葛嶺其神乃子眉嶺神也

駒嶺城

在駒嶺村先是相馬家臣藤崎內藏允居館爾後黃門君攻而取之令黑木中務守之

谷地小屋城

在谷地小屋村相馬長門守義胤家臣杉目八郎左衛門居館也黃門君攻之而陷令大町參河守之

手長明神

新地村中有農家曰貝塚居往昔有神乎曰居伊具腹狼山好食貝子臂肘甚長屢伸長臂于山巔一

而撮數千貝子於東溟中嚼其子而棄殼於茲地委積如丘鄉人稱其神而謂之手長明神委殼之地謂之貝塚其朽貝腐殼如今猶存焉

鄉人曰元祿十二年夏日有人有故之於相馬領路經此村落盛夏炎蒸喉喘額汗乞水于貝塚地主時其人平日多病長鬚散髮容貌魁岸地主元愚昧不省殊信鬼甚以爲此乃神之所現揚言一鄉曰今日神明至于吾廬而乞水去實所以垂跡于吾地也説此妄言而誘愚民俱信此言相言曰神之降無可疑矣自是一鄉或投錢帛或薦酒食祭之水旱疾疫毎有求必祈神效驗立得之爾來造言維行妖説維成彌固其誕焉於是鄉黨雷同信仰酷厚雖異鄉他邦者亦傾家產費財用遐邇遠近靡然信之不遠千里而來地主稍得富榮後妖勢忽竭而幻術已衰人或覺妄誕而止彼富榮亦索寞

又牡鹿郡柳眼邑中有小徑路傍多秋田有狢者經過此地日已薄暮有妖狐遮路而爲妖狢者屢避之且不堪憤怒迺捉其狐尾狐欲脱之不可得乍嚼乍傷狢出勇力握之不放狐哀鳴特甚如此者終夜至天明而狐遂斃狢者亦死邑人視而怪便合瘞之因聞爲一堆塚他日有人語曰吾嘗患癰疾用藥餌而無功禱諸塚頭忽平愈後一鄉擧言此神甚有應一有求則疾痛者治痿痺者立瞽者復明聾者忽聽其他祈之皆必有効聞之俱驚耳自是隣里鄉黨薦時羞其粢盛駸々仰之擲金錢而不顧委身命而不厭日々爲群處々成市司塚者一時致富有後郡吏聞其耗費而禁止之其實近村有妖僧不堪貧乏幸小狐死與無賴者設奇計令日給欺愚民遂得其所爲

又世俗多信鬼慢神求冥福覓僥倖者衆就中崇敬羽州湯山尤甚滔々而天下是也斯地也釋空海所開特説靈驗大傳奇怪或誇説三尊

之来降或妄誕魍魅之集會是以愚民信其妄重其誕每歲夏日精進潔齋齋金負糧而凌嶮登山値晴天白日者為身心淨靜之應遇陰雨晦暝者言邪志妄念之著若歸來有說山岳之狀溪澗之態神感之靈物怪之變者則目眩舌縮立蒙其罰而得其祟是以惧怖恐惶無敢說其實者且祖先一脩此行則其子孫永不得脫却之了故愚夫鄙俗因循不能知其邪不能革其非敗産廢業費財年々離鄉踰境登此山岳其耗費殆不可枚擧焉我親族有今邑勝長者為人鯁直而倜儻也平日疾之以為說破其妄解喩其僞矣於是多日敢止沐浴厚身垢食猪鹿深臭氣直入彼山中人或詰之則便對世之愚夫甚迷浮屠永陷佛說如今予適欲解其惑啓彼蒙而斷將來之疑敗世上之迷何憚之有憤然獨行上下于層巒跋涉于幽壑數日經歷來往其試世所說之故果咸妄誕虛謬無一有也唯山峙雪深水流路嶮而濕雲沾衣冥霧昏道傍有堂宇寺院而妖僧役徒之屬說奇談妙以欺愚民誑凡庸耳入彼境而試之兩回其所說者如此於是令人永革素隱行怪之弊忽醒天下古今之昏可謂雄偉不常者也

元祿十五年信州善光寺妖僧率其徒舁其像巡行于諸國經城市郡縣其志欲專欺愚民貪金錢而大逞我所利焉是歲孟夏初至于城下愚昧之徒凡庸之輩崇之如奉鬼神役勤之如公事遶大路而出迎或拜禮或圍繞鄉里小人嘗言如今會此佛像之西來而面拜親摩之神造焉實時世之僥倖人間之嘉榮何幸若此哉仍荷擔之役往之者俱得其富貴資其冥福者尤不可疑焉於是貴賤高下老少男女奔走馳驅恰若子弟護父兄臣妾敬君夫剩擲金錢散米穀其費若泥土塵芥而不顧自玆衆人親肩之自舁之入于城東萬日堂留滯已十有八日

其間衆人爭鬪趨競如狂如酣其耗費幾何哉且所其賣與者或避難之符幽冥之壐之類渾欺人誣人之其不可勝言人至則妖僧口給各數妙誇奇自衒自好愚民聞之者固信深崇每日陷溺者以巨萬數焉且甚者或說東瀛遙處擎龍燈於海上或言螢上求佛放瑞光是以無貴無賤男女旋倪俱望滄溟而終宵不眠聞曉鐘而止至其期視彼爛爍則衆人囂々不覺其何者皆涕泣嗚咽渇仰悲歎渾不知是明星也彼輩明日誇人曰夜來得天幸而拜龍燈昇海上佛光出眉間相暎去焉歡喜踴躍自負高慢不可枚擧矣嗚乎哀夫著寂寞草其中記聖海上人感騎犬背立于丹波大社妄及感涙評之曰上人感涙已徒寄宜哉彼等徒歡喜踴躍亦雷同之拙同日之譚也本月五日發城下之社鹿郡石卷准衆人自前宵重圍繞佛龕爭競于道路上其聲如雷浪如驚波古詩所謂十萬軍聲半夜潮者彷彿于耳邊於是群集鳴動而相送其他乘夜陰冥暗或竊盜或淫行然有司吏人不怪不罪來往致壯觀焉

按如今考手長神者神書中更無所見偶見神社啓蒙四卷有天手長神社曰此神乃在壹岐國石田郡一宮記曰天思兼神一男也宇多所祀蓋此神歟其爲淫祀亦無足怪況如柳眼村落死盲偪狐是亦不足言焉於其害亦易知其惑亦淺也如湯殿神社往古來詳祀何神此神也天下群國自古其謬迷徹于筋骨其浸淫入于肌膚如善光寺佛像信仰者惟多致其費亦不可枚擧焉俱是所以痛惑衆民大陷溺世人之大害者也人君執政不可不辨焉不可不禁焉故擧手長神怪之次附有害于世上者以令後人識迷亂之甚云

釣絲濱

在駒嶺東北白沙灣曲隈青山遶長洲南岸有離島曰之調子巖々下波瀾崩騰于雪其島陰曰投溺潭往昔有婦人有故投身于岩下死焉山頭有羣松五六株曰之愛兒松其西曰大童濱有大悲閣其木末聳東光覆狼兩山北望則金華山大原兒潭大六天牧山宮戸鹽釜茂嶺仙臺龜峯白石嶺入極目中尤絶景之地也

白沙礒

埒濱以北白沙數里在畔松林青々淺水遶林外曰雙股川其風致可愛曰之白沙礒

小濱

未詳其地有古歌之膾炙鄕黨以句意考之則蓋産好貝子之濱也

みちのくのうたの小はまのかたせかいあはせても見む伊勢のつま白

伊具郡

神名帳曰伊具郡二座 並小 熱日高彦神社

鳥屋嶺神社

瀑布不動

在丸森村瀑布數仞上立不動像此地在伊達十四世左京大夫稙宗君墳墓

講念寺

在島田村稱國平山講念寺百四代後土御門帝文明中從五位下藤原惟行後裔目黒源内兵衛尉國平者居同村他田舘其子曰石見守資平平日純孝喪父而不耐悲慕之情立一精舍號目黒院是其地也

醫王舘

在尾山村伊達十四世稙宗君第十九子亘理兵庫元宗居舘也冒姓于武石三郎平成胤家焉後薙髪號元安城中安善逝閣故鄕人稱之

高藏寺

在高藏寺村曰勝樂山高藏寺々向東南老松古杉鬱々含翠喬木深樹森々涵青林中有彌陀堂方六間鄉人言飛驒工匠所建其制不用鎖釘也置丈六彌陀坐蓮華上其下設三級彫飾護光尤高大彫雲氣叢鏤象左右有十有三間址蓋設十三佛者也是釋德逸作上品之佛像有古榜書高藏寺三字相傳宸翰也字體楷書頗失精彩且幾俗態寺院嵯峨帝朝建之帝本好書蓋扁宸翰于此乎

寺中納棟札者（是中華上梁文）多消滅前後始末不詳其文字凡俗其詞義卑拙不足取然其記得造營修補之事故附此以爲考證於滅字處闕而記其上下其詞曰（逐條分附年代等于其間）

嵯峨天皇御宇弘仁十年己亥　月十五日伽藍

新造德一菩薩建立（嵯峨五十二代帝德一傳見元亨釋書）

又治承元年丁酉五月加修理（八十代高倉帝即位九年）

大旦那　小旦那安部安氏權大僧正聖圓大

工飛駄右衛門尉行正小工飛駄左近三郎正近

細工清原恒師小細工　助力　三十貫藤原

烏取直正五貫　三十貫

五貫　則直五貫　正定十五貫上

野眞　五貫藤原近眞一貫上野眞弘五貫草部

眞道三貫烏取永友一貫藤原師安一貫　安

氏（蓋安部安氏乎見上小旦那下）五貫藤原在綱五貫藤原實師

一貫安部清定一貫烏取安清　藤原　氏一

貫

右此寺依舊新造立　修造之中比者

行滿上人加修理今此寺　中奥州國司秀

衡妻女新造之皆是依　佛也（此間數十字消盡了）勝樂山

大衆合掌奉祈　天長地久併奉祈

今上皇帝殿下安穩國中豐饒于時　年乙

亥（按北畠知奥州當後醍醐帝時然則是歲乃建武二年乙亥乎是乃當九十六代光嚴帝二年）

天皇御宇奥州國司北畠大納言入道殿依

國宣彼寺打額（先言宸翰則此所言後所扁乎）國宣有少將

依國宣大衆合掌
高藏寺修理結縁勸進聖人金剛佛子　大
旦那　度野鳥伊藤原　康永二年癸未（九十七代光明帝六年也）二月日加修理小旦那二十七人葺手又
四郎旦那諸人面々各々等　二世所願成就
也

右此寺代々久近比葺替事聖一乘坊權少僧都
智證應永三十三年丙午二月九日（百二代稱光帝四年）其
後葺替事願主一乘坊權少僧都智證摠取持入
之坊久尊繩手傳大門坊智才葺手亘理郡十文
字五郎兵衛二月九日起之三月十八日成就之
畢萱寄進北澤三百駄
其後葺替事　院權少僧都賢高藏寺
御堂萱大旦那北澤源彌禪門寺時明應九年庚
申三月廿八日（百四代後土御門二十六年）狐戸之旦那井上
三郎右衛門勝樂山御堂之橋板十方旦那聖
永正七年庚午（百五代柏原十年）

其後葺替事大旦那源朝臣義宗奥州石川郡司
御代官矢吹十兵衛慶長十年乙巳正月十三日
起之二月十八日成就畢中村七右衛門筆者大
坊明鑁上人（百八代後陽成十九年）此度修理事　大旦那
源朝臣宗弘公當大和殿代貞享四年丁卯四月
吉日肝煎大槻外記賴祐奉行藤田七郎兵衛戸
加四郎右衛門添田久左衛門大工大内正右衛
門高田正八井上作兵衛菊田勘吉開眼導師藥
王寺法印權大僧都覺盛（自嵯峨天皇宇至此而棟札之俗文章也）
右棟札者文拙字陋不足以取之剏又往々消
滅了文理盡斷絶然其間年號人名足以考事
實故舉之且夫當時姓名實名雖東鄙之地各
不略其次第雖工匠卑職賤者俱備姓名其中
鄉信之正救賑之厚高下同志而共寄附貴賤
設價而不拘輕重於是亦可閲自上世所傳之
流風善政其遺法餘制在此

菩提巖

在白岩村有寺曰白巖寺々畔有雙石墳佐藤次信忠信兄弟墳墓也相傳兄弟幼時學書于此地仍後人立二碑而證焉賤人呼之曰菩提岩

斗藏山大悲閣（或曰實大貴已尊社也）

在小田村斗藏山頭建寺曰安居山斗藏寺至山頭高坂十三町相傳五十一代平城帝大同年中田村麻呂建立也閣乃南面本尊秘佛有安居山三字額安井門主眞翰西方建鎭守中稻荷而左右山王白山孟夏晩秋祭日十七日寺院在閣以南山頭古松路暗老杉陰深羊腸縈回山樹數千株其樹乃俗呼曰檉木者是也（檉訓加志不見字書字彙有樫字音緊檉木也蓋此字乎）倶凌雲藏牛此地之名產或用之槍竿或備之銃架堅實牢固極其美好樹間多翠竹又有楜樹相交生其葉秋來深紅緋々好看

鄕說曰寛永五年戊辰八月金山之市人星野七郎兵衛通次者欲新鑄洪鐘而興于久廢於是乎寄進于華鯨一器寺主祐貞者記銘其略曰正安辛丑有沙門嚴圓者奉晃鐘一口其後萬治庚子値火災而銷爍餘焰及伽藍飛閣須臾爲烏有鐘亦焦爛焉唯本尊脫于赫炎之中而飛揚去

寛永五年戊辰百九代後水尾帝十七年正安三年辛丑九十二代後伏見帝三年万治三年庚子百十二代後西院五年也銘文字卑俚不足取之且以本尊自脫于焰中而爲之詞以誣人是亦浮圖之陳言每々愈其豈然乎

有鐵鉢銘曰奥州伊具莊斗藏寺千手觀音之鉢一器奉置伊具郡田手助三郎藤原時貫寺主圓海大工佐藤助左衛門于時永祿三年大歲庚申九月十六日（永祿三年百七代正親町三年也）

侯石峯

松懸村中有一山々頭石巖巍然峙恰若備布侯愈鄕人言往時八幡太郎東征登于丸森山而射此石巖試己弓勢且逞精兵之機恐怖賊兵之術也後稱之侯石峯

赤崎渡口

入于金山城渡口也是乃阿武隈河上流此地水勢頗奔流瀰々而揚逆浪左右斷岸盡赤故郷人曰之赤崎之津渡

佐介神社

在佐介村祀諏訪神毎歳正月十四日夜有祭事今夜斬竹筩投之豆粥中煮之神前晨朝取之以其粥濕之淺深而試歳時之氣候五穀之生熟以識一年之豐凶風雨之多少呈其記錄于城主郷人曰之筩粥之候

按河内國河内郡平岡神社記曰正月十五日卜田祭當日於神供所燒小豆粥々上五寸掛竹管々中納百穀著依蒸氣強弱占年穀之吉凶也其事相似

騰光山

在伊手村其山秀出于群巒旭日騰于東溟則先照此峯也故曰之騰光山上有羽山叢祠郷人言往時建五神祠未詳祭何神也傳曰之五社壇東南臥嶺跨宇多伊達兩郡其北山曰地藏峯山間長路曰椨坂其高坂也崎嶇羊腸不減兒坂之險難坂上西望則不忘山之外無數層巒疊峯村落邑里入吟眸登々既一里餘見東瀛海上南相馬領烏納磯以北浩蕩森茫之狀

霞狼山

相接騰光是亦大山也郷人言往時有神仙常愛老霞驅白狼相伴其長臂不可量馬蹄此山頭遊觀亦不知年又好食貝子仍屢伸長手於山東而提貝子于海濱歸其子而棄殼于宇太郡新地村落所積累之腐殼朽貝堆々若丘郷里呼神稱手長明神號丘曰貝塚名其山曰霞狼山

大楯城

在楯山村細口修理亮古城也

荒山城

在高倉村石母田左衛門居館也

下栖城
同村右左衛門家臣明智九郎右衛門居處也
本栖城
在神次郎村中森式部居館也
丸山城
在丸森村伊達左京太夫稙宗君令家臣高野壹岐居之
鳥屋城
同村大條薩摩居館也
名號山城
在伊手村往年我黄門君與相馬接兵之時以此地而爲子城
西山城
同村相馬之役伊達安房成實所據之地也
柴小屋城
在小齋村佐藤紀伊之居館也
伊與城
在尾山村亘理兵庫元宗舊館也
北小屋城
同村元宗後來居此城自是移于遠田郡涌谷村今居館是也爾後令大條玄蕃守此城
古内城
在坂津田村若崎右馬助居館也其裔今屬亘理家臣
南栖城
在平貫村櫻田玄蕃居館也後仕伊達遠州君
北栖城
同村澁谷大隅居館也
陣營城
在大内村往年之役相馬長門守義胤據此城與黄門君屢相挑之古戰場也

亘理郡　和名後篇作曰理今従延喜式

四十四代元正帝養老三年五月乙未割常陸国白理等六郡置石城国

按常陸白常作奥陸曰皆誤字也石城国今之岩城之地也

四十八代称徳帝神護景雲三年三月辛巳陸奥曰理郡人従七位上宗何部池守等三人賜姓湯坐曰理連

神名帳曰亘理郡四座並小　鹿島伊都乃比気神社　安福河伯神社　鹿島緒名太神社　鹿島天足和気神社

五十六代清和帝貞観五年十月丙寅陸奥国勲十等阿福麻水神授従五位下

按此神乃前件安福河伯神然福字下脱麻字者乎

鳥海濱

在荒濱以南大畑長瀞高屋鳥屋崎箱根田等邊其水潮左右長汀松林相連其以東者向大洋也網地田代長渡小淵兒潭大六天牧山以北相接盡浮于水上其間有時而商船来往漁舟出没雷破之漫波雪島忽崩軍聲之晩潮銀山立起加旃一行白鷺上青天数點旅雁帰秋風日月之昇降雲霧之晴陰渾奇観壮遊之地也郷人言鳥海弥三郎産于此仍有此名矣然彼也羽州人事見于鳥海山下後人附会伝之耳

抽矢澤

在田澤村相伝寛治之役義家攻金澤城鎌倉平景政先登為鳥海弥三郎射左眼語人曰不報其仇則奚抽之遂僵其敵後廢鏃于澤中仍号抽矢澤是皆依鳥海名而後人附會之下同

義家古館

在同村相伝義家朝臣往年次年之地也不見舊史是亦後人之附會也館下有調鷹岩飛騨工匠所彫也

鹿島神社　名所集作加島今從延喜式

近逢隈以南小山小堤兩村曰鹿島村宮社南面神名帳稱鹿島者三社未知何神也社東有大悲閣鄉人曰關觀音往時得之自河關山而安于此關山神都々古和氣也豈夫然耶

玉葉戀一　源　順

つらくともわすれす戀むかしまなるあふくま川の逢瀨ありやと

石間神社

在下郡村入居舘道傍有巨石斷岩數片塊石間有小祠山頭亦建社曰石間明神其西北往時有一古杉下出一泓幽泉曰之清井杉清井泉古杉古昔爲甲兵之象夜客見之驚後人曰驚杉

椿花嶺

在同村椿樹七八百株蓊鬱繁茂春來花開處滿山如焚唐詩所謂似若枝老樹昔誰種照耀萬朶紅相閒者矣其風致濃艶甚可愛尤嘉麗之奇觀也林中有小堂置觀音像或曰往古立叢祠祀花神後人換之以此像

按伊勢國河曲郡有椿神社一宮記曰猿田彥命也

阿福麻水神社　延喜式作安福河伯歌枕名寄類字松葉藻鹽草等共作阿武隈河八雲御抄作合曲川他書或作逢隈川今從三代實錄

在阿武隈川渡南田澤村中有小社曰之阿武隈明神是神名帳所謂安福河伯神社也但考諸清和本記且考古來稱號則脫麻字者不足怪焉貞觀五年加階之義見于前

阿武隈河　武字於和歌則清音於俗語則濁音

此河源出于野州奈須嶽濫觴于嶽麓瀑布林中有老熊年々產子必飲瀑布而安故稱之曰生熊瀑布自是滾々歷于會津白河伊達柴田伊具亘理村落尾山田澤名取南長谷數所過同郡荒濱而入于海且夫奧州大河尤多在我大守封內北

稱崎多河岬南號阿福麻此河流是也荒濱乃商舶所輻湊設倉稟於此而納公穀有吏而司之河北亦商舶着岸之津也其地乃名取郡蒲崎也河流過其兩間而滔々朝于東濱焉於和歌殊得其美名

八雲御抄曰萬葉集みちの國あふくま川をひのくま川といへるも一説あり

藻鹽草川類阿武隈奥州安達郡　按安達蓋誤乎

同隈部あふくま奥州霧檜隈川下河内一説奥州阿武隈河

の別名と云々可釋之月五月雨戀か　しらの雪時鳥さいのくまひのくま川に

駒とめて水かへ我はよそにみん佐檜隈大　まひのくま川ともつゝけり又さゝのく

和市郡ひのくまひ　の木の名といへり

古今　大歌所御歌

あふくまに霧立わたりあけぬとも君をはやらしまてはすへなし

後撰戀一　よみ人しらす

夜と共にあふくま川の遠けれは底なるかけをみぬそ悲しき

女のさうしに夜々たちよりてものなといひて後

同二　藤原輔文

あふくまの霧とはなしに夜もすから立わたりつゝよにもふるかな

橘爲仲朝臣陸奥守になりて侍ける時延任しぬときゝてつかはしける

金葉雜上　藤原隆資

待我は哀八十年になりぬるをあふくま川の遠さかりぬる

按爲仲朝臣廼奥州刺史居名取郡武隈舘其事實載之武隈下未詳時世其作始見金葉集此書也天治元年白河帝令源俊頼朝臣撰之書成崇德朝大治二年奏覽之然則斯人之在任應在其以前

一條院東門院へ行幸せさせ給けるによめる

詞花賀　入道前太政大臣

君か代にあふくま川の底きよみ千とせをへつゝすまんとそ思ふ

みちのくにのすけにてまかりける時範永朝臣のもとにつかはしける

新古今別　高階經重朝臣

行末にあふくま川のなかりせはいかにかせましけふのわかれを

返し

同　藤原範永朝臣

君にまた逢くま川をまつへきにのこりすくなき我そ悲しき

按源賴義朝臣以久勳勞于東征而康平五年春令高階經重朝臣代之然經重怯懦而甚畏貞任兵威且國人懷賴義之武毅而不服經重仍歸于京師復令賴義任東奧焉此作經重前任之時所唱和也夫男兒生有四方之志經重本處武官何奚夫怯耶此倭歌巧則可采心術不可取焉甚乎哉理義之惡人也如今千載之下俾讀者恥左袒于經重可不警邪

景勝四天王院の障子に逢隈河書たる所

同雜上　藤原家隆朝臣

君か代にあふくま川の埋木もこほりのしたにはるをまちけり

按往昔以方國名蹟而寫之畫圖風流之擧好事之玩尤可貴此下往々維多視者莫宜注其意而愛其風致徒看過了

新後撰戀　民部卿成範

年ふれとわたらぬ中に流るをあふくま川とたれかいひけん

同　藤原秀宗朝臣

人しれぬ戀路のはてやみちのくのあふくま河の渡りなるらん

嘉元百首歌奉りける時述懐を

續後拾遺雜中　前内大臣

君か代にあふくま川のわたし舟むかしの夢のためしともかな

新拾遺雜中　祝部成久

またれつる此瀨も過ぬ君か代にあふくま河の名を頼めとも

同戀四　二條院讃岐

いかなれはなみたの雨は隙なきをあふくま川の瀨絶しぬらむ

新後拾遺秋上　權中納言爲重

たちくもる霧のへたての末見へて逢隈川にあまるしらなみ

堀川百首　藤原顯仲朝臣

名にしおはゝあふくま河をわたりみむ戀しき人の影やうつると

同　權僧正永縁

ぬれ衣といふにつけてやなかれけむあふくま河のなこりをしさよ

建保三年名所百首御歌（夫木集あふくま川　陸奥四年と有）

名所百首夫木集　順德院御製

あすは又あふくま川のしからみにきのふの秋の色やのこらむ

同　前中納言定家

たちくもる逢隈川の霧の間に秋をやゝらぬ關もすへなむ

最勝四天王院名所御障子

同夫木　大藏卿有家

冬の夜をなかくや契る友ちとりあふくま川のたへぬみきはに

題不知ぁふくま陸奥　よみ人しらす

逢隈をいつれと人に問ぬれは名こその關の

あなたなりけり
按ニ考二名社一關二于此歌一則在二逢隈以南一可レ視焉
如今岩城菊多地是也
建保三年名所百首
夫木隈部　兵衛内侍
あけぬるかをちかき人もあふくまの七瀬の霧に袖の見へゆく
按下以二歌句一考上レ之此河往時有二七湍一可レ知矣
同　藤原康元
ふかき秋逢隈川原しくるれと色こそ見へねせゝのむもれ木
按ニ家隆康元倶ニ咏二沈木于此一豈名取河流耳乎
景勝四天王院名所御障子作ニ御屏風一
同　後鳥羽院
かせはやきあふくま川の小夜ちとり涙なそへそ袖のこほりに
同懐中　參議雅經卿
わすれしよ又あふくまの河かせにしはしなれぬと千鳥鳴なり
建保四年百首　順徳院御製
小夜衛八千代をささう君か代にあふくま川のしき浪のこゑ
同　具親朝臣
夜を寒みつまよふ千鳥うらむなり合曲河の名やたのむらん
最勝四天王院御障子歌
同　定家卿
おもひかね妻とふちとり風寒みあふくま川の名をやたつぬる
中務家集
ある人
かくしつゝよをやつくさむみちのくのあふくま川をいかてわたらむ
返し

同

逢事をわたりもはてぬ物ならはかはる〳〵
にわれいかゝせむ

あふくま

阿武隈に霧たてといひしから衣袖のわたり
に夜もあけにけり

按袖渡乃牡鹿郡住吉渡口也重之咏此地
重之乃奥州刺史其所指尤可疑

拾遺愚草　定家

わか君にあふくま川の小夜千鳥かきとゝめ
たる跡そ嬉しき

詠藻　家隆

みなはなすもろきいのちもはやき瀬に逢隈
河のいつとたのまむ

小侍従

名にしおはゝ尋もゆかむみちのくのあふく
ま河は程とをくとも

阿武隈山

出夫木集山部未詳何山焉想夫河畔青山古来
有称者土人偶失其地而不相記得耳

題不知ぁふくま山　みちのく

夫木集　よみ人しらす

昔見し人をそ今は忘れゆくあふくま山のふ
もとはかりに

稲葉渡口

在山田鳥屋邊距逢隈社北巳半町餘有一小丘
其地曰稲葉是亦尾山邑中也其北流乃稲葉津
渡也河畔南岸碧潭染藍其上有巨巌而相峙東
岸岩面穿方形北方彫牌子其次彫二佛其次空
方形南方彫石佛石塔郷俗曰地藏巌西畔岩面
亦彫双方形往時中有石佛後來或碎去或人取
之去乎相傳此彫形各飛驒内匠之神造也

歌枕又夫木

題古渡月　光俊

風そよくいなはのわたり霧はれて阿武隈川
にすめる月影

按讀此歌詠而味其句意江風之排空煙霧之吐月能寫得其幽致而恰若臨土地對佳境

牛頭天王社

在笠野濱有寺曰笠野山德泉寺有宮社建牛頭天王祠其地乃高瀨村中有上棟文曰大同二年丁亥釋德逸所建享祿四年齋越前者覓神像于筑土來寛文九年乙酉五月三日邑主大條監物宗快寄附其材料元祿十六年癸未後監物宗道修造之

大同二年丁亥五十一代平城二年享祿四年辛卯百六代後奈良五年寛文九年乙酉百十三代新院七年元祿十六年癸未百十四代東山院十七年

貝吹城（カイフキノ）

在高瀨村不詳其城主

小平城

在小平村小平兵衛者居館也

坂本城

在坂本村坂本大膳子城也

奥羽觀蹟聞老志之卷四 終

奥羽觀蹟聞老志卷之五

仙臺　佐久間義和著

名取郡

四十八代稱德帝天平神護元年十二月辛亥陸奥國正六位上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣

同神護景雲三年三月辛巳陸奥國名取郡人外正七位下吉彌侯部老賀美郡人外正七位下吉彌侯部大成九人賜上毛野名取朝臣

五十代桓武帝延暦四年四月辛未中納言從三位兼春宮大夫陸奥按察鎭守將軍大伴宿禰家持等言名取以南一十郡(一作一十四郡)僻在山海去塞懸遠屬有徵發不會機急由是權置多賀階上二郡募集百姓足人兵於國府設防禦於東西誠是備預不虞推鋒萬里者也但以徒有開設之名未任統領之人百姓顧望無所係心望請建爲眞郡備置官員然則民知統攝之歸賊絶窺窬之望許之

按多賀階上自是前權置之依家持之請斯時始爲眞郡者可視焉家持之奏請可謂急先務專守禦之器也(壺碑之途程蓋起乎此時而勒之石乎)

五十六代淸和帝貞觀十一年三月庚午名取郡大領外正六位上刑坂宿禰本繼授借外從五位下風土記曰陸奥國名取郡名浦四湊三名山九岡七溫泉三宮祠七寺院五

又曰名取郡東限青葉川西限岩沼川南限松賀湊北限若狹山貢松栢檜桐栗梨楊梅紅花熊鹿猪狐之革猿兎之膽隼鷹牧馬鶴鴒鴈鷗鵆鴿鷲鱒鮭鮎及海鮮等

按青葉岩沼二川松賀湊若狹山未詳其地焉今雖岩沼村落在非稱川者但青葉川者指城下廣瀨川歟河畔山頭乃青葉山也仍稱之青葉川歟牧馬亦不傳其地焉鱒鮭鮎鯉今猶多

特鮎魚肥大美味異于他梁之同郡人來田河
流
神名帳曰名取郡二座並小　多加神社　佐具
叡神社
風土記曰多賀神社圭田五十八束二字田所祭
伊弉諾尊也雄略二年始奉圭田行神禮式祭
神名秘書説載之宮城郡多賀下
又曰佐具叡神社圭田五十束三字田又假粟獻
半毛所祭高皇產靈尊也孝德天皇二年丙午三
月始奉圭田行神禮有神家巫戸等
按兩社今失其地焉元祿元年戊辰依命巡行
于名取郡而問勝迹笠島村中有民家曰之北
野宅有小祠曰賞方墓或曰作衛臣是乃往時
佐具叡神址也鄉人誤其音且以爲昔人墓也
仍今荒廢州人渾無知之者可勝歎哉
又曰名取郡公穀七百九十二束假粟六百七十
三丸其貢同前鄉外獻白糸白綿桑麻等

なとりのこほり　源重之
あたなりなとりのこほりにおりゐるは下
よりとくることはしらぬか

茂崎城址
在根岸村相傳粟野大膳者往時領名取北邑
三十三鄉居此城也去仙臺治府已可一里沮
廣滿河流而蒼翠萬株峰巒溪澗頗多岑鬱蒙
密仍稱之茂崎先太守綱村君建寺號兩足山
大年寺且夫呼北曰般若峰號南曰善那崎沒
後葬于此山中

北目城址一作喜多目
在郡山村是亦大膳故舘也往年黄門君在斯
城後俾家臣屋代勘解由居焉往時古杉今猶
存虬枝鶴骨甚屈蟠鄉俗曰北目古杉
此地產好瓜粉瓤玉瓣大異于他方也古城内
外多種之仍載古詩一律以賞之可併按也
夏　桂洲

茬毬引蔓翠交加性羨青門處士家帶露摘來珠有淚揮刀剖破玉無瑕寒膏細嚼清肌骨甘液新嘗泌齒牙尙憶滕曇貽遺母至今千載有人誇

慶長五年秋北越豪將長尾景勝令家臣直江山城率兵攻出羽守義光朝臣于最上請援兵于我黃門君此時黃門君在此城以伊達上野介政景將三百騎爲前鋒津田豐前爲次軍佐々布淡路爲軍監其佗國分士臣白石縫殿助中島半七北目左兵衛矢田善七郎鶴貝治部伊藤彥右衛門萱場式部青木又七郎朴澤藏人遠藤出羽鄕六外記支倉紀伊（武勇拔群時司戰鼓）鄕六又藏青木掃部馬場右衛門青木勘三郎八乙女與吉佐々布五郎右衛門二瓶又七郎鄕六孫六小野雅樂允同彌七郎古內主殿堀江摠吉同雅樂允同源兵衛同藤四郎丹野縫殿介新妻備前伊藤將監同摠左衛門練生川源十郎同源左衛門小石縫殿介同彥右衛門二瓶甚平本鄕出雲同九郎右衛門佐藤和泉早川久藏關半內堀江下野針生助右衛門蛇躰彌七大福彌三郎高彌七大友美濃同讃岐馬場清右衛門霞野目二郎兵衛上目左馬介愛子外記父子等相從高清水長門大立目四郎小國駿河中目彌五郎矢田豐前松井藏人佐野治部河東田右馬介小關甚內二瓶右近湯村加賀久水右馬介青木木工介落合孫右衛門青木摠右衛門落合莊藏鈴木主計等亦在此隊焉三陣乃以名取北三十三鄕兵並斑目太郎左衛門父子大條薩摩成田左馬介後藤五郎左衛門四郞丸藤兵衛小島次兵衛等率其兵四陣乃名取以南三十三鄕兵大嶺式部司之五陣乃保土原江南武山修理同彌藏等也以遠藤但馬石川彌平爲游騎十月朔會北越主將大石常陸于長谷堂而戰戸神山血戰頗甚死傷互多常陸戰不利喪七百餘騎殘兵纔九十騎山城軍盡敗走還于米澤我主將堀江下野馬場清右衛門霞野

目口二郎兵衛上ノ日左馬介四郎丸藤兵衛小島摠兵衛支倉紀伊咸戰死武山彌藏青木勘三郎兄弟有戰功各班師至于國見嶺於是黃門君問軍議于伹馬彌平伹馬對曰臣自少壯屢力戰未會如此役之强北燕之兵勢不勝侵易焉自是其問及彌平對曰夫軍之有勝敗雖固依時運實出謀略之疎密主將之勇臆士卒之强弱豈北越之兵惟精鋭哉伹馬平日以勇敢而負焉如今何奚有此言矣想夫彼武毅勇敢每々建勳于弱兵之間而未敢會於强敵而致其勝敗者乎黃門君稱伹馬功而優彌平對 見松岡氏軍記

石川彌平慷慨之士也平日以勇武自負焉仍通國與小田部大學並稱曰不屈之彌平乘入之大學凡信許於人也如此兩氏有家紋旌旗以赤黑琵琶而分其色敵兵望之每々乃言黑琵琶也彌平 赤琵琶也大學 襲來豈敢當之乎盡敗走而如崩角

名取郷 義氏碑說作名虎里利羅音相通故誤之

前田橋西有舘曰前田舘址門前設調馬路北西有湟址佐々木勘解由者舊舘也郭西有伊豆神社相傳往昔義氏者遇讒而配當國置之石獄其獄址今猶存焉配流已三年遇赦歸主人竭力而能遇感厚意臨別改氏號與實名而稱柿沼忠義後孫降民間往時刺史牧伯等所與之印璽花押傳在家

野史曰中津川義氏筑紫豐前人也花山朝爲衛士而侍禁闈已三載鄕國夫人禱平安于宇佐神國司某遇之途寫情寄艷書不報怨之甚納讒愬於大炊大納言經春帝信而不疑竄義氏於奧州名虎里伯父高倉宮之釆地也別時令家臣湯原滕太光好告鄕里夫人不堪悲痛抱幼兒松若赴奧州光好及女侍冷泉從焉棹舟于赤間關不幸値光好卒自是顚沛至于播州室津宿海賊蟻坂善太夫家國司歸自京師聞之途搜索已急善太

夫亦欲幸寓止告之旅舘而德之其婦乃光好姉明月者也流落于此家主未知我主君見夫之無狀心潛哀之密告亡之夫人語鄉里婦大驚而導之避急難國司怒責殺明月夫人走至獄囚與市門是亦海賊也忽發哀心愛護頗厚善太夫圍與市舍主夫射而殪長子荒五郎十八歲武勇絕人力戰殺力人赤間石介太郎者國司怖敗走與市送行夫人赴若狹宿婆子家見夫人艶容心喜得利俾其甥山三郎者放舟而載夫人僞赴奥州焉自是棹越中引冷泉而歸家冷泉不耐悲憤抱幼君而泣老婆怒投兒于沙上有鵰鶚搏兒騰空衝翼去後賣冷泉于駿州吹上鹽屋次郎者以煮鹽也夫人益流落婢于奥州名虎文田四郎高綱者義氏在此舘一日招義氏于浴室置酒開宴以容色優艶而出其婢勸酒固未知其婦人寵異之餘情問鄉里始知其夫人俱相喜摻手而嗚咽話其艱難後依高倉之愁訴而遇赦歸洛路經吹上海濱冷泉出迎述其狀物色得松若于民間謂向某搏鵰鶚去有老翁急追之鶚棄某去翁撫育有年矣父母俱喜奏之朝罪老婆及山三郎賞獄囚與市舉荒五郎賜采地奉勅以討國司報舊讐云

按野史説與鄉人所傳不同文田四郎高綱者以實名考之則是亦佐々木支流乎其地今日前田橋西宅後孫雖降民間保舊舘址而不失其地可謂厚矣且藏古文書五篇曰天文七年戊戌六月廿七日景宗名取郡在家柿沼七郎年貢免許書一篇同十三年甲辰七月十三日守屋彦十郎爭田三段與柿沼源二郎書一篇同年七月廿四日守屋彦十郎爭田中依柿沼部屋太郎愁訴與三百刈書一篇同十五年丙午十二月十五日名取前田漟内五貫文年貢與柿沼部屋太郎丸書一篇（合而四篇景宗花押）同二十二年癸丑十二月十四日達摩丸同所在家與柿沼源二郎書一篇或稱景宗或書達摩丸未

詳何人天文百六代後奈良院年號花山帝乃六十五代朝也

澄光法親王

しゐてとふ人はありとも戀すてふ名とりのさとをそことしらすな

夫木集里部なとりの里陸奥寄里戀前大僧正終覺と有

名取川

水源有二一則出自同郡二道清泉嶽經村落而東流至閖上村而入于海二則出自吾妻岳下行澤而合于野尻邑其河流過中田驛北仍曰中田川夏秋之交設魚梁入數罟以捕細鱗漁鮭魚又世稱埋木灰者燒河中沈木用之其色紫赤於歌詠亦賞吟之者多

按閖字不見字書俗間用來而取水波激蕩之狀然則以港字而爲之乎港乃水分派也又云水中行舟道或爲港洞開道也

風土記曰名取川貢鱒鮭鯉等又出怪石水材奉官家

按今河中不出鯉水材者乃沈木也

東史曰文治五年己酉藤泰衡築柵于刈田郡引柵於名取廣瀨兩河流者乃其一也

古今戀三　讀人しらす

名とり川瀨々の埋木あらはれはいかにせむとかあひみそめけむ

同　忠岑

陸奥にありといふなるなとり川うき名とりてはくるしかりけり

なき名立ける人のもとにつかはしける

金葉戀上　前齋宮内侍

淺ましや逢瀨もしらぬ名取川またきにいはまもらすへしやは

源重之

なとり河梁瀨の浪にさはくなり紅葉やいと

とよりてせくらん
按重之奥州國司想夫任國之際所詠此地乎河上架魚梁而捕鯉魚及鮎魚也考其出處于此歌則自來者已久矣

攝政太政大臣家歌合によみ侍ける
同戀三　寂蓮法師
有とてもあはぬためしの名とり川くちたにはてね瀬々の埋木

千五百番歌合に　攝政太政大臣
同
なけかしよいまはたおなし名とり河瀬々の埋木くちはてぬとも

續後撰春下　定家朝臣
名取川春の日数はあらはれて花にそしつむせゝの埋木
按沈木之沒于花流實能形象暮春之狀古来遺綺言于此河者多然重之之於紅葉定家之於落花能述春秋之景情而雅藻風致如此幽艶者尤少可謂衆作之奇巧詠中之絕唱也

同戀四　祝部成賢
くちねたゝ猶物おもふ名とり河うかりしせせにのこる埋木

同雜中　源三位頼氏
年ふれとかはりもやらぬなとり河うき身そいまはせゝの埋木

同　藤原伊長朝臣
憂身世にしつみ果たるなとり川又埋木のかすやそふらん

續古今戀三　定家朝臣
あらはれて袖のうへゆくなとり川今はわか身にせくかたもなし

中務卿親王家十首歌合に
同　源時清

みちのくにありてふ川のむもれ木のいつあらはれて憂名とりけん

續拾遺戀三　前中納言定家

名とり河いかにせむともまたしらすおもへは人をうらみつる哉

夏の歌の中に

新後撰夏　源三位爲繼

なとり河瀨々にあるてふ埋木も淵にそしつむ五月雨の頃

同戀一　津守國明女

埋木のいさや朽なむ名とり川あらはれぬへき瀨々は過にき

續千載神祇　中臣祐春

代々かけて神につかふるなとり川かゝる瀨まてと身をそ祈りし

同戀一　少將内侍

いかにして朽たにはてんなとり川瀨々の埋木あらはれぬ間に

惜久名戀といふ心を

同　式部卿久明親王

なかれては人の爲うき名取河よしや泪にしつみはつとも

戀の歌の中に

同　平政長

うしとてもあふにしかへはなとり川よしあらはれよせゝの埋木

題しらす

同戀二　大江廣氏

いかなれは憂名はかりの名とり河あふせをよそに聞わたるらん

續後拾遺戀一　從三位氏久

名とり河あふせによとむ流木のよるかたしらてぬるゝ袖かな

建保三年名所百首　夫木集魚梁部

同二　　僧正行意

いたつらにあはぬ憂名のなとり河梁瀬の浪
を袖にかけつゝ

同雜中　　藤原眞忠

名とり川いかなる瀬にかあらはれて身の埋
木の人にしられむ

新千載秋上　　花園院御製

流れてのそのよかたりのなとり河かりの逢
瀬に身をやしつめし

同戀一　　前參議能清

秋のよの月のこほりの名取川なき名あらは
す浪の音かな

同　　權中納言經光女

そのまゝに逢瀬は絶ぬ名とり河憂名はかり
そあらはれにける

同　　贈從三位爲子

あらはれてくやしき物は名とり川たえたる
中のせゝのむもれ木

文保三年百首奉りけるとき

新拾遺夏　　前大納言爲定

名とり河せゝのうもれ木浮しつみあらはれ
てゆくさみたれのころ

新後拾遺春下　　權中納言爲重

夜と共にかすめる月のなとり河なき名とい
はん晴間たになし

同戀一　　源守法親王

名とり河音になたてそみちのくのしのふか
原はつゆあまるとも

名所百首歌合下同　　順德院御製

をろかなるなみたそあたの名取川せきあへ
ぬそてはあらはれすとも

定家卿

なとり河心にくたす埋木のことはりしらぬ
そてのしからみ

家隆卿

名取河心のとはゝうもれ木の下行水のいか
かこたへん

名取歌戀部

御集　土御門院

なとり川憂名にぬるゝ戀ころもあふをまつ
まにくちやはてなむ

長久二年祐子内親王家名所歌合

よみ人しらす

名とり川底さへてらす夏の夜は螢ひまなく
見えわたりつゝ

かきりなく忍ひて人にしらせさりける人
に

拾遺愚筆　定家朝臣

せき詫ぬ今はたおなしなとり河あらはれは
てねせゝの埋木

返し

同

名とり河ゆくての浪にあらはれて淺くそみ
えん瀬々の埋木

九月十三夜水無瀬殿戀歌合河邊戀

同　定家朝臣

名取河わたれはつらし朽はつる袖のためし
のせゝのうもれ木

入道攝政家歌合に

詠藻　家隆朝臣

よしさらはあふせに見えよなとり川つけの
まくらの瀬々の埋木

家集　定家朝臣

那とり河心のとはむことのはもしらぬ逢瀬
はわたりかねつゝ

家集名取河　陸奥

夫木集　能因法師

名取河川なる鳥はなかれてもしたゆく水の

ますかとそおもふ
河邊見螢といふ事を
同　民部卿爲相卿
埋木のこゝろもしらす名とり川さもあらはれてとふほたる哉
六帖
同
名取河いくせかわたる七瀬とも八瀬ともしらすよるしわたれは
建仁二年内裏詩歌合河上花
同春　參議雅經卿
ちる花のをのれあたなる名取河風そくるらし春の岩浪
仙洞三首河邊杜鵑
同夏　少將内侍
杜鵑をのかさつきのなとり河はや埋木のあらはれてなけ

文永二年歌合
同秋　前大納言資季卿
くもりなきこよひは秋の名取川月にや見えんせゝのうもれ木
弘安元年百首
同冬　後九條内大臣
埋木もしはし紅葉の名取河あらはれてゆく冬のあらしに
同　從二位爲定卿
なとり川底の埋木あらはるな紅葉はうへの色にいつとも
同　西行法師
名取河岸の紅葉のうつる影は同し錦を底にさへしく
同　源重之
なとり川わたりて作るおしま田をもるにつれつゝよかれのみする

太平記　　圓觀上人

みちのくの憂なとり河流れ來てしつみやはてむせゝのうもれ木

按二太平記一曰法性寺圓觀上人以二關東咒咀之罪一而元德二年七月十三日竄二于奧州一臨二名取川一所レ詠吟也

又曰近江犬上郡亦有二同名一擧二證歌一以備二參考一

前件重之田家歌亦所レ詠二于江州一也

犬上の床の山なるなとり川いさとこたえて我名もらすな

名取石

想二夫往昔此河畔水汀有二文石一而入二于朝貢一者歟

おほむ石なとりの石をつゝませ給ひけるに三十一有けれはひとつに一もしをかきてまいらせける　　重之

苔むさはひろひもかへむさゝれ石の數に皆とる千代はいくつか

重之ハ奧州ノ刺史依テレ命ニ而賦二一首之和歌一而分書シ之毎石ニ獻ス焉實ニ風流之雅玩好事之幽致後人未レ知三如レ此ノ有ル二事實一故表二出ス于此一想夫往昔此地出ス二文石ヲ一者多キ乎因テ如今有二紅石赤石一名ヲ誤テ曰フ二碁石ト一

太白山（或曰二烏兎峰一　下篇生出峰ハ乃謂二此山一生出俗誤二其音一）

在二茂庭村一高峻可レ愛突二兀于城南ノ山外一矣鄉俗稱ス二烏兎峰ト一往古大白星墮テ而所レ化也相傳往昔山上ニ有二巨人一常踞二峰頭一風詠シ自樂焉踞石今存ス也山下印ス二左脚ヲ一右趾ハ沓ニ在リ二吉田村邑田中ニ一長可二三尺餘一濶ヲ半ニ二其尺ヲ一北ニ二其足ヲ一鄉人言フ往古地仙之徒往々於二山中一而出沒隱見時々來リ游ス二于此地ニ一焉仍テ認ム二遺蹤ヲ于山頭一仙臺之地名モ亦因二此事實一出ツ焉

古老ノ說ニ曰夫レ奧州ハ郡國之東陲殊ニ叢險之國也故ニ高山巨嶽深澗幽壑危峰怪巖神洞鬼窟尤多シ是以有テ二羽人飛客換骨輕身之徒一而雲棲木食之者モ亦タ可レ多ル矣是以篠谷ニ有リ二仙人嶽之稱一湯ノ

原遣仙翁峰之名想夫上代有神仙游息而得其地名者足以推識矣於是吏知茲地本是仙境也

又曰往昔白河有巨人不知何許來支體大而骨力多郷黨曰大膽子在民間而好善稼穡主悦之後負邑中巨山如隣郷相傳其負山乃下野茂邑山是也時々隱見于人間遂不知其所終焉其足跡認在野州奈須野原上濶一尺許長加一尺其事頗相似大白地仙矣俱是妄誕怪異豈夫然耶但有見巨人痕履之而生后稷之事則中華亦有此說可知也

東坡云羅浮山有野人相傳葛稚川之隷也鄧道士守安嘗於菴前見其足跡長一尺許以酒一壺依蘇州韻作詩寄之

高楯古城

在吉田村相傳藤秀衡之古壘也一說賴朝東征次軍于此山館焉又東南有一丘外郭謂秀衡丘上有羽黑叢祠郷人言伊達十四世稙宗君在伊達郡屢接兵于葛西大崎而取名取刈田柴田黑川四郡令家臣福田駿河守守之

熊野神社

在河上村縁起說曰昔年名取郡有巫女信紀州熊野參詣有年老後不堪長途爲鳥羽帝保安四年勸請三山神祠于名取河南東稱若王寺中號證誠殿西建老女祠山頭祭高館權現又建善逝堂及寺院十六區蘋蘩隨時禮典無怠爾後崇德帝保延中有役徒欲赴奥州而遊于松島平泉辭東行而寢于證誠殿有少童忽言東奥有名取老女者崇當社多年老羸不相見久矣須憑爾傳話且付此物也醒來枕上有椰葉葉上有文字乃和歌也美知登乎志士之茂伊豆支加一作漸々於伊尼計里於毛比乎古世與連連戊和須禮志役徒東行傳之老女感動悲歎不覺涕涙之墮遍引役徒示其地曰斯地幸擬證誠殿左右皆末社也西北有

原野移飛鳥里西南有瀑布象那智飛龍名取河流爲音無川篤合彼地理方隅者自然之奇遇也役徒聞老女語對地理狀驚之曰是乃神感之所致也

東史文治五年己酉十月二日記因人佐藤莊司名取郡熊野別當各許還本處

神庫所藏文書多文治五年七月十日賴朝卿觀應三年四月廿九日右京大夫文和四年三月十五日平中務貞治五年十一月十五日平親貞永和四年十月九日陸奥守永德四年五月十九日源棟義應永十一年七月晦日沙彌某等書也又有文和二年癸巳四月九日右京大夫以名取郡北方三本塚郷而寄附當社大般若轉讀料之書又有伊達十一世大膳大夫持宗君寄附花鯨一口於當社而修冥福之事

老女義祠

在前田村中新宮東南一里餘遺址猶存

烏鵲宮 一作神烏宮

去老女祠一町餘老女建神烏祠祭之以熊野之使令也

老女墳墓

在下餘田村北釜中島之間也

熊野神詠

新古今神祇歌

道遠し程もはるかにへたゝりぬ思ひおこせよ我も忘し

此哥は陸奥に住ける人の熊野へ三年まふてんと願を立て參りて侍けるかいみしうくるしかりけれはいまふたゝひをいかにせんとなけきて御前に臥たりける夜の夢に

按右詞書與老女故事小同大異歌上句不同姑存以備參考

宗禪寺

在根岸村號青龍山宗禪寺相傳百一代後小松帝應永年中北目館主栗野大膳大夫所建也鄉人其他曰宮澤

合派大悲閣

在袋原村號無爲山落合寺安雲慶作觀音名取廣瀬兩流合派于茲鄉俗曰落合

名取浦

出色葉集萬葉名所浦部曰下流閖上之江濱乎索之萬葉集未得其証歌

飯野桃花巷

飯野村巷多植桃樹前大守綱村君一春南行路過此村落斯日也桃花盡開紅白相交滿村之艷陽甚可愛顧侍臣稱曰此弊邑也居民雖鮮少風光殊富可謂疊錦鄉也稱之巷邑而可乎鄉人因大守許家々栽培桃千樹認先君之遺愛以比諸甘棠

弘誓寺

在飯野以南曰金剛遊山弘誓寺相傳觀喜年中僧良賢者中興之

寺庫珍藏最多其一舍利三枚收水晶塔其二牟王玉色碧黒相混斑斑圍四寸四分其三兩界曼荼羅二幅善無畏眞跡其四勢至其五十三佛及十王其六地藏長三寸空海作其七龍蛇以唐金而作其八大乘經白紙黒字其九辨才天並六簡空海或彫刻或書寫其十藥師行基所畫其十一帝釋韋駄二天智證作其十二淡墨綸旨其記曰天正十一年六月廿八日宣旨上卿甘露寺大納言權大僧都貞珪宜敘法印藏人左少辨藤原宣光奉其十三大炊御門會紙曰詠松歴年和歌正二位藤原經光以久千代農春毛北野乃神垣耳松能絲乃色增流羅牟其十四不動像其十五十六善神共土佐所畫其十六愛染畫像度磨所圖其十七次信所書紺紙金泥彌陀經其十八唐鏡徑四寸五分八角裏面有飛鳥花紋其十九駒角

長可二一寸一其色淡黒其二十不レ喫貝化石蛤也
考二年號一而無レ觀喜者蓋寛喜之誤乎八十五代
後堀河帝年號天正十八年百七代正親町帝
年號也

栽松

寺西南有二大悲閣一下ニ有二稲荷社一南山下建二彌陀堂一
坂下有二喬松一郷人謂二之栽松一或曰源重之所レ詠鼻
輪松是也

笠島道祖神

在二笠島村一祭二洛陽賀茂川西一條北出雲路道祖
神之女一也往昔私二通商賈一故所レ謫二流死于此一州人
立レ祠祀レ之以二元夜一爲レ祭日焉九月十九日令二神輿
之于北釜一還二郷人祈レ神有レ應則爲二陰相一而賽レ之

按蟠龍子曰道祖神乃猿田彦大神也上古迎二
瓊々杵尊一降二臨於天八達之衢一天鈿女命問レ之
答曰吾名是猿田彦今雍州出雲路道祖神也
麗氣記亦曰二之道辻神一是也神名異記二曰伊勢
度遇郡大土公神社猿田彦大神新古今集淑
望詠二猿田彦一歌久堅乃天能八重雲振別天降
志君乎我曾迎邊之其説如レ此道祖神女通二商
人一事不レ見二正史神籍一若俗説則邪神也淫祠也
又今川了俊紀行播州四竈郷有二出雲路社一造二
陰相一掛二之於佗邦一有レ之

下妻神

在二社前一町以南一本社東南手倉田村飯野坂邊
有二小社一是亦妻神也本社神輿息二乎此地一

鳥井遺址

社南二町余曰二馬湟宅一有二兩大石礎一鳥井之遺址
今猶存

認鏃古杉

在二社西川内澤一往時藤秀衡上京經二此地一傍有二老
杉一射而賀二其首途一從者亦進二其鋒鏑一去明暦中古
杉猶存根圍一丈二尺郷人佗日欲レ伐レ之逞二商舶一
焉坎々仆レ之鳴動之聲及二郷隣一割レ之遺鏃頗多

造功已畢泛于滄溟其前宵有妖聲未幾而損壞

東國道

杉下有一細路是往昔通行之道郷人謂東行路

實方中將墓

有兩地一則在鹽手村山畔一則社北七町餘在農家後曰北野宅設叢祠是其墓址也或曰作衞臣者墳址也是傳古之佐具叙神社而郷俗誤其語者也然不能質傳來之愆焉可惜

神社考曰一條院御宇中將實方坐不敬謫奥州三年註和歌名所以爲歌枕尋阿古野松而無知人有一翁謂實方曰阿古野松在出羽國奥羽昔一州而今分爲二實方趣出羽見阿古野松是乃其翁鹽竈明神也其後實方騎馬而出過一社或人曰是陸奥名取郡笠島道祖神也行人必下馬實方問何神答曰王城賀茂川西一條出雲路道祖神之女也以密通商人故被放逐來此州人祭拜禱者造陰相懸神前必有靈驗今中將其復所歸洛實方曰然則此下品之女神也我何下馬哉經行實方馬俄斃實方亦死同葬社側其靈化爲雀飛來王城入內裡殿上臺盤以飲啄飛鳴云

古事談曰一條院御時實方與行成於殿上口論之間實方取行成之冠投棄小庭退散云云行成無繆妄靜喚主殿司取寄冠擺砂着之云左道ニイマスル公達哉々々主上自小蔀御覽シテ行成ハ召仕ハルベキ者也ケリトテ被補藏人頭于時備前介兵衛佐也實方ヲハ哥枕見テ參レト被任陸奥守實方於任國逝去云云實方小一條左大臣師尹孫侍從貞時子母ハ左大臣雅信女行成ハ伊尹孫義孝少將男謙德公爲子母ハ大納言保光卿女

西行撰集抄云むかし殿上のおのことも花見んとて東山におはしたりけるにはかにこころなき雨ふりて人々さはき給へりけるに實方中將木のもとに立よりて

拾遺集　よみ人しらす

さくらかり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花の陰にかくれむ

とよみてもりくる雨にさなからぬれて將束しほり侍る此事興ある事に人々思ひあはれけり又の日齊信の大納言主上にかゝる面白き事の侍りしと奏せらるゝに行成その時藏人頭にておはしけるか歌はおもしろし實方はおこなりとのたまひてけり此詞を實方もれきゝ給ひてふかくうらみをふくみたもふとそ聞侍る

實方竄東奥之事實不見正史且故事談等說亦不詳其由記者亦黨行成而貶實方今按撰西行記則實方之報怨雖坐不敬不可免焉其實直在實方而曲在行成舍憤報怨宜哉唯惜其事出於倉卒而不覺陷不恭之罪矣想夫實方在搢紳之中而秀和歌可謂堪才能人也故世以爲秀逸之先輩焉矧又此一首胸襟之高吟詠之優古今之絕唱天下之美譚也且綠枝之帶雨胡惜催吾吟紅濕之含露不厭沾吾衣溫藉風流實好事之人也是以花山帝之於選選也載諸拾遺集然行成以私意而妄譖之至尊前是固嫉才賊人之尤者而可必深惡而痛絕之人也然帝不及乎此却罪實方而賞行成縱令實方之怨出一朝之怒而忘其身在于帝心則豈令彼徒不糺其是非斷其曲直而遽然陷其重科哉後人不察漫爲之詞而畀于口筆于書令實方入喪心者之域實可歎哉故今千載之下爲實方惟切齒發憤以左袒于其非罪云爾

みちの國にまかりたりけるに野中に常よりもとおほしき塚の見えけるを人に問けれは中將の御墓と申はこれか事なりと申けれと中將とはたれか事そと又問けれは實方の御事なりと申けるいとかなしかり

けりさらぬたに物あはれにおほえけるに霜かれのすゝきほのほの見えわたりて後にかたらむ詞なきやうにおほえて

山家集　西行法師

くちもせぬ其名はかりをとゝめ置てかれ野の薄かたみにそ見る

新古今哀傷部詞書少異也爲參考記之

みちのくにへくたり侍りしに野中に常よりはとおほしき塚の見え侍りしを人に問侍りしかは是なん中將の墓とこたえけるに中將とは何れの人そとかさねて問侍りしかは實方の御事なりと申いと哀れにおほゆさらぬたに物かなしき霜かれのすゝきほのほの見ゆる後の物語にも詞なき心地し侍けれはと有

按西行文治中人自一條院永延元年至後鳥羽帝文治元年已百九十九年及經過斯地而見草枯墳遺仍發無限感慨而吐此苦吟於是亦鳴乎一首之挽歌寓無窮之悲哀令讀者流涕于千載之下是亦和歌之神德也

停馬地

去社西北七町餘在鹽手村實方落馬停馬于茲今曰停馬地

寓舍宅

去社乾一町餘在同村實方落馬所寓舍之地也故曰寓舍宅

臥書地

去社二町餘肆尸以東半町餘實方病革氣息將絶時作家書于臥床故曰臥書地

肆尸地

在同村社邊以北三町餘停馬以東一町半實方遺言曰我得不敬之罪乎神明如今臻茲宜肆尸乎斯地示後昆以爲警戒焉仍置尸于茲二三日故曰肆尸地

火葬地

同所實方火葬之地也火化地俗人曰竈地蓋死者之於火化也猶烹爛魚鱗於竈中仍曰諸竈地或曰實方眷戀阿古野之松也切矣故沒後從戸羽州而瘞于千代山下建寺曰唐松山萬正寺以阿古野之松在處也

繰環邑（俗曰鹽手則非也於字義亦不當故聊易之以此字）

笠島北邑也其地往昔埋實方馬具之繰々者固結也所以繫鞦鞦于鞍下之環而固結馬具者也故以埋繰環于茲而後人舉爲邑名焉實方墳墓以在此邑而爲是也

元祿元年戊辰依命問名取名勝路過于笠島而觀其蹤里人村翁不斥言實方名而直稱中將君敬之也如鬼神仰之也如主君說舊時也如親見談往事也如面命嗚乎古人亦多遺名實方抑何人哉雖身陷不恭之罪而神沒佗鄉之鬼千載之下仰慕其風想見其人而遺愛如此夫久矣古人所謂桃李不言下自成蹊者實方之謂乎

中將宮

在笠島神社東南實方沒後眷戀已深遂化白雀入禁廷而屢爲妖怪詔賜神號建祠祀之

按實方不忍一朝之怒永觸帝震怒貶乎東奧而不復還于帝鄉遂沒夷狄邊鄙之地焉可謂積鬱沈恨之深者也宜哉眷戀乎帝闕之臻茲矣其事實雖其不記于載籍而見于歌句撰集中者可併考之證亦維多故每涉獵于歌林采而輯之欲令後人略知其始末焉如今讀之則俾觀者不堪惆悵酸鼻於今日云

已下十三首共關實方事實者故低書以備便覽

實方朝臣みちのくにへくたり侍ける時給はせける

新後拾遺離別　　花山院御製

なにこともかたらひてこそ過しつれいかにせよとて人のゆくらむ

今拜讀叙作而乃知實方平日呢近之親而當亦離別之宸襟極深也令讀者不覺涕泣而鳴咽焉宜哉采花雨之吟而收之拾遺集

實方朝臣みちのくにへくたりけるに

夫木集　能宣朝臣

わかるへき別れなりせはおもふとも涙のみちにむせはましやは

以此歌考則知當時朝士群臣議流刑之不相當者多隱然在其中矣細味可別之文字則這裡有眞意而非罪之旨自可視

實方朝臣みちの國へくたりけるに馬のはなむけすとてよみ侍ける

新古今別　中納言隆家

別れ路はいつもなけきの絶せぬにいとゝ悲しき秋のゆふくれ

返し　藤原實方朝臣

とゝまらむことは心にかなへともいかにやせまし秋のさそふを

同

按實方當顚沛之時而一字不著非罪之意一言不加訕上之詞唯述秋色之催別而有從容不迫之氣象可謂能呈性情之正者也若議唐詩之間則自然有盛唐之風味而哀而不傷者獨得于茲後人不知其旨尤可惜矣

實方朝臣みちの國へくたり侍ける時したくらつかはすとて

拾遺別　右衛門督公任

東路の木のしたくらくなりゆかは都の月は戀さらめやは

一時之搢紳朝士餞別之厚相競致慇歟丁寧也如此可見實方非罪之實不刑之

證在茲

陸奥の任に侍ける頃五月まてほとゝきすきかぬよし申て

續後撰夏　實方朝臣

都にはきゝふりぬらんほとゝきす關のこなたの身こそつらけれ

返し

同　よみ人しらす

子規名社の關のなかりせは君かねさめにまつそきかまし

夫謫客流人居江湖之遠阻荒裔之遙尤可哀之甚者也況過節物之新感花鳥之時乎實方在東陲之地而杜鵑聲絶關山道路長憶帝闕而不見奉宣室以何年屈乎有言曰望孟夏之短夜兮何晦明之若歳鄙路之逝遠兮魂一夕而九逝如今與實方謫居之情聊相似

かたらひ侍ける人のもとにみちのくによりつをつかはすとてよみ侍ける

後拾遺雜五　藤原實方朝臣

みちのくのあたちのまゆみ君にこそ思ひためたることも語らめ

實方朝臣みちの國より人のもとへ弓をつかはして戀しくは是をいたきてふせと申たりし返し人にかはりて

風雅戀三　三條院女藏人左近

是やさは安達のま弓いまこそはおもひためたる事もかたらめ

左近歌想夫前作之答詞乎在東奥而遙寄切思之贈一別心知兩地之情可感乎

此陸奥國に侍ける頃中將宣方朝臣のもとにつかはしける

後拾遺雜五　藤原實方

やすらはて思ひ立にし東路にありけるも

のをはらからのせき

按兄弟關一作憚關若前記則宣方乃實方之連枝乎若後說則只詠東奥之名地而歌之意味尤薄矣須從前說則實方意趣亦歸厚也

實方朝臣みちの國に侍ける頃いひつかはしける

同　大江匡房朝臣

都には誰をか君はおもひ出るみやこの人は昔をこふめり

返し

同　藤原實方朝臣

わすられぬ人の中には忘れぬをまつらん人の中に侍やは

匡房憶舊友於東奥而盡心知之情懇懃切實實方亦能述相思之志無餘蘊矣今日讀之則再灑感慨之淚也

陸奥國へくたりて後ほとゝきすのこゑをきゝて

拾遺雜春

年をへて深山かくれの郭公きく人もなき音をのみそなく

實方去常郷而道路千里謫居寂寞客心無聊杜宇泣血之中斷愁腸于不如歸之哀音而動若干之鬱念焉多年之不遇亦隱然于句裡也

自笠島至此凡十四條共記實方事實以備便覽

栽松城　當收之前條栽松之下

在栽松村相傳多田滿仲往昔居此館焉滿仲是奥州刺史任國之間在武隈館而無居此館之事也然則爲防禦設之而備要害乎

雄幸橋

在川上村相傳百四代後圓融院永和年中有

桑島・宮内者甚張減福而稱善人有一女號幾世有容色鄕有山上雄幸者男色動鄕黨俱同村巷焉幾世佗時見雄幸而思念日夜不息私通艶書而終有雲雨之會爾後屢欲再會而不能焉幾世不耐眷戀思慕之切詠一首之哀吟投身而死死時十有六其遺吟曰

うたかたのあはれにきゆるみつ瀬川しつむも嬉しすゑのあふせを

雄幸亦遂死于情是亦二十有一歲鄕人哀而立石題曰幾世墓永和三年三月十日沒高三尺六寸闊一尺五寸餘厚四寸五分雄幸墳亦隔川而在有小橋往昔雄幸通行之地故鄕人曰之雄幸橋

仙臺佛 一作千體佛

在飯田村相傳五十六代淸和帝貞觀中釋慈覺所造舊在今治府地黃門君構城池之時移之此地云 或曰其佛像有千軀故名之

武隈神祠

武隈乃地名祀稻荷神在岩沼驛西社邊有八幡雷神愛宕叢祠及觀音小堂社後有稱寶窟者鄕俗以爲明神窟也其眞體乃封狐而如今現在于窟中也大古騎竹馬而來于此地故武隈文字或易竹駒訓音相通而幸爲寺號也岩沼村落崇野狐顏如神仲春初午日行祭禮

按稻荷者考神書則倉稻魂也豈以封狐當之哉然諸國以此神而實爲老狐之精於犬成經亦有其說是乃浮屠附會者豈足信之哉尤可痛恨之至也想夫斯地亦往時有此狐窟而好事愚昧之者以爲神迹之所垂焉建神祠因地名而號武隈明神者也爲神道者雷同而無質其妄誕令神明遂蒙此淫號矣切怪神明亦不加罰神官亦不能咎故俾神明永陷于妖獸而汚辱蕪穢之甚不復悲哉

白井宗因稻荷說曰或問稻荷神社僧空海於東寺門前逢負稻老人海祭之以爲東寺鎭守

以其擁衛故號云奈何曰不知焉者以爲然知焉者不信故予舉其神名使見之者不惑也昔者神社多爲浮屠見攘竊還就浮屠覓其說令之爲其傳爲其記胥率之陷于夷狄梵語之中證之以三昧非神喜之猶不得已也雖然至久而不矯則猶治飢於鳥喙止渴於酖毒故比不入乎其肺臟而救之吭胸之間則庶乎復生矣其號稲荷者所謂荷田神地置倉稲魂故也又豐葦原卜定記云辰巳乃方仁當天倉稲魂乃垂跡阿利夫此神和百穀於播玉故仁名春神代乃昔與利此峰仁向玉母不知只三峰仁顯玉之和人皇十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日仁垂跡寸誠仁諸人哀憐乃御心深久昔生作禾物和草乃片葉末天百乃災於穰玉又曰間二月初午之說奈何曰神祇拾遺云元正帝御宇當社影向之日偶二月初午日也故至今用此日右三條神社尊家說宗因以爲神號自然有之然深嫉痛絕于出雲海者閲以神明而實爲封狐比走獸乎於此數說切實讀之可視其妄誕矣且駕竹駒之揣乎

寺曰寶窟山竹駒寺相傳往昔能因法師所開基也自祭祀前日設珍羞具盛饌而供于窟前或人生鷄于窟中以爲牲牢封狐盡食之夫寺僧鄉人以爲神享之驗而喜之

寺中所藏舊物多其一印行大般若其二板行大乘經裏面用女筆反古建禮門院所寄附也其書曰敬白十二斷食右生涯禁食之如件嘉元第三曆仲冬初八日平氏女敬白外亦女子書簡之草也俱女院親筆也筆痕精采頗得婦人之書法其三涅槃像畫樣高古畫中記曰美濃州神淵山龍門禪寺永寬供養貞和三年丁亥六月十五日畫僧宗久摸張思恭筆其四十六善神唐畫其五不動象空海智證畫跡八大童子未詳其人愛染象惠心畫迹其六猛虎唐畫其七集歌帖廿七首是

乃一時搢紳筆痕書武隈古詠外題門主所書也
按能因開基說未詳焉所藏緣起及華鯨銘卑俚文旨不足觀焉夫武隈者東奥之名區世上知之能因者歌林之翹楚衆人知之且夫能因其先出于敏達帝而得佳聲於敷島就中白河秋風之作所以膾炙于人口稱述于海内者也然後身東遊歷覽于奥境而作八十島記豈不知武隈之故蹟者乎哉然妄設竹駒之卑說而沒其佳名誣能因者俱後人之附會也女院眞筆者亦年代不合嘉元第三曆者九十三代後二條四年乙巳也女院崩御在八十二代後鳥羽建久二年辛亥至嘉元三年乙巳既百十五年相去如此其遠矣不考年代之誤也貞和三年丁亥乃九十七代光明帝十一年也

鼻輪松樹 鼻輪或作鼻端

在館西若沼驛西五町餘過小坂入其地一樹相並枝葉繁茂又見前條萩松下

藻鹽草第五奥儀抄を引てたけくまのはなはの松共よめり

たけくまやはなはにたてる松たにも我こと獨ありとかはきく　源　重之

年をへて誰をまつとか武隈のはなはにのみはいてたてるらむ

按するに奥儀抄本書には前の歌の外此一首あり

武隈のはなとて山のさし出たる所の有なりとそちかく見たる人は申し此松野火にやけにければ源の滿仲か任に又うふ其後又うす道貞か任にうふそのゝち孝義きりて橋につくるつくりてのちたえにけりうたてかりける人なりこれよりうせたりさりともなをよむへしと云云

奥儀抄本書に考れは其間少異也仍旁に附

之
歌林良材云奥州たけくまといふ所に二本の
松あり是によりてこもたるといへりはなは
とは山のさし出たる所の有をいふなり
袖中抄曰古歌云
　われのみやこもたりといへは武くまのは
　なはにたてる松もこもたり
拾遺集を引て云
　我のみやこもたりといへは高砂のをのへ
　にたてる松もこもたり
とはいはれたれ高砂の松は二本ともきこえ
す又總して山の松ならは二木に限るへから
す又武隈のはなはの松ともよめり重之歌有
武隈のはなはとて山のさし出たる所の有な
りとそちかく見たる人は申し教長卿云宮城
野に武くまの松も侍けれと今は見えすと云
宮城の武隈はなは館はひとつ所也按宮城武隈傳聞之
誤也
按奥儀抄或稱二株松或曰鼻輪松混爲一所
同樹皆傳聞想像之說也唯源重之之歌意爲
別樹且夫歌句之旨亦暗含兩株之意據哥林
良材說則又混二樹而爲一處如今點撿其樹
實別樹也於是始信焉重之實見不可誣矣以
此說而可爲正焉

二株松樹

驛西五町餘館南六町許自寺北亦阻一町餘今
臨其地一樹交翠馬鬣垂枝可怪
自古稱來曰武隈雙株松一曰臨其地而須有
兩樹而却存一株焉與其名稱不相合焉以重
之之歌考之則稱鼻輪者一樹而往昔名二木者
可兩株也然則此松實稱鼻輪者而鄉俗失其
地乎此却稱二木松乎又名寄裏書及歌人說
曰武隈二木松在館前也於是世古松朽盡則
依舊繼新松者亦見乎書中按如今所在松亦

元有雙樹而一株枯槁唯餘一樹乎
又總論古人説曰二木鼻輪稱來久然古書前
人之説異義紛々繁多叢雜落著不分曉故如
今擧諸説而末言之藻鹽草引奥儀抄而始謂
武隈鼻輪松而末篇混二木而説色葉集亦相
同歌林良材始謂二木而後混鼻輪又末合爲
二木事了袖中抄專謂二木一事而能因季通
深覺之歌亦同其旨唯源重之特挺然而爲別
樹且於歌意亦如詠一松樹是乃身踏其地而
所親見之證尤可貴二木則須取袖中抄之義鼻輪則須信重之之説也
清輔奥儀抄云 此説色葉集亦有之大同小異故旁附其字
うへし時契りやしけん武くまの松をふた
たひあひみつるかな
武隈の松は何れの代より有ける物ともしら
ぬ人はうへし時とよまれたれはおほつかな
くもや思ふとて書いてゝ侍るなり此松はむ
かしより有にあらす色葉集此松は以下相同

宮内卿藤原元良といひける人の任に館の前
に始てうへたる松也陸奥の館は武隈といふ
所に有此人ふたゝひかの國司になりて後の
たひよめる歌也たけくまのはなはの松とも
よめり重之歌云
たけくまのはなはにたてる松たにも我こ
と獨ありとやはきく
武隈のはなはとて山のさし出たる所の有な
りとちかくみたる人は申せし此松野火にや
けにければ源滿仲正字か任に又又字なしうふ其後又うせ
たるを橘道貞か任にうふ其後孝義代りて橋
につくりて後絶にけりなかく失に情なき心は世末の代迄名をなかしうたてかりける人な
りさりともなをとゝめりなくともよむへし以上奥義抄説附色葉集
袖中抄云々
うへし時契りやしけんたけ熊の松を再ひ
あひみつるかな
顯昭云武くまの松は陸奥の武隈といふ所に

二木ある松也此歌は宮内卿藤原元良か陸奥の初任に件松をうへて後任によめる歌也其松野火の爲に焼うす其後滿正か任にうふ其後又うす道貞か任にうふ其後孝義きりて橋に作る其後失終りにきと云云

又能因法師陸奥國へ再ひ下れりけるに後度は武隈の松もなかりけれは

たけくまの松は此たひ跡もなし千とせをへてや我はきつらん

橘季通朝臣みちの國よりのほりて

武隈の松は二木を都人いか丶ととは丶三木とこたへむ

か丶る歌をなんよめりと自賛しけるをき丶て禪林寺大僧正深覺返し

たけくまの松は二木をみきといは丶よくよめるにはあらぬなるへし

橘爲仲朝臣みちのくの任はて丶のほるとて

ふるさとへ我はかへりぬ武隈のまつとは誰につけよとかおもふ

右五ヶ條共に袖中抄説

みちの國の守にてまかり下れりける武隈の松の枯て侍けるを見て小松を栽つかせて任はて丶後またおなし國にまかりてかの前の任にうへし松を見侍りて

後撰雜三　藤原元善朝臣

うへし時契りやしけん武熊の松をふた丶ひあひみつる哉

擧前説者廼此歌也記以証出所之書下同

陸奥守にて下り侍ける時三條太政大臣餞し侍けれはよみ侍ける

拾遺別　藤原爲頼

武熊の松を見つ丶やなくさめむ君か千とせの陰にならひて

小大君家集には爲仲みちの國の守にて

くたるに四條のおほきおほいとのゝせんし給にと有

あひかたらひける人みちのくにへまかりけれは

同雑上　　能宣朝臣

いかて猶我身にかへて武隈のまつともならんゆくひとのため

按能宣實方同時人送行之歌見夫木集蔵于前篇讀來此歌亦蓋同時之作乎送奥行之意可見然詞書稱或人則記時忌時勢避世情而隱其名者歟與花雨之例相同

則光朝臣の許に陸奥國に下りて武隈の松をよみ侍ける

後拾遺雑四

たけくまの松は二木を都人いかゝとゝはゝみきとこたへん

陸奥國にふたゝひくたり後の度武熊の松も侍らさりけれはよめる

能因法師

武隈の松は此度跡もなし千とせを經てや我はきつらむ

歌枕名寄に曰右一首陸奥に二度下りて後の度武隈の松も侍らさりけれはよめるとなん

同裏書云或傳曰藤原元善任國之時館前所植置之松也其見後撰集其後火燒源滿仲任國之時又植之其後又失橘道貞任國又植之其後孝義任國之時切之造橋之後永失畢無情之名留後代者云々

橘季通みちの國に下りて武隈の松を歌によみ侍けるに二木の松を人とはゝみきと答むとよみて侍けるをつてに聞てよみ侍ける

同誹諧　　僧正深覺

武隈の松は二木をみきといふによくよめる
にはあらぬなるへし
陸奥國の守もとよりの朝臣久しくあひみ
ぬよし申していつのほるへしともいはす
侍けれは

新古今別　藤原基俊朝臣

かへり來む程おもふにも武くまのまつわか
身こそいたく老ぬれ

橘爲仲朝臣みちのおくに侍ける時歌あま
たつかはしける中に

同雑上　加賀左衛門

覺つかな霞立らむ武隈の松のくまもる春の
夜の月

陸奥國へまかりける人に

新勅撰雑　藤原清正

かりそめの別とおもへと武隈のまつに程歴
む事そくやしき

續千載雑下　圓光院入道前太政大臣

武隈の松をたのみになからへてむかしをみ
きと誰にかたらむ

藤原兼時陸奥守になりて下りけるに餞し
たもふとて

新千載別　九條右大臣

武隈の松は幾よをへにけると年をかそへて
かへりあはなむ

新拾遺冬　光行

武くまの松のみとりもうつもれて雪をみき
とや人にかたらむ

新續古今戀四　前中納言爲忠

たけくまのまつ程過て問ぬかなむかしはみ
きとおもひいてめや

鎌倉右大臣

子規きくとはなしにたけ熊のまつにて夏の
日數へにけり

事無草

たけくまの松にはいと丶年ふれとことなし
草に生ひそはりける

六帖　　大納言師頼

たけくまの松のみとりは改玉の年と倶にそ
ふかく成ける

松を

薄雲抄

生そめし根もふりけれは武隈の松に小松の
千代をならへむ

宮にて弓いさせ給にくらうなるに人ぬす
に達けれは

家集　　小大君

まつ程に久しかりけるゆく末のまた遠けれ
は武くまのまつ

たけくまの松一もとはかれにける

同　　重之

武隈の松一もとは枯にけりかせにかたらふ
聲のさひしさ

年をへて誰をまつとか武隈のはなはにのみ
はいてたてるらん

武隈のはなはにたてる松たにも我ことひと
りありとやはきく

たけくまの松は昔に成たりけれとも跡を
たにとて見にまかりてよみ侍りける

山家集　　西行法師

枯にける松なき宿のたけくまはみきといひ
てもかひなからまし

西行東行之時已枯槁也可視于此歌

拾玉　　慈鎮和尚

たけくまの松もかひなくほと丶きす二こゑ
とたになかて過なむ

同

武隈の松に心をならへてそみきとは人にか

たるへらなる
正治二年百首
夫木　參議雅經
たけくまの松にや音を立そめてけさは都に
春のはつかせ
家集杜藤を
權僧正公朝
武隈の松の梢に春と夏とふた木をかけて藤
咲かゝる
建久八年百首歌合
同　從三位行家公
武隈の朽にし松の跡にまた誰うへかへて千
世をつきけん
新葉集　長親
よそなからみきとはかりを契にて終につれ
なき武隈の松
同　後村上院

つゐにきく見きとはいはて武隈の松ならぬ
身も年そへにける
草菴集　頓阿法師
何事をみきとかいはん数ならて我身いそち
にたけくまのまつ
陸奥國の任はてゝのほり侍りけるに武く
まの松の下にてよめる
詞花九　橘爲仲朝臣
ふる鄕へ我は歸りぬ武隈のまつとはたれに
つけんとやおもふ
爲仲爲奥州刺史東行之日任國之間客愁
之濃歸路之長別恨幽懷互發于吟詠者維
多依類聚于低書裨後人考其始末云
橘爲仲朝臣陸奥國へまかりける人々餞し
侍けるによめる
金葉別　藤原實綱朝臣
人はいさ我身は末になりぬれは又あふさか

をいかゝまつへき

橘爲仲朝臣の陸奥國の守にてくたりける時大皇大后宮の大盤所よりとて誰ともなくて

詞花別　大皇大后宮甲斐

東路のはるけき道をゆきめくりいつかとくへき下紐の關

陸奥國へまかりける時逢坂の關より都へつかはしける

金葉　橘爲仲朝臣

我ひとりいそくと思ひし東路に垣根の梅は先たちにけり

橘爲仲朝臣みちのおくに侍ける時歌あまたよみてつかはしける中に

新古今　加賀左衛門

覺つかな霞立らむ武隈の松のくまもるはるのよの月

橘爲仲朝臣陸奥守になりて侍ける時延任しぬときゝてつかはしける

金葉　藤原隆資

まつ我はあはれ八十年に成ぬるをあふくま川の遠さかりぬる

陸奥の國に侍ける頃八月十五夜京をおもひ出て大宮の女房のもとにつかはしける

新古今　橘爲仲朝臣

見し人はとをのうらかせ音せぬにつれなく澄る秋のよの月

浮島明神

夫木集二

祈りつゝ猶こそたのめ陸奥にしつめ給ふな浮島の神

同四

浮島の花見る程はみちのくにしつめる事も忘られにけり

詞書見前件以事實前後重收于此

詞花
ふる郷へ我はかへりぬ武熊のまつとは誰につけんとやおもふ

信夫のさとにて

新古今秋上
あやなくもくもらぬ宵をいとふ哉しのふの里の秋の夜の月

以歌意考之則蓋爲仲歸京之時所作也須以下兩首之秋候而證之則其實亦併考也皆所以爲客中旅夕之寂矣下倣此

さ夜の中山といふ所にて鹿の鳴を聞てよめる

夫木
たひ寐するさやの中山さ夜なかに鹿も鳴なり妻や戀しき

陸奥の任はてゝのほり侍けるに尾張の國鳴海野にすゝむしの鳴侍ければよめる

同
ふる郷はかはらさりけり鈴虫のなるみの野邊の夕暮の聲

無名抄に爲仲任はてゝのほりける時宮城野の萩をほりて長櫃十二合に入て持てのほりければ人あまねく聞て京へいりける日は二條大路に是を觀ものにして人おほくあつまりて車なとあまた立たりけるとそ

按爲仲爲奥州刺史而久在武隈館其往還任國之間信夫鄕之吟旅懷之寂可観十符浦之詠客愁之情可想歟遠遊于浮島留別恨于武隈且携宮城之萩而壯皇州之觀焉可謂風騷慷慨之人也就中留別之一篇與彼唐戎昱別湖上亭作旨趣略相似也其詩曰

好是春風湖上亭柳條藤蔓繫離情黃鶯久住
渾相識欲別頻啼四五聲
別情之深感慨之長適與此合故附于此且
欲令後人知其性情之發無倭漢之異也
自詞花爲仲歌至此凡十四條以次敍而
輯于此以備爲仲事實考究云

武隈古館

歌枕曰二木松藤原元善任國之時所植于館
前也然則松下邊乃古之館址乎鄉人未詳其地
可謂遺恨矣今居館疑非舊時之地焉

遠望浦

非地名若沼以東大洋之渺茫極目尤遠故以悠
遠之狀而稱之遠望浦自入爲仲之吟來却似稱
地名矣其亦看歌意可觀也

陸奧國に侍ける頃八月十五夜に京をおも
ひいてゝ大宮の女房のもとにつかはしけ
る

新古今旅　　橘爲仲朝臣

見し人もとふのうらのせ音せぬにつれなく
すめる秋の夜の月

按古來以宮城郡多賀國府山麓十符池混
此浦名而爲一焉豈然耶十符池本以菅薦
得其名大納言經信卿之歌可併考此浦景
也海上望洋而日力更竭以其悠且遠得其
名十符與悠遠和訓音響實相近因後人不
辨混爲一所焉抑此吟也其所發者何哉爲
仲久刺史于東國而在于武隈館偶値中秋
月色之澄鮮乎行李蕭然客心無聊於是不
勝旅愁寂寞之情望清風之凄涼而憶常闕
之舊遊對明月之皎潔而慕閭中之並照因
茲所以苦吟而吐情實哀吟也矣乘此月夜
之興取路于多賀山陰之杳哉相去十餘里已而別
又彼地在山家幽隱中而欠海濱汀浦之象
乎弗思之也甚

鷹硯寺

寺在千貫松嶺北武隈西號龍谷山鷹硯寺相傳往時爲由利若愛鷹綠丸（鷹丸）所建也有大悲像日長谷觀音南北村名出于此鄉說曰由利若夫人想海曲欠文房具締小硯于鷹翼而放之杳空不耐重墮而死後人取葬此山畔建寺是也或曰別有寺曰若窟山長谷寺康平中摸長谷象而賴義所建也村名亦出于此

長谷古館

在鷹硯寺南南長谷村長谷紀伊守者故墟也

綠丸石

千貫嶺上深山叢祠西可三百步有一石長七尺高二尺七寸東面立綠丸者由利若所飼鷹兒名戀其主而至謫居傳書于夫人死後化石見由利若草紙因言此邊乃往昔元海島也（由利作由理或作百合）俗說曰嵯峨帝朝豐後刺史曰百合若膂力善射爲時輩所重此時蒙古高句麗襲日本國衘命百合若討之已有功及歸期而其臣別府者欺放之元界島掠其夫人不從焉奪國而極奢肆也百合若苦海曲有年矣後駕漁舟而歸鄉里告朝奉勅遂亡亂臣別府云豐後府內有百合若墓今猶存焉

按百合若事不見正史況無來東國之由未詳元界島者蟠龍子引豫章記曰孝靈天皇第五皇子曰彥狹島命爲藩屛將軍奉勅在伊與國自是世人稱之伊豫皇子爾來代々掌征伐異賊六世三井者先鋒神功皇后于三韓其四世曰百里十五世曰百男至十六世益躬奉推古帝勅征復異賊射賊魁首鉄人者殪之十八世玉興有故竄攝州難波憑漁舟而歸鄉里其末葉乃河野氏也其族臣以別府稱氏者多又曰弘安四年（後宇多帝七年辛亥）蒙古使高句麗先驅襲日本地遇大風于筑前博多賊船尽破裂多溺死漂泊已甚此時賊將范文虎者得舟乎向國

志摩郡鷹島（玄界島也）自是歸其國云以此等事率
合附會作此說者乎

千貫標松

貫者連錢之名千者謂其多在南長谷村而最大山高嶺也上延深山叢祠山下有寺曰深谷山眞珠院其嶺上青松萬株隨山勢之高低而相連數十町有屈曲有平直交翠排青標者標記也言商船漁舟汎滄溟者或有泛々而失西東則杳望此嶺松而得其方隅詳其村落焉於是有大安其意者以爲喜歡之價以千貫而當之亦未爲過多焉故棹郎舟子貴重此嶺松而所以標準之而相稱以此鄙名也

東平王塚

在南長谷村千貫松嶺下上有青松十二株古來相傳異邦人東平王者客死于茲瘞此山下蓋以眷戀鄉里也塚上草木枝葉靡然盡向于西云

宗久紀行に路のほとりに一の塚ありゆきゝの人のしわさとおほえてあたりの木に詩歌なとあまた書附たりし昔東平王といひける唐人の墓なり故鄉を戀つゝ爰にて身まかりけるかそのおもひの末にて塚の上の草木も皆西へかたふくと申ならはせりと語る人ありしかはいと哀に覺えてかの昭君か青塚の草の色もことはりにこそ思ひやられし誰も旅のそらにてはかなくなりなは夜半のけふりも猶ふる鄉の方にやなひかましと憂世の妄執もあちきなくこそおほえ侍りしか塚上の松の木あまた生ならへるもうなゐ松とは是にやと哀なりと物語のためしもおもひいてらる

ふる鄉はけにいかなれは夢となる後さへ
猶も忘れさるらん

それをも猶過て武隈の松の木陰に旅寢して木の間の月に心をつくし（此一句亦武隈の一故事）名とり

河のわたりを過つゝ行水のかへらぬことを
かなしむ　此所も名取河の一故事

五言奉試得東平樹一首

作　成益

東平壠感木傾影志非空地隔連枝異神幽合意
同泉裏亭待雪條靡○因風遙望相思處悲哉古
墓中　雖因之開元有脱字

經國集十四

按經國集淳和帝天長四年丁巳命滋野貞主
選自慶雲四年至天長四年之詩文然此樹入
騷人墨客之吟也久
成益文德實錄曰仁壽二年二月丁未從四位
下丹波權守作宿禰成益卒父從五位上宇治
人成益少在大學長習文章應進士舉遂得登
科弘仁十四年爲左京少進天長元年秋爲式
部少丞七年春左轉爲右京少進九年冬叙從
五位下承和三年夏爲大藏少輔遷右少辨
十一年夏爲左中辨十二年春叙從四位下依
法隆寺僧善愷訴訟事辨官内共解由後出爲
丹波權守境内肅然國人稱其廉潔成益爲人
質直在公奉法不阿權貴卒時年六十四
貞主同年同月乙巳參議正四位下兼行宮内
卿相摸守滋野朝臣貞主卒曾祖父大學頭兼
博士正五位下猶原東人該通九經號爲名儒
天平勝寶元年爲駿河守于時土出黄金東人
擇而獻之帝美其功曰勤哉臣也遂取勤臣之
義賜姓伊蘇志臣父尾張守從五位上家譯延
曆中賜姓滋野宿禰貞主身長六尺二寸稚有
度量涯岸甚高仁明大同二年奉文章生試及
第五年爲少内記六年轉爲大内記仁明天皇
初在儲之日遷東宮天長八年勅與諸儒撰集
古今文書以類相從凡有一千卷名秘府略十
一年春捨城南宅爲伽藍名慈恩寺貞主坐禪
之餘歴游其間時人慕之十二年陳便宜十四

非事多不載議亦不行嘉祥二年春兼尾張守于時太宰府吏多不食衰弊日甚貞主上表曰夫太宰府者西極之大壤中國之領袖也東以長門爲關西以新羅爲拒加以九國二島郡縣濶遠自古于今以爲重鎭夫謀事必就租發政占古語因撿舊記大唐高麗新羅百濟任那等悉託此境乃得入朝或緣貢獻之事或懷歸化之心可謂諸蕃之輻輳中外之關門者也因茲有德爲師武才良爲監典若無其人選叙辨官式部頃年以來絕而不行近得飛語云彼吏或聾耳閉口似避時人之或忌恥貧賤爲聚斂之吏府司國宰莫不悲傷若如此不變恐噬臍不及臣聞此語心神罔措雖此之飛語有何信處而臣子之理何不預憂又聞少貳從五位下小野朝臣恒柯筑前守從五位下朝臣今守有意抗論無力矯枉未審虛實唯得耳劇臣不勝血誠伏觸逆鱗言詞切直默止不省其秋爲宮内卿三年夏授正四位下兼爲相摸守仁壽二年春毒瘡發啓吻詔賜醫藥中使相望於路道俗來問者日闐街巷填咽遺誡子孫云殯斂之事必從儉薄徂歿之後子孫齋供而已卒于慈恩寺西書院時年六十八時人知與不知莫不流涕愍惜貞主天性慈仁語恐傷人推進士類隨語汲引長女繩子心至和順進退中規仁明天皇殊加恩幸生本康親王時子内親王柔子内親王少女奥子頗有風儀閑調克修爲天皇所幸生惟彦親王濃子内親王勝子内親王時人爲外孫皇子一家繁昌乃祖慈仁之所及也

按貞主德儀宏才安富尊榮人之所慕亦宜哉唯恨捨城南宅而爲伽藍坐禪之餘歷遊其間終卒于慈恩寺也如今考曾祖父東人之事迹該通九經號爲名儒可謂一世之英豪也貞主亦若有度量爲文章生兼大小内記後昇顯官是亦繼志述事之人也然其所

學者不正所見者不精遂入于浮屠朝政之暇專志于坐禪入定者非己之不明誤其生却令時人慕之且併先人所學而錯之者實可惜哉

松竹對策　江以言

新撰朗詠集懷舊

東平王之思舊里也墳上之風靡西天門山之傳新名也峽中之烟拂地（全文見于下）

按文粹爲弓削以言問藤原廣業對俱一條帝寛弘中人想夫昔時朝士文臣或賦之應制或述之旅懷以弔其旅魂乎然近世寥々乎唯有宗久之歌在書中所言詩歌亦不收之紀行實可惜哉

松竹策

治部少輔從五位下弓削宿禰以言問

文粹三對策部

問松抽靈幹雲連嵩高之烟竹抱貞心風吹會稽之綠是故德配乾位方似聖人云爲法之取囊爻自作君子之範則不審或速成而晚就其人誰人之氏族或九疑而千尋其處何處之烟雲度庭間庭植棟植梓樹之變化猶暗一生一死六年十六年之期約忽迷至于筆海之海遂日競起詞林之花隨春交開荊嶧華池之說別時代而風羅南條北葉之詞明根荄而露布綠楊黄柳行人去就之意如何築山穿池道子封樹之功幾許子仙藉是重暫降蓬萊萬里之雲高材不拘誰待橡樟七年之日去春甚邇解氷何疑

文章得業生正六位上行近江權大掾藤原

朝臣廣業對

對竊以濛昧混沌之中一鷄初生二一三圓蓋方輿之後萬象遂別品彙野草山木毛髮之種相分春雨秋風榮落之期自定於是送歳送日不改者松林之心侵雪侵霜無移者竹叢之色秦始皇擁蓋忽避岱嶺之雨漢高帝之正冠長伸薛縣之烟柯

亭月閑雲過、蔡氏之曲蘭臺日暮風舞宋玉之詞霜毛丹頂之禽翅棲綠林之夕驊騮騄駬之馬跡蹈玄池之春復有費長房之龍鮮葛波之雲永去周景式之塵尾石門之路空閑秋風索々子野之商絃讓音曉霜森々南山之羽括呑舌東平王之思舊里也墳上之風靡西天門山之傳新名也峽中之烟掃地貞姿入夢知靈効於十八年之後勁節含音叶律呂於十二月之中梁王之好苑囿先備西園之庭實夏后之分貢賦永爲青州之上宜王右軍之遊四郡蓬海之浪渺々嵆中散之締七賢鹿巖之月蒼々蓋乃風化所及動植遍稟者也國家俗反九首仁蒙萬心聖化風遐二華之松獻壽叡德露下細葉之竹受祥自然首文背文之鳥長巣上林之雲羽氏翼氏之人遙就中華之日然則速成晩就之禄方策載其人九疑千仞之談圓丘爲其處殷庭周庭之變梓樹之詞自明一生一死之期竹譜之文方決則驗時代可辨披齋紀而區分南北暗知指族民而誦詠行人休止猶遊幽僻之烟道子山池誰述斟酌之水謹對（皇擁之間疑脱二字）乎

右文粹全文擧之備前參考朗詠以舊里作舊宅或作舊土掃作拂爲江以言作想夫基俊偶誤之乎

又按文選四十三劉孝標答劉治書云冀東平之樹望咸陽而西靡蓋山之泉聞絃歌而赴節云云李善註云聖賢家墓記曰東平思王冢在東平無鹽人傳云思王歸國京師後葬其冢上松栢西靡今具考之則東平王元是中華之故事儒官學生讀之發感慨搢紳朝士亦想像而賦之乎成益廣業亦似未必盡述吾國之事者矣此古墳也往昔異邦人客死于茲而眷戀之狀有偶與夫東平王暗合者而好事者牽合之歟宗久亦信傳聞之誤而記之貽後人之惑于斯者也

洞窟堂址

在名取溫泉北洞中遺文字記曰平治二年相傳往時釋慈覺開精舍時刺史不好佛一日出漁獵于河畔焉得魚尤多仍令寺僧數十輩出荷鮭魚運細鱗寺主大不樂捨寺去至羽州別開地曰寒居山立石寺是也後人呼其址而曰洞窟堂

名取御湯

在名取上流秋保村郷人曰秋保溫泉相傳古昔勅封之地也故以御湯而稱之

按御湯二文字非稱本朝中華亦稱之古詩所謂有御湯搖蕩雙龍影又是胡兒簇馬看句

大和物語曰名とりの御湯といふことを常忠の君の女のよみたるといふなむ此黒塚のあるしなりけり

拾遺物名

おほそらの雲のかよい路見てしかなとりの見ゆけは跡はかもなし

となむよみたりけるをかねもりの大君ききて同しこゝろを

しほかまの浦にはあれやたえにけんなとすなとりのみゆる時なき

となんよみたりける

按前一首載拾遺集物名部大空作花際宝（此字出楚詞而失志說訓無覺束）而爲平兼盛作拾遺集大和物語共花山帝之叡作也何爰有牴牾夫如此乎哉

直下橋

入御湯板橋也立此而臨岸下則下流滄々水色染藍其狀殆駭囑經過者必倚橋欄而臨河流故曰直下橋

長館

在長袋村秋保平次郎者居館也

楯山館

同所大曲某者居之後爲平次郎所陷（平次郎平次太郎）

上館

在馬場村平次太郎仲子賀澤左衛門居所也

豐後館

同所是亦左衛門孫秋保攝津永祿中所築也秋保氏其先出于相國平清盛清盛子生資元資元生長基長基生基盛基盛始來于奧州名取郡秋保邑以秋保爲氏焉十四世有彈正直盛者是乃攝津祖先也自是世居此城以武毅所知于人也

天正十六年黄門政宗君接兵大崎深谷月鑑在軍中而通志於大崎軍散而後惧其罪欲亡之于最上而託義光麾下焉途經城下攝津蚤知之命從者要之告急黄門君命命置諸城中而守之十九年十二月七日使細谷甚兵衛者（甚兵衛登時勇敢者又有星甚兵衛者是亦與細谷同武名慶有勇功時人謂二甚兵衛）命攝津害之其書曰所託月鑑齋可速加殺戮仍令夫甚兵衛監其首可矣若事不成則其罪引及親族攝津受命將刺之浴室而招月鑑于居第月鑑暗覺計略而辭之以風疾而不應焉時冬天殊寒長子長門先是脫上衣而藏短刀于衣中預置諸月鑑坐後退侍側焉月鑑視薄衣而命襲服對曰脫衣在坐後取之則恐失不敬乎許之於是過背後把兵而急刺之月鑑怒而取腰刀斬長門不中其刄入于席中已三寸首遂墮於爐中從者聞之浴室各裸體而出與長門及其弟善太夫接兵攝津坐視曰小兒輩能勵力兄弟忽仆五人二人殺之路上畢令甚兵衛獻八級首于米澤黄門君大其功復賜親筆書曰月鑑傷害之速足可以賞也子弟之勇敢頗拔群是亦足以痛快也前後親筆榮幸之甚併短刀而珍藏于家

按黄門君書中記甚兵衛事而加一夫字是尤所重其人而實否平日之所試以證其使者可謂勇士之榮也長門善太夫好勇不在于人下故大坂之役快戰死可謂不墮家聲者也

生出峯　或曰前篇太白山乃此山也

在茂庭村其山極高峻極目遼遠郷人以爲涌出于地上者也山下有八幡神祠相傳二條帝平治元年所建也

羽山叢祠

在境野村岸上其下則湧碧潭其神八乃八幡熊野稻荷有寺曰醫王山藥師寺相傳小松内大臣重盛所建也寺中藏古笈高二尺内設三架表裏朱之

秋保瀑布

在馬場村深溪密林中直下千丈其勢也如曳練如亂絲有上碎白玉水底躍明珠山上多青松澗中交紅樹斷岸絶壁殆非凡境古人所謂千尋白浪瀉蒼壁萬丈銀河舞翠巒者豈虛語乎實山中之壯觀也

靜子古塚

在長袋村其高可六尺相傳義經之歌妓靜子之墓未詳何人設此之山

東奥嶽

在新川村封境與龍駒嶽相接焉秀衆山甲一國連天凝黛色百里透青冥西方之大嶽州人盡知其大山故名曰之東奥嶽

龍駒嶽

同所與東奥相並山上無樹唯生茆草郷人曰山中有龍駒常出而食草往々有見之者仍名其山岳

磐神山

在新川西南龍駒山南者嶇相峙翠岩相並上有青松紅樹下有屈曲潺湲其山勢也層々峨々數峯連亘凡二千餘町濕雲常生于足下冥霧長鎖于面前空洞幽邃擁斷岸峭壁横峯遶長流渾與人境大異也相傳往古有山人不詳産何地焉見曰磐次郎弟曰磐三郎容貌魁岸性好田獵常在山澤疾走輕捷跋渉峯巒蹊澗恰若飛仙羽客郷

俗以爲地仙之儔焉未詳其所終矣後人祀之爲山神仍稱栖遲山岳曰磐神山也其中西曰陽磐神東曰陰磐神山頂曰櫛形嶺後來以其遺像置于最上立石寺洞中以祭之

鄕談曰或天陰雨晴四顧寥々有坎々伐木者其聲已數百人談笑震林木而止明旦求之其地則聊無見之者矣或偶然遇異客于幽邃之間忽然失所在而不知其之處如此奇怪往々有之蓋魑魅罔兩之類乎

又府城西大梅寺有高山屈曲十八町相傳是亦磐次郎遊息之地也山上安其像兩地俱獵人之狀而持弓矢者也是山亦稱磐山

指賀莊 和名集亦擧之

風土記殘篇曰公穀六百七十二束三毛田假粟五百六十五束三字田貢駿馬栗梅櫻未詳其地

或曰今志賀村是也

岩窟山

在同村曰岩窟山石龍寺相傳淸和帝貞觀二年僧慈覺所開善逝像自所作脇持日光月光運慶作又有丈六彌陀堂後有經塚其傍有一山稱山王峯下有不動瀑布

玉浦

岩沼以東二倉海濱曰藤曾根是往時之玉浦也阿武隈河流經其南河南是亘理郡荒濱地是乃商舶之所輻湊設倉稟于此而納公穀有吏而司之河北乃名取郡蒲崎也是亦商船着岸之津也河流過中間而入于海左右海濱共有便廻船之地也玉浦渾河畔之摠名

玉崎 玉前不詳其地崎前同訓蓋同所乎

去武隈館南數百町在南長谷村中曰之玉崎

玉島

增田驛南河流曰之玉川去武隈西北六七里水源出笠島是亦誤玉島川名者乎

風土記曰出鱒鮭鮎等自阿武隈河入此水

玉島神社 己下出風土記未詳其地

圭田五十九束三字田所祭下照比咩也天武天皇三年甲戌三月始奉圭田行神禮

玉前莊

公穀三百五十二束假粟二百八十六丸貢紅花栗梨楊梅等

井上郷

公穀二百六十七束假粟二百二十五丸貢杉柏栗及鵜鶘鷗鷺等

九品寺

寄田四十八束三毛田道眼和尚結夏之丈室也

乘圓寺

寄田二十五束三毛田行基信宿地也

多賀神社

圭田五十八束二字田所祭伊裝諾尊也雄略二年始奉圭田行神禮式祭

奥羽觀蹟聞老志卷之五　終

奥羽觀蹟聞老志卷之六

仙臺　佐久間義和著

宮城郡上

白石先生曰宮城乃神所都之墟而古史所謂高天原地與州壤相接古者其土壤最曠後分爲常陸陸奥二州凡東方古書宜通古言而不拘今字則思過半矣

四十八代稱德帝天平神護二年十一月巳未以陸奥國磐城宮城二郡稻穀一萬六千四百餘斛賑給貧民 按此舉可視善政之化也

八十三代土御門帝正治二年八月二十一日羽林賴家令宮城四郎伐芝田次郎九月十四日城陷十月十三日歸于鎌倉

神名牒曰宮城郡四座 大二座 小二座 伊豆佐賣神社志波彦神社 名神大 鼻節神社 名神大 多賀神社

風土記曰宮城郡名浦五湊五名山十三岡七河五川四温湯三宮社十一寺院九墳墓三宮城郡東限松島都島西限青葉川南限松岡湊北限寒河山貢杉樟檜樫黄櫨茯苓松狐狸狼猿兎鱒鮭鱸鮒鮎等亦出怪石奇菜出桑麻白綿紙墨等（其說風土記）

按松岡寒河山今不詳其地青葉川蓋指廣瀨川乎河流經府城青葉山下來故稱之乎

仙臺城

此城前太守黄門政宗卿依神君命以慶長七年壬寅相攸于此自玉造郡岩手城遷來築斯城鑿斯池搆大廈設高樓因山而爲居館焉東奥高嶽甲於一國西北之所圍乃和泉峻嶺也西南之所蟠乃不忘大崋也七疑峯連其北太白嶺聳其南東北横榴岡東南臥茂山廣瑞河流遶城下宮城原野帶郊外第宅爰設市井爰區魚鹽之利商賈之便尤得其所焉可謂龍蟠虎踞相備之地也往昔有太白山人者遊息于斯地隱見于人間幸遺其仙蹤焉故號曰仙臺仙臺城地是也（鎌倉實記云或書云賴政之木下鹿毛ト云名馬ハ深栖陵之助元重カ贈所ナリ本ハ宮城野國分寺ノ青葉山ノ城主穗積玄蕃武成カ秘藏ノ馬ト云）

或曰此城用明帝朝完所築中古島津陸奥守者始居茂嶺城（其城址今猶存）後遷此城文治中結城七郎朝光居此爾後荒廢已久永祿中國分能登守來居天正中嗣子彦九郎盛重繼而居先是黄門君在北目館慶長五年十二月二十四日依命移于此明年起土木事七年壬寅落成卜居焉又曰少林古城寛永三年丙寅興之五年而成又曰外城羽林君十五年戊寅經營之十六年己卯落成

龜岡神社

在青葉山西北大守遠祖宗村君建久元年庚戌遷鶴岡八幡於伊達郡高古城外號龜岡爾來慶長七年壬寅黄門君遷于仙臺城東（今猶存其址）天和

元年辛酉綱村朝臣依嗣子扇千代君誕生而復移于城後青葉山北備神宮立巫祝以祈社稷平安古來以孟夏朔祀之

青葉山 於歌書作青羽

今治府城頭南嶺春來吐綠先群山最早矣號青葉山於和歌亦稱之但考萬葉集等則共作青羽且歌句多詠冬樹之狀或比諸綠頭鴨今舉舊說且風土記有青葉川名蓋古有此山稱青葉來而川亦指其山下河流乎勅撰名所抄云八雲御抄並範兼抄若狹云々清輔抄陸奧云々宗祇國分ハ入之近江

三原王歌一首 夫木集秋露作白露

萬葉

秋露者移示有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者

秋の歌とてよみ侍ける

千載秋上　前大僧正覺忠

常葉なる青羽の山も秋くれは色こそかへねさひしかりけり

元曆元年大嘗會悠紀歌青羽山

新古今賀　式部大輔光範

立よれは冷しかりけり水鳥の青葉の山の松のゆふかせ

按大嘗會者王者之大祭悠紀主基者左右之重禮預此國尤可愼之至於封內始見于此延喜式第七曰踐祚大嘗會凡踐祚其年預令所司卜定悠紀主基國郡奏可訖即下知依例准擬又定撿校行事凡散齋致齋一月三日齋月者預告諸司及下符畿內不得預祓齋清食忌其言語凡造大嘗宮者前祭七日神祇官中中臣忌部二宮人依次立率悠紀國司及雜色人等爲一列亦中臣忌部相別率主基國司以下准上皆單行各自朝堂院東西腋門入至宮地龍虎道南庭分列左右 悠紀在東主基在西 鎭

祭其地別國所備幣物其說如此當此事者預
其祭地豈非幸耶
殘花のこゝろを

續古今夏　太上天皇

たつねはや青羽の山の遲櫻花の殘るか春の
とまるか

續後拾遺秋下　讀人しらす

水鳥の青葉の山は名のみして露霜をけは色
つきにけり

風雅夏　權大納言公宗

薄くもる青羽の山の朝あけに降としもなく
雨そゝくなり

題しらす

新拾遺夏　贈從三位爲子

夏あさき青羽の山の朝ほらけ花にかほりし
春そわすれぬ

寶治百首歌に

新續古今戀一　兵部卿隆親

おもひ初し色はかはらし水鳥の青羽の山は
猶しくるとも

千五百番　青葉山

夫木夏　通具卿

ちりのこる青葉の山のさくら花風より後を
たつねさりせは

此歌及仲實之作皆以青葉字而詠之

光臺院入道二品親王家五十首　青羽若狹

同　知家卿

秋や來るかたはつれなき常葉木の青羽の山
そ風かはるなり

同　從一位良孝卿

水鳥の青羽の山の夏木立うきねにたへる花
おしそおもふ

建保四年百首歌

同　光明峯寺

霜しくれ上毛をはらふ水鳥の青羽のやまも
色に出つゝ
永久四年百首
同　　仲實朝臣
眞鷹かる青葉の山も秋くれは露のうつしに
下紅葉せり

經峰靈廟

在城東廣瀨西南相傳有人往昔藏經于峰頭仍稱之如今安國君三代陵墓于此曰寺正宗山瑞鳳寺黄門君廟號曰瑞鳳殿貞山公前羽林君號大慈院義山公後羽林君號見性院雄山公殉死墳塋亦相從並皆所以致愼終追遠之孝哀示忠臣義士之赤心也其宮殿廊廡也盡富麗其寺院樓門也極輪奐其地也河流過于寺下鬱林遶于門前古杉老松暗幽逕層巒衆峯凝遠眸開窓則萬里之滄溟涵于坐上臨砌則千疊之江山落于欄外可謂佳境壯觀之地也有他邦客一日登精舍題一絶實能名狀其景其詩曰

登瑞鳳蘭若即事　　無名氏
瑞鳳舞城巒偃臺日月閑君臣墳墓地恩義涙闌干

大崎八幡神社

在城外河北山頭慶長年中黄門君遷之自玉造郡岩手城令富塚内藏允信綱木幡木工介旨清眞山式部繼重等經營之同七年八月十一日落成社東建寺曰惠澤山龍寶寺々中藏龍珠仍爲其寺號焉此宮社也綉闥彫甍極富麗結搆之盛山節藻梲盡丹青光彩之美其所莊嚴者天下之妙工甚五郎者彫刻而妙術在左手時人稱左手甚五郎是以今所存之人物禽獸花草蔬果之像自然有生意飛動之勢如今現爰存焉非後世之庸工凡手所及矣一國之奇觀也爾後寛文中後太守綱村君下命以致修造加莊飾也此時建石華表令儒臣内藤閑齋作銘虎岩道説書之其銘

曰
奥州宮城郡當社八幡神者州人之所崇也慶長年中本州牧君政宗卿相彼於此地改造其祠廟方今其昆孫龜千代君取瑕石於州内東山爲華表次創立焉欲永年不朽也銘曰
嗟國之爲國以有神嗟神之爲神以有國惟神以敬惟國以寧永與華表萬年無極
寛文八年戊申八月十五日閑齋叟希願敬書

滿勝寺

號當午山始在城府東北今移之城北太守遠祖中村常陸入道宗村君墳塋舊在伊達桑折邑慶長中黄門君移寺院來故塋依舊在桑折鄕人呼滿勝寺村寺中存古牌子題曰右大將頼朝卿之台靈是乃以與朝宗君相親也

羽黒神祠

在府城北相傳所祭倉稻魂也往昔在伊達郡淸和帝貞觀中建之以爲伊達米澤三春鎭守焉黄門君遷于此文永甲子中北條時頼微行時亦入于其社而祈平安云

覺範寺

在城北號遠山伊達十六世左京大夫輝宗君墳塋在于伊達後移于此

東昌寺

在同所號無爲山同四世藏人太郎政依君塋在于伊達後移于此

東照神廟

百十後光明帝八年

慶安三年庚寅吾太守忠宗君請建東照神宮廟社于治府大樹許之迺欲擇地于城北艮隅而起土木事焉承應三年甲午廟宇落成焉殿堂門廡悉極莊麗別置林舍一宇奉祀事號仙岳院令石川大和請寺主於江都東叡山仍最教院僧正晃海與倶奉神輿而至于東奥太守淸道而郊迎之三月十六日夜遷宮有司監造於是乎各有賞十

七日舞猿樂於宮庭自是間歳有祭禮以九月十七日爲祭日其次第也令騎士整威儀正行列而前驅後拒于神輿矣且市童徒小兒輩逞色莊設異體携花者巧剪綵荷果者誇彷彿喧鼓吹張行裝而過斯日也通國群集滿城奔走簞食壺漿者滿巷横路不可勝數焉一時之奇觀也爾後世建公廟而祀之宮殿

璽玉大悲閣

在治府以南石那坂相傳田村麻呂東征之間以宮城產璽玉子者爲側室平日愛護大悲像後人建閣而藏之

多門堂

在城東市店中有寺曰金光山萬福寺名取北目館主粟野大膳大夫護持之像也天正四年藤原宗國者安置于此

眞福寺

曰廣澤山在城南河畔光嚴帝建武元年遊行五世僧安國者東行所開之地也

廣湍川

濫觴出于當郡大倉村巨舟山岳麓而至同郡熊臥村與名取郡新川邑溪流合經愛子村復合名取川于嚢原村同流入于海城下禁回處俗曰仙臺河其下流曰長驛河總是廣湍川也多鮎魚鮭魚矣或曰刈田宮驛口亦曰之廣湍川其說見于下東史曰文治五年己酉泰衡構壘于刈田郡湛水流于名取于廣湍爲要害之地以若九郎大夫余平六等守栗原三迫黑岩口一野邊令河田太郎行與秋田三郎致文守出羽自將兵拒幕下於國分原鞭楯

若林古城

在小泉村黄門君寛永中經始此地經五歳而成蓋擬之兎裘地乎今猶存焉

釋迦堂

在榴岡嘗廟以東元祿八年乙亥綱村君始開此

地建堂以置播人淨眼院所護持釋迦像且其南
大設騎射地以習磬控忌從送忌植之以單重絲
綸櫻各數百根及青松紅楓千餘株未聞他方並
樹鬪花如此夫多好事風流之設也是乃所以播
人追孝之示遺愛也斯地古之所謂鞭楯城址是
也自岡上望則木下之古林傲于春色宮城之曠
野富于秋爽其木末則本荒郷也錦萩纉織于芳
原其極目則松浦島也布帆ノ乁于瀛海千家之
綢繆多賀之縹渺皆入吟眸玉田横野亘于北野
和泉東奥峡于西岳實郊外之絶境也

躑躅岡　古書作山榴今從風土記或作榴岡

在南目村有高岡謂山榴岡東史稱國分鞭楯古
壘蓋此地也郷人不詳舊址
風土記曰躑躅岡在府之西府乃多賀古府也出紅躑躅
官以之摺衣號都々茲摺
　按往古岡上多躑躅且以其花而摺衣帛者可
視雅物之一故事也其制不傳惜今不能見之
矧又躑躅花亦絶而亡

題不知　つゝしか岡陸奥又大和　よみ人しらす
六帖　夫木集　藻鹽草
みちのくのつゝしか岡のくまつゝらつらし　藻鹽草くつかつら
と君をけふそしりぬる

永久四年百首　本後堀河百首松葉集常隆
夫木集　一本兼昌　二條大皇大后宮肥後
東路やつゝしか岡をきてみれは何かものす
そに色そかよへる

菅神廟　號照星閣

在同所西岡祀菅道實公往時在宇田郡八幡崎
相傳六十四代圓融帝天延二年庚戌半持村者
所勸請也後八十九代龜山帝文永元年甲子島
津某者移之宮城郡國分莊小俵村玉崎山中玉崎
或作玉手崎又稱玉田崎古ノ玉田也又百六代後奈良帝天文十三
年癸卯白石參河守宗明者再興之爾後百八代

後陽成帝慶長十六年辛亥我黄門君新致修造焉百十代本院寛永十七年庚辰忠宗君以四十二厄歳復新建立百十一代後光明帝慶安三年庚寅偶會東照宮經營之事仍移其東林至寛文七年丁未七月少將綱宗君遷之榴岡而新造云々

南目古館

在南目村一則喜多目紀伊居館一則相傳結城七郎朝光居城也

猫潭壘石巖

在郷六道路烏崎下有深潭奇石出于河畔可半町斷岩一丈餘曠狹小大截然相並壁立數尋其石上高平可坐可臥可飲可釣其上流石瀬潺々可渉可濯其下口碧潭蘸藍其南涯樹林落影秋來流紅尤可愛之佳境也相傳有妖猫匿石中而往々出爲怪焉故謂之猫潭

樂壽園

在城北郷鹿村斷地也江流遶其左斷岸峙其前山岳環其右平田擁其後其土宜梅樹仍古來農家植之頗多到春時則無所而不清香幽芳也里人呼曰梅邑或稱梅郷貞享四年丁卯八月十三日綱村君始知佳區地移民居四家而爲園囿之所命上野市郎兵衛河東田三右衛門司之起土木之事芟草去荊遶短垣于四邊松于其內柴于其外中有一丘丘上有桂樹名曰桂丘營亭於其南園中梅樹凡百八十餘株倶古木老樹其根也屈蟠其幹也曲節横斜交枝偃蹇並陰風致自然所以不假機巧作爲之手而見天工之妙也趙師雄之意可迷乎此劉後村之情可斷乎此是乃因太守之佳玩而顯勝地于此時焉至明年戊辰春三月稍成其事號曰樂壽園蓋取諸仁知之於山水者乎是月望日饗宗族家門會群臣有司始開宴而賀其落成焉且俾儒雅之士文藻之輩和歌之徒釋門之屬呈唐詩和歌以暢其佳趣以著其祝志可謂推己與人同其樂之君子也日是花時

每在東藩道遙遊觀以此爲例焉可謂幽致風流之設也斯時也行人憧々往來絡繹門有繫鞍馬墻有立肩輿花吐穠艷香凝幽芳花因地而新地因花而貴是亦可謂繁華之都壯觀之衢也開花之盛具言之則點點疎者如星壘壘密者如雲顆顆圓者如玉層層堆者如雪鮮明者皎皎其色也馥郁者芬芬其臭也滿面之香風透袂遮眼之穠艷起吟加入于妙香國似坐于椒蘭室務觀千億之化身言可分澤民三百之苦吟言可費豈羅浮庾嶺之奇孤山隴頭之勝而已哉伯顏之擔頭猶堪挿林逋之夢魂却爰臻坡公所謂羅浮山下梅花村者同日之譚也於是乎貴太守風致之高標識趣之秀逸也

神鏃石（ヤノネイシ）

在白石館腰地俗說曰山神相戰所射之鏃也故曰神鏃其形質似箭鏃或赤或黑或白或碧雷雨之後必得之石中本草所謂霹靂石者是也或說兵書謂之骨雨此地之外加美郡亦有之

三代實錄光孝元慶八年九月丙戌出羽國守言六月二十六日秋田城雷雨晦冥雨石鏃二十三枚七月二日飽波郡海濱雨石似鏃其鋒皆向南是亦霹靂石也

磐神山（ハンサン）

在名取宮城境間尤高山也山頂建小祠是亦安磐次郎磐三郎像古之獵師而神怪之人也（詳名取磐）（神山下）登登己十八町山下有寺號瑞鹿山祥岩寺後綱村君改之曰拈華山大梅寺

諏訪神祠

在愛子村不詳所建有上棟文記曰百三代後花園帝康正三年丁丑（是歲改元長祿）國分能登守藤原宗政所建而有元龜二年永祿三年之事

多門閣（ヒシヤモンカク）

近神祠有寺號知福山大門寺有上棟文曰元龜二年宮鶴者建之

彌勒堂

同村相傳運慶所造有寺號正覺山彌勒寺傍有石墳高五尺餘題曰元亨四年甲子（是歲改元正中）二月二十五日遺弟圓默爲先師立石

鳳鳴瀑布

在作並村山中在處大小凡四十有八條共界破青山鑿落丹崖不知噴雲濺月幾春秋也相傳往古有羽客來遊吹笙而臨于此後人呼曰鳳鳴瀑布

牢獄洞

在熊臥村河畔有空洞其狀方一間鄉俗曰牢獄

屋料巖

在大倉村其狀似刈田小原村石岩自山頭至河畔如立屋柱長五六間廣八九寸是亦神造之奇石也

彌陀堂

同村隔河流有寺號極樂山西法寺相傳平重盛家臣筑後守貞吉所持之像也藏茶臼茶竈等

山鬼橋

在同所入山中一里餘斷岩高壁疊雲籠烟峯轉絕處路滑苔邃架一石橋兩下臨萬丈幽邃巧備神造殆非凡境焉視者蕩胸度者斷魂鄉人號曰天狗橋以示非其人爲也

屏風嶽

在福岡村建權現祠尤嶮峻山勢如屏風壁立萬仞有寺號鷲倉山松林寺相傳推古帝養老二年經營之未詳其由

幽泉澗

在嶺白石村有寺號狐白山寶積寺是亦古跡也

和泉嶽

同村山岳跨府城西北峻極與刈田高岳相低昂焉山勢中國府群山圍繞此山下俗人呼曰嶺白右嶽好事者疾其名之俚而稱泉嶺

山內館

在實澤村山內須藤刑部少輔者永祿中在此城鄉人謨山內而稱山野村殿同所有古城八乙女淡路者居之

長命山城

在上谷刈村鄉人曰長命山東史所謂國府中山物見岡者是也

東史曰文治五年己酉八月十四日泰衡在國府中山物見岡爲小山朝政宗政朝光下河邊行平圍之泰衡先亡擊殘黨而獲四十餘級首筑前坊良心者有戰功館北曰伊谷澤原賴朝陣所也

洞雲寺

在七北田東北根村號龍門山鄉人稱山寺百一代後小松帝應永七年庚辰釋祥山所開也往時有僧房二十四宇其後荒廢今所存龍月泉龍江北當陽瑄溪龍雲景雲積書回軒江西幾餘九區其地也峰回路轉幽邃寂寞密林聳寺門細逕入空院古杉喬松客稀苔深惟聞鳥聲山靜溪音響長有殘僧說舊時而足以發深省之地也其所珍藏一曰舍利二曰觀音三曰藕絲袈裟相傳應永帝所賜也四曰香合五曰菩提樹數珠六曰鈴七曰唐畫八曰蟒牙九曰靈石

宮城野

南目村有廣野謂之宮城野而天下古今所稱者是也自木下鬱林以北至原市驛自山榴岡上以東至與館村平原渺渺草野芊芊原上錦萩古今專其名女郎花我裳香萩葉藤袴刈萱桔梗及無名野草無數秋花以百數焉又雲雀叢鶉殊多或巢或育太守之於羽獵也欲獲之多焉故平日禁雉兎芻蕘者而不得妄往矣鄉人呼曰活巢原東則海水滄々有千家鹽釜松浦島末松山浮島壺碑興井等之名區而襟帶于其中南則有茂山千貫松笠島武隈等之舊蹤而縈回于其際西則寺院森森其木末則不忘山東奧岳白石大岳羅列峭立北則七疑峯轡多賀古城利符村落盡入吟

昨東史所謂國分原是也此地古稱國分莊也且夫國分寺號亦皆所以出于此莊內也

堀河院の御時百首歌奉りける時ともしの心をよみ侍りける　前中納言匡房

ともしつる宮城か原の下露にしのふもちすりかはく夜そなき

按信夫文字摺本謂所出于信夫郡之衣也然詠于此者花草名此草生于原上至初秋而始著花緣莖濃紫其結花也縈紆其莖而如糾繩以草書之變態相似春蛇秋蚓之象而譬諸信夫文字摺衣以借其義而名此花草也又鄉俗呼之別稱花紫焉實一物也宮千代墓址頗多

大宮前太政大臣の家にて夏月如秋といへるこゝろをよめる

同　藤原敦仲

小萩原また花さかぬみやき野のしかやこよひの月になくらむ

同秋上　藤原基俊

宮木野の萩や小鹿の妻ならん花咲しより聲の色なる

按往時麋鹿伏原上者可視此他多詠鹿鳴者也是知古者深林幽邃而禽獸亦得其處者乎

堀河院御時百首歌奉りける時よめる

同　源俊頼朝臣

さまさまに心そ留る宮城野の花のいろいろ蟲のこえこえ

右一首能寫得原上秋景之態而更如畫且詠物之情多景之勝縮之三十一字而無遺漏可謂衆作中絕唱者也

鹿の聲兩方といへるこゝろをよめる

同秋下　覺延法師

宮城野の小萩か原をゆく程は鹿の音をさへ

わけてきく哉

新古今秋上　西行法師

哀いかに草葉の露のこふるらん秋風たちぬ宮木野の原

藤原惟成につかはしける

同戀五　よみ人しらす

うちはへていやはねらるゝ宮木野の小萩か下葉色に出てしより

野分したる晨にをさなき人をとはさりける人に

同下　赤染衛門

あらくふく風はいかにとみやきのゝ小萩かうへをひとのとへかし

名所歌奉りける時

續後撰秋上　定家朝臣

移りあへぬ花の千種に亂れつゝかせのうへなる宮木のゝ露

續古今秋下　順徳院御製

みやきのにしからむ萩や散ぬらんあらはれなくさをしかの聲

正治二年百首　夫木みやきのむら陸奥夫木喜多院入道二品のみこ

玉葉秋上　二品親王守覺

こゝろをは色と顔とにわけとめつはきに鹿なくみやき野のはら

同冬　土御門院御製

宮木野や枯葉たになき萩の枝におれぬはかりもつもるしらゆき

同千載秋上　後徳大寺左大臣

おもふとちいさ見にゆかん宮き野のはきか花ちる秋のゆふくれ

同雜體　前大納言爲成

露ならは色もかはらすすり衣千くさの花のみや木野の原

山階入道左大臣家の十首歌合に野草

續後拾遺　三條入道前内大臣

分過る人の袖まてみやきのゝ萩のにしきはうつろひにけり

同　安嘉門院別當

宮城のゝ萩の下葉のうつろふををのか秋とや鹿のなくらむ

和歌所にて六首歌奉けるに旅歌

同旅　鴨長明

たひころもたつあかつきの別れよりしほれし袖や宮城のの露

新千載秋上　前大納言實敎

いく度か盛見すらんみやきのやをなし古枝の秋はきの花

新拾遺夏　左兵衛督基氏足利

ともしする露分ころも立ぬれてこよいもあかす宮城のゝ原

同秋上　法印隆淵

宮城野の露分きつる袖よりもこゝろにうつるはきか花すり

同旅　有家朝臣

さくら色に春立そめし旅衣けふみや木のゝはきか花すり

新後拾遺秋下　前參議忠定

宮城野の露分衣あけたては忘れかたみの萩か花すり

同　正三位通藤女

露のぬきよはきもしらす宮城のゝ萩の錦に秋風そよく

新續古今秋上　頓阿法師

宮城野の朝露わけて秋萩の色そみたるゝしのふもちすり

同旅　正三位季經

哀なる宮城か原の旅寢かなかたしくそてに

鶉なくなり

原上由來叢鶉多季經之詠寫得地理之狀旅懷之情而尤奇也今也秋晩之哀鶉聲之寂殆如見之季經實知原上之興人乎

後小松院にて題をさくりて五十首歌つかうまつりけるに月前の露といふことを

同雜上　勝定院贈左大臣

かせわたる古枝の萩も花散て月にそのこる宮城の丶露

名所百首歌合　順德院御製

同

みやきの丶萩の葉よはき朝露を枝なから吹秋の風哉

同　定家朝臣

秋に逢て身をしる雨と下露といつれまされる宮木の丶露

同　家隆朝臣

霜枯はまたことしけき宮城の丶もとあらの萩の枝そさひしき

建久二年左大將歌合地部

拾遺愚草下同　定家朝臣

かたるともかはかり物やしらさらん宮城か野への夕暮の色

院句題五十首歌月前草花

宮城野の風まち侘る萩の枝に露をかそへてやとる月影

讀此一首則原上沈沈無人見夜月孤照錦萩而此時嫋風未至花上之白露各寫寒影來之態宛然發興悚然生感於是却知天上一輪月落影而各具其淸光者實道學之旨而統體各具之意隱然乎其中矣是乃自然至其妙而著和歌之德者豈不奇哉就中算露之句妙之又妙者也

百首歌の中

同
色に出む心もしれす秋はきの露に露をく宮
城のゝ原

後京極攝政家の會に
家集下同夫木集眞葛　家隆朝臣
みや木野の眞萩吹こす秋風に露さへおくる
さをしかの聲

建保三年内裏御歌合に
同
人ならは都に見まし宮城のゝ露をいさよふ
秋のゆふかせ

貞永元年歌合に
同
宮城野の眞萩か上の白露を玉にしきてもや
とる月影

同
秋の歌とて
みや木のゝ野守か庵に擣衣萩か花すり露や
そふらん

同
秋はきの下葉の露も色つきてうつらなくな
る宮木のゝはら

前條定家卿露上露家隆卿以月影之映白露而比之數珠玉之狀及此一首亦能寫原上之秋色來者也

俊頼朝臣
宮木野のしつくにうつるかり衣しのふもち
すり亂れしぬらん

をみなへし
良玉集　藤原顯仲朝臣
宮城野の露おひもたる女郎花あなくるしけ
の花のけしきや

此原上女郎花殊多古人詠錦萩者維多詠女郎花者已少如今始見此一首

堀河百首　　　　　　　　　　　　　　　　　　　權僧正永縁
宮城野の秋の萩原分ゆけは上葉の露に袖ぬれぬる

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　左京大夫顯仲
みやきの野千々の草葉を結置く花見む程は絶すかよはん

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　師時
時しあれは花咲にけりみやきのゝ本荒のこはき枝もたはゝに
枯野

六百番　　　　　　　　　　　　　　　　　　　家隆
鹿の音も蟲もさま〳〵聲絶て霜かれはてぬみやきのゝ原

同　建保百首　　　　　　　　　　　　　　　　兵衛内侍
宮木野や玉散萩の上葉よりうつりもあへぬ色そこふるゝ

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　家衡
さをしかのなく音なかすやうつるらん袂にあまる宮木野の露

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　俊成卿女
哀のみわくるもふかし露にすむ月を袂にみやき野の秋

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　忠定
取れはけぬよし枝なから宮城野や萩の下葉の露の白玉

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　行能
吹あへぬかせはいかなる色とたにまた見やきのゝ秋の夕くれ

同　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　康光
宮城野やわけ入あさの衣手に露おもけなる萩の花すり

拾玉　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　慈鎭
わかものとうつすはかりの袖もかなけふみ

や木のゝ萩か花すり

同

宮城野にたつねきつれは秋はきの花は誠に
こゝにとゝめり

同

みやき野を思ひ出るそ哀なるけふ萩の戸の
秋のにほひに

月清集　後京極

哀いかに旅行そてのなりぬらん木のしたわ
くる宮城野の原

玉吟　家隆

みやきのゝ露分ゆけはかり衣忍ふもちすり
萩か花すり

同

みや木野はやとかる草も松蟲のなく夕陰の
萩の上の露

夫木集御集　清愼公

いとはるゝ身を恨つゝ宮木のゝまつとしき
けはけふそ嬉敷

家隆卿之於松蟲清愼公之於松樹法性寺
之於玉椿皆可怪

白玉椿

同樹部　法性寺入道關白

みやき野のしら玉つはき君かへむ八千世の
數に生そしぬらん

天暦十年五月芳子女御御歌合

同夏　清涼殿女御

宮木野にけふ咲初るなてしこはならはぬ色
そ人や見るらん

旅宿蟲

同萱　後徳大寺左大臣

みやきのゝ萱か根になくきり〳〵すなれも
旅寝や露けかるらん

建保三年社十首歌合秋歌

同　定家卿
袖ぬらすしのふもちすりたか爲にみたれて
もろきみや木のゝ露
最勝四天王院歌合

同　如願法師
みやきのゝうつろふはきに足引の山たちな
らし鹿そ鳴なる
家集

同　元眞
宮城野の枝を分てもしら露はをもきやなひ
く萩の白糸
長治元年五月季廣朝臣歌合

同　大江盛佐
みやき野や尋て來つる藤はかましるくも匂
ふ夕間暮かな
家隆之眞葛(マクズ)女御之瞿麥(ナデシコ)後徳大寺之蛩聲
盛佐之藤袴(フチハカマ)皆此原野之實事也可愛可玩

宮城野

拾玉　慈鎮
みやき野の秋におくこそしられぬれ萩の哀
を霧にのこして
安元元年右大臣家歌合初雪

夫木冬　藤原基輔朝臣
めつらしやけさ初雪にみや木のゝ萩の古枝
に花咲にけり
百首歌

同　寂蓮法師
きゝすなく宮城か原のかすめるは花見る秋
はさもあらはあれ
百首歌合原露

同 狩獵　従二位家隆卿
眞萩咲みや木か原の白露を朝ふますらん狩
人そうき
光明峯寺入道攝政家歌合野逕早秋

同

初花のひと花すりの旅衣露けき物は宮城野の原

文治八年歌合

同　皇大后宮太夫俊成

露しけき宮城か原の萩盛錦のうへに玉そちりける

瞻彼薄兮零露瀼々于萩花上而釆此之錦上之散玉可謂奇巧能寫其情来者也庾帝之所謂露凝千片玉者暗彷彿乎哉

正治二年百首

同

秋萩の下葉の露も色つきてうつらなくなり宮城野の原

寳治十年歌合野外雪

同　山階入道左大臣

白雪の古枝のこはきけさ見れはあらぬ花咲みや木のヽ原

藏玉集此はきみやき野にありと云云

藻鹽草　西行法師

みや木のヽ露も色ある古枝草ことしの秋も花咲にけり

源氏桐壺月日にそへていとしのひかたきはわりなきわさになんいはけなき人もいかにとおもひやりつヽもろともにはくヽまぬおほつかなさをいまはなほ昔のかたみになすらへて物し給へなとこまやかにかヽせ給へり

宮木のヽ露吹むすふ風の音に小萩か本をおもひこそやれ

東屋いてや心はせのほときおもへは人ともおほへすいてきみはいとこよなかりけるになにことといひゐたるそとつふやかるれといとこヽちなけなるさまはさすかに

したらねはいかゝいふとてこゝろみに

浮舟

しめゆひしこはきかうへも迷はぬにいかなる露にうつる下葉そ

とあるか少将はいとおしく覺えて

少將

宮城野の小萩か本としらませは露も心をわかすそあらまし

無名抄爲仲みやき野の萩ほりてのほる事

爲仲任はてゝのほりける時宮城野の萩をほりて長櫃十二合に入て持てのほりければ人あまねくきゝて京へ入ける日は二條大路に是を見ものにして人おほく集りて車なともあまた立たりけるとそ

夫言於世上之常則富貴人之所願故於嫌疑之間暗空之中必有犯之者雖伏波之賢得讒于眞珠雖王密之才所紀于四知皆所以不避嫌不顧欺之臻茲也如蘇章擧正于二天包極無犯于家賊去可埋清日之行也惟如元將伯顏擔頭不帶江南物只挿梅花一兩枝之言章匪性行之深又風流之高致也如今爲仲之於萩根與彼老將之優何以爲兼之哉謝秩之雅趣千載之美談也

木下喬林

同村有平林林中建白山權現午頭天王神祠善逝閣古木老樹森森相圍翠松靑杉鬱鬱相交其中辛夷單櫻殊多千葉絲綸者亦數十株春時開花于綠林之間裊香于紅靄之中望之遠則濃淡壘堆雲淺深飄素練此時遊人過客不可不乘幽興而發雅懷焉古歌多有詠鹿鳴者想夫往昔林深樹茂蓊鬱蕭條且夫人居遠來往稀故自爲群今也近于治府迫于寺院蒭蕘常往經過尤多剏又林下蹊潤無處藏斑紋故今也亡矣雖然暮春盛夏綠陰蒙密林下墜露依舊今亦如雨

あつま歌のうちみちのく歌

古今大歌所御歌

みさふらいみかさと申せみやきのゝ木の下
露は雨にまされり

右古歌實寫得土地重陰林下幽暗而盡之
今毎經樹下葉雨瀼々墜露濕衣屢追憶此
吟情者多千載之識歌也

新勅撰雜四　平　政村

宮城野の木の下ふかき夕露もなみたに増る
秋はなからん

萩をよませ給うける

續拾遺秋上　太上天皇

みやきのゝ木のした露も色みえて移りそ増
る秋萩の花

新後拾遺秋上　前參議雅有

みやき野の木の下露に立ぬれていく夜か鹿
の妻を戀らん

玉葉秋上　大宰權帥爲經

秋萩の花咲しより宮木のゝ木の下露のをか
ぬ日そなき

露をよみ侍りける

同　夫木　源清兼朝臣

置餘る木の下露や染つらん下葉うつろふみ
や木のゝ原

正治百首歌たてまつりたる時

續後拾遺秋上　正三位季經

宮城野の小萩をわけてゆく水や木の下露の
なかれなるらん

同　春宮太夫公資

すむ月の影をはよそにみや木のゝ木の下か
くれ鹿や鳴らむ

同　平　貞宣

みやき野の木の下露やこほるらん萩の古枝
に結ふ朝霜

百首歌奉りし時さみたれ

新千載夏　中務卿宗尊親王

露にたに御笠といひし宮木のゝ木の下くらき五月雨のころ

能寫得木下夏雨之景氣尤奇巧

新拾遺秋上　法印定爲

萩か花折てもゆかむみやきのゝ木の下かせにちらまくもおし

同雜上　雅成親王

みやき野の木の下露や落つらん草葉にあまる秋のよの月

新續古今戀二　前參議雅有

日影にそ御笠もとらん宮城のゝぬれて冷敷露の木のしたた

同秋上　從二位家尹

夕霧もたつみやきのゝ秋萩は木の下やみの錦なりけり

同別　藤原長能

別るゝも留るもおなし宮城のゝ木の下露に笠もとりあへす

治承題百首旅部

月清集　後京極

宮城のゝ木の下草に宿かりて鹿なく床に秋かせそふく

五十首和歌野子規

拾遺愚草　定家

みやきのゝ木の下露にほとゝきすぬれてや來つる涙かるとて

草庵集　頓阿法師

みやきのゝ木の下晴にとふ螢露にまさりて影そみたるゝ

夫木　人丸

女郎花

手にとれは袖さへ匂ふ女郎花木の下露にち

らまくもおし

定家之杜鵑頓阿之飛螢人丸之女郎花今

猶往日但女郎花尤多見之

白山神祠

在善逝堂東林中白山乃神書曰伊弉諾尊至伊弉册尊所曰吾當留此國不可共去時菊理媛命有白事伊弉諾尊聞而善之乃散去啓蒙曰白山姫神社在加賀國石川郡一宮記曰伊弉並尊也上社菊理姫改曆曰靈龜二年丙辰顯形云我當山地主伊弉並垂跡也又左峯老翁現云吾白山輔佐也稱小白山又右峯老翁現云吾白山弼也即大己貴垂跡也不詳自何代祭于此地也

或曰此所非祭白山焉往時祭志波彦神之地也後人不察令鄕俗失神號焉夫志波彦神者宮城之大社所以國主重之州人崇之也考之古書源重之奥州刺史有三月赴任國之祭祀而遇雪之歌見于本集小鶴詠想夫刺史當必關其大社之祭禮職也因茲似冒雪而往是乃祭其神之證也矧又如今鄕老傳神號稱焉白山乃波多彦神社也是誤其文字併失其神名者是亦其證也

此神祠以三月三日而行祭禮浮屠徒奉之神人從焉先是二月二十五日騎射華會的司堀江氏世掌此事宅而享魚鳥饌日之潔齋會自是相共之東溟濱日之濱齋各浴潮水還直入馬場本僧舍名俗曰之齋屋坊舍豫齋戒三日午時國分寺僧徒學頭院主別當率二十四坊而讀經于白山拜殿神人舞踏于社前然後有流鏑馬五番此祭禮也古來地主國分氏司之依舊例而其故家遺族臣勤之國俗曰之國分士其次列森田北目鶴谷三氏世預之鶴氏相繼精騎射此日每每驚人其體勢也襯女衣而表素袍戴組檜笠佩鹿皮行縢携彤弓而乘駿馬古所謂羽獵之舊制日之狩裝束者是也設的以割檜板並之以竹挿之于拜殿以南的司堀江氏立于此射徒並馬于社畔擊太鼓而待其招的司相窺揮揚金扇

而麾之於是急鼓聲而進馬馬奔馳如飛射徒發矢去（其二騎亦如先騎）乃舉其的而投衆群稠人之中名取宮城兩郡農夫預結黨作隊而期輸贏焉此時也一直逞膂力一味出心肝而爭之南北也所以因勝負而驗其年租之豐凶而自古之例也此義畢僧徒神人至于善逝拜殿有太平樂（僧徒着戎衣取白刃而舞）龍王納蘇里（神人被假面而舞）等舞踏自是其徒巡行堂上而畢之斯日也州人爲群尤夥堂下社邊商賈成市男女如堵時暖藹融融彩霞簇簇樹間之白櫻林中之辛夷尤可愛野外拾翠原上踏青者殆踵相望晚來家家扶得醉人歸

祇園小祠

在白山社南鄉人曰之天王役徒萬藏院者司之夏六月十五日祭之

善逝堂

在白山社西未詳何人經始內殿置藥師脇持菩薩及十二神將相傳俱是運慶之作但本尊乃閻浮檀金故蔽帳秘而不發有二王門其像亦前作同形質勢威生意如神慶長九年甲辰黄門君造改宮社堂宇令新野宮內左衛門元茂白石縫殿介重佐監之梓人泉州比根人駿河家次鍛冶島田惣八郎家繼勤之十二年丁未秋八月十四日落成令國分彥九郎盛重主其事如今往昔舊廟敗社古瓦遺礎往往猶有焉（古瓦其制高古點綴其表細布其裡好事之徒彫而硯之）

國分寺

建三宇以備之號金光明四天王護國山國分寺學頭（其寺在白山東）院主（在學頭南）別當（在善逝堂西南）俱勤寺務其屬坊舍有二十四區逐年巡勤祭祀事相傳聖武帝天平年中詔每州所建之一也其後鎮守將軍藤秀衡甚好佛法建寺觀僧房頗極壯麗設長堂廻廊而及尼寺後傾倒荒廢剏又其間及兵燹等災乎

和漢合運曰四十五代聖武帝天平九年丁丑每

州建國分寺又十一年始建每州國分尼寺（不見續日本紀）

續日本紀聖武帝天平三年辛未三月丁丑詔曰每國令造釋迦像一軀挾持菩薩二軀兼寫大般經若一部

又曰同十三年辛巳正月丁酉故太政大臣藤原朝臣家返上食封五千石二千戸依舊返賜其家三千戸施入諸國國分寺以充造丈六佛像之料乙巳詔曰朕以薄德忝承重任未弘政化寤寐多慚古之明主皆能先業國泰人樂災除福至修何政化能臻此道頃者年穀不豐疫癘頻至慚懼交集唯勞罪已是以廣爲蒼生遍求景福故前年馳驛增飾天下神宮（先是九年十一月癸酉遣使于畿內及七道令造諸社）去歲普令天下造釋迦牟尼佛尊金像高一丈六尺各一鋪幷寫大般若經各一部自今春已來至于秋稼風雨順序五穀豐穰此乃徵誠啓願靈貺如荅載惶載恐以自寧案經云若有國王講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我等四王常來擁護一切災障皆使消殄憂愁疾疫亦令除差所願遂心恒生歡喜者宜令天下諸國各敬造七重塔一區幷寫金光明最勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明最勝王經每塔各令置一部所冀聖法之盛與天地而永流擁護之恩被幽明而恒滿其造塔之寺兼爲國花必擇好處實可長久近人則不欲薰臭所及遠人則不欲勞衆歸集國司等各宜務在嚴飾兼盡潔清近感諸天庶幾臨護布告遐邇令知朕意

又每國僧寺施封五十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名爲金光明四天王護國之寺一十尼其寺名爲法華滅罪之寺兩寺相去宜受教戒若有闕者卽須補滿其僧尼每月八日必應轉讀最勝王經每至月半誦戒羯磨每月六齋日公私不得漁獵殺生國司等宜恒加檢校

夫先王之於國家厚施仁政薄致稅斂則民人親於上而社稷亦自安今帝以未弘政化寤寐慚古之明王以年穀不豐疫癘頻至慚懼交勞罪己是可謂善端之發也然則常恐懼修省以隨乎天理應乎人望之政自然天地位萬物育矣何妄詔于天下或造無用之佛像或寫無稽之僞經以爲因茲風雨順序五穀豐穰此乃徼誠啓願靈貺如荅且令天下諸國各造七重塔及寫光明最勝法華經等剃俾男女浮圖混合雜居紊人倫敗世道之大弊莫大焉實可歎哉況亦後世妄讀此詔則或啓時君佞佛而廢道懷利而求福大費財賊人之心仍論其義于此云

或難曰如今細讀其記詳考其事此時帝之於天下徒非傾心于浮屠費財于塔宇焉於神明之義亦用其心竭其力以致至誠故馳驛增衛天下之神社者亦至矣豈偏以此非義之哉曰帝之崇神元我國之社稷宗廟是其職分之所當爲矣以此細事而許心術之大者耶其舉也是則是未歸其至當焉想夫其衷誠實出於眞實無妄而爲蒼生求其多福則可若其心不在茲却出於逞其所好快其所欲則豈非私意之尤者耶今視其迹造佛像已及丈六且置僧尼維多縱令造像設僧豈期其大望其衆哉無厭之機於是乎可視末幾廢帝朝作丈六彌陀於列國後世之天子諸侯守護州牧及士庶人自是旋至造立數宇之堂舍而不惜財用供養巨萬之僧徒不慊于心志者於此爲大其濫觴焉其作俑亦發于此無厭之害可不愼耶

又曰四十六代孝謙帝天平寶字二年戊戌七月戊戌勅爲令朝廷安寧天下太平國別奉寫金剛般若經三十卷安置國分僧寺二十卷尼寺十卷恒副金光最勝王經並轉讀

又曰四十七代廢帝三年（乃天平寶字四年庚子七月）七月癸

并設皇太后七七齋於東大寺並京師諸小寺其天下諸國毎國奉造阿彌陀淨土畫像乃計國内見僧尼寫稱讃淨土經各於國分金光明寺禮拜供養

又曰同天平寶字五年辛丑六月庚申爲設皇太后周忌齋令天下諸國各於國分尼寺奉造阿彌陀丈六像一軀脇持菩薩像二軀

又曰五十代桓武帝延曆元年壬戌十二月壬子勅太上天皇周忌御齋當今月二十三日宜令天下諸國國分尼寺見僧尼奉爲誦經焉

按舊記正史説如此問之寺僧則無釋伽及阿彌陀七重塔失金光明等號又不讀最勝王經法華經等恒以仁王經藥師經轉讀焉且寺僧自誇説于人曰我山之善逝廼聖武帝之遺賜也未知丈六佛像及往時之勅旨其無智妄誕之甚實可嘆哉

尼寺

在國分寺以東據合運而考之則天平十一年己卯所置也如今半荒廢宗旨亦改爲曹洞

續日本紀曰聖武帝天平十三年正月乙巳詔其寺名法華滅罪寺二十尼毎月八日必轉讀最勝王經

又曰四十六代孝謙帝天平寶字三年七月戊戌勅置金剛般若經十卷

又曰五年六月庚申爲設皇大后周忌齋奉造阿彌陀丈六像脇持菩薩像二軀

又曰五十代桓武帝延曆元年十二月壬子勅太上皇周忌齋爲誦經焉

本荒郷（モトアラノ）

其地不分明以宗久紀行考之則蓋尼寺畔以北

宗久紀行曰宮城野の木の下露も誠に笠もとりあへぬほとなり花の色々にしきをしけるとみゆ中にも本荒の里といふ所に色なそもほかにはことなる花のありしを一

枝おりて
宮木のゝ萩の名にたつ本荒の里はいつより
荒はしめけむ
とおもひつゝけ侍し此所はむかしは人の侍りけるをいまはさなから野原山にて草堂一宇の外は見へす此はなを古へは散をや人のおしみけんとあはれに思ひやられ侍りき抑もとあらの萩とは春やきのこしたる去年の古枝に咲たるをいふなりと聞置侍るそれを木萩と申侍なり是は枝さしなともなへての萩よりはこは〳〵敷あはらなるにや本荒のさくらなとよみて侍れはと思ひ侍りしにいまきゝ侍れはもし此さとの名によそへてもやよみけんとはしめて思ひ合侍り

按宗久經過其地而親所見本荒之說如此然則自古昔爲地名者可識也然搢紳之徒和歌者流以未履其地不詳其名或泥本跡之櫻舊根之說而失爲其鄉名乎仍擧古歌若干而姑證其說焉識者辨之

古今戀四　よみ人しらす

みやきのゝ本あらのこはき露をおもみ風を
待こと君をこそまて

後拾遺秋上　藤原長能

宮城野に妻よふ鹿そさそふなる本荒の萩に
露や寒けき

新古今雜上　祝部允仲

しら露はをきにけらしなみやきのゝ本あら
の小萩末たはむまて

新勅撰秋上　祐子内親王家小辨

さをしかの聲聞ゆなりみやきのゝ本あらの
小萩花盛りかも

續拾遺秋上　從三位忠兼

野鹿といへるこゝろを

宮城野の本荒の小萩今よりやうつろふ色に
鹿のなくらん

秋の歌の中に

續後拾遺　よみ人しらす

けふこすは悔しからまし宮城野の本荒の小
萩花そうつろふ

新千載秋上　彈正尹邦定親王

露なから折へき物を宮木のゝ本荒の萩に秋
風そふく

題しらす

新後拾遺秋上　従三位嚴子

宮城のゝしからむ鹿のあとなれや本荒の小
萩露もたまらす

藤原長能

ぬれ〳〵て秋は又見むみやきのゝ本荒の萩
やしほれしぬらむ

建保三年名所障子

夫木集　僧正行意

みや木のゝ本荒の小萩下おれて葉のほる露
にやとる月影

句題五十首月前花

月清集　後京極

古郷の本荒の小萩咲しより夜な〳〵庭の月
そうつろふ

詠花鳥和歌十二首鹿鳴草

拾遺愚草　定家

秋たけぬいかなる色もふくかせにやかてう
つろふ本荒のはき

水無瀬殿にて講せられし秋十首の歌

同

宮き野は本荒のはきのしけゝれは玉ぬきと
めぬ秋風そふく

仁和寺宮五十首歌秋部

同

さとはあれて時そともなき庭の面も本荒の
小萩秋は見へけり
按京極黄門二首彷彿詠郷名之意其他共
徒讀本荒之義而不干渉里名焉可惜哉下
好忠歌專爲燒痕之萩
家集宮城野 陸奥

夫木　曾根好忠
見やきのゝ燒野の萩の下葉よりもとあらに
さかん花をまつかな
六百番歌合朝戀

同　定家卿
かせつらき本荒の小萩袖に見て暮ゆく空に
おもる白露
元承元年内大臣家奥州名所歌合 宮城野

同　藤原忠房
宮木野の本荒の小萩霜枯てしつのしのやも
かくれなきかな

按奥州名所歌合者想夫方物之雅宴地理
之證蹟也可謂東奥勝地便覽之一珍書也
惜乎哉如今不傳于世焉
建保三年内裡にて秋の歌よみ侍りしに

家詠藻　家隆
鳴わたる鴈のなみたをこきませて本荒の萩
に秋風そふく
住吉にて隆祐か會に

同
みやきのゝ本荒の小萩根にちらしをきぬる
露よ人に折すな

夫木　師時
時しあれは花咲にけり宮木のゝ本荒の小萩
枝もたはゝに

宮千代墓
郷人言木下東北五六町往昔有荒墳其遺蹤也
塚上生花草稱花紫青葉紫莖初秋著花其花如

豆花其色紅紫如糾繩相似相傳往昔松島寺有少年曰宮千代容色艶冶有才而貴重後死于此野焉里人哀之爲一堆塚葬子牧童毎過墓畔聞塚底有人語吟聲最哀怪怖告之人往窺之則果誦和歌前聯曰月者露露者草葉耳寓假里天吟畢而大息復有嗟嘆之聲聞人或恐怖或墮涙焉後松島寺僧徹翁者往足下聯弔幽魂曰其古會夫與宮城野乃原自是鬼吟熄行路無恙

按宮千代元松島寺喝食御島有經歷之遺蹤

昔信州有寺寒夜寂寥霜月照窓緇素相集不堪幽閑設歌會有一少年得歌句苦吟已久傍人問之曰得下句未及上聯吟曰今宵乃月者空耳故曾阿禮衆難曰月本在于天奚亦墮地乎年少赧然發赤色自經死于房内爾來幽魂屢誦之悲吟愴々但有其聲而不見其人聞者膚生粟魂爲搖夜々哀吟不絶寺中怖畏殊甚遂發瘧之死者相繼遂爲廢寺自是夜雲之羃々腥風之淅々鬼必出且泣且吟近郷無行客古路絶人蹤有偶過其地聽悲吟者其人不畏鬼物相向問之鬼曰我素無害人之意得其人而庶成之則足慰之故屢出爲悲吟哀誦以俟其人然無敢向我而弔其愁恨幸得子也請足成之以慰吾鬱結焉客又知倭歌乃庶上聯曰池水乃上者氷丹鎖羅連帝於是鬼謝客曰今夜遇君以適吾願遂失其顔也與宮千代事相似妄誕奇怪不足言之且坐客難月在空誦唐鮑溶詩明月在天將鳳管者亦難之耶

太平廣記曰鄭郊路逢一塚爲詩曰
塚上兩竿竹風吹常裊々塚中人庶曰下有百年人常眠不知曉此亦同日之談也

西陽雜俎曰寒食月夜人見於楚吟詩云
流水涓々芹發芽織烏雙飛客還家荒村無人作寒食殯宮空對棠梨花是則鬼詩

玉田横野

在小俵村東照神廟東北山間有湖水稱玉田湖自是以東山下稱横野而爲兩地郷俗曰其地安養寺住昔寺蹤也舊說見于下

歌枕　　　　　　　　　俊頼朝臣

とりつなけ玉田横野のはなれ駒つゝしか岡にあせみ花さく

藻鹽草馬醉木部つゝしましりにあせみ花さく此歌も馬醉のこゝろか

名寄歌枕曰右歌玉田横野在河内國山榴岡亦彼所在之歟可詳俊頼歌乃收之奥州

堀河百首註に玉田横野は津の國にありその野にあせのつゝしともに有共に馬の毒なりよつてとりつなけと云也

又堀河百首にむつゝしのけたにあせみ花咲と有註に或人云交友には方ある事なかれと云本文有私云方の字けたとよめり又非のけたなとには井幹と書なり幹此字を草木にては枝とよむ也又田舍語にかたはらをけたと申事有或人云俊頼集には榴岡といへりそれは河内國にあり又云つゝし變してあせみとなると也躑躅と書ふしまろふとよむ

藻鹽草九馬醉木註云馬食此草則死云馬醉木

按萬葉集以馬醉木而訓躑躅大來皇女哀傷歌磯之於示生流馬醉木乎手折目杼令視倍吉君之在常不言示馬醉木之和訓乃都都滋也是其證也如今世曰馬醉木者其葉似榕而綠色花純白而如藤花相連垂莖榴字本非躑躅乃海石榴也訓坐久路躑躅乃映山紅唐張籍寄季渤詩五渡溪頭躑躅紅者是也本草躑躅即杜鵑花羊食則死見之躑躅以此得名以此等事而索合馬醉之義乎如前說躑躅變而爲馬醉木之言亦不

可ㇾ曉

色葉集曰或書云玉田横野とは所の名也津の國の玉田といふ所に横野といふ野有其野あせみおほかりつゝしのけたにあせみ花咲とはつゝしの古き根はあせみといふ木になる也あせみは馬の毒也又つゝしも馬の毒也躑躅と書ゆへは馬のくゐては腹をやみて臥まろふ事有故にいふ事也躑をはふしとよみ躅はまろふとよむなりと云云或人云交友には方有事なかれといふ本文ありけたとはそはといふ事也されはつつしのそはといふへき也と云云或人云此歌は俊頼集にはつゝしの岡と有河内國にある岡なり玉田横野も其國歟躑躅は立もとをる也馬水木とかきてあせみともつゝしともよめり馬の毒羊の毒なれは取つなけとはよめる也ふしまろふといふ義はひか事なり又傍の字をけたとよめりかたはらをも田舎にはけたと云詞有されともつゝしの岡と書たれはけたの詞無ㇾ益歟云云

建久八年歌合

信實朝臣

山陰に心はかりは春の色のつゝしのけたに花咲にけり

判者知家卿云つゝしのけたみこそ耳遠く侍れ或書にはつゝしの古根にあせみおもふと申せは又つゝしのけはといふ義も侍るとかや何にても風體あなかちの秀逸にあらさるにや又けたみこそおほつかなく侍れけたにも知て侍けり僻事にて侍けるとこそと云云

多湖浦島（郷俗作ニ田子ー今據ニ藻鹽草ー同名多駿河爲ニ田兒ー越中爲ニ多祜ー其出ニ萬葉ー）

在ニ福田以北ー俗曰ニ田子村ー以ㇾ産ニ好蹲鴟ー而一國稱ㇾ之古往不ㇾ詳ニ江浦島嶼之地ー今見野田村落ー而已相傳頼朝東征之日次ニ軍于茲ー東史遂日記宿次

而不及其地尤可疑
一字抄　藻鹽草五
夫木二十三　よみ人しらす
あまた度君か心をみちのくの多湖の浦島うらみてそふる

小鶴湖（コツルカイケ）
在小鶴村往年有大湖相傳多賀城下有富家極貪婪有一妾婦謂小鶴子有容色主家待之甚刻迫更無慈愛之意一日俾小鶴立苗田畝頗大負子概種焉不遑乳之遂令背後幼兒飢死（其田畝今在利府以北春日社邊田中有小丘乃埋其死兒之地也）爾後不堪其訶責亦投身于此湖水死焉鄕人曰之小鶴湖近年水涸而爲野田寔可惜哉仍遺名于村落耳
三月はかりにみちの國にまつりにゆく程に雪にこうしたるかこなたを小鶴の池を過るにや爰はいつくそといへは小鶴の堤といへは心やりによめといへは
源重之集　むねちか
千世をすむ小鶴の池しかはらねはおやのよはひをおもひこそやれ
同　ちゝ
千とせをはひなにてのみや過しけむ子鶴の池といひて久しき
按重之爲奧州刺史此記三月過祭祀于雪而過此池畔此地三月之祭祀無所考于他蓋木下之祭禮乎其祭時也蓋祭志波彦社者乎此神乃宮城之大社爲刺史者豈宛然外其祭事哉斯時重之須在于多賀城中仍欲徒雪而之于木下焉路必經過于池畔者也
按編和漢三才集者以爲在行方郡想夫彼亦有受而記之乎然則此邊乃古之行方（ナメカタ）地乎未詳其所焉

與井（ヨノヰ）　據小町歌則當作孀井字

未詳其地相傳同郡八幡農家中有小池池中奇石礧々佳狀可愛州人古來稱曰興石奇絶如盆池池中乾隅有水脈而出是乃興井也俗子以爲二條院讃岐沖石詠則指此石者也不知以湖水濕海石難乾而比之愁人涙袖之語也 歌見都島下

興井郷

八雲御抄有興井郷未詳其地蓋指此村落乎又文字或作起居郷其義則取愁人不眠之意然夫木集以起居之歌而混爲興井里之作註其下曰興井里乃陸奥也文字亦相通和訓亦相通不知同所而異其字同其訓者乎唯編松葉集者分爲別所未詳其是非焉以同訓而姑擧之興井里下但於呼其名也興井則上下之間加之字起居則去之字其相別也如此不可不辨焉

家五十首　　従二位範家郷

夫木集下同

ほとゝきす起居のさとは過ぬなりいかなる人のゆめ結らん

九月十三夜十首歌里月　おきの井里陸奥

同　　第三のみこ

夜もすから袂につとふしら露のおき井の里に月を見る哉

同　　藤　教　純

しつの女は月におきゐの里とをみ追かせしるく衣うつらん

正治二年百首御歌

同　　第二のみこ

衣うつきぬたの音をしるへにておきゐの里を尋つるかな

以歌意考之則倶是起居字當其義而會無興字義矣然則爲別所分明也決當取起居之義矣興字亦據小町歌而當作織井於興字會無干渉也十三夜下註加之字者非是

都島

未詳其地或曰桃生郡宮戸島是也島上景致絶勝比之京師之華靡且宮戸都音相近故誤其稱呼戸音許俗人合訓音而呼宮戸直爲皇都後人不察誤所以訓美也登者也或曰其說非也其島畔別有稱皇都者鄉人誇言往古此佳島奉勅蒙美名者也仍有皇都島名是亦不足取焉以小町歌考之則熾井都島元一所而豈異其地哉熾井以八幡地爲是則此島奚隔數十程耶且夫熾井則宮城也都島則桃生而間海岸不合古歌事實豈夫然耶然則八幡名蹟池爲熾井石爲都島而似無障礙矣識者辨之

むかし陸奥國にて男女ありけりおとこ都へいなんといふ此をんないとかなしうて馬のはなむけせんとておきの井みやこしまといふ所にてさけのませてよめる

小　町

おきの井て身をやくよりも悲しきはみやこ島へのわかれ成ける

右歌及詞書見伊勢物語第百十五又古今集爲小町作

弘長三年中務卿親王家百首

夫木島部　權僧正公朝

わかれ路に身をやくおきの數そへて都島邊に飛ほたる哉

八幡古館

在八幡村伊澤四郎家景家臣八幡兵庫居館也

末松山

八幡村中有寺曰末松山鄰障寺寺林有高丘丘上有青松數十株是往昔舊地而去海濱已十餘里遠望入波濤處笠神花淵大六天杳島諸山莒蒲田之江濱悉來于山頭古人所謂遠波江上之佳境得名于此地者可觀也能因法師歌枕有本中末三松之說或曰以岩切爲本松以八幡爲末松未詳中松之地據此說則岩切松樹可推識風

土記曰末松山在八幡之南其山三峯而嶺上三松秀出自島之地市川之道見之則嶺上之三峡白波浩浩以爲奇観

島之地不可曉按今據三松秀出之説則本中末名非別所乃就此地而當分三株之名市川之於地名亦考于此則知自來之久也

歌林良栽曰昔男女のありけるか末の松山をさしてかの山に浪のこえなむ時に忘るへきと契けるか程なくしてこと心付てけるにより人の心かはるをは浪こすといふ也彼山に誠に浪の越るにはあらすあなたの海の遙にのきたるに立波の彼松山の上より越るやうに見ゆるをあるへくもなき事なれは誠にあの浪のこえん時を心はかはるへしと契れる也能因歌枕に本の松中の松末の松とて三重に有ると云りされはにや山とはいはてたゝ末の松とよめる事も侍り

色葉集下

君を置てあたし心をわれもたは末の松山
浪もこえなん

あたし心とは他心なり萬葉には異意とかけり末の松山波踰るといふ事有むかし男有女に末の松山をさして彼山に浪の越えん時そ忘るへきと契りけるか程もなく忘れにけるより人の心のかはるをは浪こゆるといふ也彼山に實の浪のこゆるにはあらすあなたの海の遙にのきたるに立浪の此松山の上よりこゆるやうに見ゆるをあるへくもなき事なれはあの浪の山をこえん時忘れんと契る也

袖中抄顯昭云末の松山とは陸奥國にあり能因坤元儀には末の松山中の松山本の松山とて三重にありといへりまた或本には末の松中の松ともいへりされはにや唯末の松ともよめり

こえにける浪をはしらて末の松千よまて
とのみたのみける哉
或は只松山ともよめり
松山につらきなからも浪こさむことはさ
すかに悲しき物を
末の松山浪こすといふ事は昔男をんなに逢
て末の松山をさして彼山に浪のこえん時そ
こと心は有へきと誓ひたるより男も女もこ
とふるまひするをは末の松山波こすとよむ
也何事によりておもひかけす山の浪をこえ
ん事をはちかひけるそとおほつかなきにか
の山は遠くて見れは山よりあなたに浪のた
つか山より上に見こされて山をこゆると見
ゆるによりて誠の浪のこゆへきよしをちか
へるなめりあたし心を我かもたはとは異心
あるましき事をいふ也異をはあたしとよむ
也あたし國といふも異國也異國は他國なり
されは君をおきてこと心をもたはと云心也
奥義抄云彼山に浪のこえんする時そ忘るへ
きと契れりといへり今云忘るはかりにはあ
らすこと人にかよはし君は逢事も有ましと
云也心かはりて侍ける女に人にかはりて元
輔かよめる
契りきなかたみに袖をしほりつゝ末の松
山浪こさしとは
兼通朝臣のかれかたになりてとしこえてと
ふらひ侍けれは元平親王のむすめ
改玉の年もこえける松山の浪のこころは
いかゝなるらん
又男女の中ならてもよめり
浦ちかく降來る雪は白浪の末の松山こす
かとそ見る
是は寛平の御時后宮の歌合の歌也古今に入
れたり

いかにせむ末の松山浪こえて峰の白雪消
もこそすれ

是は匡房卿の雪の歌なり金葉に入る

君か代は末の松山はる〳〵とこす白波の
數もしられす

是は弘徽殿の女御歌合祝歌也入金葉但義忠の判云末の松山といへる歌の姿はいとおかしく敷島のやまと歌とは見へ侍れと男女の中いかにそやうらみ歌とおほへて祝のかたには聞えす侍れはこれもかれもわたつ海のかた〳〵に高瀬舟のさしてまされりとも申かたし一條大相國海橋立の亭歌合櫻左將德大寺左府

花盛末の松山かせふけはうす紅の浪そ立
ける

判者顯季卿云此櫻の歌こそ思ひ給へあつかひにたれまちかき櫻咲所は昔も今もあまたよみ來りたる所をさし置て花も讀來ぬ末の松山誠に思ひかけられ侍らすむねとまた松の花と見へたり薄紅といふ事はそのかみよみたりし後よりいまはよみ侍らすかた〳〵思ひかけられす

奥儀抄云

君をおきてあたし心を我もたは末の松山
浪やこえなむ

あたし心とは他心也君をおきてこと心をもたはとよめるなり萬葉には異意とかけり貫之歌にも

櫻よりまさる花なき花なれはあたし草木
は物ならなくに

とよめり末の松山浪こゆるといふことはむかしおとこ女に末の松山をさして彼山に浪のこえん時そ忘るへきと契けるか程なく忘れにけるより人の心かはるをは浪こゆると

云也かの山に實に浪のこゆるには非すあなたの海のはるかにのきたるには浪の彼松山の上よりこゆるやうに見ゆるをあるへくもなき事なれは誠にあの浪の山こえん時忘れんとは契也

藻鹽草云是はむかし男をんなに逢て末の松山をさしてかの山に浪のこえん時そことなる心は有へきとちかひけるより末の松山浪こすとよめる也是何事によりて思ひかけぬ山に浪のこえん事をは誓ひけるそとおほつかなきにかの山は遠くてみれは山よりあなたに海の浪の立か山より上にこされて山をこゆると見ゆるによりて誠の浪のこゆへきよしをちかへる也かの松山は末の松中の松本の松とて三あるといふ也

宗久紀行に陸奥國多賀の國府にもなりぬそれよりおくの細路といふかたを南さまに末の松山に尋行て松原こへに遙々と見渡せはけに浪こすやう也海士　釣舟ともさなから木末をわたると見ゆ

夕日さす末の松山霧はれて秋かせかよふ浪のうへかな

いまはとてもとの道へと心さし侍し程に又むさし野にもなりぬ爰にて思ひの外に都の人の敷島の道なと尋侍りしにゆきあひぬ其ほか昔しれる人ひとりふたりありしかは折から嬉しく覺へてやかて伴なひつつ堀兼の井爰かしこ見めくり侍しかは此たひの思ひ出なる心地そし侍りし素性法師かうつの山にて在中將に行逢けるもかくやとおもひやられ侍りきさても末の松山は特に名高き所なるをたゝひとり道ゆきふりに見すこさむもねむなきやうに侍しかは昔も長柄の橋のかなくつ井手の蛙のひほしをたにこそ持侍

へれ忘れかたみにもし侍らんと思ひしかは松の落葉なとかき集めて侍しかは中に松かさといふ物の有し又しほかまのうらにうつせ貝なとやうの物をひろひあつめて侍りしを此人にとり出して見せ侍りしかはかく申侍りし

　末の松山まつかさはきたれとも浪たにこさは又やぬれなん

返し

　浪こさぬ袖さへぬれぬ末の松山まつかさのかけの旅ねに

更に朽せぬ契のほとも思ひしられていとゝたひの衣手もしほたれまさり侍りしに又かのひと

　伴なはてひとりゆきけむしほ釜のうらのしほかひみるかひもなし

返し

　しほ釜のうらみもはてぬ昔か爲ひろふしほかひかひやなからん

　按ニ末松山ノ松子(マツカサ)鹽釜ノ貝殻(ウツセカイ)携レ之西歸實風雅好事之産也

古今冬　　興風

うらちかく降くる雪はしら浪の末の松山こすかとそ見る

同　大歌所御歌

君を置てあたし心を我もたはすゑの松山浪もこえなん

後撰戀一　　よみ人しらす

女のもとにつかはしける

いつしかと我まつ山に今はとてこゆなる浪にぬれぬ日そなき

同二　　土佐

をとこのもとにつかはしける

我袖は名にたつ末の松山の浦より浪のこえぬ日もなし

せうそこつかはしけるをんなの父ことことにつかはすと聞ておもひたへねといひをくり侍ける返事に

同三　贈太政大臣

松山につらきなからも浪こさむことはさすかに悲しきものを

題しらす

同　同

あちきなくなとか松山浪こさむことをはさらにおもひはなるゝ

返し

同　伊勢

岸もなく汐しみちなは松山を下にて浪はこさむとそおもふ

かねみちの朝臣かれかたになりて年こえてとふらひて侍ければ

元平のみこの女

改玉の年は越ぬる松山の浪の心はいかゝなるらん

土佐かもとよりせうそこ侍ける返事につかはしける

同五　さたもとのみこ

ふかみとりそめけむ枝のゑにしあれは薄き袖にも浪はよせてん

返し

土佐

松山の末こす浪のゑにしあらは君か袖にはあともとまらし

わかうちかひに人の物いふときゝて

同六　藤原守文

松山に浪たかきねそ聞ゆなる我よりこゆる人はあらしな

源頼清朝臣みちの國はてゝ又肥後守にな
りてくたり侍りけるを出立の所にたれと
もなくてさしおかせて侍りける

後拾遺別　相撲

たひ〳〵の千世を遙に君や見ん末の松より
いきの松まて

しのひてかよふ女の又こと人に物いふと
きゝてつかはしける

同戀二　藤原能通

こえにける浪をはしらて末の松千世まてと
のみたのみつる哉

こゝろかはり侍けるをんなに人にかはり
て

同四　藤原元輔

契きなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪
こさしとは

後一條院御時弘徽殿女御歌合に祝のこゝ
ろをよめる

金葉賀　永盛法師

君か代は末の松やまはる〳〵とこすしら浪
のかすもしられす

百首歌の中に雪のこゝろをよめる

同冬　大藏卿匡房

いかにせむすゑのまつ山浪こさは峰のはつ
雪消もこそすれ

松風秋近といへるこゝろをよめる

千載夏　藤原親盛

秋風は浪とともにやこえぬらんまたき涼し
き末の松やま

攝政太政大臣家百首歌合に春曙といふこ
ゝろをよみ侍ける

新古今春上　藤原家隆

かすみ立末の松山ほのほのと浪にはなるゝ
横雲のそら

土御門内大臣家にて海邊歳暮といへる心
をよめる

同冬　寂蓮法師

老の浪こえける身こそあはれなれことしも
いまは末のまつ山

百首歌奉し時旅の歌

同旅　藤原家隆朝臣

ふる郷にたのめし人も末の松まつらむそて
に浪やこすらん

八月十五夜和歌所にて月前戀といふこと
を

同戀四　藤原定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こす浪にの
こる月かけ

橘爲仲朝臣陸奥國に侍ける時歌あまたつ
かはしける中に

同雜上　加賀左衛門

しら浪のこゆらんすゑの松山は花とや見ゆ
る春の夜の月

新勅撰戀二　源家長

いたつらにいく年浪のこえぬらんたのめは
おかし末の松やま

同旅四　藤原清輔

古郷の人に見せはやしら浪のきしよりこゆ
るすゑの松山

をんなにつかはしける

續後撰戀二　源信明朝臣

うしとおもふこゝろのこゆる松山はたのめ
しかひもなく成にけり

返し　中務

同

秋といへと色もかはらぬ松山は立とも浪の
こえん物かは

同　俊成

浪こさはうらみむとこそ契しかいかゝなりゆく末のまつやま

同　　祐子内親王家紀伊

あた浪を君こそこさめ年ふとも我松山は色もかはらし

同　　按察使朝光

つかさめしの頃おもふことおほくて同し心になけきける人のもとにつかはしける

同雑中

松山のこなたかなたに浪こえてしほるはかりにぬるゝ袖かな

返し

同　　左近大将濟時

おもはしとおもふ物から松山の末こす浪に袖はぬれつゝ

人の心かはりて侍ける頃綸に松山の浪こえたるをよみていひ侍ける

續古今戀四　　伊勢

松かけてたのめしことはなけれとも浪のこゆるは猶そ悲しき

續拾遺春下　　慈鎭和尚

すゑの松山も霞の絶間より花の浪こす春はきにけり

同　　爲家

いつはりの花とそ見ゆる松山の木末をこえてかゝる藤なみ

同戀五　　春宮太夫實兼

行年のむなしき袖は浪こえて契りし末のまつかひそなき

同　　太上天皇

おもひあまる袖にも浪はこえにけり嵐にかはる末の松やま

同　　九條左大臣

逢事はかけてもいはしあた浪のこゆるにやすき末の松やま

同　大納言典侍（後嵯峨院）
浪こさはいかにせむとはたのみけんつらき
なからの末の松山
同雜上　右衛門督忠基
いかにせむ我身にこゆる白浪の末の松やま
まつかひもなし
新後撰戀三　爲氏
代ゝかけて浪こさしとは契るともいさや心
のすゑの松やま
百雜中　民部卿資宣
憂にたに絶てつれなき末の松こゆる浪をも
えこそ恨みね
續千載戀五　信實
末の松あたし心のゆふ汐にわか身をうらと
浪そこえぬる
同　兵部卿元良親王
いつしかと我松山の今はとてこゆなるなみ
にぬるゝそてかな
光俊朝臣すゝめける百首歌に
同　爲氏
忘れしと契りし中の末の松たかつらさにか
なみはこゆらん
續後拾遺戀三　相摸
いつとなく浪のかくれは末の松かはらぬ色
をえこそたのまね
鎌倉右大臣
いかにせむいのちもしらす松山のうへこす
浪にくちぬおもひは
風雅雜下　法印延全
七十の年波こえて今は身のなにをかすゑの
まつことにせむ
藤原顯仲朝臣家十首歌よみ侍ける
新千載春上　源俊頼朝臣
いつしかと末の松山かすめるは浪とともに

や春の立らむ

同　　大江行光

しれかしなかはる契りのすゑの松袖に浪こす恨ありとは

同雑中　　大納言朝光

思はしとおもひなからも松山の末こそ波にぬれつゝそふる

同春下　　従一位宣子

末の松咲こす藤の浪の間にまたや彌生の春もくれなむ

同秋下　　有家朝臣

末の松まつ夜更行空晴て浪より出る山の端の月

同冬　　入道二品親王道助

哀又すゑの松山六十にもをくるゝ年のこえんとすらん

同別　　女御淑子女王

今よりはたゝ行末の松かせをよその事とやおもひなしてむ

同戀四　　従二位嚴子

今こむと契りしなみもはやこえぬうき僞のすゑの松山

同　　津守國助

こえぬなり末の松山末つゐにかねて思ひし人のあたなみ

新續古今春上　　土御門入道前内大臣

春やまつなみより先に立ぬらん霞もこゆるすゑのまつやま

同　　正三位知家

いまは又春のなかめも末の松名殘ありあけの山の端の月

同　　中宮太夫公宗母

今はとてこゆらむ方も白波の跡なき春のすゑの松やま

同冬　欣子内親王
遙〳〵とおもひし年の末の松老のなみこそ
やすくこえけれ
同旅　百首歌奉りし時　權大納言實量
たひ衣立白波をよそに見て我そこえゆく末
のまつやま
同戀三　兼好法師
こぬ人を猶こりすまにまつ山は幾よなみこ
す契りなるらん
名所百首歌合下同　順德院御製
彌生もや末の松山春の色いまひとしほのな
みそこえける
同　定家
梓弓末のまつ山春はたゝけふまてかすむな
みのゆふくれ
同　夫木集建保四年　家隆
時わかす末の松山こすなみに花をわけても
かへるかりかね
長方
白波のこすかとそみる卯花のさけるかきね
や末の松やま
家隆
をのか妻なみこさしとや恨らむ末の松山を
しかなくなり
夫木　永久四年六月八條の入道太政大臣家歌合　後德大寺左大臣
花盛すゑの松山かせふけはうす紅のなみそ
立ける
同　俊賴朝臣
子規末の松山かせふけはなみこすくれに立
ゐなくなり
同　文治三年百首歌寄名所戀　定家

浪こさむ袖とは兼て思ひにき末の松山尋ね
見しより
承元三年長尾社歌合海邊雁
同春　權律師公猷
春もいまは末の松やまこすなみに霞をわけ
てかへる雁かね
承久四年四月鳥羽殿歌合卯花
同夏　大藏卿行宗
よそめには末の松山こすなみにみえまかひ
つゝさける卯の花
文治五年五社百首
同秋　皇大后宮太夫俊成
常よりも袖こそぬるれ末の松なみの下にや
鹿のなくらむ
洞院攝政家百首眺望
同　俊成卿女
なみに移る色にや秋の越ぬらん宮木の原の
末の松山
最勝四天王院名所御障子鳴海浦尾張
同冬　慈鎭和尚
きくからに哀なるみのさよちとり霧立なみ
のすゑの松山
まくら
同　俊成卿女
朽にけりかはる契のすゑの松まつに波こす
そての手枕
姿か顔はあらたまらさるに君か心はあら
たまりたり
同　前中納言匡房卿
うら波は末の松山こえにけりたらいの水の
かけはかはらす
天永四年閏三月家歌合藤花
同　左京太夫顯輔
波こすと人はみるらん末の松こすゑにたか

くかゝる藤をは

又　　　　　　　　　　　　　正三位家衡卿

同

春かせに末の松山なみこさはころしも花のちるかとやみん

西洞隠士　　　　　　　　　前中納言定家卿

同

花はなみ槙立山はすゑの松風こそこゆれ雲の通路

建保三年名所百首　　　　　　兵衛内侍

同

折しもあれ末の松山波こえてつらきなかめにかへるかりかね

家集末の松山陸奥　　　　　　相摸

同

荒磯のみるめは猶やかつくらんすゑの松山浪たかくとも

入道關白家御屛風末の松山兼盛集には大入道御賀御屛風歌

同　　　　　　　　　　　　　兼盛

蘆たつのむれゐる末の松山はいくよかさねのちとせ成らん

重之家集末の松をかの人の母くるまにていたるにかみ

末の松ひきにそ來つる我ならぬなみのみおるときくかねたさに

信明集敦茂のみこのむ中務すめに

年ふれは忘れやせんと思ふこそあひみぬよりも我は侘しき

返し

なからへんいのちそしらぬ忘れしとおもふ心は身にそはりつゝ

考二本集一此末酬和併二兩首一凡四十一首此下有二中務詠末松山歌一故載二此兩首一其歌乃見二

前篇清輔歌下故略之以其唱和出于此兩首而擧之備其出所者

能宣集屏風の歌よめと侍るに末の松山に馬乗ともおりてやすみ侍ける　夫木集海邊　一條太政大臣家屏風才　松山と有

夫木
音にきく末の松山けふこそはうちくる浪の聲〱すみめ

白河院にて藤花を翫といふことを

同　よしのふ朝臣
うしろめたすゑの松山いかならんまかきか島をこゆるしら波

此歌は梨壷に和歌の寮とて是かれ侍るに傍なる内侍のかみさうしつほねより藤花を物より落して侍ければよめると云々

仁安二年二月清輔朝臣家歌合海邊霞

同　従三位頼政卿
春霞へたつるころは白浪のこすとも見えぬすゑの松山

此歌判者儀すゑの松山歌はいと〻おかしく侍るに海の畔の霞にはへた〻りたる心地すかの末の松山は誠に浪のこゆるにはあらす山よりをくに遙にのきたる海の浪の山の端より見こされてこゆるやうに見ゆる也されは題の心に叶はすや中にもへたつとよまれたれは山よりこなたにたてる霞にこそと中人もあり然れ共ちかく江の中納言の歌にすゑの松山浪こさは峯のはつ雪きへもこそすれとよまれたれはそれをひかこと〻はよむと申さる〻人も侍しかはとかなくなりぬと云々

同　貫之
松か枝に咲てか〻れる藤浪を今は松山こすかとそ見る

同　信明

すゑの山昔よりまつ君をおきて浪たかくともこえしとそ思ふ

同　元眞

すゑの山まつ人をのみ頼つゝ我をはなみにおもふなるへし

六百番歌合　女房

すゑの松まつ夜いく度過ぬらん山こそなみを袖にまかせて

山家集　西行法師

たのめ置しそのいひことやあたになりてなみこえぬへき末のまつ山

慈鎭

春くれは櫻か枝にかせちりて花の浪こそすゑのまつ山

契りてもひとりをくれてしほる袖の泪よいかにすゑのまつ山

しら浪のこえてかくると見えつるは雪に風ふくすゑのまつ山

哀にもくるしき海をおもふとて浪こす袖やすゑの松やま

詠藻　俊成

うかりける昔の末の松やまは浪こせとやはおもひ置けむ

明玉　俊平

浪こゆとぬるゝ草木や思ふらん夕立すくるすゑの松やま

月清集　後京極

知るや君末の松山こす浪に猶もこえたる袖のけしきを

御集　後鳥羽院

浦ちかき末の松やま雪ふれは冬よりうへを浪やこゆらん

行意

いまはとてあたし心の春なれややよひのそらもすゑの松やま

俊成卿女

立馴し霞の袖も浪こえて暮ゆく春のすゑのまつ山

建保歌合　忠定

月日さへいつこえぬらん霞來し浪もやよひの末のまつやま

範宗

立かへる浪よりうへのかすめるは末の松やま春やこゆらん

行能

すゑの松山にかゝれる白雲の絶てわかるゝ春の色かな

康光

春のゆく末の松山吹かせにかすまぬ浪の花やちるらん

明石巻しのひかねたるは夢かたりにつけてもおもひあはせらるゝことおほかるに

紫上

うらなくもをもひける哉契りしをまつより浪はこえし物をと

浮舟巻かしこには御使のれいよりしけきにつけてもものおもふ事さま〳〵なりたら〳〵その給へる

薫大將

浪こゆる頃ともしらす末の松まつらんとのみおもひける哉

東奥細路

自古封内稱東奥通行者或有口碑傳者或有書中記者於名取則在笠島邊於宮城則在木下西其道路有與今相會者有與昔異者此地亦其地不分明焉或說曰岩切橋北東光寺前道路是也其下碧潭曰霧谷潭也考宗久記則與今所通行

者相同
宗久紀行にみちの國多賀の國府にもなりぬそれよりおくのほそ路といふかたを南さまに末のまつやまにたつねゆきぬ
按宗久親經過其地十府池戸絶把皆近其行路矣不遺其吟不認其語哉考其取途之地則南行而北歸者也然往時之道路與今之方隅異乎耶
途絶把
過今市河橋入岩切農家所有小把郷俗曰之轟行把是古今所謂途絶把也土橋之極而短狹者也誤呼其名矣
橋上月といふことを上西門院にて人々よみ侍けるにとたえのはし陸奥
夫木集　権大納言重家卿
遠近の人そかよはぬすみわたる月にとたえのはしなかりけり

旅行末戀
同　正三位季經卿
いかにしてとたえの橋にならひてかわたらぬさきにかくはあやうき
永久四年百首歌不見書戀
同又堀河百首　俊頼朝臣
いさやまたふみし見られすともすれはとたえの橋のうしろめたくに
夫木集に此歌は人のもとよりたひ〳〵申せと返事もなきはいかなる事に文を御覽せぬかなと申たりし返事と云々
藻鹽草　相摸
あやうしと見ゆるとたえの丸きはしまつ程かゝる物おもふらん
千首　爲尹
おもふことつゐには末やとまらまししはしとたえの橋にはあるとも

冠川神社址

在岩切河北鄉俗曰之志波道上宮社說曰延喜式所謂志波彥神社者乃指鹽釜焉志波志保訓相通彥者老翁之美稱栗原郡志波姫神社同體神也道上乃誤同社之語者也冠川者今呼岩切川者是也以其川在此邑而鄉人失其舊名者也緣起說曰社家及里俗相傳岐神乃鹽釜神也先降于冠川上因先立祠曰神降明神而爲鹽釜末社依後曰冠川明神冠者首也擬其元初之義且夫神降冠其訓亦相同或曰志波彥乃所祭于木下者也鄉俗是亦誤傳曰白山詳于前條也

十符池 符或作府

在岩切邑中多賀國府舘南農家後有小池池中有垂柳柳下菅草頗多鄉人謂之十符菅薦

袖中抄云顯昭云とふのすかこもとは編を十してあみたるなりすかこもとは菅にてあみたる薦也菅笠菅蓑菅枕菅わらたなといふかことしこもはおほやうに菰蔣にて編たれは本の名に隨ひてこもとはわらにてあみたるをはわらこもといひすけにてあみたるをは菅こもと云也十符あらん事は廣からん料也されは綺語抄にはとふとは十符あみたるをいふといへり又みちのくとつゝくるは此ひろきこもの奥州に有なめり是は人をおもふ心にて七ふには君をねさせ三ふに我寢むとよめる也それを童蒙抄綺語抄なとにみちの國に十府の郡より十符あみたるこもの出くるよしいへる心得られす奥州の郡のうちにまたくとふの郡なし又とふあみたらはさて侍なむとふの郡と云所に生ふるこもの十節有といへるもいはれすこものふしいかゝ十節あるへきたゝ十符あみたることそいはれたれまた十節ある菅とこそいふへけれこもと云もいはれす此とふの郡のとふあめるこも

の義極て手つゝ也又とふあまんことは外にも有なんといふ難はいはれす何事もあき事なれとも國々に好む事かはりたれは陸奥國にとふのすかこもを好むには又あなかちに好まねとさやうによみ出さる歌あれはやかてそれをみちのくのとふのすかこもとよむ也俊頼山家嵐歌

嵐のみ絶ぬ深山に住民はいくえかしける　とふのつかなみ

つかなみとてわらをあみてしく也わらくみあらしきねこかきともいふ

八雲御抄云とふの菅薦兩説有十府に編たる也又はみちのくのとふといふ所といへり　按後説得之

藻鹽草第八八雲御説かくのことししかりといへともたゝとふにあみたると可用之　今以在所考之則此説不合以前説爲是

或曰如今稱利符者乃古之十符地也利與十訓相通以上州利根川而訓之登禰川者其證也後人誤其訓而讀爲便利之利不知利其器之利焉利符十符爲兩區按此説聊有據而甚得其考索今擧古書論之據郡名之説則非郡名者固也然利府近村有菅生邑想夫往古以此地生好菅而得地名乎盖郷俗以此制莚席而爲産業自是人稱之利府菅席亦無妨其事實也據十編之説則採生于此池中者而土人編席以備庸貢者乎故存兩説以待識者

よみ人しらす

みちのくのとふのすかこも七符には君をねさせて三符に我ねん

氷滿池上といふことを

金葉冬　大納言經信

水鳥のこほりのつゝらひまもなしむへさへけらしとふのすかこも

新撰六帖　光俊朝臣
をのつからとふのすかこも幾符ともたれにかつけんおもひたえにき

六百番　有家朝臣
更にけりたのめぬ鐘は音つれて七符さひしきとふのすかこも

堀河百首　河内
霜はらふ鴨の上毛やいかならんとふのすかこもさゆる夜な〳〵

同　公実
玉衣にあられたはしるゆふ暮はいと〻そさゆるとふのすかこも

夫木
戀の歌の中に　鎌倉右大臣
文席緒に成までに戀侘ぬ下朽ぬらしとふの菅こも

讀此歌始知十符菅席或染葛或織紋而甚設美好者也然則往時有名産之稱而當播紳處士之綺筵臥具者歟是故多與吉人之吟詠也

久安百首
同　大炊御門右大臣
冬の夜はとふのすかこもさえ〳〵てひとりふせ屋そいと〻さひしき

千五百番　小侍従
待人もとふのすかこもとは〻こそ七符をあけてぬともしられめ

同　保季
いくかへり七符のちりをはらふらんまつ夜かさなりとふのすかこも

一字抄　顕輔
なか〳〵にたのめさりせはみちのくのとふのすかこも中にねなまし

新葉集　よみ人しらす

しきしのふとふのすかこもみふにたに君か
こぬ夜は我やねらるゝ
久安百首　　　教　長
夫木集
君まつととふの菅こもみふにたに寝てのみ
あかす夜をそ重ぬる
御集　　　後鳥羽院御製
寝覺するとふの菅こもさへ侘て曉ふかく千
鳥なくなり
右歌專詠十符之意、但此製作主浦景之意、
弘安百首　　　長　雄
稀にたにとふのうら風音つれは野田の松か
ねかたしきやせむ
中務卿親王家五十首歌合秋風
類名夫木　　　長　明
みちのくの野田の菅こもかたしきてかりね
さひしきとふの浦風

家集
夫木　　　同
浪かくる玉もの閨のひしきものあますやな
にをとふのうら人
右所低書三首與十符池不合、焉稱野田詠
浦景海人等、尤可怪、又擧之有以橘爲仲憶
京城之歌而收此地者、然其詠非指斯地而
詠之、唯所以望于武隈之東溟而發吟者
也、按往時爲仲爲當國刺史而斯時在名取
客館、久行李悄然客居無聊、況亦值中秋清
明之夕、而望極浦之遼遠乎、於是憶京師而
難息忽發相思之情、宜哉此際不可無愁吟
焉、胡取途于岩切之遙而弊吟于侘所之寂
乎、且夫見經信之作以氷滿池上而爲題焉
此地非江濱也、不可疑、仍以爲仲之吟而屬
名取之海上、以經信之詠而附宮城之池畔、
則兩得其地矣、爲仲之作對海上悠々之象、

而發客情之無窮吟眸之不及以遠且遙取之歌句豈爲地名哉遠與十符訓音相近後人誤混一所雖載名勝之目於遠浦者其名蓋起爲仲旅懷遠望之情與此地實指其跡者尤異也

蘸影池

在神谷澤村有小池相傳前件所謂小鶴者移貌爲覩粧池也岩切以北松島道路上有小坂是亦謂覩粧坂是也

南宮

在今市河北古有南宮祠是亦鹽釜末社也

神社啓蒙曰南宮神社在美濃國不破郡一宮記曰金山彦命也社家註記云南宮者金山彦命而火神也非金神司離火南方故名南宮抑南宮者陽神而居南方文武兼備故國家崇貴敍正一位勳一等就中天武朱雀朝施功我邦云

多賀城（或曰末島高森多賀國府相同且高多賀謂同國府謂其總名森指其地實同地也）

在市川村南有往昔城壘古址上有多賀神祠前代之古瓦遺礎往々有之好事之者取斯地及木下古瓦以爲之硯堅剛細密足書房其瓦上有紋理表若鑿跡裏似細布也城壘年暦詳壺碑上續日本紀曰聖武帝天平九年四月戊午陸奥持節大使藤原朝臣麻呂等言以去二月十九日與鎭守將軍大野朝臣東人到陸奥國多賀柵

又曰麻呂等帥三百四十五人鎭多賀柵

又曰同月二十五日將軍東人從多賀柵發

又曰四月一日東人到出羽國大室驛入賊地且開道而行但賊地雪深馬芻難得（東奥深雪季孟夏未消於是可視）故同月十一日東人廻至多賀柵自導新開通道總一百六十里或刻石伐樹或塡澗疏峯從賀美郡至出羽國最上玉野八十里雖總是山野形勢險阻而人馬往還無大艱難從玉野至賊地

又孝謙帝天平寶字四年春二月丙寅陸奥國調庸者多賀以北郡令輸黃金其法正丁四人一兩

以南諸郡依舊輸古之稅法大概於是亦可見

又光仁帝寶龜十一年三月丁亥上治郡伊治公呰麻呂反率徒殺按察使紀朝臣廣純於伊治城獨唯介大伴宿禰眞綱開圍一角而出獲送多賀城

同年七月甲申勅曰爲討逆虜調發坂東軍士限來九月五日並赴集陸奧國多賀城其所領軍粮宜申官送兵

同年九月己未勅將軍爲賊被欺致此逗留以今月不入賊地宜居多賀玉造等城能加防禦益鍊術

又桓武帝延曆四年四月辛未陸奧按察使鎭守將軍大伴家持等言權置多賀階上二郡

同七年三月庚戌軍粮三萬五千餘斛仰下陸奧國運收多賀城又糒二萬三千餘斛並鹽仰東海東山北陸等國限七月以前轉運陸奧國並爲來年征蝦夷也

同月辛亥下勅曰調發東海東山坂東諸國步騎五萬二千八百餘人限來三月會於陸奧國多賀其點兵者先盡前般入軍經戰敍勳者及常陸國神賤然後簡點餘人堪弓馬者同月乙丑以多治比濱成紀眞人佐伯葛城入間廣成並爲征東副使以紀古佐美爲征東大使是乃欲攻膽澤城也事見伊澤下

同八年三月辛亥諸國之軍令於陸奧多賀城分道入賊地

後鳥羽帝文治五年秋八月十二日賴朝自柴田郡船迫至多賀國府居三日先是言多賀者稱柵編木假爲之塞柵者也光仁以來以城而言以東人所築而稱之後鳥羽以來以國府言稱多賀古城者則市川古碑在所而稱多賀國府者則岩切河北地十符池上地也以此可辨其地

同年十月朔賴朝從平泉到多賀國府因賞吏犒民

同六年正月泰衡家臣大河次郎兼任欲踰出羽大關山而赴多賀國府到于鎌倉宮城記曰多賀城者宮城郡中

松山也從廣瀬川五十九町之間號宮古路云云鎌倉實記

宗久紀行にみちの國多賀の國府にもなりぬそれよりおくの細みちといふかたを南さまに末の松山へ尋ゆきし

稱多賀國府地今市以北岩切山陰古館是也本號高森後遷市川多賀城于此爾來呼高森而曰多賀城呼利府而曰多賀國府

一說曰文治六年三月十五日頼朝令伊澤左近將監家景主當國來居宮城郡高森仍家景以高森稱氏焉時俗又謂之留主殿者居館雖在高森其任以主多賀城也據此說則文治中似呼高森也頼朝大軍之地今市川多賀城也是乃往昔治府仍稱國府不可疑

多賀神祠

舊在多賀城址中神名秘書曰多賀宮伊弉諾尊洗右眼日以出神號曰豐受忌魂亦名伊吹多主神是也

按名取郡亦有多賀神社風土記曰所祭伊弉諾尊雄略五年春三月加神禮

自宮城野以下至多賀而有稱八境者謂之宮城八景仍得天漪翁述作聊載之此焉

宮城秋月　高玄岱

渺然無際野原秋天上桂枝月下萩千萬錦叢綉不盡蟲聲和露一綢繆

木下晩鐘

萬木遮天大作群相繆密蓋幾重雲釀成玉露繁於雨撞出鐘聲帶夕曛

本荒夜雨

一抹本荒泠濕烟萩花可惜自相憐任他狼藉夜來雨斷送凄涼沒有邊

榴岡夕照

城東十里有高岡躑躅當年映赤裳人去物亡空寂寂菅公廟古照斜陽

玉田落雁

九疑拔得七疑峰移置吾東欲擬封下有玉田横野潤呼群落雁侶相從

青葉晴嵐

東皐早古葉青青嵐氣分晴翠靄停城謂仙臺亘萬古遙知上象應奎星

松浦遠帆

征帆片片莫知涯出沒波濤望眼賒還去還來松浦外由他風信各歸家

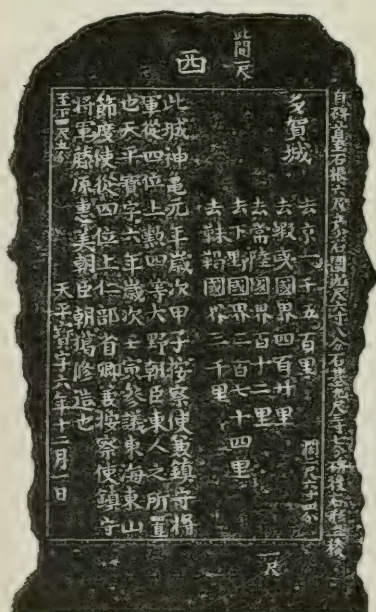
多賀暮雪

古城廢壘十符池多賀森邊暮雪奇聞說源君稿民所至今遺惠遠相思

壼碑（歌枕作壺石文或作碑風土記作坪碑壼苦木切音悃爾雅宮中衖郭璞曰衖閤間道詩大雅其類維何室家之壼又居也俗作壺碑非也壺洪孤切音胡酒器坪蒲明切音平地平所按斯碑也以往時在城中館庭面名壺碑者也）在市川村中多賀城址其碑文詳于圖上想夫或達境內反命于京師告逆賊蜂起于隣國或募兵集徒之切急遽倉卒之忙預致其備所以量遠近考多寡定日子計來往而擇緩急遲速之設也古人所謂凡事預則立事前定則不困者於此碑亦可見

日本風土記百六日陸奧國宮城郡坪碑有鴻之池今廢爲故鎮守門碑惠美朝獦立之見雲眞人清書也記異域東邦之行程令旅人不爲迷途

壺碑圖

西
多賀城
去京一千五百里
去蝦夷國界一百廿里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨國界三千里
此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勲四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也
天平寶字六年十二月一日

按神龜元年甲子遡丁聖武帝元年天平寶字

六年壬寅丁廢帝四年
又續日本紀大野東人聖武帝神龜元年爲按察使陸奥守鎭守將軍授從四位上勳四等天平十一年四月壬午爲民部卿兼春宮大夫
藤原惠美朝臣朝獦孝德帝天平寶字四年正月癸未爲陸奥國按察使兼鎭守將軍授正五位下同月丙寅授從四位下同五年十月壬申爲仁部卿陸奥出羽按察使如故同六年十一月丁酉爲東海東山節度使十二年己巳爲參議

壷碑在于我東奥也久然累世無人識其神妙者空蕪沒于古城草莽之中者幾千年水戸黄門君請其文字于我大守綱村君命儒臣田邊氏雙鉤以遺焉未及石刻尤可惜元祿十二年與江定守及亡子義方經此地以義方術而打之去閲其文字筆勢高古字體寛閑殆非尋常書考之中華則蘇長公趙松雪之上而陶弘景顏魯公之亞也未嘗見日本之字態於是切怪我朝有此鳥跡而未嘗以此傳其妙遺其名于後世仍告之平信如是亦驚其妙手時編本朝書史乃收之篇中予亦屢示好事之徒説之談本朝希有之書爾後州人略知其奇跡也正德甲午春當太守君命僕雙鉤以進之質筆者姓名而得其左證于風土記殘篇中始知見雲眞人筆痕可謂得其時而顯者也

袖中抄云
石ふみやけふのせはぬのはつ／＼にあひみても猶あかぬ君かな
顯昭云石ふみとは陸奥のおくにつもの石ふみ有日本のはてといへり但田村將軍征夷の時弓のはすにて石の面に日本の中央のよしを書つけたれは石文といふといへり此説大非也信家侍從の申しは石の面長さ四五丈許なるに文えりつけてありその所はつほと云と云

云それをつもとはいふなり私云みちの國は
東のはてといへとえその島はおほくて千島
といふは陸地をいはむに日本の中央にても
侍にこそ
按二此説皆失一レ其事跡一レ按二圖上一而可レ知二其説一
前の大僧正慈圓文にてはおもふほと事も
申つくしかたきよし申つかはして侍ける
返事に
新古今　前右大將賴朝
みちのくのいはてしのふはえそしらぬかき
つくしてよ壺のいしふみ
仲實
いしふみやけふのせはぬのはつ〳〵にあひ
みてもなほあかぬ君かな
顯昭
おもひこそ千島のおくをへたてねとえそか
よはさぬ壺の石ふみ

良玉　懷圓法師
日かすへてかくふりつもる雪なれはつほの
石ふみあとやなからん
山家集　西行法師
みちのくはおくゆかしくそおもはるゝつほ
の石ふみそとの濱かせ
拾玉　慈圓
みちのくのつほの石文ゆきてみむそれにも
かゝしたゝまとへとは
おもふことといなみちのくのえそいはぬ壺の
石文書つくさねは
夫木　清輔朝臣
碑やつかろのをちにありときくえそよのな
かを思ひはなれぬ
同　寂蓮
陸奥のつほの石ふみありときくいつれか戀
のさかひなるらん

題手臨壷碑見遺　高　玄　岱

聞道千年壷石文摹臨一紙致爭分貢人鐵畫若
然古想見隴頭照夕曛

坪浦（ツボノウラ）

未詳其地多賀城邊往昔有海水之去來也以浮
島之地勢可考之風土記曰坪浦在松山之右田
温湯不知指何地

浮島神社

在浮島村多賀城東鹽釜西南往昔海潮來其下
者考古人之詠而可視如今變爲野田田上有一
高丘丘上有神祠是乃浮島明神也不詳祀何神
也

藻鹽草云浮島は奥州松（人の心をうきしま／ぬれ衣しほかま）
のまへにうきたるうき島の
夫木集浮島陸奥一駿河
ものへまかりける人にぬさつかはしける
衣はこにうき島のかたをし侍りて（古寄贈／之状可）

祝此予

拾遺雜上　能　宣

わたつ海の浪にもぬれぬうき島の松に心を
よせてたのまむ

同雜戀　源　順

さためなき人の心にくらふれはたゝうき島
は名のみなりけり

中納言家持かもとへつかはしける

新古今戀五　山口女王

しほかまの前にうきたる浮島のうきて思ひ
のある世なりけり

みちの國へまかりける人のもとへつかは
しける

續千載旅　小野小町

みちのくはよをうき島の有といふ關こゆる
きのいそかさらなむ

題しらす

続古今春上　後鳥羽院御製
しほかまの浦のひかたのあけほのに霞にの
こるうき島のまつ
うき島の橋わたして侍けるころに
家集　能宣
浮島と名に聞たれと浪のうへに所もさらす
世をそへにける
按稱浮島橋者不知何地姑擧此
天暦八年中宮七十賀御屏風の料の和歌　浮島
家集　信明
憂事もきこえぬものをうき島は所たかへの
名にこそありけれ
同　爲仲朝臣
いのりつゝ猶こそたのめみちのくにしつめ
給ふな浮島の神
元輔朝臣
浮島の松のみとりを見渡せはは丶そか末も
紅葉しにけり
夫木集家集　爲仲朝臣
浮島の花見る程は見ちのくのしつめること
もわすられにけり
考前條及此歌則爲仲不幸而値竄之人乎
唯爲東奥之刺史而憂遠于帝闕之歎吾乎
延喜十七年伊勢の齋宮の御料に國々の名
有所々をかゝせ給へる御屏風の歌めしあ
りしかはうきしま
家集　躬恒
いさやはた身のうき島にとまりなむしつみ
つゝのみよをふれはうし
按圖群國名蹟以命在作可謂好事之清翫
也但躬恒歌咏似發述懐其意不可曉下同
村上の先帝の御時の御屏風國々の所々の
名をかゝせ給ひてうきしま
同　中務

たのまれぬ心からにやうきしまの立よるなみのとまらさるらん

一條太政大臣家障子浮島

夫木集　わたつ海の底に根さゝぬうき島そ龜の脊につめるちりかも　　能宣朝臣

御屏風うき島ぁさか

家集　おきつ浪よせはよせなむ浮島に年ふる松をこえなから見む　　忠見

家集戀歌

夫木集　戀すればなみたの海にたゝよひてこゝろは常にうきしまのまつ　　源仲正

土御門内大臣家歌合遠島朝霞

同　あけわたる沖津波間に根をたへて霞にやとる浮しまの松　　鴨長明

永觀二年八月一條大納言家障子歌春浮島

同春　憂島の松のみとりを見わたせは千とせの春そ霞そめたり　　平祐擧

長久三年齋宮歌合

同　あさりける浮島めくる海士人はいつれのうらにとまるなるらん

家集　しら浪のうちおとろかすうきしまは立るまつたに根こそわふなれ　　伊勢

玉吟　沖の風たゆとふ雲をはらふ夜は月の氷にうきしまの松　　家隆

面和久橋　當作吹面橋

在留谷村有一圯橋面和久橋是也天和四年甲

子二月依命巡視宮城郡中勝蹟里老示其地且言土人誤曰阿倍松橋視之不見有一楓樹於是惜欠其事實三月二十日歸城府達之因命出納司松林仲左衛門及郡司而即日植楓樹五株於橋畔且橋東小山亦多植楓樹以爲紅秋之設焉爾後過二十二年再經歷其地其猶存焉郷人橋呼紅楓橋山號紅楓山是併先君之遺愛也

ふりたるたなはしをもみちのうつみたりけるわたりにくゝてやすらはれて人にたつねけれはおもはくの橋と申は是なりと申をきゝて

山家集　西行法師

ふまはうき紅葉のにしきちりしきて人もかよはぬおもはくのはし

しのふのさとよりおくに二日はかりいりてあり

夫木集橋の部に家集をひきておもはくの橋　陸奥

此歌は信夫郷よりおくへ一日二日はかりいりてふりたる橋あり人にとへはおもはくのはしと云もみち有と云云

或曰面和久字本俗字於義理亦不通曉焉郷老曾言是實吹面橋也往昔橋畔有紅楓林村落秋晩人行稀稀唯所經過者農夫野人西風飄飄吹衣紅葉紛紛飛面蓋風吹來則物已分分者紛也仍呼之曰吹面橋

野田玉川

在鹽釜村以南往昔有河流潮汐亦來往石瀨所浮光躍金深潭地淸影沈璧皆爲月得嘉名如今爲廢地而唯遺野田之溝梁耳或曰南部領九戸郡亦有同名者

みちのくにまかりけるときよみ侍ける

新古今冬　能因法師

夕されは汐かせこしてみちのくの野田の玉

川千とりなくなり

百番歌合に　順徳院御製

續古今冬

みちのくの野田の玉川見渡せは汐かせこしてこほる月影

邦省親王家五十首五月雨

續後撰　鴨祐夏

さみたれはゆふ汐なからみちのくの野田の玉川淺き瀬もなし

御集　後鳥羽院

光そふ野田の玉川月きよみゆふしほ千とり夜半になくなり

大神宮百首御歌

夫木集

冬されは野田の玉川氷ゐて萩こす浪は夜半のしらゆき

按古人玉川之於萩花詠諸近江玉川者往往有之今用之奥州玉川者尤可怪此下有或分玉川或分野田或稱入江或稱池塘者又錄之下以備參考

周防内侍

たえにきとのたの玉川ことよせて猶あらためぬひとのこゝろや

家集　家隆

うつらなく野田の玉川けふみれは萩こす波に秋風そふく

新勅撰　よみ人しらす

みちのくにありといふなり玉川のたまさかにたにあひみてしかな

鴨長明

みちのくや野田のすかこもかたしきてかりねさびしきとふのうらかせ

弘安百首　長雅

稀にたにとふの浦風をとつれは野田の松か

ねかたしきやせむ
建長五年毎日一首

夫木集　　　　爲家

さと人や野田のわかなをすゝくらん汀そにこる玉川のみつ

同　　　　政村

朽のこる野田の入江のひとつはし心ほそくも身そふりにける

同　　　　爲家

せきかくる野田の入江の澤水に氷りて留る冬のうき草

百首歌野田 陸奥

同　　　　後鳥羽院

霜氷る野田のうはてにせく池の汀になひくしのすゝきかな

同　　　　長明

むれわたるいそへのあきさ音寒し野田の入江の霜のあけほの

龜井泉

在加瀨村有寺號龜島山天正寺相傳伊澤將監家景塋地也始稱增長寺後改之其墓畔有古梅傍有幽泉曰之龜井泉

春日神社

在春日村相傳大職冠第七世從四位下陸奥按察使藏人頭藤原富士麻呂仁明帝承和十年癸亥三月爲陸奥國刺史居多賀城其生質達文武好和歌十一年甲子建春日神社于城北上野原爾後世祀之至押領使秀衡時新造營州人益崇之文治五年己酉賴朝東征之次以伊澤左近將監家景補奥州留主職居岩切邑高森寨（乃多賀國府俗間以多賀字呼爲高乃多賀峯也）此時相繼崇敬焉至留主上野介政景重經營宮社天正十八年庚寅征北條氏政以政景遲參之罪沒收采地寛文元年辛丑十一月二十六日綱村君寄附祭田延寶元年癸

丑春初造神祠三月二十三日遷之新祠祀之

奥羽觀蹟聞老志卷之六　終

奥羽觀蹟聞老志卷之七

仙臺　佐久間義和著

宮城郡　下

鹽竈神社

去多賀城址十八町餘在鹽竈村未詳何代祀之慶長十二年丁未前太守黄門政宗卿命内馬場日向監造紀州良匠鶴右衛門修造之是歲六月廿日落成焉但以貴船紀而祀本社東元祿六年癸酉後太守中將綱村朝臣遷紀宮于城北古内邑為別社自是新興經營之事以武甕槌命為左宮以經津主命為右宮共南面岐神為別宮西面併三座而號陸奥國一宮正一位鹽釜大明神

謹按鹽釜神號出處古來所傳說紛々而難一定於是先君綱村朝臣請之神祇管領卜

部兼連朝臣草縁起關白基凞公書之其說始定焉仍擧其說以主之低書舊說于其間而附之其末篇復擧源君美白石先生記備博覽之參考且別作社地審定說附之後以便考索

社家舊說曰大古天孫降臨經津主武甕槌二神先降平定葦原中國時以岐神爲鄕導周流削定終至陸奧國祠此三柱神斯地武甕槌鎭座于常陸鹿島郡經津主鎭座于下總香取郡二神又遷幸于大和三笠山岐神終止于此所也由建三座之

弘文院林恕說曰奧州鹽釜明神者延喜式外之神社也紀伊國熊野之海濱鹽屋之王子之神社同體也伊弉諾尊御子鹽土老翁是也始燒鹽仍名之其他神德不遑計其神克感人之至誠而現效驗因茲古者國郡多建祠祀之今也則兩國之外悉斷絕云

又曰日本紀神代下卷云皇孫天津彥火瓊々杵尊使之皇孫乃離天磐座且排分天八重雲稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣其地有一人自號事勝國勝長狹皇孫問曰國在耶以不對曰此焉有國請任意遊之故皇孫就而留住

又曰事勝國勝神者伊弉諾尊之子也亦名鹽土老翁

又曰彥火火出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢鹽土老翁問曰何故在此愁乎對云々老翁曰勿復憂吾當爲汝計之乃作無目籠內彥火出見尊於籠中沈之海即自然有可怜小汀

又曰鹽土翁多其名一名猿田彥指伊勢地主也一名道祖神指能守道路也一名岐神一名事勝國勝長狹神共同體別名也

當社左右別宮各有社人又有巫女各一人祭祀之時先別宮是皆武甕槌經津主兩神以岐神爲鄕導之緣也

當社大祭禮七月十日也以湖滿時供御膳祭鹽土老翁之故也（同月同日於常陸國鹿島有異國歸伏之大祭禮云々或云鹿島同躰或云鹿島之御見也故此地先祭之云）毎月十日及申酉日爲縁日也（以末篇類聚國史弘仁三年說考之則以七月十日爲社日尤久）

風土記曰鹽竈神社圭田五十六束所祭鹽土翁也推古二年甲寅七月始奉圭田行神事式祭等有神家巫戶等凡當社之境景日本雙一之地也松島隣鹽竈浦爲左右之景地凡朝吟暮嘯之佳境不可越之（以此考則祭禮及祭月合于當時者可見）

或曰延喜式所謂志波彥神社是也志波志保訓相通彥老翁義相同栗原郡志波姬神社同體神也（此說與下篇源君美先生說略合然亦不同後人宜併考己下同體末社說）

社家及土人傳云岐神先天降于冠川上因祀此曰神降明神爲鹽釜末社或曰冠川明神加牟武利加牟布里訓相通

古社當多賀國府城乾去城四十町許今此所日若切邑川曰若切川社傍有志波道上址

又傳云岐神先天降于鼻節濱延喜式所謂鼻節神社是也猿田彥大神御形以鼻有節曰鼻節神社而後遷座于鹽釜浦云鼻節神社今爲鹽釜末社（當鹽釜巽隔二里半許）

又曰延喜式所謂多賀神社無所見今鹽釜社在多賀國府是三社神天降于此國祀之於國府故號多賀神社（按此說不分曉多賀說見前所祭伊弉諾尊雄略時祭之）一宮左右宮大明神尊氏文書藏之田村麻呂東夷征伐之時勸請三柱神於加美郡其社于今在（其社今四竈河東而在香取神祠東北）三河國岡崎六所明神者勸請當社別宮是東照大神產生神也

大成經舊事本紀曰陸奧國住諸荒祇等未伏奉從天孫請於大己貴尊東夷祇荒兮大神能讓之尊曰吾弟神命猿田彥神有靈妙威心又清義宜遣此神乃使侍從天鈿女命告天孫尊命大巳貴神命猿田彥大神奉兩命即考懸懃

背御矣將八十武神發於五瀨國蹈動八雲路光輝鳴震以至於篠忍岡諸神諸鬼等皆怖恐畏伏悉隨順敬歸於天孫尊命猿田彦大神尋分國州年氣豐氣而納取之爲年貢調將國州魂衆荒神等使朝於天廷永爲天道奴（己下俾載異說于此而考合本義此一條記猿田彦事）

又曰太歲在於己未春二月壬辰朔辛亥長髄彦神爲天孫尊被襲而棄大倭國往於陸奧國故中國順伏這長髄彦神元人神尸化嶽山祇神兒在陸奧國燒鹽施民后稚櫻宮御代依往吉神催促前韓軍能擊數百異神韓怨其長高其力強其威巍其氣猛故俱洲輪神司軍船有功依爲陸奧鎮守今鹽釜神是也（此說以猿田彦又換長髄彦直爲鹽釜神也）

又曰開化天皇廿八年春五月癸卯詔曰朕見王道磐余彦天皇時西國皆服已歸王化東國歸服不及朝貢有邊國餘三代御宇邊國大朝

雖然以爾未知君道正淳理如當於國々以定神主周弘王道奥南鹽釜神主等皆定夏冬祭祠祭日暢元道天下始知君道

神社考引古事談說曰一條帝馭寓中將實方坐不敬謫奥州三年註和歌名所以爲歌枕尋阿古野松而無知人有一翁謂實方曰阿古野松在出羽國奥羽昔一州而今分爲二實方赴出羽見阿古野松其翁鹽釜明神也云

伊勢國河曲郡椿神社一宮記曰猿田彦命也舊說稱鹽釜六所明神久一曰猿田彦二曰事勝國勝三曰鹽土老翁四曰岐神五曰興玉命六曰太田命凡六座祠之於別宮也是乃同體異名神也

神社啓蒙曰興玉社在伊勢國度遇郡宇治鄉內宮酒殿邊無神殿猿田彦命一座世紀云無寶殿衢神猿田彦太神是也一書云衢神孫太田命是土公氏遠祖神五十鈴原地主神也

古語拾遺云勅大物主神領八百萬神永爲皇孫奉護焉仍使大作遠祖天忍日命帥來目遠祖天槵津大來目帶仗前驅既而且降之間前驅還白有一神居天八達之衢其鼻長七咫背長七尺口尻明曜眼如八咫鏡即出從神借問其名八十萬神皆不能相見於是天鈿女命奉勅而往乃露其胸乳抑下裳帶於臍下而向立笑噱是時衢神問曰汝何故爲然耶天鈿女命對曰聞天孫應降故奉迎相待吾名是猿田彥大神時天鈿女命復問曰汝應先行將吾應先行耶對曰吾先啓行天鈿女復問曰汝應到何處將天孫應到何處耶對曰天孫當到筑紫日向高千穗槵觸之峯吾應到伊勢狹長田五十鈴河上云々神名秘書云作神無寶殿以賢木爲神殿也五十鈴宮處之地主神也石坐也

大麻彥神社在阿波國板野郡二宮記曰猿田彥命也

白鬚神社在近江國志賀郡境打下所祭之神一座猿田彥命神祇正宗曰打嵐白鬚大明神者猿田彥命也

大常國史云垂仁天皇時遂赴伊勢國遇一老翁告事翁答曰宇治川上有光我二百八萬歲守之至于今此翁猿田彥（猿田彥又號興玉命也一云倭姬命逢大田命）教之曰彼川上有五十金鈴天上圖像及天逆戈吾在于此八萬歲護而崇之（大田命者昔猿田彥之苗裔也）因以中臣祖大鹿島命爲祭主

垂仁帝時倭姬代豐鋤姬任大神教巡諸州尋宮處二十六年丁巳十月甲子建宮于伊勢度會郡五十鈴川上鎭座此地此地者昔天孫降臨時猿田彥大神所到之處也

鄉老說鹽釜末社者多一曰青木（在竈社畔）二曰奏社（在市川村）三曰浮島（去本社一里餘在浮島村）四曰鼻節（去本社東五六里在花淵濱）五日石根（去花淵五里在海上）六日吉田（在吉

田洲七曰籬島（去本社以東五六町在海上）八曰東宮（去本社東南三里在東宮濱）九曰松島（去本社海上四里在桂島）凡九區

又曰一曰只洲（或作紀古內村）二曰北宮（春日村）三曰小刀（澤乙村）四曰柏木（笠神村）五曰冠川（岩切村）六曰南宮（南宮村）七曰奏社（市川村）八曰浮島（浮島村）九曰梅宮（吉津濱）十曰吉田（吉田濱）十一曰東宮（東宮濱）十二曰鼻節（花淵濱）十三曰石根（松濱海上）十四曰籬島（鹽釜海上）十五曰桂島（桂島上）凡十五區俱末社也

奏社神鄉人以爲其地在本社前道傳祈祀之言於本社之神也按啓蒙作惣社字爲大貴己命軍八頭正一位總社伊和大明神也在播磨國飾磨郡姬路城中也蓋此神歟奏字誤傳之者未可知焉奏社號亦可怪

類聚國史十六（神階部）嵯峨天皇弘仁三年壬辰七月十日陸奧宮城郡鹽釜神社授從二位

又百三十七（幾外奉勅宮社部）舒明天皇四年七月陸奧國宮城郡鹽釜神社奉勅使損贈良隅奉錦綿布蠶繭等

鹽釜社考　源君美（筑州牧君白石先生）

東陸州鹽釜社祝號祭式不載祀典而文獻不足徵也古今之傳莫能定于一或曰昔在草昧之世武雷槌神經津主神以岐神爲鄉導征是四國平定天下後武雷槌爲鹿島神經津主爲香取神岐神止于此神皆有功于是州州人乃廟祀之以鹿島神爲左社香取神爲右社而岐神爲別宮總稱謂之鹽釜神社或曰鹽釜所祭之神卽與南紀熊野鹽屋王子同伊佐奈伎神子鹽土神也曰猿田彥曰岐神曰道祖神曰國勝事勝長狹神皆其異稱也美按神祇式州之信夫磐城等郡有鹿島神社牡鹿行方等郡有鹿島御子神社黑川亘理等郡有鹿島天足別神社又亘理郡有鹿島伊都乃和氣鹿島緒名太等神社栗原郡有香取御兒神

社黒川郡有行神社皆是每歲祈年祭案下班幣及國奉其幣者而宮城郡莫有鹿島香取岐神及鹽竈神社焉舊事古事日本紀等書未嘗謂伊佐奈伎神有子鹽土神也猿田彦或稱衢神前說所謂岐神不與之同長狹古之襲國主神襲國即今日向之州也前者二說之言未知是何稽據也以余驗之鹽竈神社載在祀典崇奉祇恪不懈益虔所謂名神大社凡皇家大祭祀則莫不與焉但其祝號今昔異稱耳蓋古之神聖德被四海廟祀百世以到于今按史太古二神有男名宇比地邇女名須比智邇古之神聖多稱功德以著其號古言宇比地邇猶言資海也須比智邇猶言資雌也至後傳今字以記古事宇比地邇作泥土煑須比智邇作沙土煑蓋惟二神始爲煮鹽之利以贍民用故名州之宮城郡有志波彦神社栗原郡有志波姬神社方言志波即鹽也

鹺謂之志波々由斯猶言鹽味也　自註也下同

彦讀云日子姬讀云日女日子日女古男女至尊之稱則知二郡所祀者宇比地邇神須比智邇神是已郡名宮城乃神所都之壤而古史所謂高天原地與州壤相接矣

高讀云多珂天讀云阿麻古言天謂之阿毎海謂之阿麻天亦呼云阿麻其音之轉耳原讀云播羅播羅上也日本紀河上讀云箇播羅即此高天原乃言多珂海上之地也古者其土壤最曠後分爲常陸陸奥二州凡東方古書宜通古言而不拘今字則思過半但其說極長且我有其書故略于此

後俗以鹺戶所在故稱之以謂鹽竈神社而古時祝號遂失之其有二社蓋配以其日女神也古言和氣男子通稱今字作別別宮猶言鹿島香取等御子神社乃神之子若孫亦未可知也或曰按風土記殘編是郡有志波彦神社有鹽竈神社其所祭之神本自不同而併以爲一豈其然乎曰

元明和銅六年　勅京畿七道諸國撰風土記天平初書成奏上而其所謂殘編載多賀城碑事碑者天平寶字六年十二月鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦所建相去風土記奏上無慮三十餘年安有預記是事乎哉其餘則亦可知也據僧仙覺萬葉集註釋文永弘安間風土記全書猶存自是之後其書散亡於今則僅存一二美嘗觀所謂殘編二十餘卷其書體裁與原本不甚相似且其文字鄙陋實是兎園寠册耳其中一卷跋云右加賀國之小帳也可以證已嗟夫上世之事若存若亡正史實錄所不載吾斯之未能信孟子曰盡信書則不如無書穀梁氏曰疑以傳疑聊述所見以俟博古君子而質焉

右祉考一篇雖與緣起旨趣不同具發出上代神明之事來尤分明也且夫公元該博能通古今而精密于本朝之事想當必有所受焉又如其德義才識實海內之文宗神州之鴻儒故特擧而收之其高名學術唯非稱之本朝雖佗邦異域亦能識其人而稱風藻服強識焉殊於唐詩則豊腴馴雅與開元諸名家相頡頏由是四方爭傳以逮海外之國其詩名擅天下爲明鄭任鑰甚見稱譽誰又得而間然耶今幸得封內祉考及松島記等于公大手筆而爲吾州之珍載之以備文獻之徵云

神竈祉

神竈凡四口在南方者二口東竈徑四尺八寸西竈徑四尺在北方者二口東者四尺八寸西者四尺八寸有國殃則釜中水色各爲變或紫或黃或赤或靑其色不同於是恐妖孽之兆而祈之（此水以七月十日昧爽以新水而易舊水以此爲例）

去本祉南二町餘在市店後鄕人曰往古有六口昔盜人載二口于扁舟去其人手足痿痺恐懼投于海中笆島邊今猶在曰釜潭水面縈廻盤渦頻生或爲風浪沒其舟焉過者必致敬畏去

或曰往古有十四口竈二口野田一口伊澤一口鹽釜一口潭四口黒川四口志戸田併此四竈其說難信

藻鹽草十七云是はむかし田村將軍討夷之時五萬八千人の兵粮をかしきたる釜なり爰にしほかまの神おはしますと云々

按爲炊兵粮之器此傳聞之誤也觀今所存而可知其非說也

宗久紀行云日くるゝ程にしほ竈の浦に行つきぬ神體はやかてしふかまにてわたらせ給ふ御前に通夜し侍りぬ

按往古建神祠于此而直祀神竈者是證也宗久固親經直視者可謂實記不可疑者也上古唯附此神竈而祀之故神號字亦出于此焉然此器乃上古神明自煮鹽之具也

緣起曰鹽土老翁始降此浦燒鹽以敎民故稱鹽釜浦神竈今在矣別宮社人掌之

鹽竈社址審定考

夫奧州鹽竈者天下之名勝東陸之佳境也曾古人亦言我　天子宇內之曠遠其名地惟多然無若斯地之壯觀者（出伊勢物語及宗久紀行）幸在于吾封域其勝聞於闔國也矧實神明垂跡之地乎是以自古建宮祠而擬社稷奉祭祀以禱國祚其神號也於所指而異其名不可不辨焉或稱岐神或稱鹽屋王子是此伊弉諾尊子稱鹽土老翁是也或又稱事勝國勝長狹是乃鹽土之別名也自爲伊勢地主言則號猿田彥自克守道路言則號道祖神又號岐神同其意而俱是一體別名也或通爲妻神稱猿女君是也妻之爲言配也偶也男女相合爲夫婦之謂是乃司婚姻之神也夫男女之有交感因茲生々而無息焉於是乎生人倫而繼天理也故采諸道路啓行之義而復呼道祖神而曰妻神或曰延喜式所載宮城郡大社志波彥神社者所謂鹽土老翁也（志波姬亦栗原郡大社也）按志波志保音相通訓亦近彥者是老翁之美稱也社家說曰古來稱

鹽竈六所明神者一曰猿田彦二曰事勝國勝三曰鹽土老翁四曰岐神五曰興玉命六曰太田命今祀之別宮是乃同體異名之神也其舊說紛々也如此然前代未詳宮社在于何地其祭始于何人也按我先太守黃門政宗卿以慶長十二年丁未夏經營于千家山頭以貴船只洲兩社而配合祭焉爾後元祿六年癸酉後太守羽林綱村朝臣遷只洲宮於城外三里古內邑而爲別社然後新造營于斯地以武甕槌命爲左宮以經津主命爲右宮以岐神爲別宮併三座以號陸奧國一宮正一位鹽竈大明神蓋此學也皆所以據神代書而裁斷其位次者良有以哉且請卜部兼連朝臣艸宮社緣起關白基熙公親筆之其書藏諸神庫以爲至寶焉可謂悉其衷誠而增國光以致壯觀者也於是乎予竊考古代之神址如今之宮社蓋非往古所祭之地審是一篇之大本想夫古之社址者乃今之市店安神竈者是也斯地乃和歌所稱千家浦

者此處也仍世人呼千家鹽竈者其名始出乎茲矣其號之所因以上代所燒之鹽竈在千家之地而茲稱其名者也且夫今言著見者則崇光帝朝九十八世天子觀應中去今己三百八十年丹州人釋宗久者東行吟詠于路次之佳境輯爲一篇名號都產其紀行有言曰行々至千家鹽竈其神體迺鹽竈也仍宿茲以禱焉又古稱此竈乃自太古所相傳來者往昔老翁降于此江濱而始煮鹽以教民于將食養脈漢食貨志詔曰鹽爲食肴之將酒爲百藥之長又五味禮曰瘍醫以酸養骨以辛養節以鹹養脈以甘養肉以滑養竅其功在茲自是五朝始知於資滋味利生民焉故尊其器而稱神明呼其地而名鹽竈浦者實據乎此也依後世貴厥厚德重厥盛功建祠于此所以直崇奉神體也以紀行而考之則宗久經過之時神祠存洲民鄉俗崇奴猶往時矣然宗久直指此舊器而乃言神體者是乃現聞州人之所傳親見鄉黨之所崇筆之紀行寫之文字之證矣夫容疑于其間哉然不察天賜永久之利出于此而其名傳于不朽實可憾焉且今社

家說言別宮社人司竈祭則禮奠雖失其事實羊存之證亦可併考然則往昔此地有神職家而歷世司其宮祠行其祭禮也尤無可疑也當斯之時也未混浮屠之非祭惟粹然上古之神道相授受之也無間斷而猶傳其禮奠于後世者亦可考見也爾後當黄門君起土木之時而其神祠依舊在蜑舍中湫隘窄狹殆無緣致于輪奐富麗且其地在行路馬蹄之間則猶恐厥褻瀆仍相攸于山頭擇基于淨地以遷宮祠而祠之竈社乃依舊此時神道益衰微佛法愈熾昌世之信神道者亦多是陷浮圖之弊遂以兩部習合而致尊信者往々皆僉是以黄門君新建一寺始稱之法蓮寺自是彼浮屠之徒雖居于神職社家而移先世之祭禮以混爲習合焉爾來因循苟且而不悛焉妖僧之輩大得其志而誇己之術奪神人之權每々輕神威蔑社家者引來欺去遂至以固無智妄作之迹議者尤可憤激之甚者也自是以降州人恬而不怪習而爲恒妄重新宮而却踈舊址也久爾來獨崇山頭而不知眞靈威之寓此神竈爲舉國皆僉剩詣宮社納拜者歸路經市店之次徒瞥視竈社過了可謂輕慢神靈之尤者也蓋此神器也太古神代之舊物言其久則與三種寶器相先後焉言其貴則上世神明之作也言其重則人間始知煑鹽之利豈啻禹王之九鼎望文王之旋蟲乎言利世之制乃在于夙沙之前（夙沙乃黄帝臣初作煑海鹽者）言救民之功復亞于后稷之下（詩思文篇立我烝民昔烝民乃粒莫非爾極朱子曰使衆人得粒食爾后稷之所立去）今也身生于千載之後而目視于萬世之奇物者豈匪天幸之賜乎或曰上古所具其數渾六竈說者曰曩昔有大盜竊其二口藏之扁舟去時其人手足忽痿痺不能起焉故恐怖迺投海中其地今去籬島已八九町現在其蹤人呼曰竈淵水波與佗處異時有覆其舟者因過者敬畏焉其來遺竈存四口也予曾念豈夫然哉妄誕之甚者不足信其說焉實不詳神器之由者附會

而爲之辭也今熟視彼神器其制是奚人爲凡作之能所及耶實上代神造之物也如彼姦盜胡容易扛得而去哉擧六口說者是亦習聽六社明神之義後世一般好事之徒逞牽合附會者也抑此神器也國有不詳則竈中之止水必變色而示凶焉或青黃或紫紅其應變不可窮於是人或識妖孽災異之兆而每々恐惧脩省焉可尊之靈器也然則此神竈也神代之舊物而神之格思不可度思矧可射思我州人於談封內之舊物所知者獨多賀壺碑而已然彼也是歲乙巳去天平寶字六年壬寅凡九百九十年奚比並於神代之悠遠哉故予多年費考索之力如今得其說及于茲實爲往古神社祭于此者更無疑也且擧神器之妙用而具論其興廢尤盡視者乎其心易其氣聊不容私意于其間左袒于予說而庶幾革先入之誤信神器之尊則是所謂不以人廢言之美實不智哉仍辨論其顚末如斯夫

憩息石

本社以東坂下有一巨石是乃大古神煑鹽之日及疲勞而所憩息之石也

神牛石

竈祠以北蚕舍後有臥石五尺餘其形如伏牛神太古負潮于牛背而運送之其牛死後化石鄕人謂之神牛石

歩斷橋

七曲坂下市店間有小橋斷續其横板曰之歩斷橋

白坂大悲閣

本社以東在竈社山頭相傳源賴光所造立也

駒犬城址

東園寺後鷗羽洲間有古壘址不傳城主

解鞍島

左竈潭邊太古神明解負潮牛於此島山而所息之地也

千家鹽竈 或稱鹽竈浦或稱千家浦歌枕作血鹿又作千賀
自竈社地至海濱渾謂之鹽竈其間人屋市店漁家甍舍尤多稱之千家浦斯地也商舶之所輻輳漁舠之所集會所以有商賈之利漁鹽之便而豐饒繁華之地也故行人來往不絕釣徒常滿水汀魚蝦日鬧歩下本社東南有寺曰金光明山法蓮寺々下以東有沙汀曰翠松磯其北有青山曰藤蔭峯下曰藤蔭隈往時山頭有古藤殊蔓衍春時開花々影涵陰仍得其名竈社以東有寺曰東園寺青松滿山樹林繞寺山外有二島一曰鷗羽島一曰天女島建辨才天祠其崎碧灣去千家海汀十町餘有巨島所謂間籬島是也縹渺浮滄溟凡言海上之景致則雲浪烟波之含日古今之感懷奚異群島極浦之樂碧遠邇之賞心更齊白鷺之破空海鷗之睡沙汀渾無不起興發感者皆與古人所稱相合而實扶桑之名勝天下之佳境也
袖中抄云しほかまのうら

みちのくはいつくはあれとしほかまの浦
　こく舟のつなて悲しも

顯昭云此歌はみちのおくは浦々にめてたき所々ありときけとみないみしき所ならす鹽釜の浦のえもいひしらぬに浦漕舟の綱手ひくさまこそ限なくおほゆれとよめるにや悲しもとよめるはこゝろかなしとほむるなり
六帖に伊勢歌

鹽釜のうらこきつらん舟音は聞しかこと
　くきくはかなしき

是も此古今の歌を思ひてよめるにや聞る心ときこへたり又伊勢歌

あま舟の通ひ來しより鹽かまのほのほい
　てそふおもひつきなき

それもおなしさまのこゝろにや伊勢物語云昔左の大まうちきみ六條のさとに家をまたなくつくりて住けり神無月の晦日菊の花う

つろへるさかりにみこ達おはしまさせてさけのみしあそひて夜あくるゆへに此殿の面白きをほむるに歌よむそこにありけるかたひおきなの板敷のしたにはいあるきて人にみなよませはてゝよみける

しほ釜にいつか來にけん朝なきに釣する舟はこゝによらなむ

とよみけるは陸奥國にいきたりけるにあやしうおもしろきところおほかりける我みかと六十餘國の中に鹽釜といふ所に似たる所はなかりけれされはなん此翁更に爰をめてゝ鹽かまにいつか來にけんとはよめる也けり是につけても鹽竈をめつる心と聞へたり

藻鹽草云鹽竈浦 奥州宮城郡 さひしく うら 烟絶にし浦 漕舟の綱手

悲しも 前に うきたる浮島 雪 霧 月 たく藻の烟 入めも見へぬ 久堅 白河 め

闘のあなた 立石 すなとり

八雲御抄浦部 しほかまのうら 陸 古今神御在所

東歌の内みちのく歌

古今大歌所御歌

みちのくはいつくはあれと鹽釜の浦こく舟の綱手かなしも

むかし左のおほいまうち君いまそかりけり鴨河のほとりに六條わたりのいゑをいとおもしろく作りて住給ひけり神無月のつこもりかた菊の花うつろひさかりなるに紅葉のちくさに見ゆるおり御子達おはしまさせて夜一夜酒のみしあそひて夜あけもてゆくほとに此殿の面白をほむる歌よむそこにありけるかたいおきないたしきのしたにはゐありきて人にみなよませはてゝよめる

伊勢物語第八十

鹽釜にいつか來にけむあさなきにつりする舟は爰によらなん

となんよみけるはみちの國にいきたりけるにあやしうおもしろき所々おほかりけり御門六十餘國の中に鹽釜といふ所に似たる所なかりけりされはなむかの翁更にこゝをめてゝしほかまにいつか來にけんとよめりける

按源融公乃嵯峨帝第十二子淸和朝貞觀六年甲申三月甲午加陸奥出羽按察使想夫當時之任國而遊歷其勝蹟親見其絶境者乎然後眷戀不息想像于風致追憶于壯遊而遂設別墅於六條河原院模東陸無邊之狀乎帝鄕千里之地俾人日汲海水于攝州浪華而爲生涯之娛樂焉可謂風流雅藻之翫好也貞觀十四年壬辰八月廿五日任左大臣寬平七年乙卯八月廿五日薨仍後人稱河原左大臣生前身後文人歌客屢遺吟詠于故院今載其一二於此去或曰一條帝長保二年庚子建河原院去寬平七年踰百年未詳其所據焉

貫之集河原の大臣うせ給ひて後にいたりて鹽竈といひし所のさまの荒たるを見てよめる

きみまさてけふりたへにし鹽かまのうらさひしくも見へわたるかな

本朝文粹居處部

春同源澄才子河原院賦（依次同用人事則非改之僧院爲韻）

源　順

有院無隣自隔囂塵山吐嵐之漠々水含石之磷々丞相遺幽居雖忘前主法王垂叡覽猶感後人其始也軒騎聚門綺羅照地常有笙歌之曲間以弋釣爲事夜登月殿蘭路之淸可嘲晴望仙臺蓬瀛之遠如至是以四運雖轉一賞無感春玩梅於孟陬秋折藕於夷則九夏三伏之暑月竹含錯午之風玄冬素雪之寒朝松彰君

子之德豈乎有苦有樂一是一非彼寬平之相府爲天祿之禪扉不待皐禽夜半之聲夢先絕枕豈因峽猿第三之叫淚自霑衣然猶山貌疊嵩岸勢縮海人物變兮煙霞無變時勢改兮風流不改蘆錐之穿沙抽日波鷗戲波葉錦之照水浮時綵鴛添綵是以感其事論其時登臺少熙々之樂滿院多蕭々之悲喩富貴於浮雲誠天與也比燕礫於囊日難地忍之嗟乎黃閣早闔翠微易登信脚蹈披纖草舒手控此垂藤携何兮得來遊屈曲橫首杖向誰兮談往事一兩白眉僧吾固知陵谷猶遷海田皆變何地同萬古之形體誰家至百年之遊宴强吳滅兮有荆棘姑蘇臺之露瀼々暴秦衰兮無虎狼咸陽宮之烟片々何唯涼風坊中一河原院而已哉
順聞融帝永觀中人左馬允源與子從五位春宮藏人任能登守去融公已七十餘年懷古之情宜哉

百首歌の中に月の歌とてよみ侍ける

千載秋上　藤原清輔朝臣

鹽かまの浦ふくかせに霧晴て八十島かけて
すめる月影

百首歌奉りし時秋の歌の中に

新古今秋上　慈圓

更行は烟もあらし鹽かまのうらみなはてそ
秋のよの月

家に百首歌よませ侍けるに

同冬　入道前關白太政大臣

ふる雪におく藻の烟かきたへてさひしくも
あるか鹽竈のうら

上東門院少將身まかりて後常に打とけて
かきかはしける文の物のうちに侍けるを
見いてゝ加賀少納言かもとにつかはしけ
る

同哀傷　紫式部

見し人のけふりとなりしゆふへより名もむつましき鹽かまの浦

海邊の霞といへるこゝろをよみ侍りし

同雜中　家隆

見渡せは霞のうちもかすみけり烟たなひくしほかまのうら

屏風の繪にしほかまのうらかきて侍けるに

同下　一條院皇后宮

いにしへの蜑やけふりとなりぬらん人めもみへぬ鹽竈の浦

按往時圖之畫屏以爲奇賞其清翫美稱之厚於是亦可觀

十首歌合海邊の月といへるこゝろをよみ給ける

續後撰秋中　太上天皇

しほかまの浦のけふりは絕にけり月みむとての蜑のしわさに

同戀三　よみ人しらす

鹽竈のうらとはなしに君こふるけふりも絕すなりにけるかな

題しらす

續古今春上　大納言經信

けふり立蜑のとまやもみへぬまて霞にけりなしほかまのうら

あつまにくたり侍ける時旅歌あまたよみ侍けるに

同旅　從三位行能

おなしくは越てやみまし白河の關のあなたのしほかまのうら

以此歌考之則行能亦東行之人也

同戀三　正三位知家

しほかまの浦のけふりも有物を立名くるしき身の思ひ哉

雪中遠懷といふことを
法性寺入道前關白
かきくらし降白雪にしほかまのうらのけふりも絕やしぬらん
夫木集
家集鹽釜の磯陸奥
玉葉賀　忠岑
しほ釜の磯の砂子をつゝみもて御代の數とそ思ふへらなり
續後拾遺春上　後京極
蜑のたく烟よりこそ鹽竈の浦のかすみは立はしめけむ
同　權中納言公雄
しほかまのうらのけふりの一すしにたつとも見へすかすむ空かな
新千載春上　藤原爲道朝臣
漕舟も浪のいつくに迷ふらん霞のおくのしほかまのうら
新拾遺雜上　藤原隆信朝臣
あけぬとや釣する舟も出ぬらん月に篙さすしほかまの浦
新後拾遺春上　正三位知家
春の色は分てそれともなかりけり煙そかすむしほかまの浦
同雜春　權僧正賴印
ことうらの春よりも猶かすめるや燒鹽釜のけふりなるらん
同　爲道朝臣
鹽竈の浦よりほかもかすめるをおなしけふりの立かとそみる
新續古今春上　源俊賴朝臣
いつしかと霞にけりなしほかまの浦こく舟のみへまかふまて
建保三年名所百首歌合夫木集鹽竈浦陸奥

順徳院御製
雲の浪烟の波はそれなから朧月夜の鹽竈の浦

千五百番歌合　顯昭
春かすみけさは煙にまかふらししるしもみへす鹽竈のうら

保季朝臣
はるくれはもとより絶ぬ烟さへかすみとみゆるしほ釜のうら

建保名所歌合 顯　定家
しほ竈のうらみてわたるかりかねももよほしかほにかへる浪かな

家隆
春よいかに花鶯の山よりもかすむはかりのしほかまのうら

文治三年百首和歌寄名所戀
拾遺愚草　定家
鹽釜のうらみになれて立けふりからきおもひはわれ獨のみ

最勝四天王院名所御障子和歌
同
かすみとも花ともいはし春のかけいつこはあれと鹽釜のうら

拾玉　慈鎭
しほ釜の浦のけふりのうはかすみふかき哀そたちそひにける
鹽かまのうらめし,とのみおもふそらに戀の煙も立そひにけり
なかめ侘るそらに思ひの夕けふりやくしほかまのうらめしの身や

月清集　後京極
あはれいかに心有海士のなかるらん月影か

すむしほかまのうら
それとなをこゝろのはてはありぬへし月みぬ秋のしほ釜のうら　　定家
鹽かまのうらの浪かせ月さえて松こそ雪の絶まなりけれ
此歌能寫得江月之寒夜雪之潔而可謂絕唱也與後醍醐帝雲雨遺松土御門帝緣葉見春之叡作倶須相頡頏矣
玉吟　　家隆
波のうへ松の氣色もたくゐなしけふりたなひく鹽釜のうら
千五百番歌合　　家長
山かせに花の浪立みよし野の吉野の春やしほかまのうら
御集　　後鳥羽院御製
おほかたはかすみもやらすあけほのに春をむかふる鹽釜のうら
建保百首　　行意
月影のいつくはあれと春の夜の朧月夜のしほかまのうら
俊成卿女
立まよふ烟りの波にかすみしく春のあはれやしほ釜のうら
兵衛內侍
春もまたいつか來にけん鹽釜の釣する小舟かすみへたてつ
範宗朝臣
たちのほるけふりや空に霞らんみとりもふかき鹽かまのうら
康光
見わたせはたく藻の煙立わかれかすめるかたやしほかまのうら
堀河院に土佐の藏人とてさふらひける人

みちの國のすけつねくにといふ人の女に
てくたるに
伊勢
しほかまの浦にきつらん舟の音きゝしかこ
とにきくはかなしや
返し
しほかまの浦こく舟の音よりも君をうら見
のこゝろそまされる
忍ふのなかなる中かきの歌とて
海士舟のかよひしまゝにしほかまのおのほ
いたます思ひつきにき
百首歌雪朝眺望
夫木集　寂蓮法師
なかめやる心のすゑもみちきえぬ雪の晨の
しほかまのうら
同神祇　爲仲朝臣
千早振神も子日とおもへはやけふはたなひ
く鹽竈の浦
按爲仲會任國子日所詠之歌也
最勝四天王院名所御障子
同船　後久我太政大臣
あはれとや霞につけて鹽かまのうらこく船
の遠さかるこゑ
大藏卿有家
こゝろあらは袖はいかにとあまはとへ朧月
夜のしほかまのうら
爲賴朝臣
礒に生ふるみるめにつけて鹽かまの浦さひ
しくもおもほゆる哉
建保三年名所百首
正三位家衡卿
なかむれはやそ島かけて淺みとり霞そたて
るしほかまの浦
百首　皇太后宮太夫俊成

夢にこそ都のことも見るへきに袖の浪こす
鹽竈のうら

元久元年五辻殿御會名所月　　前中納言定家卿

里分すもろこしまての月はあれと秋の半の
しほかまのうら

具親朝臣

春の月松に霞を深みとり山の端もなき鹽竈
の浦

從二位家隆卿

敷島や大和にもあらぬもろこしの春にもき
かすしほかまの浦

みちの國より中つかわしける人の返し

夫木冬　　能宣朝臣

しほかまの浦にすむとも鴛のとふことのは
をいつかわすれん

秋鹽かまのうらにやとりて

同秋　　能因法師

さ夜更て物そ悲しき鹽かまの百羽かきする
鴫の羽風に

家集ちとり

同冬　　俊頼朝臣

鹽かまのけふりにまかふ濱ちとりをのか羽
かひをなれねとやなく

承元元年長尾社歌合

同春　　權小僧都季嚴

かりかねのこゑ吹をくる春風にけふりもな
ひく鹽釜のうら

宗久紀行に日くるゝ程に鹽竈のうらに行
つきぬ神體はやかて鹽竈にてわたらせ給
ふ御前に通夜し侍りぬ此浦の東にむかへ
る入海にかけはしたかくかけて浦より遠
にうかふ有（按ニ此路今廢道）又磯きはをめくりて山
の陰をゆく路もあり蜑の家ともおほく作

りならへたるに煙の立のほるもこれや鹽燒ならんと見ゆ浦こく舟の綱手も所からにや心ひくすしならし我御門六十餘國の中に鹽竈といふ所に似たるなしと古の人のいひけんもことはりなりと覺へし

有明の月とともにや鹽竈のうらこく舟も遠さかるらん

袖中抄曰考二能因歌枕一云鹽竈宮此神は田村將軍討夷之時五萬八千人之兵粮をかしきたる竈なり千家のおほかまとそいふ

古歌　六帖はるけく君も慰わたるかな

陸奥の千家の鹽釜ちかなからからきは君にあはぬなりけり

鹽釜の前にうきたる浮島のうきておもひのあるよなりけり

引奥儀抄云みちのくはいつくはあれと云々是は世のはかなきことをみちの國にてよめりけるにや此みちの國にあるもあるにもあらぬ身なり悲しきはさなといへるなり浦こく舟はいつこともなくゆくゑもしらぬ海にうかひてこきゆくかはかなくみゆれは悲しきことに引よせていへるなりこきゆく舟の跡のしら浪なと丶よめるなり此義心ふかくはおもひよりたれともいか丶あらん能々思ふへし教長卿云みちの國にかくて有と我をはひく人もなくまかきの島のつなくやうにもひかれねはそれを見る悲しとよめる也是もいか丶侍へらんつなてかなしとこそよみたれ綱手の樣にひかれんとこ丶ろうへからす

我背子を都にやりてしほかまの籬か島のまつそ悲しき

同卿云籬の島の松によせてよめる也籬の島はしほかまの沖なり

童蒙抄云昔みちの國の守鹽釜の明神にちかひ事有てひとりむすめをゐてまいりて此神の寶殿の內におしいれて歸りにけり此娘啼悲しみて神殿よりさし出たり（色葉集たれより此明神）父是を見けるに心まとひにけり是より此神の命婦は宮司除かさらん限りはおやこたかひに見ゆましとちかへり年にふたゝひ（色葉集ひとたひ）の祭の日ならて限りは人に逢見へす件の娘の子孫今に繼てその命婦たり委見「陸奥國風俗」云々色葉集說同歌枕名寄曰千香浦島正字「可」詳或筑前國云々八雲御抄當國也夫木集ちかのうら攝津又陸奧或肥前

八雲御抄ちかのうら肥前道信歌　松葉集爲「非」陸奧國」

千香浦

後拾遺十二　道信朝臣

ちかの浦に浪よせかへる心地してひるまなくてもくらしつる哉

新後撰十一　左近中將師良

かひなしやみるめ計を契にてなほ袖ぬるゝちかのうらなみ

家隆

あかつきのちかのうら風音さへて友なし千鳥浪になくなり

新古　知家

ちかの浦に燒鹽けふり春は又ひとつかすみに成にけるかな

家隆

もろこしもちかの浦はのよはの夢思はぬかたや遠津うら人

島

面かけの先たつ月に音をそへてわかれはちかの島そかなしき

名をたのむ千香の島へをこきくれはけふも

鹽氣にくらしつる哉

右七首松葉集作者分之爲肥前國

或人のもとにとまりて侍けるに書は更
にみくるしとて出侍らさりけれはよめ
る

後拾遺戀三　藤原道信朝臣

千賀の浦に浪よせかくる心地してひるまな
くてもくらしつる哉

續後撰戀二　よみ人しらす

みちのくのちかのしほかまちかなからから
きは人にあはぬ也けり

同戀三　山口女王

我おもふ心もしるくみちのくのちかのしほ
かまちかつきにけり

安嘉門院甲斐遠き所へまかるよし申おこ
せたりける返事に

續後拾遺前　前大納言爲氏

よしやたゝちかの鹽竈ちかなからかひもな
き身は遠さかるとも

女のもとへ近き程にあるよし音信て侍け
れはこよひなん夢に見へつるは鹽竈のし
るしなりけりと申て侍けるにつかはしけ
る

風雅戀二　前大納言爲家

きゝてたに身こそこかるれかよふなり夢の
たゝ地のしほかまのうら

返し

同　安嘉門院四條

身をこかす契はかりはいたつらにおもはぬ
中のしほかまのうら

新續古今春上　權大納言實量

秋霧の籬の島のへたてゆへそこともしらぬ
ちかの鹽かま

六百番歌合　顯昭

へたてける籬の島のわりなきに住かひなし
やちかの鹽かま

　千五百番歌合　　前大納言忠良

松かせの夏たけくまのすゝしきは梢に秋や
ちかの鹽竈

夫木春　　右大將道綱母

みちのくのちかのうらにてみましかはいか
につゝしのおかしからまし

　此歌は或人陸奥國におかしき所ゝ繪に
かきてのほりて見せけれはよめると云
云

　第三親王家十五首家

同浦　　從二位家隆卿

もろこしも知家のうらはのよるの夢思はぬ
中に遠津舟人

　洞院攝政家百首

同　　大納言經通卿

たち迷ふ煙も浪にまかへつゝ名のみそちか
のしほかまのうら

　元永元年十月内大臣家歌合　奥州名所 鹽釜浦

　　按一首趣意不可曉

同　　藤原忠隆

浦にゐていのちをかけしものゝふやかすさ
たまれるちかの鹽釜

　後京極攝政家十首歌合旅泊千鳥

同　　寂蓮法師

都おもふ夢路はしはし友千鳥音は枕にちか
のうら風

笆籬島　或作間籬島或作笆島

千家以東十八九町白銀盤上擎一青螺島上有
神祠曰之笆籬明神其東北則有蟾蜍小蝸解鞍
魏闕侍嬪宰相鴉洲浮龜鶴舞姑射箕輪鬮鎧兜
嫠及筆架潭等島嶼汀洲相分而列于波間其北
山後則芦洲濱凍梨隈翠杉濱白洲濱水沙田等

幽灣曲隈漸次相續其島嶼各依形勢而設其名就中如侍嬪島其狀相似婦人被巾幘而朝宮掖也闘鎧兜鍪二島亦各彷彿其戎服於是稱其名焉其餘亦皆如此

袖中抄古歌云

みちのくの千賀の鹽竈ちかなからからきは君にあはぬ也けり

此義こゝろふかくはおもひよりたれといかゝあらん能々思ふへし

敎長卿云みちの國にかくてはあれと我をは引人もなく籬の島のつなくやうにもひかねはそれをみるかなしとよめる也

是もいかゝ侍へらん綱手悲しとこそ讀たれつなてのやうに引れんとこゝろうへからす

我背子を都にやりて鹽かまの笆島のまつそ戀しき

同卿云籬島の松によせてよめるなりまかきの島は鹽釜の沖なり

藻鹽草云籬島奥州卯花　常夏の花　しほやきこゝろも　あまのいさりの火　秋霧の籬の島の梅の花　貝きくの白露　わかせこを都にやりて

あつま歌の中みちのくうた

古今大歌所御歌

わかせこを都にやりてしほかまのまかきか島のまつそ久しき

さた國の朝臣のみやす所きよかけの朝臣とみちのくにある所々をつくして歌によみかはしていまはよむへき所なしといひけれは

後撰戀二　源淸蔭朝臣

さてもなほ笆のしまのありけれはたちよりぬへくおもほゆるかな

按右唱和可謂風流之雅會也實足以備東奥之故事遺宮掖之奇玩矣惜乎哉世不傳其全篇焉然以幸有此一首而識有往昔雅

筵之一好賞可喜

拾遺夏　　よみ人しらす

卯花のさけるかきねはみちのくの籬島の浪
かとそ見る

陸奥守に侍ける時忠義公のもとに申送り
侍ける

家集には堀河のおとゝの宮の權太夫と聞へし時みちのくによりきこゆと有

新勅撰雜四　　源信明朝臣

あけくれはまかきか島をなかめつゝ都戀し
き音をのみそなく

以歌意考之則斯人之在任國其居館在鹽
竈邊乎視朝暮字可以觀焉

名所歌よみ侍ける中に

續後撰雜上　　前大納言爲家

みちのくの籬の島は白妙の浪もてゆへる名
にこそ有けれ

夏歌中に

續後拾遺夏　　曾根好忠

ゆふやみにあまのもしほ火と見へつるは笆
島の螢なりけり

新續古今秋下　　權中納言實量

秋霧の笆の島のへたてゆへそことも見へぬ
千家のしほかま

むめのはな貝

歌枕　　俊頼朝臣

春風に浪や織けむ陸奥の籬か島のむめのは
な貝

百首歌舟路卯花

同　　家隆

卯花の咲か籬の島人の衣をほすか舟よせて
見む

名所歌冬部

御集　　土御門院御製

霜寒み笆の島の冬枯に浪の花もや色かはる

らん
秋風集
歌枕　法印公朝
長月のきくのしら露淵とならは籬の島は外
にもとめし
月
同　家隆
こゝろから籬の島のまつとたに都につけよ
鹽竈の月
同　知家
海士の住笆の島の浪のまにしほやき衣かけ
てほすなり
夫木集　よしのふ朝臣
白河院にて藤花を翫といふことを
うしろめた末の松山いかならん籬の島をこ
ゆる藤なみ
此歌は梨壷に和歌の料とてをかれ侍る

に傍なる内侍のかみさらしつふねより
藤花を物よりおこして侍けれはよめる
と云々
まかきのわたり陸奥
同家集　大納言師氏卿
みちのくの笆のわたりをしなへてわかめか
りにと海士も行かふ
大入道殿御賀の御屛風笆の島　あさかの沼 木の松山
家集　平兼盛
よる浪の数をもしらす成にけり籬の島のま
ちかけれとも
のこりのきくをおしむといふこゝろを
夫木集　権中納言定家
別れにし秋ののこりてきくの花匂ふまかき
の島に有けり
是をきゝておなしくよみける
同　権中納言通俊卿

過ぬとておしみしきくの咲のこる笆の島にとまるなりけり

永久四年九月雲居寺歌合菊

同秋　覺盛法師

秋はなほ立そふ浪と見ゆるかな笆の島の白きくのはな

同夏　源重之

しら浪の笆の島に立よれは海士こそ常に誰とかむれ

六百番歌合近戀みちのく

同　法橋顯昭

へたてける籬の島のわりなきに住かひなしや千家のしほかま

海邊松

同　從三位基雅

しほ竈の笆の島のそなれ松浦さひしくも年ふりにけり

いさり舟か　惠慶法師

海士の住籬か島のいさり火に色みへまかふ常夏の花

戀歌の中に

經平卿

松たてる笆の島の名にそきくかはらぬ色の人のへたては

家集　俊惠法師

春來れは笆か島にかけてほすかすみの衣ぬしやたれなる。

同　源順

いつみにもあらぬ籬の島ちかみ浪の越つゝもるとこそきけ

草菴集　頓阿法師

夕霧の笆の島や是ならん浪にそはれぬしほ竈のうら

玉吟集　忠度

卯花と浪やみゆらん時鳥籬か島に來つゝなくなり

鼻節神社

笆籬島以東阻海上二里餘嶺上有神祠郷俗曰花潭神社其山下曰花潭濱當本社東南樹林森々祠西則有吉田東宮兩社共鹽釜末社也其下斷岩臨海地曰神明磯東則有三島其一曰順風島其二曰飛雀島其三曰英靈島北濱曰瑤洲皆以魚蝦而爲業焉朝夕手網罟身蓑笠出沒烟濤地也南山曰新羅峯山外海濱曰金色汀其西南曰白沙洲其西山中有湖水曰阿伽波湖以其湖在山阿空濶之地而名之傍有巨岩曰立石

鹽釜社家舊說云岐神先天降于鼻節濱延喜式所謂鼻節神社是也猿田彦大神御形以鼻節曰鼻節神社而後遷座于鹽釜浦云鼻節神社今爲鹽釜末社

日本風土記曰鼻節神社圭田四十三束所祭多力雄神也舒明二年始奉圭田行祭事（異本説不合）

松島

南極千賀北石磯洲鏡光天影閲古今其左則有五大堂寶珠磯通舸磯龍首巖白翁島其右則有龜首巖觀月墩觀瀾亭破浪灣荒雷汀幽篁浦小松崕青春磯畫屏島千松島等陽德瑞岩圓通天麟寺院隱于蒙密山王稻荷八幡善逝堂社繞于後山復羅解羅般若藏經翠柳仙冠九子綵繪島分布于其前遠望之地宮戸寒澤鳳翔島納養島桂華島細石濱浮于烟波其西南姦盜放火鎖燈吹火小島若點綴放馬島峙翠璧橋柱巖擠石梁其他以百數焉其近者則雙生並立布袋大黑相對觀子多門先後伊勢小町進退嵩鐵兜鍪等羅列皆入吟眸白鷗飛銜啄其洲綠鴨群鶩集其涯浩々烟波歸帆稍有無累々島嶼釣舟忽出沒萬松藏月斜碎葉間之金遠汀含風鮮崩江上之雪王粲遊海賦所謂若夫長洲別島旗布星峙桂蘭

叢于其上珊瑚周于其址者亦彷彿于茲而寔天下之絶景古今之勝迹可謂扶桑之一滄洲也向陽林氏所謂松島之外有島嶼若干殆如盆池月波之景境致之佳與丹後天橋立安藝嚴島爲三處奇觀也僧師錬曰松島其地東溟之濱小嶼千百數曲洲環浦奇峯異石天下之絶境也是亦想可謂能縮勝狀於數字而無遺漏者也天下絶境之稱未爲過之

松島記

源　君美

天下名山水世之所稱可勝數哉而號爲神奇靈秀者多在東西焉萬物之生發育於東摯成乎西蓋天地英靈之氣所鍾不在乎此必在乎彼理或然也司馬遷曰禹本紀言河出崑崙々々其高二千五百餘里日月所相避隱爲光明也其上有醴泉瑤池今自張騫使大夏之後也窮河源惡睹本紀所謂崑崙者乎故言九州山川尚書近之至禹本紀山海經所有怪物余不敢言之也美於蓬萊言之亦然其物禽獸皆白黃金銀爲宮闕皆是燕齊怪迂之士夸誕虛妄之言今夫我東方國於萬國之東去此已東寸土尺壤似稊米粟粒之不在則知古之所謂日下暘谷蟠木扶桑太平之人君子之國及神山群仙之居皆是我式國之中或今古異稱或方言殊譯不可得而考乃者文廟之世美奉明旨屢遇西洋喎蘭地人以訪四方風俗喎蘭地人者以善游布地名天下焉且觀其國所鏤萬國地形員毬半毬等圖略聞其說我在東方則大地上下之極際而我東方之東一邊地轉出於彼所謂地平線下蓋東陸瀕海之處古人以爲天地奥藏是已美竊以謂是則陰陽晝夜之所分而衣被日月之精華最爲萬國之先易曰元者善之長也天地之至美必其在乎此及觀夫鹽竈松島等圖誌則知其果然但其地名古未之聞

天朝地誌散亡久無由考詳已今據圖誌其地則在大海之濱而岸回濱連抱四合隱若大環獨歛

其東十二塩竈之浦在其南隩而有左右二社蓋是太古神聖始作魚塩之利以贍民用後世尸而祝之社而稷之舊稱之曰志波日子神社方言志波則塩也日子乃古之尊稱

皇家祀典亦與焉郡名宮城蓋神聖之墟也去此水行一十二里而到松島々々在其西灣海中洲嶼大小凡百赤崖白沙棊布星列登高望之則鬱々蒼々皆是青松之所蟠根也若夫雲烟開斂濤瀾起伏鳧雁飛鳴於其前魚龍出沒於其下而四時朝暮雨暘晦明變化倏忽不可盡狀古之所謂蓬瀛之洲其奇如此耳而前人之述亦備余復何言雖然有一焉東陸之州古稱其俗勇悍好相殺略美嘗聞東方之人仁也其俗尚如此何其反也古者是州爲毛人所據也久漸染之弊或其然也仁者必有勇豈是其天性歟昔岐豐之地周人用之興起二南之化秦人用之有併呑八洲之氣顧其導之之術如何耳況州之人士出乎其性者哉孔子曰齊一變至於魯々一變至於道安知其風俗之變罔俾其山水專美於天下哉若其登臨遊覽之勝以此自多而已非美之所望也於是乎言夫松島之傳美名古來言詩者有之其亦庸才釋門之徒耳不足以吐物華顯地靈於文章則寥々乎拂地也特斯地者天下之絶境古今之名區擅美乎闔國乎實不可無記文焉於記文亦不可不擇海內之名手而遺之後世焉於擇其人也當今之世舍先生而又誰也然先生之於人篤實謙退請之豈容易得之哉如今幸得此一篇而收乎茲夫自古寫景述情者徒不過比之洞庭擬之西湖今若先生之作一篇之中呑許多曠濶渺茫之地而無餘蘊矣以此直爲古之稱蓬瀛者珍奇神妙金玉之遺音實可驚也於是乎我國華愈熾地名益新嗚乎地得人而照名依文而長不可不知焉

藻塩草松島奥州　あさりするあま　いそに
むれゐるあしたつ　あふ弥

月をまつ島なとゝそへたり衣うつこゑ
千島紅葉月苫屋やく鹽のけふりの
末もしほ木をしまかいそとも

至陸奥見松島又海中有奇島往昔日本武尊至此島國首國民崇之言御島

和歌本記下輿歌第四交　　上宮太子

松島哉御島者不見止日標方之月之都之外于尋者

本云是五句成篇意製之體也

或人の子三人にかうふりせさせたりける又の日いひつかはしける

詞花賀　　清原元輔

松島の磯にむれゐる蘆田鶴のをのかさまさまみえし千代かな

重之家集にはむねたるかみちの國にて子とものかうふりしたるつとめて三人重之の歌とす

八月十五夜和歌所にて歌合に海邊秋月といふことを

新古今秋上　　鴨長明

松島や鹽くむ海人の秋の袖月は物おもふならひのみかは

建保六年内裡歌合戀歌

新勅撰戀三　　前内大臣

まつ島や我身のためにやく鹽のけふりのすゑをとふ人もかな

海邊擣衣といふことを

續後撰秋下　　權律師公猷

松島や海士の苫屋のゆふ霧に汐かせさむみ衣うつなり

續古今秋下　　權大納言實雄

まつしまやあまのもしほ木それなからこりぬ思ひにたつけふりかな

千五百番歌合に

同　　土御門内大臣

浦かせや夜寒成らむ松島や海士の苫屋に衣

うつなり

同戀四　人丸

逢事はいつしかとのみ松島のかはらす人を戀わたるかな

以此歌考則詠松島者見于人丸是亦可以考證

題しらす　よみ人しらす

みちのくにありといふなる松島のまつに久敷とはぬ君かな

蓮生法師松島へまうて丶法門なと談して歸りけるにつかはしける

新後撰釋敎　見佛上人

長き夜の闇路に迷ふ身なりとも眠覺なは君を尋ねん

返し

同　蓮生法師

やみ路には迷もはてし有明の月松島の人のしるへに

人の許へつかはしける

玉葉戀一　清少納言

便あるかせもやふくと松しまによせて久しき海士のはし舟

後京極攝政内大臣に侍ける時家に十首歌よみ侍けるに秋

續千載秋下　前中納言定家

松島の海士の衣手秋くれていつかはほさむ露もしくれも

新續古今雜上　前大僧正實助

つれなくもいまは何をかまつ島やをしまぬ老のなみをかさねて

名所百首歌合　順德院御製

逢にかふる契をのみそまつ島やおしまれぬ身のならひなれとも

定家朝臣

更る夜をこゝろひとつにうらみつゝ人松しまの海士のもしほ火

家隆朝臣

海士の袖あらそひかねて松島も下紅葉する秋そ悲しき

弘安元年百首みちのく

夫木集　後九條内大臣

千里まて枝さしかはす松島はいつれの木よりなりはしめけん

文集百首望_二春々未_一レ到可_レ在_二海門東_一

同春　慈鎮

みちのくや春まつ島のうらかすみしはし名社の關路にそみる

雲葉

同　上東門院兵衛

松島にかゝれる浪のしからみと見ゆるは藤のさかり成けり

詠_二藤花于此島_一與_二後篇松島橋ノ歌_一可_二併見_一

家撰歌合

同言語部　後京極

松島や浦かせさむき磯寢哉海士の刈藻をひしきもにして

浦島子

同島部　爲相卿

常世には又もかへらぬ松島やさてみつのえの浪にかそへむ

秋風

歌枕　法橋春誓

松島や心あるあまの濱ひさし浪の軒端に千とりなく也

慈鎮

松島やかつきする海士を尋てもくらふるそては色そかはれる

建保百首　俊成卿女

逢まてとそら行月をまつ島の浪より外にとはぬ袖かな

同　範宗

しら浪のしらすや君を松しまになを立かへりかくる心を

源氏須磨に京へ人出したて給二條院へたてまつり給ふと入道の宮とはかきもやり給はすくらされ給へり宮には

源氏

松島の海士の笘やもいかならん須磨のうら人しほたるゝころ

人の心をもむ氣もあなかちなりし心のひくかたもまかせすかつはめやすくもてかへしつるそかしとあはれに戀しうもいかかおほし出さらん御かへりもすこしこまやかにてこの頃はいとゝ

藤壺

しほたるゝことをやくにて松島に年ふる海士も歎をそつむ

同夕霧になよひたるさそともぬき給ふて心ことなるをとりかさねてたきしめ給ひめてたうつくろいけさうして出給ふを雲井に見出してしのひかたくなみたの出くれはぬきとめ給へるひとへのそてを引よせて

雲井

なるゝ身をうらみむよりは松島のあまのころもにたちやかへまし

なをうつしひとにてはえすくつましかりけりとひとりことにの給ふを立とまりてさもこゝろうき御こゝろかな

夕霧

松島のあまのぬれ衣馴ぬとてぬきかへつてふ名をたゝめやは

松島八景　　釋鵬雲

松島秋月

松島十分秋留連皎月洲金波暉桂楫玉水曜蘭舟啼斷猿崖白眠鷲鷺石愁歸來人不寢猶上庾南樓

雄島夕照

雄島一洲秋沈々返照幽斜餘江水寂䕺射海雲愁柳縣漁罾曝松村暮磬浮黃昏人不見沙岸對閑鷗

梅浦早春

梅浦一枝春早機深雪津傍磯疎影瘦含暖晴香新月照羅浮夢花餘隴驛眞江橋多落盡漁笛苦騷人

霞浦歸雁

江南歸雁春燦々彩霞新風浦殘聲遠煙汀數旗屯客懷鄉里信燕背塞雲身茫渺平沙岸向北別香蘋

瑞巖曉鐘

疎鐘殘月寺霜氣滿江天淵澆南溟外紆餘東海邊鶴林添露警僧窟與禪圓菱市三竿日衆漁齋釣鮮

竹浦夜雨

一夜千竿雨砂汀蕭颯寒漁燈霑短焰釣笛促凄酸松咽湘琴怨蘭鳴楚佩難曉光烟竹浦餘滴灑琅玕

鹽竈暮烟

秋江殘雨裡鹽竈暮烟微慘淡籠通岸瀰漫罩石磯曳寒松島翳掠水葦洲晞浮翠蒼溟外宿砂功未非

江縣殘花

獨愁三月暮跋涉惑西東春盡吳門雨花飛楚岸風日添汀草綠時減落桃紅江縣烟霞裏啼鶯處々空

鹽竈八景

鹽竈暮烟　　千賀漁父

黄昏千賀浦鹽竈簇幽烟柳塢涵風翠花崖擁露鮮曳寒分斷雨和霧罩行船嘗預融公景賞華遷洛川

離島斷雨

離島陰雲暖凄然斷雨寒沙鷗飛夢溼洲鷺潤翎乾潮逆松巖落波侵蘆岸寛釣翁始脫笠仰霽坐磯端

社頭賞春

山社十分春參差花柳新綠堆粧燕界紅鬧餙鶯隣泡露芳姿淨迎風艶恨顰一枝强不折則可奠明神

法蓮臨潮

飛樓聳碧空萬里睇春潮玉穴渦生水銀山湧接青鯤威洲荻振雷怒岸松搖空逞雄豪望倚欄眼界遙

江郷春雪

二月雪江濱整斜冷艶新寒盧瓊葉亂斷荻玉花匂草禁烟汀碧梅妬野水春驛樓吟斷處漁笛過雲津

前津泊舟

秋夕又春晨征船泊此津棹歌分土俗郷酒忘悲辛雨卜蓬窻月風禱江社神雁雲歸路遠瞻望五湖人

松浦秋月

凄涼松浦秋明月滿三洲鶴水歸仙夢猿雲篠客愁寒光千里海爽氣五更舟枕籍篷中睡還思赤壁遊

壺碑懷古

將軍藤惠美疇昔示蛍民字暗添新墨行銷苦積塵賴朝騷雅古宗久遠遊覩緬想天平歲讀碑隨涙頻

松島浦

南至栖霞潭北石磯洲外宮戸寒澤桂花納嚢島

嶼恰如載之白銀盤上其島陰乃大洋也渾謂之松島浦其間江上許多之洲渚波間無數之螺髻綺之立棊之布過者毎凝眸囑者還驚神

藻鹽草浦部松島浦奥州 磯の田鶴 擣衣 海士の水鳥 紅葉

宗久紀行寺の前南はしほかまのうらにつゝきて千島なといへとなをそのかきりみへす或は沖の遠島とて海をへたてゝ遙かなりその間に島おほく見へたり

夫木集　　　　顯昭

有明の月に夜舟をこきゆけは千鳥鳴なり松島のうら

能寫得江上夜泊之狀而如對畫中

松島橋

未詳何地在五大堂御島外無架橋處五大堂有二短橋兩岸數仭其横梁一斷一續空其間橋下水碧深千尺臨者眩目渡者傷神人或比之銷魂橋岩畔多長松盖往昔有藤蔓而花陰臥橋上歟御島亦有長橋是亦前後有松林但考之紀行則宗久來過之時縄肩舟而通于雄島地焉蔭幽徑之像乃雄島尤近矣

良玉　　　　民部卿忠教

ふみわけてわたりもやらすむらさきの藤咲かゝる松島の橋

松島之於藤花此咏之外見前篇上東門院兵衛歌可併考且夫和歌者流詠藤花者必繋之以青松焉矧於萬松鬱々地而豈無繋藤蔓者乎故未松山松浦島之作多帶藤化而詠之藤花之蔭長橋者豈不雅興耶

松島寺

乃今瑞巖寺是也相傳仁明帝承和五年戊午始開台宗而建此寺或曰其始祖乃法身也法身其氏眞壁其名平四郎者爲浮屠而入于宋受法于徑山無準而歸朝所開地也北條相模守時頼修造之號松島山圓福寺先是稱松島寺爾後稍荒廢慶長

十年乙巳我黄門君造替寺院新起土木令中村周防丹野甚右衛門大塚善内鈴木左馬介武藤左傳次等監造焉上梁乃梅村彦左衛門家次紀州良匠刑部左衛門國次者勤之是歲六月癸未落成輪奐壯麗極其美焉請僧海晏以住改曰瑞巖圓福禪寺僧房十餘宇排之左右左傍龍月護國寶珠圓同大光聯芳法雲其右萬松江月青松傳曲紹隆得住合十區其地也青山環其後蒼瀛湛其前寺畔有岩洞曰法身窟始祖坐禪于此左方曰陽德院右方有天麟圓通二院寺門左右皆市店也比屋俱設旅舍搆高樓望微茫于欄外挹幽趣于坐上水濤艤舟地曰之繫舟汀右有觀瀾亭太守遊觀之地也左有五大尊堂其東溟瀛浮群島遊眺壯觀之美豈夫靈隱而已哉此亦樓觀滄海日門聽浙江潮來待駱賓王之句焉

釋法身

遠上徑山分風月歸開圓福大道場法身透得無一物元是眞壁平四郎

元亨釋書曰釋法心過壯歲出家不知文墨聞衲子之稱宋地禪行駕商舶入臨安徑登徑山見佛鑑禪師鑑於圓相中書一丁字示之心止席下單提研究性堅硬耐禪坐骨臀腫爛而不撓者九年初持丁相於萬物中現丁字心不屑漸經歲餘席始得平穩歸朝居奥州松島臨終先七日謂徒曰某日當取滅然心無恙侍僧不信到斯齊罷坐禪床侍僧乞遺偈心元不克書即喝曰來時明々去時明々是箇何物止而不言後句侍僧曰猶欠一句望足之心應聲喝一喝泊然而化

宗久紀行云しほかまより浦つたひに松島にたつね行けるに心ある海士の住家と見へたり又此所に圓福寺とて寺あり覺滿禪師開山の地なり僧徒百人寺住すとかや

開之寺僧法身法心本一人而心當作身蓋師錬傳聞之謬也又宗久以覺滿而爲開山者非

也考寺院歴嗣則覺滿自法身五世之住持向住法雲菴後爲瑞巖寺住僧是亦鄕人妄傳說俾宗久誤者也

按浮屠氏每々主張達摩所謂不立文字一字不說敎外別傳之語而甚誇說是乃爲雖文盲之徒不學之者無弊于傳法悟道之證焉故以不知文墨而贊法身夫文字者貫道之器也唐李漢所謂不深此而道至者不也者信乎哉彼徒記六祖惠能傳法之事而擧無一物之偈令熟視之豈不知文字者之作乎格律備而字熟句老何不知字者如此夫吐秀逸乎況述心法傳授之正味乎夫釋迦一生之間血口燥舌說八萬諸經抑是何爲哉爲文字本無用之物而從令文盲無害于傳法則其所說經綸者果是妄言耳實是捉風弄影之事而豈足信之哉若有不因文字猶悟入醒覺之術則釋迦一生之所說達摩終身之所述者及古來所傳祖錄法語之屬徒反古堆覆醬紙而已縱令淺近之技術非文盲之輩能所會得焉況傳法悟道之重乎且法身坐禪之間骨臀腫爛而不撓者九年可謂辛勤之人然今以人倫日用之大義議之則抑是何益耶是中庸所謂不可强而强者也浮屠之行每々皆僉豈不誤哉

釋月潭

聞說松島勝山水甲東州仙臺城郭近瑞氣映滄洲民物俱康阜藩侯德政優宅興古梵刹萬礎聳瓊樓見佛遺蹤在法心道蹟留殘碑宋僧字蘚蝕歲月悠膺翁去未久慈化播遐陬繩々芳裔夥董席振嘉猷戢々犀顱萃安禪不懈脩巨鏞撞旦夕梵放薄雲頭寺門臨江潤烟波豁兩眸小嶼千百點星布翠螺浮松梢飛白鶴洞口臥蒼虬鹽竈連汀渚土腴草木稠巖陰藏蜑舍磯畔繫漁舟天然一幅畫摩詰筆難收蓬萊與方丈奚須別處求聞勝欲呼策迢々驛路脩旣之淩雲錫又無縮地謀

山聰清夜夢且此作神遊

登圓福寺方丈　釋恒寂

圓福古叢正始臻前臨海嶼後嶙峋雄基本自法心創結搆重因道腨新榻上草花誰巧彫壁間圖畫世爲珍可容八萬四千座環堵空寛床絶塵

幽竹浦

在松島寺以南其北畔水汀曰破浪灣荒苫汀是古人之所謂雄島之苫屋荒波浪者乃斯地也皆相連而近乎雄島矣有寺曰法性院幽閑而來客稀也過寺門者經象鼻岩青春磯之苔徑而自是入于御島

贈竹浦老師　田宗魯

竹院着絃歌吟中佳趣多高僧忘物我招客臥烟霞

和祇流老師韻　同

幸免簪纓傳此身從心所欲可逢春暫離城市筌簀遠數間江山魚鳥親波上月浮如躍壁花間風過豈揚塵更無閑夢到魏闕莫比晉朝道隱人

同和六言韻　同

豈無羅襪凌波堪聆金衣弄歌心醉烟嵐千日歸程驚落花多

御島　名所集作雄歌枕作小今從見佛傳

在竹浦東南經水汀踏白沙而行七八町右旁巖上松千樹左邊屏風島落陰涌翠過長橋而入幽徑苔蘚露深岩崖路滑上有坐禪堂傍有一亭號把不住軒道腨住昔栖遲之處此地乃見佛上人之故蹤也塔婆浮圖矗々而植古墳荒塚累々而列其北岸有富千代遺跡自是過細徑而有骨堂向西南壙底徹泉收死者之遺骨散髮等之地也其堂後有賴賢古碑其地也老松五六株海風吹淅瀝斷岸數千似江波來弄騰其北渚也幽沈寂寞沙汀來客稀松杉寒鴉集殆非凡俗塵囂之地焉登島上者必發悽愴悲哀之情矣

元亨釋書曰釋見佛居奥州松島其地東溟之濱

小嶼千百數曲洲環浦奇峯異石天下之絶境也其尤者曰千松島佛結茆而居精勵苦錬一十二年其間誦法華滿六萬部其後不計數專一持誦世曰淨六根役使鬼物屢顯靈應天仁帝（鳥羽帝年號）聞道譽賜佛像寶器而旌異之依茲土人改千松曰御島蓋境得人而顯又人因境而傳也年八十二終

宗久紀行に南へむかへる山陰の磯きはに石を高くたゝみてほそき路あり海のきはをつたへゆきて見れはすさきに松生かたふきて木末を浪にひたせり行かふ舟はさなからしつえの綠をゆくこゝ地そするそれよりすこしへたてゝ小島あり是なむ御島なるへし小舟に綱をつけてくり返しつゝかよふ所なり此島に寺あり來迎の三尊并ひに地藏ほさつをすゑ奉れり又を島より南一丈はかりさしいてゝ松生ならひて苔ふかく心すこき所あり此國の人はかなく成にける遺骨を藏る地なり（是乃骨堂）今その外法心の人のきりたるもとゝりなともおほく見ゆいとゝあはれに心すみておほへしかは二三日とゝまり侍りき

たれとなき別れの數をまつしまやをしまかいその涙にそみる

按師錬依一山說而述地名來由曰千松島鳥羽帝感見佛苦錬有賚賜來改號御島今以重之歌始並稱松島御島者考則重之乃村上帝朝人先見佛已百五十餘年豈始于見佛哉且據和歌本記則其名始于日本武尊而稱之者久矣然先是有地名而或書雄島或書小島者至見佛之時榮天子之賜而以御字易之耶想夫較松島之多景則用小字比群島之磊落則用雄島字乎識者辨之

藻鹽草雄島わうしう　月れ　沖のつり舟あまのぬれ衣　しかく

ちまくらとまや　岩　秋の夜の月や　ちとり　松

薩　天錫

風光招我海山阿拍手吟魂奈何御島烟波松島月到茲捲舌富摟那

上御島　　田宋魯

山路高低花縦横鐘聲時雜宿禽聲峯頭徐上春宵月影落波心一段清

別松渚自二一字至二七字

春々鳥集花新山谿暖歌吹頻酒伴時至詩徒日親曾無垂釣客或有閑棊人景老何須惱意境清儘足怡神屈指方驚三月盡閑遊不是惹紅塵

又

素愛山中宿龍泉茲暫留藏花孤島轉映水數峯流磨墨時題壁捲簾日上鈎忽思妻待我清興未酬休

帶刀に侍りし時春宮に歌めしけれは戀

後拾遺戀四重之集　源重之

松島やをしまか磯にいさりせし蜑のそてこそかくはぬれしか

歌合し侍けるとき戀の歌とてよみ侍ける

千載戀四　殷富門院大輔

見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす

八月十五夜和歌所歌會に海邊秋月といふことを

新古今秋上　宮内卿

こゝろあるをしまの海人の袂かな月やとれとはぬれぬ物から

和歌所歌合海邊月を

同　家隆朝臣

秋の夜の月やをしまのあまの原明かたちかき沖のつり舟

土御門内大臣家にて海邊歳暮といへるこゝろをよめる

同冬　藤原有家

行年ををしまの海士のぬれ衣かさねて袖に

浪やかゝらん

守覺法親王家に五十首歌よませ侍けるに

旅の歌

同旅　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

立かへり又も來て見む松島やをしまの苫や

浪にあらすな

按小島之詠以此歌而爲絶唱焉故和歌者

流爲制詞以賞之來

百首歌奉りしに

同　　　　　　　　　　　式子內親王

松かねのをしまか磯の小夜枕いたくなぬれ

そあまの袖かは

新勅撰春上　　　　　　　前參議親隆

松しまやをしまかいその夕霞たな引わたる

あまのたくゐは

續後撰戀二　　　　　　　鎌倉右大臣

浮名のみをしまの蜑のぬれ衣ぬるとないひ

そ朽ははつとも

續後撰戀五　　　　　　　西園寺入道前太政大臣

憂名のみをしまの海士に身をかへていかに

うらみむ人のこゝろを

海路時雨を

同　　　　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

袖ぬらす小島かいそのとまりかな松風寒み

しくれふるなり

千五百番歌合に

續古今雜中　　　　　　　大藏卿有家

かぜふけは海士の苫屋のあれまくもをしま

かいそによする浪哉

海月と云題をよませ給うける

新後撰秋下　　　　　　　今上御製

もしほ燒烟も絶て松島やをしまの浪にはる

ゝ月かけ

千五百番歌合に

同冬　皇太后宮大夫俊成

松島やをしまか磯による浪の月のこほりに
千鳥なくなり

按凡題名地者身在帝都而足未履其地以傳聞而施之想像億度故其與地景齟齬背馳者往々皆僉然今俊成卿詠此地者凡三首皆暗合其土之風致可謂擇而精語而詳者實歌林之冠冕者也

遊義門院

つれなくも猶逢事を松しまやをしまの磯と
そてはぬれつゝ

藤原親盛家歌合におなしこゝろを

玉葉冬　勝命法師

夜舟こく瀬戸の鹽合に月澄て雄島かいそに
千鳥しはなく

續千載春上　後京極

のとかなる春の日影にまつ島やをしまの海
士も袖やほすらん

山階入道左大臣家十首歌に島月

同秋下　津守國助

浪かへる小島の苫屋秋をへて荒るゝもしら
す月やすむらん

同　前參議忠定

松島や雄島の海士のすて衣思ひすつれとぬ
るゝ袖かな

同戀二　正三位知家

まつ島やをしまのあまに尋みんぬれては袖
の色やかはると

雲葉雜歌　従二位家隆

あけわたる雄島の松の木の間より雲にはな
るゝあまの釣舟

此歌能寫出曉天島外之狀先是屢投宿于松島水汀曉來側臥于樓上而開曙窓于江

頭ニ則毎々必得ニ此佳趣一
新千載戀一　前中納言有光
憂名のみをしまの海士の夕煙たてしとすれと浦かせそふく
新拾遺戀三　醍醐入道前太政大臣
逢見ても名こそをしまの海士人はけさのおきにそ袖ぬらしける
新續古今旅　有家
浪かゝるをしまか磯の浪枕こゝろしてふけ八重の鹽かぜ
前大僧正實助
つれなくもいまは何をかまつ島やをしまぬ老の浪をかさねて
建久四年六百番歌合寄ニ海人一戀
拾遺愚草　定家
そてそいまは小島の海士もいさりせんほさぬたくみに思ひける哉

堀河百首　俊頼
あらしふくをしまか磯の濱千鳥岩うつ浪に立さはくなり
夫木集下同　從三位保季卿
こその秋越路もおそくまつ島や春はをしまのかへるかりかね
建保八年八月八幡宮歌合海邊雁
俊成卿女
まつ島やをしまかいそになく雁のなみたもぬらす海士の袖かな
承元三年長尾歌合
同　法印猷圓
たれこゝに秋風ふけは松島やをしまの浪にかへるかりかね
題不レ知
同　源季廣
興津かせやゝ寒からし松島や小島の浦に千

鳥啼也
　磯千鳥
同　前中納言定家卿
誰と又夜ふかき風をまつ島やをしまの千鳥
こえさはくなり
　長承三年九月顯輔卿家の歌合紅葉
同　藤原忠兼
ちりぬへき小島か磯の紅葉々にあらくもよ
する沖津波かな
　家集島上櫻　源仲正
しほかせにをしまのさくら花かけて浪のみ
たてもなくてちりぬる
　平野社歌合月前千鳥　如覺法師
さしのほる月の出鹽にさそはれて小島の千
鳥浦つたふなり
　承元三年長尾社歌合　參議雅經卿
名殘をや雄島の浪にたつ鴈のをのかつはさ

もしほれてそゆく
　承元三年海邊歸鴈（をしまのうら 陸奥又常陸）
　權少僧都白巖
行鴈の名殘をしまのうらみても袖しほたる
る春のあまひと
　家集松風曉冷といふことをいせ又陸奥
　神祇伯顯仲
曉やをしまか磯の松かせに衣かさねよゆら
のうらひと
玉吟　家隆
かへる鴈小島の海士をうらみてもをのか翅
もしほたるらむ
　建保百首　定衡
松島や雄島のいその海士の袖いくとせ浪に
しほれきぬらん
　忠定
まつしまやをしまのあまのすて衣思ひすつ

れとぬるゝ袖かな

康　光

暮れは又いかにしのはん松しまや雄島の海
士の夜のおもひを

家　長

海人の袖いかにほしあへぬ松島や小島か磯
に衣うつらむ

後鳥羽院御製

あま人のそてともわかすしほひこん小島か
磯にさみたれのころ

夏もまたをしまかいそのかち枕夏ねの浪に
秋かせそたつ

新葉　上御門院御製

まつしまやをしまの浪にこととはむ立かへ
るへき時もありやと

賴賢碑　高一丈曠三尺六寸五分彫龍以下五尺八寸五分石厚七寸

賴賢乃御島住僧其碑在御島西南是乃其門人
匡心孤運者請寧一山而記老師行實之碑也碑
首有奥州妙覺庵賴賢菴主碑銘幷序十三字用
楷法而書二行其銘乃草書一山者以書名于世
今碧鮮鎖石面文字半消滅尤可惜

巨福山建長禪寺住山唐僧一山一寧撰

德治丙午冬予再居福山丁未春有僧匡心孤運
來禮謁云來自奥州手其師行實一通炷香禮足
謂予曰吾鄉奥州有松島其側有御島有菴曰妙
覺乃曩歲見佛上人來結茆而居見佛淸苦精進
身淸嚴口緘默日誦法華經先十二年中已滿六
萬部後至八十二入滅厥後所誦又不可以數計
也六根既淨能役使神物靈異頗多道乃遍布聲
聞朝野適鳥羽院當宇賜本尊器物以旌異之其
島本名千松島以見佛承御賜之故時人乃易今
名凡松島左右列島僅百數獨此名最揚蓋由見
佛之故也吾之師名賴賢號觀鏡房生於本州源
氏幼而端愿父母俾出家乃依長崎成福寺爲童

于十五薙髪而學天台及眞言教于講席久之忽自悟謂文字之學非出世之法至年四十二今圓覺無隱範和尚住松島圓福寺往依之居弟子列復遊方參學一于東福大覺于建長佛源于壽福孜々請扣法無異味仍因圓福將終老焉無隱遷相州淨妙空巖慧和尚繼席適此菴乏主者空巖乃擧師以補之既居歷年光大振興凡法社之未完者咸修備之口誦法華心住禪寂二十二年影不出山鬱爲叢社四衆攸歸人謂見佛上人之再世也別其天性慈和略無畛畦待物如一淸濟安恬精勤不怠誡末法化物之儀軌也世壽今八十二僧臘六十七居處如平居時度弟子三十餘人匡心孤運等以師之德之功不著于後我之責也相與議立窣堵波以紀之敢求數語以信于後予聆其語又覺其詞因思古之立道場振法門者率由是道賢師其由是道乎賛寧師作僧傳有興福一科賢師其在斯科乎既有補於法門故爲銘之

銘曰

人惟德馨　地由人興　御島之菴　見佛始營

賢師後居　乃臻厥成　淸明勝靜　開迷醒醒

慈善根力　克享脩齡

弟子樹茲窣堵波紀其德行予爲銘是歲三月十五日書　小師三十餘人匡心孤運同立石

德治後二條帝年號無隱松島第四世住僧曰知覺空巖第五世住僧曰覺滿是乃宗久之所紀之僧也

師錬見佛傳本一山語一山碑依匡心孤運語而記之此時猶言千松島矣自見佛得優賜而始稱御島者亦兩門人所語而一山親聞之實記也雖然重之此奥州刺史而見佛之先人是亦直視實語之證也且稱千松島者一山所言之外無所見也雖鄉里士人無暫以傳之呼其名者矣尤足以可疑之

題頼賢碑銘　　高玄岱

菩鎖雲封四百年屹然如岸立無遷賢師達觀天開鏡妙覺空華口吐蓮一字一鐫功用普隨形隨摹筆端圓誰敎巧奪神工手直把老仙面目傳

落雁峯

御島以西高峯秀于佗山兩峯相並而嶙峋嶙嶸山形嶺勢望之江間則似飛鴻展其首而張兩翼矣仍曰之落雁峯其山勢之屈蟠于水汀處曰之鴻首磯土人以其訓音之相近而誤曰之腕崎以爲其狀如人之曲肱而伸之其前焉誤其名于所取之義者也

朱鳥嶺

相並落雁峯相傳往古有神仙逍遙于山中有朱鳥常相從焉故曰之朱鳥山是亦土人誤其稱呼曰姉取山

眺浪坂

入于松島長坂也其道路之間江上之佳境曲洲環浦奇峯怪岸隨歩而盡入于眺望就中其壯觀者複羅之蟠根樹林森々落重陰幽篁猗々蘸翠色長洲之縹渺白沙曳素練遠汀界碧浪其佗波間之布帆木末之漁艇奇絶種々如畫風雅之徒稱眺浪坂是亦誤呼長老坂

八幡神社

類聚國史畿外奉勅宮社部曰舒明天皇三年七月陸奥宮城郡松島八幡奉勅使早良達惟保時疫

退漢松

在眺浪坂右旁土人相傳往年釋西行爲鳥羽帝北面時私通宮女屢謀密契宮女恐其人言戒之以阿漕語西行不解退問人未遇識者自是雲雨亦遠煩悶而入浮屠周流足跡幾遍于諸州蓋欲得識者而解彼語意東行臻茲有一翁牧牛於松下牛齕草而不飽焉翁叱牛曰我牛奚阿漕也西行勃然而驚蕩然而喜問之翁々曰子爲誰曰西行者也翁曰西行乃歌林之秀胡不解之仍引古

調而答之曰
伊勢海阿漕浦耳引綱毛數度波發顯乎爲
翁罵以不解此語之拙西行無以對自是乃耻退
稱其松而呼西行退其翁乃松島明神也
此事極淺近殊西行禁闕之侍臣歌林之翹楚
何暗此一句乎西行事迹載歌書舊記是亦一
世之名衲也其中絕經過東奥而相見見佛于
松島之事爲荒𡢽汲々乎多方者常人不爲焉
況達人乎以翁爲松島神者美阿古那松故事
而牽合爲之説者也今姑從郷説而擧于此

鷗沙灣

在落雁峯以南水濱郷俗呼大澤有精舍曰海無
量寺幽閑清閑可愛之地也一日秋夕自松島棹
扁舟繋柳陰而上水汀行々分蒙密過幽溪細石
磊落芦荻蕭瑟其境殆類曲逕通幽徑之情焉稍
登回磴而入于深松投寺院而與僧話舊坐久而
海月昇松梢江風度峰頭張籍詩所謂秋山無雲
復無風溪頭見月出深松者宛然自來夜闌更老
取輕舟短棹于寒江時秋夜沈々萬頃空四顧寥
々歸路遠月色嬋娟落江波清影玲瓏沈海底幽
趣今猶不忘仍記其情狀于此而證地理

五大堂

在瑞巖以東大同二年坂上田村麻呂造營之置
五大尊黄門君慶長五年攻刈田白石城得夢徵
仍九年十二月令監造阿部藏人紀州良匠鶴右
衛門等修造之有兩短橋見松島橋下其東面則
複羅梅影潭解羅藏經般若旭日仙冠翠柳彩綺
苫艇白翁九子諸島涵陰其北則寶珠崎通舸磯
龍首巖石磯洲曲隈映波其間沙場煑鹽之地也
群鷺浴鵜二島並翠灣其北乃高城驛也
宗久紀行云松島の東に當りてはなれたる島
に橋をわたしてひとつの堂あり五大堂とい
ふやかて五大尊を安置せり

松島明神

在高城驛西樹林中鄕黨曰之紫明神未詳祭何神焉或曰松島明神以在桂華島爲是然以方隅取之則豈非遙海臨平陸者爲鎭護地主哉當以此神祠爲松島地主也

宮戸島

去松島水濱十餘里其地曠濶南北既長上有善逝堂其下斷崖巨壁危岸空洞上連青松下蹈白沙石磴屈曲堂前絶景堂後聳高峯曰之舵假峯言春來絳霞帶峯頭仍稱之島中多水濱其一曰霧芦灣其二曰沙土灣其三曰落月灣繫商舶業魚鰕之地也堂下有巨島曰都島見八幡都島下其前島曰孤月島其餘猶多

寒風澤

在宮戸以南有寺曰寒澤寺是亦商舶集會之地也其前巨島曰鳳羽島海岸出牡蠣極巨大甘美尤名產也其南方巨島曰納義島大島也蜑屋富家多其東北有一島曰鷹巢島山形殊崔嵬層崖疊石如一盆石流浪遶其斷岩潮聲鳴其曲磯皆絶勝也

桂華島

在納義島南青嶺翠松連白沙素波急其東濱曰落星濱細石錯落疊波來去島上有神祠曰桂島明神或曰是乃松島明神也其南巨島曰神馬島千尺丹崖相峙數間翠洞豁然奇絶可驚靈機可恐相傳太古以神明所駕之龍馬而放乎此地仍曰之神馬島

松浦島

去千賀地十餘里在青松濱佳境絶景不減松島往古島上有紫藤而得佳名今更無知之者此濱居民多以漁鰕爲業以芻蕘爲役濱南斷岸千尺長灣數似白浪濯石磯碧波染沙汀山頭有觀江臺登此見北隅南方西關東溟盡入于吟眸其地七疑峯和泉岳仙臺城大白山盤似山篠谷關山不忘大峯名取直理伊具宇太相馬諸山等也水

濱以東阻沙場遶漁家巉岩相峙長松相連岩下有一島上戴若蘆是所謂松浦島也東北有小島號鷗鵜分前後而爲兩島其西曰舞踏其東曰英雄島在其北海中者曰石巖明神鹽釜末社也青松濱南曰菖蒲田南西曰水門濱有善逝堂市川遶其南汀傍有巨岩曰之臥石其南岩崖相連其岩下有空洞通行漁舟郷人曰之通船穴

藻鹽草云松浦奥州　音にきく　松か浦島　もしほ火　霜月　塩風　雪

あまのもしほ木　あしたつ　しほのひるま　藤　都のつと

西院の后御くしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時かの院の中島の松の木をけつりてかきつけ侍りける

後撰雜一　素性法師

音にきく松かうら島けふそ見るむへ心あるあまはすみけり

千載冬　顯昭法師

雪の歌とてよみ侍ける

浪間より見えしけしきそかはりぬる雪ふりにけり松かうらしま

題しらす

新勅撰雜四　祝部成茂

心ある海人のもしほ火たきすてゝ月にそあかす松かうらしま

海邊雪

續後撰冬　藤原光俊

ふりつもる雪ふきかへす汐風にあらはれわたる松かうらしま

をんなにつかはしける

玉葉戀三　大納言爲家

浪のよるしほのひるまも忘られす心にかゝるまつかうらしま

文永二年白河殿にて人々題をさくりて七百首歌つかふまつりけるついてに浦藤をよませ給ける

新続古今春下　夫木集文永二年七月御時取七百首浦藤と有
後嵯峨院御製
心ある海人やうえけむ春ことにふち咲かゝるまつか浦しま

島鶴を

玉葉雑上　源　俊平
蘆田鶴のなく音もとをくきこゆ也浪しつかなる松かうらしま

新撰六帖　衣笠内大臣
いかにせむみやこのつとにつゝみもていもにも見せんまつか浦島

夫木集下同　源　有仲
家集藤花のさかりなる松のもとにて
ふち浪のかゝれる松か浦に来て見るめにあかぬあまとなりぬる

同　常盤井入道太政大臣
寳治二年百首みちのく
すむ鶴も千よにちととせやかさぬらん岩根に生ふる松かうら島

六帖

同　權僧正公朝
しほたるゝ蜑にその名をまかへはやすみはしめけむ松かうらしま

同　民部卿爲家卿
康元元年毎日一首中
夏刈の沖のふかみのさひしきにいとゝ戀しき松かうらしま

拾玉　慈　鎭
海士の子もちよへぬへしとおもふらん陰にかくるゝまつかうら島
心ありて物かたりせむ海士もかな舟こきとめむ松か浦しま

玉吟　家　隆
おもひあまり松かうら島尋見ん心ある海人やなくさむるとて

後鳥羽院

春かすみたてるやいつこ朝日影さしゆく舟をまつかうらしま

俊成卿

たのめをく人やありけむ浪かせに衣うつなる松かうらしま

貞和百首　下野

藻塩やく心あるあまのゆふけふり月にはたてすまつか浦しま

草庵　頓阿法師

月みてもたへぬけふりはこゝろあるあまともいはし松かうらしま

源氏榊木にとけわたる池の薄氷岸の柳のけしきはかりは時をわすれぬなとさまさまなかめられ給てむへもこゝろあるとしのひやかにうちすし給へるまたなうなまめかし

源氏

なかめかるあまのすみかと見るからにまつしほたるゝ松かうらしま

ときこえ給へはおくふかうもあらすみなほとけにゆつりきこへ給へるおまし所なれはすこしけちかき心ちして

藤壺

ありしよのなこりたになき浦島に立よる浪のめつらしきかな

按讃岐有同名但其文字作麻都我浦仍載其證歌于後以分其異同

萬葉　無名氏

まつか浦にさはゑうらたちまひとことおもほすなもろわかもほのすも

拾玉　慈鎮

四方の海や霞いとけき松かうらの春の湊に春風そふく

後拾遺　　定頼

松山の松のうらかせ風よせはひろいてしのへ戀忘れ貝

返し　　光成

たへぬよりしほれもあへぬ衣手にまたきなかけそ松かうら島

　　行能

松かうらのとまりのいそときくものを名にもさはらすかへる浪かな

富有山

在小泉村有寺號大仰寺去松島東北數十里近境之高嶺也上有大悲閣大同年中田村麻呂建三觀音牧山篦峰此地是也斯地也特鍾東南之佳美于寺前尤壯觀也南極桂島北大塚宮戶浮于東瀛之微茫松島聳于西峯之木末其間脩洲之臥波間也引素紈而長群島之横海上也疊青螺而點篆烟之𡽳嶷者燒藻鹽也急雪之崩騰邀江風也漁舟之分綠洋忽生ノ乁之字勢布帆之接碧天更竭隱見之目力加之洲渚之動石鷗之集也林梢之點星鷺之宿也無邊之幽致凝于吟胙其富有佳美甲天下故名曰富有嶺

曝練洲在東溟其長十餘町廣半之直横斷江上若引數百丈縞練渺茫而皆白沙也其北村曰大塚以漁獵爲產其西曰神丘洲中有小山曰之鬪灘洲東波瀾常惡有此小山而防之去鄉人呼曰鬪灘

此已下所載于風土記而未詳其地

磐城莊

公穀六百七十二東三毛田假粟五百八十二字田貢鶴隼鷹牧馬鹿猪等

源順和名集宮城郡村有赤瀨磐城大村多賀等數邑

伊豆佐賣神社 文德帝仁壽二年七月辛未陸奥國伊豆佐咩神授從五位下

圭田二十八東三毛田所祭溝咋比咩也天武天

皇二年春圭田行神禮有神家巫戸等

淨光寺

寄田五十三束鑑眞掛錫之地也

赤瀨鄉

公穀六百九十二束 以下蠹食

志津彥神社

圭田六十八束三毛田所祭饒速日命也天智天皇三年始春圭田行神禮

妙德院

寄田三十二束道源法師開基之地也

大村莊

公穀四百八十二束三字田假粟三百五十六丸

奥羽觀蹟聞老志卷之七　終

奥羽觀蹟聞老志卷之八

仙臺　佐久間義和著

黑川郡

四十五代聖武帝天平十四年正月己巳陸奥國言部下黑川郡以北十一郡雨赤雪平地二寸

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥國黑川郡人外從六位下靭大伴部弟融等八人賜姓靭大伴連大國造道島宿禰島足之所請也

寶龜九年夏四月癸巳朔陸奥國黑川加美等一十郡俘囚三千九百廿人言曰己等父祖本是王民而爲夷所略遂成賤隸今既殺敵歸降子孫蕃息伏願除俘囚之名輸調庸之貢許之

五十代桓武帝延曆八年八月己亥勅陸奥國人軍人等今年田租宜皆免之兼給復二年其牡鹿小田新田長岡志太玉造富田色麻加美黑川等

一十ヶ郡與藏接居不可同等故延復年
同九年十一月丁亥陸奥國黒川郡石神山社幷爲官社
五十四代仁明帝承和十一年乙亥十一月己亥陸奥國黒川郡大領外從五位下勳閑靱件連黒成授從五位下褒公勤也是磐城臣雄公書生也
八十二代後鳥羽帝文治五年己酉八月十四日頼朝自多賀經黒川郡之玉造郡
神名帳曰黒川郡四座　須伎神社　石神山精神社　行神社　鹿島天足別神社

新日吉神社

在富谷村五十二代嵯峨弘仁六年叡岳行尊所建有寺號藥師山熊谷寺仍鄕人呼其地稱熊谷往昔有十社號十宮後易富谷字有善逝堂淸和帝貞觀中慈覺所造也
延喜式神祭部云日吉神社比叡神同傳記曰山王權現者欽明元年自天降于大和國磯城上郡而現大三輪神公事根源日吉社者與松尾神爲同體也後白河帝永曆元年十月十六日移日吉神體於東山今熊野新宮號曰新日吉

飯森社

在宮床村淳和帝天長中祭熊野有寺曰飯峯山信樂寺藏運慶所造彌陀藥師觀音仁和年中火光孝帝時再造至永和二年道琳者修造之

鶴峯山祠

在同村祭市宮波神賀茂三社推古帝聖德六年所建也藏雄劍一枚長二尺七寸有銘曰備前景元今稱雷光丸珍藏

七疑峯　巨魁峰　松蔭峰　積倉峰　尖頭峰　鐮索峰　飛蜂峰　太倉峰

三山在宮床村四山在吉田村其山犬牙相列人疑指示何山矣故鄕人稱七峯一日先君及此事而曾曰中華有九疑稱此山亦須稱之七疑峯自是呼之爲其山稱焉相傳頼朝東征之時經歷至于茲和生大夫廣高者獲麋鹿一頭而獻之

舟形嶺

在吉田村祭舟形神祠相傳反正帝時建之土人曰之升澤

古石墳

在大松澤村高九尺廣一尺五寸厚一寸五分石上銘曰元亨三年十月三日重高敬白未詳何爲設鄉人曰之立石

赤崎社

在駒場村後鳥羽帝建久二年兒玉彌太郎重成者所建未詳所祭何神也

鶴巣館

在下草村城上有喬松雙鶴來巢仍稱之永祿中黒川安藝守晴氏居之

御所館

在蒜袋村黒川氏祖某自鎌倉來始居此城將軍左馬頭源基氏分流以室町氏族鄉人推而稱御所

八谷館

在相川村安藝守弟八谷冠者居城也

端取城

在志戸田村安藝守長子三郎春氏居之

大童壘

在今泉村安藝家臣大童豐後居之

大衡壘

在大衡村或曰越路館是亦家臣大衡治部居之

登米郡

加賀野城

在加賀野村飯塚修理居館也上有八幡叢祠

太子堂

在同村朱雀帝天慶中源義元所建聖德太子影堂也相傳雲慶所作也

新井田壘

在新田村千葉掃部居之上有明神小社

法華寺

在同村有寺號寶龍山本源寺修日蓮宗寺畔有二石墳一基長四尺五寸廣二尺石面記題目下有右爲日日上人小祥忌元弘二年二月日門弟日位誌字一基長二尺五寸廣一尺五寸爲日用上人大祥忌建武二年八月日立之

葛籠潭

館下有沼碧潭溶々鄉人曰之葛籠淵

保呂羽館

在寺池村城主不相傳

石神祠

在石森村未詳祭何神傍有愛宕八幡叢祠

雙樹古館

在同村双樹三五郎者居之

彌勒堂

在彌勒寺村本尊坐像長二尺五寸運慶作也有寺號長德山彌勒寺

鈴木壘

在同村往時鈴木正齋者居之

諏訪社

在黑澤村未詳何人建之祀焉

八幡社

在上沼村後冷泉帝治曆年中源義家東征之時次軍于此地治平之後所建也傍有湖水曰八幡湖

上沼壘

在同村葛西家臣千葉豐後居館也豐後後在栗原郡若柳新山館而與大崎屢接兵

千手堂

在大泉村本尊長七尺慈覺作也未詳何人置

大泉古壘

在同村深堀隱岐者居之

洲前城

在嵯峨立村岩淵信濃居之傍建熊野叢祠

淵水城

在西郡村西郡新左衛門者居之

寺田古館

在森村三浦式部者古館也

明神館

在水越村瀧川右近者居館也上祭明神仍稱焉

長谷川大悲閣

在同村有寺號遮那山長谷寺往昔田村麻呂模相州長谷觀音長八尺二寸釋惠心作也今猶存焉

中澤瀑布

在樓臺村鄉里之佳觀也傍有古石墳不詳何人立也

馬頭閣

在鱒淵村有寺號高峯山華足寺大同年中田村東征之時乘馬斃于茲仍瘞于此地建堂置馬首佛

及川古壘

在同村及川紀伊者居之

三神社

在狼河原村祭八幡諏訪愛宕三社未詳其由

小泉大悲閣

在小泉村崇德帝長承二年建之是亦雲慶作也有寺號大白山長泉寺

旗竿坡

在同村米谷修理居館也

櫻場古館

在櫻場村櫻場新九郎者居之傍建八幡小社

高梯館

在淺部村往時二階堂平内者居之

日根牛古壘

在日根牛村城主不相傳

森合　米谷古壘

倶在米谷村兩地不傳城主

善王寺

在善王寺村不詳其事實相傳年代悠遠之古刹也

葛田　赤生津古壘

倶在赤生津村城主不相傳

森村古館

在森村不傳城主

鶴並古城

在鶴並村里是亦城主不傳

寺池館

在寺池村葛西親族居之

志田郡（續日本紀延喜式和名集並作志太今郷俗作志田從古書）

五十代桓武帝延暦八年己巳八月己亥勅陸奥國入軍人等今年田租宜皆免之兼給復二年其牡鹿小田新田長岡志太玉造富田色麻加美黒川等一十ケ郡與賊接居不可同等故延復年

神名帳曰志太郡一座小敷玉早御玉神社

古川古城

在稲葉村大崎義直（一作義宣）家臣新田安藝行遠（一作行稙）弟古川刑部持慧居館也大崎始祖伊賀守家兼延元二年八月爲管領居于大崎焉行遠先祖亦相從爲世臣有善政行遠繼家居玉造郡新井田城後値義不得止以居城畔之仍天文五年六月上旬義直自將兵急攻之行遠自殺持慧亦率高清水一迫家族而守古川居城兵勢尤強大義直憂之乞援兵于伊達世十四左京大夫稙宗君乃帥騎兵三千歩卒三萬餘向古川義直迎之郊外伊達兵直攻南門義直自東臺澁谷笠原等亦將一千兵而相從急附城門伊達家臣濱田伊豆波山丹下内崎典廐國分彈正遠藤左近等先登而敗西門牧野安藝亦攻北門中野上野長江播磨宗武等以黒川宮城兵二千是亦附城壘屏下攻之急城兵纔三百然義氣勇敢以死相支十九日我兵進而燒外郭二十日夜城危急廿一日停午城主持慧自執火趣火死行年三十六歳弟安藤丸十四歳子三郎直植十六歳倶自殺持慧老母自憤怒執戈衝中堅奮戰殊甚遂中矢而死從者豐島佛坂兄弟五井伊豆入道父子大伴常廣等六十餘人或戰死或自盡城遂陷天正中古川彈正者居此城主君大崎義隆依運參罪亡滅大閤令木村伊勢守彌市左衛門相繼爲城主

按室町時世無延元年號蓋後光嚴帝延文二年丁酉乎

緒絶橋

古川驛中小板橋是也其水源乃玉造河流分而

入稲葉村是古稱緒絶橋也

藻鹽草緒絶橋わうしう ふみふます 白妙の ともそへたり たつの

かたいとのともそへたり中絶 月 琴の
音もなけきくはゝる 聞わたり 橋はしら

うき名立る 木の葉ふりしく 秋の通ひち
駒 琴 山鳥 口おしや

伊勢の齋宮わたりよりまかりのほりて侍ける人にしのひてかよひけることをおほやけもきこしめしてまもりめなとつけさせ給ひてしのひにもかよはす成にけれはよみてむすひつけさせ侍ける

後拾遺戀　左京大夫道雅

みちのくのを絶の橋や是ならんふみ見ふますみ心まとはす

讀此詞書而更詳往時公程之仁愛朝家之失政撰集之不正也道雅不足議焉聞私通而不罪却令人守之者仁厚之至也知荒淫而不糺却令彼長之者失政之甚也夫選集采歌者須以公平正大而爲主以勸善懲惡爲戒矣如今擧淫奔不正之作而加之天子叡覽之書者記者之過失也夫考歷代之撰述多皆采私通密契之詠而公然載之萬世相傳之書而不忌焉桑間濮上之樂自古甚爲監戒焉是以夫子告顏子以遠鄭聲矣後人豈可不警哉

續後撰戀四　定家

白玉の緒絶の橋の名もつらしみたれて落る袖のなみたに

續千載戀二　院御製

憂事はあすの契もしら玉のをたえのはしはよしやふみみし

同四　式部卿久明親王

逢事はをたえの橋のはし柱又たちかへり戀わたるかな

新千載戀五　權中納言定家

建保名所百首

琴の音もなけきおはゝる契とて緒絶の橋の
中も絶にき

同　民部卿資宣

逢事はやかてをたえの橋柱憂名をたつるは
てそかなしき

同　爲氏

きゝわたるその名もつらし逢事のなとてを
たえの橋と成らむ

新續古今戀四　藤原長秀

かたいとのをたえの橋やわか中にかけしは
かりの契なるらん

延文二年百首歌橋戀

同　前大僧正資俊

なからへむ契のほともしら玉の緒絶のはし
にかきて戀つゝ

六百番歌合

同五　定家

人こゝろ緒たえの橋に立かへりこの葉ふき
散秋の通ひ路

名所百首歌合　順徳院御製

東路はをたえの橋もあるものをいかにくち
ゆく袖とかは知る

家隆

逢事はぬるをたのみの夢路にてをたえの橋
も月そ更ゆく

建保名所百首　宗尊親王

山とりのをたえの橋にさしかけてなかき夜
わたる秋のよの月

山とりのをたへの橋にかゝみかけきよき
よわたる秋の月かけ

此歌見源氏記者適失之乎

順徳院御製

いもせ山ふかき道をは尋來て緒たえの橋に、
ふみ迷ひけり

建保百首　　僧正行意

逢坂をけふこえしかとみちのくの緒絶の橋の末のしら浪

兵衛

おもひのみあつまにしめてひく琴の緒絶の橋の道やまとはん

定衛

東路や雲路へたてゝ聞しかとおたえのはしは身にもありけり

俊成卿女

しらさりき忘れかたみにみちのくの緒絶のはしの憂名はかりを

知家

忘らるゝ憂身の爲の名もつらし緒絶のはしの秋の夕暮

康光

いきてこそ人をも問はめ玉の緒のをたえの橋は憂名也けり

六百番　　經家

思はすに緒絶の橋と成ぬれは猶人しれす戀わたるかな

定家

しるへなき緒絶の橋に行迷ひ又いまさらの物やおもはむ

建保三年名所百首緒絶橋

夫木集　　正三位忠定卿

行末の緒絶のはしは聞もうしおもひの路のおくもしられて

源氏藤袴巻けに人きゝをうちつなるやうにやと憚侍るほとに年比のむもれいたさもあきらめ侍らぬはいと中々なる事おほくなんとたゝすくよかに聞えなし給てまはゆくてよろつをしこめたり

柏木

いもせ山ふかき道をは尋來て緒絶の橋にふみまとひける
よとうらむるも人やりならすは

玉葉

まとひける道をはしらていもせ山たと〳〵敷そたれもふみ見し

歌枕裏書云源氏物語歌いもせ山ふかき心をしらすして緒絶の橋にふみ迷哉彼妹背山に有は此橋歟また當國有妹背山歟不審

妹背山在紀伊國

齋田古館

在齋田村堤根肥後者居之

坂本古城

在坂本村坂本土佐者居館也

蟻袋壘

在蟻袋村熊谷玄蕃者居之

桑折城

在桑折村蜂森一曰避谷相摸居館也是乃黒川安藝叔父也安藝後稱月舟者也

伊場城

在伊場野村中目大學同氏兵庫居所也

千石古壘

在千石村往昔文覺者居之

青塚城址

在古河西青塚村往昔青塚左衞門吉春館址也是亦大崎家臣也又塚日村有古塚東西三十間南北五十間相傳上代葬王昭君地也

按昭君死蕃怜之遂葬於漢界號青塚杜甫詠懷古跡第三首曰一去紫臺連朔漠獨留青冢向黄昏青家王昭君墓也此地亦附會此義而強稱其名者乎

安國寺

在柏崎村源尊氏所建荒廢後曹洞宗者住而改常樂寺慶安中前大守忠宗君令松島寺雲居中

興焉此後柏庭悅岩者立一宇號本源庵後來松島洞水法嗣通玄爲寺主山號興聖寺復安國寺

倭漢合運曰光明帝曆應二年己卯每州立安國寺

按是之時南北兩朝相分天下大亂兵革日急民疲人苦財盡力竭未及救世息兵之術却令每州有此制可謂不知先務之時也

松山城

近年茂庭氏居館也此地文治役賴朝卿經過之地也想夫往時通行道路也

東史曰文治五年八月廿一日泰衡兵拒官兵於栗原三迫不克三浦介斬奥將若次郎同九郎大夫爲六郎朝光所獲賴朝收其兵而經松山路到栗原郡津久毛橋

玉造郡

四十五代聖武帝神龜五年四月丁丑陸奥國請新置白河軍團又改丹取軍團爲玉作軍團並許之

按如今丹取郡者不見後來合收之玉造郡中者如小田之於牡鹿四釜新田之於加美長岡之於栗原葛岡之於此郡是也

同天平九年四月戊午四百五十九人分配玉造等五柵

四十七代廢帝天平寶字四年正月丙寅記有出羽掾正六位上玉作金弓者

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥國玉造郡人外正七位上吉彌侯部念丸等七人賜姓下毛野俯見公大國造島足之所請也

同寶龜十一年九月己未勅征東使省宜居多賀玉造等城能加防禦兼練戰術

五十代桓武帝延曆八年六月庚辰征東將軍奏

膽澤之地賊奴奥區方今大軍征討剪除村邑余黨伏竄殺略人物又子波和我僻在深奥臣等遠欲薄伐粮運有難其從玉造塞至衣川營

同八月己亥玉造等一十ヶ郡與賊接居不可同等故延復年

八十二代後鳥羽帝文治五年八月十四日頼朝在多賀國府時聞泰衡等在玉造郡自多賀經黒川之玉造郡

同月廿日圍泰衡于同郡多賀波々城泰衡先逃亡

神名帳曰玉造三座並小　温泉神社　荒雄神社　温泉石神社

玉造川　或稱玉造江

其河源出于仙北自中山合鬼首川過鳴子大口分岩手川與下一栗之間作二流其南過岩手山新田夜鵶之邑而到于古川緒絶橋其北經上野目成田三丁目過于古川北江合橋過數村到涌谷城下東而合于來神佐沼川二流而其末入于海

大嘗會主基方玉造江を

夫木集　源　重之

ひとつしてよろつをてらす月なれは底も見えけり玉つくり川

新勅撰戀一　小　町

みちのくの玉つくり江に漕舟の音こそたてね君を戀れと

玉葉戀　常盤井入道前太政大臣

をく露の玉つくり江にしけるてふ蘆の末葉のみたれてそおもふ

歌枕　中納言高定

湊路にいさ舟とめむ今宵われ玉つくり江に照月を見て

類聚　知　家

蘆の葉のしけみに露をふきとめて玉造江に

村雨そふる
文治六年五社百首
夫木集　俊成卿
月もすむ玉つくり江はあられふりこほりみ
かける名に社有けれ
家集玉造川はりま藻鹽草川類玉造川奥州
但未定　萬代くらす月
夫木川類　元輔
幾度か君か御代にはあふみなる玉つくり川
すまむとすらん
藥田
未詳其地以歌意考之則言江畔之田乎
藻鹽草田部　藥田奥州くすり田の云々
藻鹽　惠慶法師
くすり田の袂に結ふあやめ草玉造江にひけ
はなりけり
小黑崎　或曰隱蔭籤取之松林蔭翳之義

在名生定村去美豆小島以北五町餘郷人曰黑
崎山翠松萬株馬鬣鬱々古人所謂髮絲翁鬱籠
烟靄皮玉鱗峋倣雪霜者也山下有石稱鰐口石
藻鹽草をくろ崎奥州　君をみをつくしぬまのねぬなはふみしたき
をくろさきみつのこしまの人
美豆小島
同所去小黑崎西南四五町在鍛冶澤東南玉造
川中丘山皆戴青松是乃小黑崎也其下流有一
洲々中有高丘高二丈餘東西五六歩南北八九
間丘上有蒼松三株河水縈廻其下翠色落陰急
流潺々細石磷々白沙芳草殆非凡境焉如海島
僉故佗方謨而用海濱之狀者多若太上皇家隆
之歌可視郷黨亦見致小島于海畔之情以稱美
豆小島蓋美豆乃爲見之訓也
藻鹽草美豆小島陸奥　螢　岩木　をくろ崎みつのこしまにあさりする　田鶴そなくらし　波たつらしも
あつま歌のうちみちのく歌

古今大歌所御歌
をくろさきみつの小島の人ならは都のつとにいさといはまし物を

奥義抄七云是は小黑崎といふ所の名也是はめてたき所なれは人にてあらましかは都へくしてのほりなましとよめるつととは萬葉に裹とかきてよめりつゝみもたる物といふ心なり人なりいかゝつゝみもつへきさてとも田舍なとより土産をもてきて人にみするをは此たひのつとなりといふこゝろ也

續古今　　順徳院御製
人ならぬ岩木もさすか戀しきはみつの小島のあきの夕くれ

同秋中　　太上天皇御製
小黑崎みつの小島にあさりする田鶴そなくらし浪たつらしも

新後撰　　光明峯寺入道前攝政太政大臣
さそふへきみつの小島の人もなしひとりそかへるみやこ戀ひつゝ

家隆
螢飛みつのこしまのたひ人はみやこをこふるさまやうくらん

中務卿宗尊親王
いさとたにいふひとなくてかすならぬみつの小島の秋そふりにき

夫木　旅歌中　　從二位家隆
をくろさきみつのこ島の夕暮にたななし小舟行衞しらすは

夫木集　寶字二年百首島鶴みちのく　　辨内侍
心ありて鳴にはあらし小黑崎みつの小島の田鶴のもろこゑ

題しらす
同　よみ人しらす
小黒崎みつの小島に住はこそ都のつとに人
もさそはめ
水尾歌合
同　俊頼朝臣
をくろさき淺きとたえの身をつくしたてる
すかたにふらぬとはみよ
信實朝臣
都にてとはゝこたえん小黒崎みつの小島に
つとはなくとも
謝東奥故人惠美豆松葉詩并引
小黒崎在玉造河之東河中小島名曰美豆島
上有松數樹霜根雪幹古色蒼然眞千載之物
也是歲之夏故人掛冠之後遊歷到此手折一
枝以贈我聞昔人遊賞此地恨其不與人共甚
京洛矣據古論今所惠實深爲愛惟多豈止感
千里之貺歟　源君美
散髮當年擲玉簪名山到處得幽尋西來瑤水崑
崙小東望滄洲方丈深杉葉秋飛洛陽思梅花春
寄隴頭心神仙有藥稱難老何獨紅顏在華陰
分所寄松葉爲奇以贈諸賀州太守及水戸
故舊安積氏賞之
和白石先生謝陸奥故人惠美豆小島松葉詩
老圃安覺
一枝蒼鬣寄徽音爲羨名區仔細尋遼海無塵千
里靜蓬萊有路五雲深襜褕應感美人贈木柿還
看好事心借問風流舊知己幾時乘興訪山陰
第六句用能因長柄橋柿事未審當否
池月湖　曰之小黒崎沼
在小黒崎山下
家集沼　根蓴生　歌枕
夫木　源俊頼朝臣
小黒崎沼のねぬなは蹈したき日も夕ましに

かはつ鳴なり

同　　　　　　光俊朝臣

をくろさきぬまの根ぬなはくるしきに此よ
にしけるこゝろ也けり

白練瀑

去美豆島西十餘町郷人稱白絲瀑布

小町塚

在新田村農家溝畔有古墓上有孤松是乃古之
小野小町墳墓也匡房西行共言小町古墓在夜
烏郷如今土人呼農家而稱夜烏宅據袖中鈔無
名抄愚見抄江次第則爲八十島今考其地則在
羽州未詳何地

袖中抄第八あなめ〳〵

秋かせのふくにつけてもあなめ〳〵をの
とはいはしすゝき生けり

顯昭云あなめ〳〵とはあなめいた〳〵と云
也凡此歌のこゝろは江記云在五中將爲嫁件
后二條出家相接其後爲生變到陸奥留八十島
求小野小町尸夜宿件島終夜有聲曰秋風之吹
仁津氣天毛阿那目阿那目云々後朝求之髑髏
目中有野蕨薇在中將涕泣曰小野止波不成薄
出計里即斂葬云々據此説則八十島奥州也
童蒙抄云此歌小野小町集に有今本無此事昔野中
を行人あり風の音のやうにて此歌を詠する
聲きこゆ立よりて尋ねきゝたるに詠しける
也そのすゝきをとりすてその頭をよき所に
をきてかへりぬ其夜の夢に我は是昔は小野
小町といはれし者也嬉しく恩を蒙りぬると
いへりさて此歌を後に彼集に入たるとそ
私云此兩説の心相違江記は到陸奥留八十島
求小町尸童蒙抄には行野中風聲吟して夢想
に示小町江記は連歌なり終夜有聲唱上句後
朝に業平付下句童蒙抄は一首聞風聲江記に
は髑髏に有野蕨薇童蒙抄には薄生出たりと

云々
古今目錄云小野小町者出羽國司女也云々數十年在京好色也然而歸本國死去故屍在八十島歟小野者姓歟住所歟古今有小野姉其歌云
時過てかれゆく小野のあさちには今はおもひそ絶すもえける
私云此歌有小野之詞擧我名只又自出來歟
八雲御抄に清輔云出羽に有と云々普通には但八十島也
藻鹽草五
幾度か霜は置けむ菊の花八十島かけてうつろひにけり
無名抄を引て業平奥州へ下向の時みちの國八十島と云所にやとりけれは野中に歌の上の句を詠するこゑ有
あきかせのふくにつけてもあなめ〳〵
と聞ゆ其あたり尋給ふに人なし死人の頭一つ有それより生たる薄の風にふかるゝ音のかく聞えたる也扨あたりの人に問給へは小野小町のところをうつみし所也とこたふその時歌の末をつき給へり
をのとはいはしすゝき生けり　此説亦八十島爲奥州
鴨長明無名抄云小野小町事或人いはく業平の朝臣二條の后のいまたたゝ人にをはしましける時ぬすみとりてゆきけるをせうと達にとり返されたるよしいへり此事又日本記の試にありことさまはかの物語にいへることくなるにとりてうはい返しける時せうと達その憤やすめかたくて業平朝臣の髻をきりてけりしかあれと誰爲にもよからぬ事なれは人もしらす心ひとつにのみ思ひて過けるに業平朝臣髪生さんとて籠ゐたりける程に歌枕共見んとて數寄に事よせて東のかた

へ行けり陸奥國に到りてやそしまといふ所にやとりたりける夜野の中に歌の上の句を詠する聲有其詞にいはく

あきかせのふくにつけてもあなめ〳〵

と云怪しく覺えて聲を尋つゝ是を求るに更に人なしたゝ死人の頭ひとつ有朝に猶是をみるにかのとくろのそのかしらの目のあなより薄なん一本生出たりけるその薄の風になひく音のかくきこえけれはあやしく覺えてあたりの人に此事をとふ或人の語ていはく小野小町此國にくたりて此所にして命終りにけり即かの頭是也と云爰に業平哀に悲しく覺えけれは涙をおさへて下の句をつけり

をのとはいはしすゝきおいたり

とそつけゝるその野をは玉造の小野といひけるとそ侍る玉造の小町と小野小町とは同人かあらぬものかと人々覺つかなき事に申てあらそひ侍しと人のかたり侍也

古事談に業平朝臣盜二條后以官仕前將去之間兄弟達昭宣公等追至奪返之時切業平之本鳥云々仍生髮之程稱見歌枕發向關東見伊勢物語宿奥州八十島之夜野中有詠和歌上句之聲其詞曰秋風之每吹穴目々々就音求之無人只有一之髑髏明旦猶見之件髑髏自穴薄生出たりけり每風吹薄のなひく音如此聞えけり成奇怪思之間或者云小野小町於此所逝去件髑髏也云々爰業平垂哀憐付下句云小野とはいはし薄生たり云々件所を小野といひけり此事見日本記式

兼好徒然草小野の小町か事極めてさたかならす衰へたるさまは玉造といふ文に見えたり此文淸行かかけりといふ說あれと高野の大師の御作の目錄にいれり大師は承和の始

にかくれ給へり小町が盛なること其後の事にや猶覺束なし

百人一首作者傳曰小野小町出羽郡司小野當澄女或曰出羽郡司小野良實女或爲常澄女三光院爲當澄女爲是仁明帝朝承和中人也拾芥抄說亦相同

按三代實錄曰業平故四品阿保親王第五子行平弟也體貌閒麗放縱不拘略無才學善作和歌履歷亦不卑今考其爲人好色淫行往時贈太政大臣長良女爲處女時密通欲勾引而出去焉國經伊尹蚤知捕之雞其鬢髮而放之然此人亦王孫也須別有所置矣何其甚哉業平亦包羞忍恥而此時已東行何其荒淫哉高子後爲淸和帝后妃至寬平八年而復與僧善祐通停后位然則高子亦甚矣婦德中冓之事不可說之人也仍擧此以備業平東行之參考云

磐手城

此地舊名曰岩手澤大崎家臣氏家彈正者居館也天正十九年東照神君討葛西大崎黨而歸路修荒廢築此館使黃門君居于此遷于江都已十二年後慶長七年壬寅黃門君遷于宮城郡仙臺令第八子三河守宗泰居于此城自是相繼至今有寺號實相寺神君往昔次軍之地也登時之飲器今猶存焉又寺前有長松氏家彈正塚上樹也後人稱磐手山號岩手關（尿前關山）擬岩手岡（城上高山）而爲歌林名跡然古歌所詠地在南部領岩手郡好事之徒所以聊擬其地而稱之也

名生城

在名生村往昔氏家兵内者居館也後大崎義隆朝臣遷此城天正年中爲大閤亡城遂居當年焦米焚穀今猶存

一栗館

在下一栗村大崎家臣一栗兵部居館也

葛岡城

在葛岡村葛西監物居館也文治後畠山重忠居于此城東史曰文治五年九月廿日賜葛岡郡于畠山次郎重忠者乃此城也

按葛岡舊郡名後分屬村落其佗往昔稱一郡者沒村邑地維多若新田色麻（今作四釜）長岡階上（今作波地上）小田之於賀美栗原本吉牡鹿此地亦其一也

多賀波々城

在同村錦戸太郎國衡支城也

東史曰文治五年八月廿日頼朝赴玉造郡而圍泰衡于多賀波々城先逃亡殘兵乃降自是過于葛岡郡而赴于平泉

新井田城

在新井田村大崎家臣新井田氏世居之爾後義隆侍童新井田刑部者妬寵而作亂

新井田字或作新田而訓之丹井多故誤以爲上野新田同訓也不辨其訓之異也

莊司館

在上宮村近于小黒崎佐藤莊司假館也

照井城

在下野目村秀衡家臣照井太郎高直居館也

啼兒温泉　（鄉俗作鳴子字非也須考之非實）

在啼兒村自若畔出克治瘡疾其下亦有温泉此地也相傳往昔義經北行夫人開胎于龜割坂仍辨慶養之笈中來於茲地始出呱々聲故後人號啼兒温泉在其地神名帳所謂温泉神社是也

荒雄神社

稱荒雄嶽山中有温泉見神名帳

石神社

在大口村其地川度（訓河波多比）有温泉所謂温泉石神社是也

抑池

在三町目村上古有湖水池中有巨蛇年々以美

婦供犧牲有一女子丁其選女子聰慧臨池畔而說虵蝎曰妾如今當其人奚敢逃其死但妾有志願請遂得之則足以甘死矣巨虵有點頭色女子取數千之空瓢及金針示之曰命瓢子沈之水底金針浮之池上如遂志願則投身乎汝巨蛇頷之引去然針之沈瓢之浮無奈之何仍起濤翻浪屢欲浮沈之於是息絕術盡終至仆也女子然無恙而歸其家父母昆弟大悅之瘞死蛇于池畔立寺祭之女子以克禁其妄而停其犧牲後人曰之抑池其畔有一丘以彼巨蛇首其丘而死稱之首丘其湖如今爲野田池水僅存其水雖炎旱不涸鄉俗說曰地下有水脉有大鱣潛行故其水往來而不絕仍號之下釜

抑關

同所有溝洫是乃玉造分流曰之蛟田其橋邊曰抑關過莊嚴寺門前而之栗原之道路也相傳源賴義康平中東征次軍之地也

右兩區在伊達郡而同名有古歌載其下

天王寺

在上目村山號興國山文武帝大寶二年聖德太子遷攝州天王寺者也有古墳相傳物部守屋墓也想夫後人依建天王寺而是亦設于茲乎傍有江浦草橋（事實見栗原郡）

賀美郡 桓武紀作加美今從續日本紀延喜式

四十五代聖武帝天平九年四月十一日將軍東人廻至多賀柵自導新開通道摠一百六十里或剋石伐樹或塡澗跳亭從賀美郡至出羽國最上郡玉野事詳聖武記

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥賀美郡人文部國益賜姓阿部陸奥臣外正七位下吉彌侯部大成九人上毛野名取朝臣是大國造道島宿禰島足之所請也

同寶龜元年四月癸巳勅陸奥國黑川賀美等言日除俘囚之名輸調庸之貢許之

五十代桓武帝延暦八年八月己亥加美郡已下十郡與賊接居不可同等故延復年

神名帳曰賀美郡二座並小　飯豊神社　賀美石神社

鹿島社

在四日市村寛永中忠宗君再造舊社未詳何代所經始

香取神社

在四竈村有寺號香取山竈印寺平城帝大同年中所建

鄕人說曰分宮城郡鹽釜四日而埋之仍得四竈地名豈夫然耶是古之色麻地鄕黨誤其文字者且得分神竈而至此地哉是皆妄說之甚者也

宮崎古城

在宮崎村大崎家臣宮崎一作笠原民部者居館天正中黃門君依大閤命攻之城兵守而不降屢攻遂城陥秀吉公賜感書而賞其功績城畔有幽泉可以掬手細石磷々時有雨水溢而不過馬腹鄕人以爲奇泉焉

按此役乃天正十九年葛西大崎故家遺族舊臣古從苦木村伊勢守父子虐政暴恶含怨發憤各立黨率類以佐沼城畔木村父子逃亡於

是大閤秀吉公命神君及黄門君蒲生侯征之
此末處々多其役也

鳥島城

在鳥島村北郷右馬允居館也天正十九年大崎徒黨據佐沼城右馬亦至此黄門君攻之急八月五日城陷虜右馬允一栗兵九郎斬之且戮一栗放牛兵九郎祖北郷道林右馬允父等三千餘人
按玉造郡一栗城主曰一栗兵部一號氏家想放牛兵九郎亦其家族據佐沼反者乎

上舘壘

在往生寺村大崎家臣今野伯耆者居之

小野田城

同村石川長門者居舘也

石神社

在小野田本郷有巨石長五尺濶四尺方三間神名帳所謂飯豐神社是也郷人誤爲飯島屋神社

石神社

在谷地森村神名帳賀美石神社是也

藥來山

跨芋澤味袋鹿原三村山勢突兀山上有善逝堂往時有富家經始此堂及落成而郷黨相賀曰今斯人欲建此堂祈之而俾一郷無疾病也猶今靈藥携來于此郷而救衆人矣庶幾自是郷里因玆而永無疾病焉仍名曰藥來山也或曰古昔八幡太郎義家朝臣討夷之日放矢如雨夷賊采之防其危恰若嚼盡桑飯也其徒在山下避箭如此故俗呼曰矢嚼山々下七瀑布其大者曰仙龍瀑布矣尤奇觀也　後説甚拙

旭日山舘

在小野田村大崎家臣小野田玄蕃居城也

高根城

在高根村笠原内記居之

味袋舘

在味袋村是亦大崎臣加藤清右衛門居所也

枇杷壘

在柳澤村大崎臣八野木澤備前居之（八野木澤疑誤柳澤者矣鄉晉不正蓋至茲耳）

谷地森館

在谷地森村谷地森主膳居之（兩主舊氏笠原）

米泉城

在米泉村米泉伊勢居之是亦大崎家臣也

中新田城

在中新田村大崎義隆朝臣居于此自是移名生城後家臣南條下総者居之或曰氏家彈正也

四竈城

在四竈村四竈尾張居館也或曰內崎中務者居之共大崎家臣也

栗原郡

按分一郡于四部而有一二三迫號鄉黨嘗言一迫古號姬松莊屬三十二村二迫稱尾松莊屬十六村三迫稱高松莊屬二十九村外二十三村稱之栗原莊

四十八代稱德帝神護景雲元年十月乙巳置陸奧國栗原郡本是伊治城也

神名帳曰栗原郡七座（大一座小六座）　表刀神社　志波姬神社（名神大）　雄鋭神社　駒形根神社　和我神社　香取御子神社　遠流志別石神社

志波姬神社

去高泉驛北三町餘有一泓泉傍有叢祠是古之志波姬神社也有旱魃則鄉俗禱雨而有應仍稱之清泉明神

伊治城

記郡中其地不詳何所也

稱德帝神護景雲元年十月辛卯勅見陸奧國所

奏即知伊治城作了自始至畢不滿三旬朕甚嘉焉宜加酬賞式慰匪躬其從四位下田中朝臣多太麻呂授正四位下石川朝臣名足大伴宿禰益立正五位上從五位下上毛野朝臣稻人大野朝臣石本從五位下外從五位下道島宿禰三山首建斯謀修成築造今美其功特賜從五位上又外從五位下吉彌侯部眞麻呂徇國爭先遂令馴服壯彼如歸進賜外正五位下自餘諸軍々毅已上及諸國軍士蝦夷俘囚等臨事有効應敍位者鎭守將軍並宜隨勞簡定等第奏聞

同年十二月丙辰勅陸奥國管内及佗國百姓樂住伊治桃生者宜任情願隨到安置依法給復

同三年二月丙辰勅陸奥國桃生伊治二城營造已畢厥土沃壤其毛豐饒宜令坂東八个國各募部下百姓如有情好農桑就彼地利者則任願移徙隨便安置法外優復令民示遷

同年夏六月丁未浄石百姓二千五百餘人置陸奥國伊治村 按至此所直稱伊治村爲地名可見又前條稱坂東八个國始見于此

四十九代光仁帝寶龜八年十二月辛卯初陸奥鎭守將軍紀朝臣廣純言志波村賊蟻結肆毒出羽國軍與之相戰敗退是以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂爲鎭守權副將軍令鎭出羽廣繼授從四位下勳等佐伯久良麻呂並外從五位下勳百濟王俊哲勳五等自餘有差

同九年六月庚子賜征戰有功者二千二百六十七人爵伊治公呰麻呂授外從五位下自餘有差

同十一年二月丁酉陸奥國言欲取船路伐撥遺賊比年甚寒其河已凍不得通船今賊來犯故先可塞其寇道仍須差發軍士三千人取三四月雪消雨水汎濫之時直進賊地固造覺鱉城於是下勅曰海道漸遠來犯無便山賊居近伺隙來犯遂不伐撥其勢更強宜造覺鱉城得碍膽澤之地兩國息無大於斯

丙午陸奥國言去正月廿六日賊入長岡燒百姓家官軍追討彼是相殺若今不早攻伐恐來犯不止請三月中旬發兵討賊並造覺鱉城置兵鎭戍勅曰夫狼子野心不顧恩義敢恃險阻屢犯邊境兵雖凶器事不措止已發三千兵以刈遺孽以滅餘燼凡軍機動靜以便宜隨事

三月丁亥陸奥國上治郡大外從五位下伊治公呰麻呂反率徒衆殺按察使參議從五位下紀朝臣廣繼於伊治城伊治麻呂本是夷俘之種也初緣事有嫌向呰麻呂匿怨陽媚事之廣繼信用殊不介意又牡鹿郡大領道島大楯每凌侮呰麻呂以夷俘遇焉呰麻呂深禦之時廣繼建議造覺鱉城以遠戍候因率俘軍入大楯呰呂並從至是呰麻呂自爲內應唱誘俘軍變而先殺大楯率衆圍廣繼攻而害之獨唯介大伴宿禰眞綱開圍一角而出獲送多賀城久年國司治所兵器粮畜不可勝計城下百姓競入欲保城中而介眞綱掾石川淨足潛出後門而走百姓遂無所緣一時散走後數日賊徒乃至爭取府庫之物盡重而走其所遺者放火而燒焉（繼一作続）

按呰麻呂先是久浴皇化賜恩澤如今反王命而面殺公官可謂暴虐之甚者也（事見前八年九年記）大楯亦不言無罪焉眞綱淨足不討仇而走可謂怯懦之甚者也豈不恥之哉

五十代延暦十一年正月丙寅陸奥國言斯波村夷膽澤公阿奴志包等遣使請曰己等思歸王化何日忘之而爲伊治村俘等所遮無由自達願制彼遮鬪永開降路即爲示朝恩賜物放還夷狄之性虛言不實常稱歸服唯利是求自今以後有夷使者勿加常賜

十五年十月戊申相摸武藏上總常陸上野下野出羽越後等國民九千人遷置陸奥國伊治城

新城館

在高泉驛口樵木田傍有古石墳二基題曰元弘

四年甲戌所立也不詳為何人

千枝湖

在小野村湖中有島安辨才天謂天女島是湖水所謂大崎沼者是也如今水已涸湖畔有古館是乃大崎義隆朝臣故墟也或曰大崎沼今新田沼也

花島山　翠生孤島中流見白寫層巒四望開

在同村乃大崎沼畔有一青山往昔多花木所謂綠淨春深如染衣有古歌鄉黨相誦來

よみ人しらす

みちのくの花島やまに陰落て木末に魚ののほるとそ見ゆ

按此歌與古詩所謂綠樹陰沈魚上樹者暗合

朽樹橋

同村圯橋也或曰在樋口村

戀歌に

風雅五　藤原朝定

あふ事はくち木の橋のたえ〳〵にかよふはかりの道たにもなし

河内

みちのくの朽木の橋も中絶てふみたに今はかよはさりけり

家隆朝臣

谷川のくち木のはしも埋木の人にしられぬ道や絶なん

粧奩泉

同村相傳往昔佐用姫者趣膽澤時設靚粧投其具於此去或曰移容貌于此幽泉地也

簀子橋

在内野崎村近于荒屋驛是地亦舊跡也

清瀧泉

在清瀧村有小瀑布往古人賞來之地也

大武峯

在佐沼莊南方村此地往昔痓賊首大武丸元之

地也上建大悲閣雲慶作大同中田村麻呂所置
也有寺號大武山天王寺

佐沼城
在北方村往時秀衡家臣輝井太郎高直居于此
城

佐沼湖
同村有小湖深潭不可測也是亦舊地也

一迫
四分栗原以一二三而區處焉其一也築館照越
萩原八澤大田沼崎梅崎鳩岡堀口八樟刈敷留
場成田清泉等皆屬于此
東史曰文治六年二月十一日泰衡舊臣大河次
郎兼任與征東軍館千葉新介戰于栗原一迫兼
任盡敗走收殘兵五百餘而屯于平泉官兵進襲
衣河兼任敗絶北上而至于素都濱糟部據焉島
舞椰爲上總前司敗自是經華山千福山本踰龜
山潛居于栗原寺

杉山善逝堂
在築館驛口廢帝寶字四年建之其像傳教作也
在寺號醫王山叢林寺

荒湯溫泉
在鬼元村往古瘞山鬼元于此山仍稱其地名側
有石其一曰老婆石其一曰黃犬石或曰此地乃
荒雄地也荒雄荒湯訓同後人誤其字者也
屬玉造郡其山勢及于此仍半屬此郡土人誤文
字實乃荒雄溫泉也

不動閣
在花山村運慶作堂宇飛驒匠所建有寺號金峯
山花山寺

貞任古壘
在川口村往時貞任所據之地也有瀑布號牛潭
瀑布

坂本館
在長崎村相傳秀衡家臣長崎四郎故壘也

白坂多門天

在上宮野村傳教作也有寺號萬德山興福寺

安寧天皇御陵

在同村以有御陵而稱其地于宮野焉

按安寧帝人王第三世天子諱磯城津玉手看綏靖帝太子母曰五十鈴依媛命事代主神之小女也治世三十八年五十七歲崩葬之畝傍山南御陰井上陵無東遊事實有何據而傳後世而至今哉尤可怪

保呂羽社

在眞坂驛後相傳武烈帝以性行暴惡而配于此地崩御後建祠以祀之

按武烈帝事載詳于國史或刳孕婦腹視其胎築石室而將避火雨解指甲使掘薯蕷拔頭髮使上樹倒木而殺之伏塘械刺殺或射人于樹令女牽馬遊牝之類暴惡不可枚擧焉然無配流之事是亦據何而附會妄說乎

赤松館

在島體村佐藤莊司長子次信舊居也館下有寺號長水山吉祥寺有佛像安阿彌作也有古墳記曰貞治二年二月三日（貞治九十九後光嚴帝十二年癸卯也）

二迫

文字鶯澤稻宅袋村櫻田傍兒黑澤八幡富村栗原姉齒梨崎城生綿丸菱沼眞根牛泉澤凡十七村曰之二迫

八幡神社

在八幡村康平中義家所建也有寺號小治山源東寺相傳賴義朝臣次軍之地也社中藏甲冑二襲義家東征之時奉納鎧也其一則六十二行冑前三段垂條上竅菊花蔓藻錣五段敲耳廣表額飾一尺一寸上形三寸五分下減五分坐金菊頷下濶八寸六分長二寸其下腹板一尺下散板九寸菱縫板苞以革共八下栴檀板菊藻紺綿縧穿劄札其二則冑七寸五分圍六寸二分錣五段

跡緻胸板八寸其下赤同下散八寸五分八行一段各異其色紅紺絲紺紫絲碧腰佩一尺六寸長八尺五寸社中舊物也

鰐口一器是亦舊物也有銘曰小治山源東寺延慶四年壬亥正月五日大旦那大麥生藤內次郎國正

按延慶四年壬亥九十四代花園帝應長元年辛亥也壬辛字誤也

錣字俗間用之肯衿考字書無此字錏字義近之於加切音鴉錏鍜頸鎧誤此字乎大麥生姓氏乎不詳何人也

鳥合神

在傍兒澤村相傳往昔由理若寵鷹綠丸產于此地後人哀爲主溺死建祠以祭之

秋法社

在鶯澤村天喜中年五頼義東征之時建熊野三社于山上以祭之秋七月落成焉於是始備禮奠定祭法仍以此字爲社號焉言取義于肅殺之事也

按歐陽永叔秋聲賦有言曰夫秋刑官也於時爲陰又兵象也於行爲金是謂天地之義氣常以肅殺而爲心天之於物春生秋實故其在樂也商聲主西方之音夷則爲七月之律商傷也物既老而悲傷夷戮也物過盛而當殺如今頼義建社而祈平安與此義暗合矣然則頼義朝臣之於戰陣自然叶此理者歟宜哉所稱古今之英雄耶

又社中藏舊物其一古鞍其二曰假面其三曰鉾

頼義古館

同所鄉人謂之秋法館頼義之故墟也

節女石墳

同村在河畔高七尺濶四尺往昔玉造郡磯田村有小林修理者其家赤貧殊甚以其幼女難養育與之鄉人流離終售身倡家歲餘修理入青樓而戲其女々知其家君而辭之後恥之投于河水而

死鄕人哀悼其志立石以弔之古墳今猶存有寺號鷲澤山金剛寺往昔修理所建也

八所權現

在稻敷村平形地有寺號春日山高松寺有古鰐口二器其一銘曰善喜二年三月日其二銘曰寄附鰐口一器於陸奥長岡郡荒谷鄕安養寺時寬正三年壬午二月廿四日願主常德

按善喜年號不見用喜字于下者七十代後冷泉帝天喜外無有之寬正百三代後花園帝三十四年也依此銘而會知此地乃古之長岡郡也然則此時未收村落猶立郡名也高松寺後稱安養寺乎又其寺在荒谷而適以此器而藏此寺者乎

姊齒松（一作羽歌枕作姊場松葉集作姊葉藻鹽草作阿禮葉今從夫木集）

去澤邊東十二町餘在梨崎村有長松樹是也古松乃四十餘年前枯槁（其松五葉）後人繼而所植新松也古老相傳是乃筑紫肥前產松浦佐用姬者之姊某墓上松也或曰小野小町姊也往昔有寺號松語山龕藏寺是乃妹子爲亡姊所建精舍也新松以南有一樹鄕老某塚上松也有誤新松（佐用姬事見伊澤郡藻鹽草あれ葉松奥州也是もあねはの松同事歟）者尤可辨別焉

むかしおとこみちの國にすゝろにゆきいたりにけりそこなるおんな京の人はめつらかにやおほえけんせちにおもへる心なんありけるさてかのおんな

中々に戀にしなすはくはこにそなるへかりける玉の緒はかり

歌さへそひなひたりけるさすかにあはれとや思ひけんいきてねにけり夜ふかく出にけれは

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつゝ

といへるにをとこ京へなんまかるとて

伊勢物語第十四

くりはらやあねはの松の人ならは都のつとにいさといはましを

といへりけれはよろこほひておもひけらしとそいひおりける

按前後二首及終篇詞皆所述方言而可以視往時郷語之實矣又審往時之人雖里婦之賤亦能倣風俗詠和歌以述其情於是始知遣國風于此歌而王化之及邊塞在茲也第一首之意與明沈明臣宮怨詩緑滿南園桑葉肥風光欲盡柳花飛妾生不及吳蠶死留得春絲上袞衣者略相似能寫得情實也

夫木

みちのくにあねはの松　祐擧

かくはかり年つもりぬる我よりも姉はの松は老ぬらんかし　長明

ふる郷の人にかたらむ栗原や姉羽の松のうくひすの聲

千五百番歌合　正三位秀能朝臣

栗原の姉はの松をさそひても都はいつとしらぬ旅かな

姉歯橋

みちの國にてあねはのはしを　夫木集類陸奥橋　能因法師

くちぬらんあねはの橋もあさな〳〵浦かせふきて寒き濱邊に

按能因親見之人也今與此地異也想夫別有稱姉歯橋者乎考下一首則自稱松子此地者無可疑然至詠水濱者則不合焉如何

光景古館

松樹以南有古壘秦衡家臣姉歯平次光景之故墟也館下水田往古稱東奥道者也

摩腰石

去松下東南十二三間有巨石上有紋理如布往昔義經經過此地聊憩于石上而伸旅鬱之地也

龕藏寺址

龜毀坂以西三十間許有寺址古之松語山龕藏寺址往時葬佐用姫姉之地也後改字松護山岩藏寺

黃雀池

新松以東一町餘林中有小池長二三間濶五六尺義經東行汲池水而研墨作家書之地也

八幡叢祠

松樹西北在梨崎村荒廢已久姉齒古松攉爲三斷鄉人納一段于祉中以爲後證焉今猶存

栗原寺

在菱沼村有寺號上品寺是乃古之栗原寺也東史曰文治六年春大河兼任潛居于栗原寺着錦脛巾佩金釦刀鄉人怪之三月十日樵夫數十人起圍其寺以斧斤殺之

鄭子臧出奔宋好聚鷸冠鄭伯聞而惡之使盜殺之君子曰服之不衷身之災也詩曰彼己之子不稱其服子臧之服不稱也夫兼任身爲轉客猶着錦佩金宜哉佪樵夫之害也

無音瀑布

在大河口畔昔川地亦盖其河流也歟

夫木集　　　　能因法師

いかにしていひはしめけむことのはそ昔川にそとふへかりける

此歌はみちのくにくたりけるに栗原の郡にてそこにあるもの是は音なし瀧に侍り又河をはむかし川といひ侍るといへはよめると云々

六帖昔なしの瀧陸奥或山城或紀伊　　正三位知家卿

落瀧津水の白玉ひゝけとも君は音なしのきゝそふりぬる

建長七年題朝卿家千首歌

大宮院中納言

音なしの瀧の白糸こゑはせてもゆるほたるのなみたにや見る

戀歌　西圓法師

をの山のうへよりおつる瀧の名の音なしにのみぬるゝそてかな

能因法師

都人きかぬはなきを音なしの瀧とはなとかいひはしめけむ

此歌はくり原の郡にてそこにものせしこれは音なしの瀧に侍り又川は昔河といひ侍るといへはよめるとそ

題しらす　よみ人しらす

いかにしていかによるらんをの山のうへより落るをとなしの瀧

按此歌幷西圓詠考則小野山乃其山頭也

三迫

岩崎沼倉松倉中野鳥津猿飛來大原木里谷平形深谷藤波戸普賢堂赤兒末野片間合小堤有壁小迫金成有賀御田鳥武鎗石越澤邊大林畑村福岡若柳石崎凡二十九村曰之三迫

東史曰文治五年秋泰衡令若九郎大夫余平六屯栗原三迫黑岩口一野邊拒幕下賴朝同八月二十一日三浦介斬泰衡將若九郎同九郎大夫爲所六郎朝光所虜賴朝收其兵而經志田郡松山路而到津久毛橋

黑岩口城

在岩崎村是乃古之所謂黑岩口城是也今稱之岩崎城事見前條

津久毛橋郷黨稱之江浦藻橋今從東史

金成驛五町餘大悲閣下有水流三迫河流架一土橋津久毛橋是也橋西平形村以東岩崎村跨南北上有古館址立石刻銘記曰泰衡之墓高四

尺五寸石面上有梵字下書承保六年二月廿日左記曰密方敬白橋畔是文治古戰場也城湟殊深士卒憂之投江浦藻蹈而攻城々遂陷仍名江浦藻橋

按承保六年白河帝承曆三年己未也考之承保四年丁巳改元于承曆而無六年蓋東奥邊陲道路已隔未解改元推記其年數者也先文治五年已百有一年非泰衡墓也審矣蓋康平中戰死者之墓乎然考國史貞任乃後冷泉帝康平五年壬寅伏誅先承曆三年已十有八年後人立石而弔之乎幸以有津久毛橋之役郷俗不考時世妄附會而爲泰衡墓者乎且江浦藻乃海畔者豈生于斯地哉蓋岩畔野草莽々離々以相似江浦藻而假其名者也

東史曰文治五年八月二十日賴朝過津久毛橋時梶原平次景高獻和歌以賀之曰

みちのくの勢はみかたにつくも橋わたしてかけん泰衡か首

或曰上句乃賴朝卿作景高賡下句

連架橋

在江浦草橋西往年河流廣濶故橋梁不足架東西相繼以用名故連架橋今水涸流細

信樂寺

在津久毛橋北號江浦藻山信樂寺今荒廢而古址猶存焉

十三壇

連架橋北二十四五間在古館址上設土壇十三堆自北至南相連不詳設之義或曰此地往昔之古戰場而瘞戰死者之塋也

守夜壇

信樂寺址北有一古壇泰衡營陣之時士卒守夜之處

大原木十三壇

在大原木村山上阻繼橋以南十六町餘自北及

南相並、蓋是亦戰死之古墳乎

古幽泉

出津久毛橋古館下城湟之水源也

初崎大悲閣

在岩崎村有寺號晋羽山清水寺相傳惡七兵衛師末者子彌兵衛師門擬京師大悲閣是乃景清後裔世信仰觀音旋及其後孫也或曰彌平兵衛師門者也

重家館

在小堤村有寺號尼山喜泉寺是乃鈴木三郎所據古墟也

義經墳墓

在沼倉村義經自盡後沼倉小次郎高次者葬之此地以立其陵墓此地乃高次古館址在上頭高山稱之辨慶峯往昔武藏坊經歷之地也

彌陀堂

同村佛軀背後記曰應永二年所建也藏義經馬具如今纔餘隻鐙又有古笈辨慶所負舊物也納錦襴袈裟傍有故礎往時多堂社置八幡天神愛宕藥師觀音遺址也

雌雄瀑布

同村山中雄瀑布直下十五丈餘畢由所謂洞門千丈掛飛流玉碎珠聯冷噴秋今古不知誰捲得緑蘿爲帶月爲鉤者宛然在目前雌瀑從焉

白象峯普賢堂

在普賢堂村後花園帝永寧中平低重所建有寺號白象山洞雲寺傍有熊野叢祠鰐口記銘曰永寧十二年四月廿二日平低重納之

舞童墳

在紅袴村相傳往時秀衡好歌舞於是選舞童數十輩常舞歌曲於庭以爲樂焉有一少年號春風容貌閑麗技亦秀出于群兒歌歇行雲舞飄紅袖衆人移心于此兒無致顧眄于佗者仍群童惡之潜令人殺之以瘞于此其兒好紅裳故後人稱之紅袴村

小迫大悲閣

在蒜香鄉小迫村號小迫山正大寺（應永二年八月十日土佐守繼長者有上梁文五十一代平城帝大同年中田村丸所建號高峯山王大寺）建大悲閣有緣起全篇卑俚不足取之故略記曰正大寺坂上將軍俊宗所創立也（分註曰倫重俊輔俊仁俊俊宗四世相次共任征夷將軍）桓武帝御宇勢州有妖魅潛竄于鈴鹿山中黨類多奪人愛子寵姬于常城以充庖厨鐵城石門不能禦之猛將勇士無當之者謂之大武丸令將軍俊宗征之俊宗率官兵到鈴鹿劍峯聳天層巒吐雲嶄岩邃洞不詳何處是鬼窟或白晝忽暗闇夜頓曉或雷電雨雹乍發乍息非常怪異不可勝言三軍戰栗徒躊躇耳俊宗知不可以人爲而征即潛心以懇禱于千手薩埵一宵兀坐非夢非覺見神女于恍惚之間天衣峨冠從容曰將軍奉勅來不亦好乎但妖魅容易不可獲有一奇計以示之子彼幸好飲今夜當置酒以出之乘其酣醉子謀之言訖去開戶覘之不知其處俊宗約期率精兵含枚把炬而入山中溪間山路不迷直到鬼窟巢群鬼盡醉臥引勁弩接利兵殺之唯大武丸脫身走於磐瀨郡千丈嶺俊宗再奉詔討于佐沼山中而殪焉瘞之構一堂上安大士像（在南方村）名號大武峯戮其餘黨於七處其一曰箟峯其二曰湊津牧山其三曰水越長谷其四曰鱒淵華足其五曰南部三閉其六小迫其七富山各建閣以爲護國鎭守蓋所以賽鈴鹿懇禱之應者乎仍俊宗置酒勞士卒藏弓矢歸京師云

按記緣起末曰承應三年甲午其文拙其說渾妄誕浮詞故考之以辨焉（下皆舉古史以證之）

考大系圖自坂上景家犬養苅田丸田村丸至廣野尚道尚常好陰是則望城其次序如此與分註說大異

俊仁乃誤利仁者也非坂上姓爲藤原姓也且俊宗之事世所傳皆非也詳俗說辨

田村東征或曰桓武帝延曆十九年冬十月令

坂上田村麻呂點撿所、分散諸國奧州夷賊上日本後記桓武延曆二十年紀曰、二月丙午征夷大將軍坂上田村麻呂賜節刀十一月乙丑詔曰、陸奧國乃蝦夷等歷代渉時（天）侵亂邊境殺略百姓是以從四位上坂上田村麻呂大宿禰等（乎）遣（天）伐平掃治（之流云云）

廿一年正月甲子陸奧國三神加階緣征夷將軍奏靈驗也（以此考之則田村平夷信鬼遷神之志可見）

丙寅遣從三位坂上大宿禰田村麻呂造陸奧國膽澤城　夏四月庚子造陸奧國膽澤城使田村麻呂等言、夷大墓公阿弖利爲磐具公母禮率種類五百餘降　秋七月甲子造陸奧國膽澤城使田村麻呂來、夷大墓公二人並從、八月丁酉斬夷大墓公阿弖利爲磐具公母禮等、此二虜者并奧地之賊首也

嵯峨帝弘仁二年夏五月丙辰坂上大宿禰田村麻呂薨粟田別業時年五十四田村麻呂從三位右京大夫兼右衛門督刈田麻呂子正四位上犬養之孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如養鷹鬢編金絲有事而重身則二百一斤欲輕則六十四斤（減百三十七斤）隨心所欲怒目轉視則禽獸懾伏平居談笑則老少馴親毘沙門化身來護我國延曆四年十一月癸巳敍從四位下時年二十八六年三月丙午兼內匠助九月丁卯爲近衛少將七年六月甲申任越後介九年三月丙午轉越後守十五年正月廿五日任陸奧出羽按察使兼陸奧守十月甲辰兼鎭守府將軍十六年十一月二十五日任征夷大將軍十七年閏五月癸酉授從四位上十八年五月敘近衛權中將二十年十月乙丑至從三位十二月轉中將廿三年爲刑部卿廿四年六月廿三日任參議廿五年四月十八日爲中納言勳二等同月廿三日兼近衛大將大同二年八月十四日兼侍從十一月十六日兼兵部卿四

年三月廿九日叙正三位五年九月十日任大納言庚申宣詔賜坂上大宿禰田村麻呂從二位野史曰二十年陸奧國夷賊高丸及惡路王起達谷窟至駿河國淸見關於是征夷大將軍坂上田村麻呂賜節刀發京師高丸退歸奧田村麻呂追到陸奧射高丸於神樂岡斬惡路王國內平

按日本後記擧田村始末如前條唯言是歲二月賜節刀而不記高丸惡路王起達谷十一月言遣田村麻呂而伐平捕治之事而不記殪高丸於神樂岡之義與野史說不合焉且大武丸事前後不相見

東史曰文治五年九月廿八日幕下自平泉赴多賀途有一青山號田谷窟是田村麻呂利仁將軍奉詔征夷賊首惡路王幷赤頭等構塞之巖窟也

百將傳曰藤原利仁者延喜之時率兵討奧賊風雪之夜乘敵無備擊平之

名將傳曰藤原利仁者勇力絕衆輕捷如飛醍醐朝當關東盜賊起奉勅往捕之會天大雪利仁夜潛兵襲其落賊果無備大克斬首萬級威名大震迨奧州夷賊起又令利仁拜鎭守府將軍征討之事所至荐克功名速成而還朝廷賞之剖符於越前世々無絕由是其胤竟盛于北越

按田村丸利仁事實如此然混爲一人或愚昧之徒以田村爲氏以利仁爲名作緣起者亦陷此妄說而幷二人混兩姓之描遂臻兹且夫若師錬釋書取事實渾不據正史故於延鎭傳雖記高丸之事而不載大武丸之事於是作緣起者之識須推而知焉

此次具考田村之事實官爵極人臣之榮武毅出男兒之倫功鳴于閭國聲盛于海內可謂固一世之雄也如今至讀毘沙門化身來

護我國始知時人有斯言而共比其威于多門勇猛神速已亦聞而喜之平素以此自負主張者可察焉自此一念言則所崇之者佛像所事之者堂舍故到處建大悲閣在處置多門堂其費亦抑幾何哉嗚乎甚哉言其謬誤之原則僅出于方寸之差而毎々認心于此累情于此致力于此施功于此空毀一生之心術遂賊終身之德行已雖抱英雄之器而秀等輩未得陷愚昧之域而脫不學之識秉筆之史亦倜而昏故筆之書而貽莫于千載也歐陽公有言曰今八尺之夫被甲荷戟勇蓋三軍然而見佛則拜聞佛之語則有畏慕之誠者何也彼誠壯使其中心茫然無所守而然也一介之士眇然柔懦進超畏怯而聞有事佛者則義形於色非徒不爲之屈又欲驅而絕之者何哉彼無佗焉學問明而禮義熟中心有所守以勝之也嗚乎令此義曉之則田村之雄才胡爲迷彼淫此安身乎異端而取訕乎後世哉潛爲斯人惜焉故吐露情實以述其所思于此丈夫者豈不取之耶

新山古館

在若柳村驛口嘗言大古此山一夕涌出仍曰新山河上架橋通于福岡此地往時義家朝臣東征次軍之地也後屬葛西與大崎屢接兵由南出野義隆兵日強葛西弟寺崎式部大輔令家臣千葉豐後移此而守之其先在磐井郡峠村北館豐後裔降民間在若柳村世能守家業勤農事貢賦稅惠親族且廉直而有陰德故鄉黨稱善人焉

馬籠

在驛南往昔義家次軍之時士卒設土窟養馬之處也或曰盜乘兵亂盜人家馬而藏于此者也有土籠寬文中猶存焉

蒼樹泉（アヲキシミヅ）

在新山八幡社下其水出于樹底蒼蘚中仍稱蒼

樹泉

平野神社

在若柳村仁德帝時世所創立也爾後葛西清重再興之

莊嚴寺

在小林村山號虛空山玉造郡三町目之間也相傳此地古之小野小町生產之處也門前有若宮八幡叢祠仍曰若宮崎寺前古昔有池有巨蛇年々以美婦爲牲焉一女子以奇計殺之瘞其屍于此建寺置虛空藏而稱莊嚴寺事詳玉造抑池寺中藏空海所畫兩界曼陀羅及阿字一篇文是嵯峨帝宸翰也如今其寺荒廢往年舊物多爲盜所掠略殘處亦幾亡失也阿字贊曰上有文下有阿字念彼蓮華處八葉鬚蘂敷葉臺阿字門焰鬘皆妙光輝普周遍照明衆生故如今會千電持佛巧色形深居圓鏡中應現諸方所積如淨水月普現衆生前知心性如是得住眞言行以阿字門作出入息三時思惟行者爾時能持壽命長刧住世阿字門一切諸法本不生故者阿字是一切法教之本凡最初開口之音皆有阿聲若離阿聲則無一切言說故爲數聲之母凡三界言語皆依於名而名依於字故悉曇阿字名爲衆字之母當知阿字眞言亦復如是如是觀察時則知本不生際是萬法之本若見本不生際者即是如實知自心如實知自心即是一切智智故毘盧遮那唯以此一字爲眞言也佛從平等心地開發無盡莊嚴藏大曼荼羅已還用開發衆生平等心地無盡莊嚴藏大曼荼羅妙感妙應皆不出阿字門當知感應因緣所生方便亦復不出阿字門

右一幅所傳不分曉或曰宸翰也仍論曰

或曰空海阿字上之贊詞相傳嵯峨帝之宸翰也今按斯文也於其眞贋一事無可其徵者矧無印璽之左證乎尤可疑者也曰予今閱此文詞蓋足以爲眞翰矣夫阿字之爲義由來佛氏

之所稱眞言之所崇凡俗之輩信之如鬼神畏之如蛇蝎浮圖釋門亦進則專拜禮退則盡戰栗且夫空海乃釋徒之巨擘信之亦莫以加焉今於其賛詞也自信仰恐惧者言之則雖三蹟之徒矣對此圖上容易加賛詞妄意落濡毫哉況其餘之凡筆俗書乎然則當之者非至尊則豈輙加褒賛輕下筆簡耶　帝由來以善書聞于世且平日與空海頡頏于其聲名抵昂其技能焉於是乎自作字揮毫者尤所以不可疑也至無印璽者則斯時世未嘗用印行而爲證也審矣豈不信其宸翰乎哉

奥羽観蹟聞老志卷之八　終

奥羽観蹟聞老志卷之九

仙臺　佐久間義和著

桃生郡

神名帳桃生郡六座 大一座 小五座　飯野山神社

日高見神社　二俣神社　石神社　計仙麻

大島神社 名神大　小鋭神社

按飯野乃村名失其社址日高見并大島舊在此郡今移其郡而屬之氣仙計仙麻乃今氣仙沼地是亦屬本吉且後人誤其文字者也

四十六代孝謙帝天平寶字元年四月辛巳勅曰古者治民安國必以孝理百行之本莫先於茲宜令天下家藏孝經一本精勤誦習倍加發百姓間有孝行道人鄕閭欽仰者宜令所由長官具以名薦有不孝不恭不友不順者宜配陸奥國桃生出羽國小勝以清風俗亦捍邊防別有高臥穎川逝

跡箕山者宜為朕代之集許以禮巡問於今善性
按孝謙帝之於盛舉也先無此令後無此命是
乃父子君臣兄弟夫婦之目而實正脩齊治之
善政也於是乎命都鄙遠邇族建學立師朝夕
諷喩涵養而琢磨其智淬厲其行則自然移風
易俗之效驗不可勝計焉然則宜令天下後世
之人咸浴恩化德而以及無窮亦無弊矣然發
口託詞而徒止于此則非先哲之所謂徒善徒
法者乎如今留此遺之留史籍可謂不易之幸
也

四十七代廢帝天平寶字二年十月甲子發陸奥
國浮浪人造桃生城（未詳其地）

同秋九月己丑勅遣陸奥國桃生城出羽國雄勝
城　同月割留相摸上總常陸上野武藏下野等
七國所送軍士器仗以貯雄勝桃生二城

同四年正月丙寅於陸奥國牡鹿郡跨大河淩峻
嶺作桃生城奪賊肝膽　又擢按察使朝獦特授
從四位陸奥介兼鎭守副將軍外百濟人足小野
竹長百濟王三忠葛井立足玉作金弓大伴益立
韓袁哲等各賜爵

辛未沒官奴二百三十二人婢二百七十人配雄
勝柵並從良人

同年十月癸酉陸奥柵戸百姓等言遠離鄕里傍
無新情（新讀爲親）吉凶不相問緩急不相救伏乞本居
父母兄弟妻子同貫柵戸庶蒙安堵許之（奥柵間盖脱桃生二字）

十二月戊寅藥師寺僧華達俗名山村臣伎婆都
與同寺僧範曙博戲爭道遂殺範曙還俗配陸奥
國桃生柵戸

四十八代稱德帝神護景雲二年十二月丙辰勅
陸奥國管內及佗國百姓樂住伊治桃生者宜任
情願隨到安置依法給復

同三年正月己亥陸奥言天平寶字三年符差浮
浪一千人以配桃生柵戸本是情抱規避萍漂蓬

轉將至城下復逃亡加國司所見者募比國三丁已上戶二百烟安置城郭永邊城共安堵以後稍省鎭兵官議奏曰夫懷土重遷俗人常情逃亡無已若有進趨之人自願就二城之沃壤求三農之利益状乞不論當國佗國任使安置法外復令人樂遷以爲邊守奏可

同年二月丙辰勅陸奥國桃生伊治二城營造已畢厥土沃壤其毛豐饒宜令坂東八箇國各募部下百姓如有情好農桑就彼地利者任願移徙隨便安置法外復令民樂遷

四十九代光仁帝寶龜二年十一月癸巳陸奥國桃生郡人外從七位下牡鹿連猪手賜姓道島宿禰

同五年七月壬戌陸奥國言海道蝦夷忽發徒衆焚橋塞道既絶往來侵桃生城敗其西郭鎭守兵勢不能支國司量事興軍討之但未知其相戰而所殺傷

同八月己巳勅坂東八箇國曰陸奥國如有急隨國大小差發援兵

同六年十一月乙巳遣使於陸奥國宿治夷俘等忽發逆心侵桃生城鎭守將軍大伴宿禰駿河麻呂等奉承朝委不顧身命討治叛賊懷柔歸服勤勞之重實合嘉尚駿河麻呂以下一千七百九十餘人復其功勳加賜位階授正四位下大伴宿禰駿河麻呂正四位上勳三等從五位上紀朝臣廣純正五位下勳五等從六位上百濟王俊哲勳六等餘各有差其功卑不及叙勳者賜物有差

澤山城

在寺崎村西條榮如者古館也

樫崎古館

在樫崎村義家朝臣與貞任接戰之地也鄕俗不解古戰場之地妄誤合戰地而稱樫崎城上山南適有一樫樹仍名其地實合戰崎之謬者也

按義家朝臣討賊于此地事不見正史且下條

以高道墓在郷人以爲戰死于此役焉然高道乃天安二年爲陸奥介之人且石上有貞觀五年字是亦嵯峨帝年號其戰役雖不見國史想夫高道天安以後久在東奥（至此歳凡六年）不幸會夷賊起而戰死于王事者也此役先義家已久考之康平元年戊戌則已百九十六年皆傳者之誤也

高道石墳（共邊有男澤内膳古館）

在樫崎村去寺崎驛東一里餘郷人稱山田碑或號貞觀石高四尺濶九寸餘石圍六尺南向立上有高道墓三字文字方二寸有榎樹挾石而生焉下畔文字不見左旁記曰貞觀五年五月日相傳斯人討夷賊而戰死于茲後人立石其古墳今猶存焉

一日打其文字鳥跡不尋常高古遒勁不知當時何人手跡郷人不詳高道何人仍考之國史文德實錄曰天安二年戊寅正月己酉從五位下坂上大宿禰高道爲陸奥介至貞觀五年癸未已六年嗚乎王事無盬遂安戰死于東陲而遺忠誠于千載可貴之人也然州人無識其實者佳名徒朽于泉下苟可惜矣

館山城

在大田村廚川次郎貞任古壘也

日高見神社

在同村相傳後冷泉帝治曆中義家朝臣東征之時所建也

按右神社延喜式神名帳所載先治曆幾百五六十年蓋義家東行所修覆者後人不察者乎

八幡太郎館

同村義家次軍之地其館下曰柏木原往時古戰場也

大悲閣

同村佛像傳教作後鳥羽帝文治五年頼朝東征之時所建號遮那山長谷寺

紫硯石
在小舟越村出紫色石用之硯而尤佳也

飯野山神社
在飯野村不詳其地

中島城
在中島村須藤但馬守居館後國分彦九郎盛重亦居之

七王館
在中野村葛西六郎居館也

解鞍島
在鞍馬村非島嶼地野外高丘也義家東征之日解鞍而憩樹下處也其傍有石墳鄕人曰石墳島

袖渡
曰橋浦（說桃生村）津渡也或曰牡鹿石卷住吉渡口也

天雄寺
在雄勝濱有寺號勝法山天雄寺後花園帝長祿中所建也此水濱出于硯石頗雅物也

供養石塔　三基
在尾崎濱有寺號長耀山海藏寺其一曰弘安十年三月十五日（後宇多年號）其二曰嘉曆元年四月二十三日（後醍醐年號）其三曰貞和五年二月日（光明年號）

潮華石
在舟越尾崎界石間噴潮水如烟霧相似鄕人稱之曰吹潮花石

天狗梁
在舟越濱雙石梁長二間餘架兩石岸不假人爲自然爲橋梁之狀土人謂之天狗橋

隆泉寺
在小野驛中舊時在同郡大窪村號無爲山隆泉寺是乃鎌倉權五郎景政所建也有牌子稱隆泉院殿興英文治三年丁未春移景政居城于小野本鄕今之寺院地是也漸々荒廢寛永二年壬寅再興明暦三年癸卯冬改號功岳寺此地乃古之葛西莊也

景政叢祠

在大窪村相去功岳寺東北一里餘是舊時隆泉寺址也曰之門前宅以往昔房舍之多而有此名其地平姓石墳古碑猶在焉鄉人建祠祭景政

小野城

在小野驛後景政末裔永江太郎義景居館也文治中賴朝賜深谷鄉于義景其子孫綿々至永江播磨守勝景後號月鑑是也相繼居焉天正中獲罪我黃門君而誅秋保攝津邑事詳名取馬場城下

小町石

小野驛口有善逝堂坂下有老杉々下有巨石土人曰小町石小町產于斯地立石爲古址之證焉頃年石亦失所在今也亡

三分一所城

在淺井村是乃三分一所宗景居城也宗景乃深谷義景家族月鑑子谷本景重之弟也先是月鑑在小野城兄弟各三分小野莊而領之其城渾三區其一淺井村其二大手村其三上岡村於是曰三分一所此地以領小野莊三分之一而名之永江一作長江月寒谷本一作矢本

不動石

在大塚濱其狀似不動佛里人稱之不動石

宮戶善逝堂

詳宮城郡松島下

鹿石神祠

在牛網村高一尺六寸長三尺其形勢如伏鹿鄉人爲神建叢祠祀之往昔有神鹿牝牡常相馴佗日爲獵師所驅牝鹿沒爾後牡悲慕而死

按神名帳有石上神社蓋是乎文德實錄仁壽二年七月辛未陸奧國石神授從五位下疑是指此石神歟

一心院已下古之深谷莊

在北村號深谷山箱泉寺一心院平城帝大同中慈覺所開寺中彌陀不動亦自作辨才天春日作

寺院東南有幽泉以横板圍之故曰箱泉々畔有古槻樹根一丈五尺樹枝半合爲一株上置熊野祠寺西有高岡形如引一畫上有槻樹兩三株曰一字岡其下有池屈偃曲爲形勢類心字曰心形池寺南有池爲草字勢曰卜池

新城舘

同所田村麻呂東征營陣之地有寺號觀禮山高福寺

谷本城

在谷本村谷本筑前守景重居城也後號露印

半直重墓

在三輪田村有寺號淨峯山高德寺有古石墳六尺七寸濶二尺一寸上題曰正中二年乙丑二月爲半直重所建也 正中後醍醐七年也

和淵神祠

在和淵渡口以南山頭田村麻呂建貴船神祠而祀之以孟春季夏望日百古與篦峯同其時祭焉前日齋戒甚忌魚肉先是舊臘除日鹽鱘魚鮭兒而薦之神前例也初春十八日集會于社家頒賓所薦鰹魚及鮮魚二十八日復頒食鮭子也皆例也社中碩鼠不食所薦之肉里俗以爲神靈之所封也季夏望日薦小麥餅及胡瓜是亦例也是乃貴船祭禮之式也

笈中生柳

在和淵以東種楊柳五六千株毿々青々可愛春初之翠色甚佳往昔義經東行偶携柳條於笈中植之斯地而祈志願于和淵之神爾後生根吐葉年々繁茂成于鬱林 其途程七八十町

遠田郡

四十五代聖武帝天平九年四月戊午遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言以去月十九日到陸奥多賀柵與鎭守將軍從三位上大野朝臣東人共平章且追常陸上總下總武藏上野下野等六國騎兵總一千人開山海兩道夷狄等感懷疑惧仍差田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人遣海道差歸伏

五十代桓武帝延曆九年五月庚午陸奥國言遠田郡大領外正八位上勳八等遠田公押人欵云已既洗濁俗更欽清化志同内民風仰華土然猶未免田夷之姓永貽子孫之耻伏望一同民例改夷姓於是賜姓於遠田之臣

同十年二月乙未授外正八位下遠田臣押人外從五位下外從七位下大部善理贈外從五位下善理陸奥國磐城郡人也八年從官軍至膽澤率師渡河官軍失利奮而戰死故有此贈焉

六郎館

在馬場谷地村往昔馬場六郎者居館也

篦峯寺

在篦臺村號無夷山鄉人謂之篦嶽有大悲閣是乃坂上田村麻呂所造營其堂宇乃飛驒内匠所施斧斤向南方其像乃竺土佛工毘首羯摩之作左右不動多門倶運慶所造堂宇之制皆隨地勢之高低東南短柱四尺西南二尺七寸西北五尺東北六尺長短不均堂前有二王門是亦運慶作有鰐口記曰永亨四年六月十八日蜂屋筑後守源光吉寄鐘乃沙彌道本者應永二十八年六月一日所寄附也其境無數之山岳跨西北千畝之田野闢東南疊青展翠江分河裂實極目之壯觀也東南有坊舍二十宇（永亨後花園帝壬子應永後小松帝末稱光帝辛丑）堂後有熊野神祠堂北建彌陀堂堂東有愛宕祠其南有鐘樓

老姥杉

在堂東根圍一丈六尺七寸曰之老姥杉

篦社權現

在悲閣西北相傳往昔義家朝臣東行到此地試把征箭而立地上乃祝之曰若生根株則是爲撥平之應矣果如其言也後建宮社號篦篁宮以其神妙而爲山號幽篁在其傍是往昔征箭之遺蹤也

夫草木之於發生也日夜之所息雨露之所潤依氣化流行未嘗間斷而於是乎物皆有所生長也是皆理之常而不足怪之焉然征箭之爲物也矢人截而爲簳冶人鎔而爲鏃雖植而培之族之以氣化豈可得活生耶人各有性矣有智矣故雖五尺童子能識其不活生焉況如義家之爲人也素以其智通神明也世人號八幡焉豈爲此迂遠僞妄之事而設神迷人哉然浮圖之輩爲此說而人信而驚其妙世與而感神者陷其術則因識道者少黨佛者多也識者之少也依其文盲故其神智亦易暗黨者之多也依其昏昧故其謬迷亦難明彼浮圖之屬乘其迷暗之厚而談奇説妙於是乎遂陷淺近卑拙之語而遺此妄誕乎後世豈爲此一事哉每々皆愈弗思之耳

胡麻坂

在黒岡村中有小坂々上悉細石點々粒々其石黒色殆若胡麻土人稱之號胡麻坂

貝殼坂

同村相阻胡麻坂可十町餘有小坂路上岩下多舊貝殼也路畔有若泉掬之則忽得細貝子數枚皆蠢々然有生意仍曰之貝殼坂

鰈魚湖

在同村山中池有小鰈魚鰈魚本海中物而湖水河流不得生焉以山中在池沼而人奇之土人呼稱鰈兒沼

小松寺

在小松村有寺號秀島山小松寺々前湖水涵青松陰落翠水上浮島嶼曲隈疊細鱗絕景可玩

秀翠峯

在大岑村有寺號日足山日吉寺鳥羽帝保安中所建地也

米岡館

在西野村相傳往昔俵藤太秀鄕東行居此館也考舊史無秀鄕來東奧之事以何附會之乎

彌陀堂

在萩埣村貞和五年七月二十四日武庫太郎左衞門源賴眞者爲考妣所建也

本吉郡 本或作元

此郡名元不出于國史及倭名集拾芥抄等唯見于東史及節用集故文字從兩書八十二代後鳥羽帝文治五年賴朝東征平泉陷九月十八日秀衡第四子本吉冠者高衡降

横山不動

在北澤村有寺號白魚山大德寺置不動像長一丈二尺弘法所造也東有熊野祠南有大悲閣西湛池塘北臥靑山池畔有古梅屈蟠横斜尤可愛也有緣起卑拙不足取焉其略曰後白河帝時世自摩伽多國載之商舶而到於當郡水戸邊海濱時不動忽飛行于北澤山頭雨天華薰異香鄕黨驚愕建堂于其所止今日之横山々下淸泉涌出爲一泓池中有一島水中多游鯈中有一白魚自能言說人之邪正因玆立寺名山號以白魚

按緣起說如此想夫往時誇不動之神妙者所以主張于竺土而實乃空海之作無可疑焉且

言白魚解語之事妄誕尤甚矣

田東嶺　氣仙郡小友村亦有同名

在歌津村峻嶺入雲層巒鎖烟東北海濱之大嶽也相傳仁明承和中所開由來不詳至高倉帝安元年中秀衡甚尊信此地新致造立僧舍頗多山上曰羽黑山清水寺半腹曰田東山寂光寺北嶺曰幌羽山金峯寺以竺作閻浮檀金觀音納寂光寺修天臺宗搆七堂伽藍設七十餘房俾其第四子本吉四郎高衡主山神祭禮焉文治之役泰衡敗績與四郎俱隱于山中官兵遂獲其首及葛西之時又置僧房四十餘宇分家族千葉刑部司寺社事葛西氏亡滅子孫不絕如縷曰之一丁落魄于民間其子曰揔十郎生甚兵衛其母夫死嫁佗夫攜彼竺作大士及大黑宇賀神像而之到處不宜家流落奔馳已十一夫自以爲靈作之祟也先是前夫揔十郎附田地于細浦與右衛門者其子亦恐其禍爲役徒曰逸名院於是彼婦以竺作而屬于役徒以所殘二軀傳其子甚兵衛珍之山神鳥井在伊里前驛口鄉俗說曰古昔田東宮舍材料水府所寄其流寓之地曰寄木濱驛南水濱也山下不動慈覺作藏辨慶長刀錦戸太郎佩刀于山頭　天和三年冬收之公庫

高遊嶺

田東西南有高嶺往昔貞任携妓言逍遙閑吟焉後人稱貞任高遊嶺　貞任遠遊不見舊史

本吉古館

在入谷村志津川六町西是乃秀衡第四子本吉四郎高衡食采于此仍爲居城焉葛西之時千葉大膳大夫者居之

椿樹島神祠　椿神社伊勢河曲郡乃猿田彥命

在水戸邊海上其島南北四町餘東西二町許古椿萬餘株大者圍五六尺其佗木槲倭榧尤多有藤蔓五六尺圍島中有小祠曰椿島神祠々後有倭榧其圍已一丈其北林大椿枝間生桐樹合生

若自然島外海濱細石磊磈水汀多文貝子水戸邊作兵衛者世司神祠修破壞

翠竹島

在椿島西南相去可二町島中空濶島口通東西其中高一丈餘可設几席二十疊其間石岩盡作茶竈几皿木器盤盂等像不假人爲自然徐其色如赤漆島上青松緑樹多

天女墳

去竹島以南五六町餘椿島以西十八町有村落曰艶宮宅屬水戸邊郷人曰之角宮有一堆塚後土御門帝延德年中宮司作兵衛四世祖某一日駕輕舟而往于竹島未至忽聞島中絲竹管絃之聲停棹而潛瞯其中則天女十餘輩羽衣蹁躚唱歌舞蹈某甚驚天女見人倏忽出洞中翩々飛揚去有一女兒不能起又白狗兒在傍問之俯而不應徒見容態哀情最深某惻然發哀心載舟擁護而歸謂其婦曰我不虞得神明子使設新席婦仰看之容貌之嬋娟所未見人間者其齡蓋十五六歳窈窕蛾眉殆如神於是自然生敬恭之心少焉具珍羞而享之然一粒不食唯食細柿些少經六七日而終死狗子亦尋殞瘁之廬舍畔上植複樹狗子亦埋其側複樹歴年生長屈蟠六七尺垂陰扶踈甚害稼於是伐其樹孽子生茂如今已藏年兩堆古塚亦猶存郷人稱曰天人堆也

按天女舊説奇怪妄誕共驚聽聞之郷人某如其所傳矣嘗請其祖某親見之時々傳其容貌曰其天質之丰所無于人間如今想之猶宛然于目中也其語亦可怪蓋依三穂天女之事好事附會之乎以相彷彿者附于下

神社啓蒙曰三穂神社在駿河國有度郡昔神女飛來懸羽衣於松枝漁人取之神女失衣不能飛屢求之不畀焉遂相約授衣神女悦而飛去土人立祠奉之

又奈具神社今稱遷社天在丹後國竹郡丹波郷里

人號猪神造酒也丹後風土記曰比沼山頂有井其名云眞井今已成沼此井天女八人降來浴水于時有老夫婦其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此井而竊取藏天女一人衣裳即有衣裳者皆飛去但無衣裳女娘一人即身隱水而獨懷愧居爰老夫謂天女曰吾無兒請天女娘汝爲兒天女荅曰妾獨留人間何敢不從請許衣裳老夫曰天女娘何存欺心天女云凡天人之志以信爲本何多疑心不許衣裳老夫荅曰多疑無信率土之常故以此心爲不許耳遂許相副而往宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飲一盃萬病悉除之其一杯之直財積車送之于時其家豐土形富故曰土形里云々後老夫婦謂天女曰汝非吾兒暫住借耳宜早出去於是天女仰天哭慟俯地哀吟即謂老夫等曰妾非以私意來是老夫等所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發瞋願去天女流涙微退門外謂鄕人曰久沈人間不得還復無親不知由所居吾何哉拭涙嗟歎仰天歌曰

阿麻乃波良布里佐氣美禮婆加須美多知伊弊治麻止比天由久弊志良受母遂退去出至荒鹽村即謂村人等云思老夫老婦之意無異荒鹽者仍云比沼里荒鹽村亦至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹野郡船木里奈具村即謂村人等云此處我心奈具志（古事平善者云）乃居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也　竹野宇下一有野字

戸倉明神

在波天野村此神往古與不動同船而自竺土至建祠祭之

涵船池

明神社下之池是也明神駕船藏茲後來地裂土分而船涵了遂爲汙池往時礎亦化石遺其形質入地尤深人曰之礎石

折立古館

在折立濱葛西舊臣千葉彦右衛門居之

戸澤古壘

在戸澤村菊地善九郎者故墟也葛西舊臣也

春日神祠

同所在驛西有寺曰海藏寺祉後有古松至樹頭四分其幹翠鬣鬱々根圍一丈六尺有長坂傍槻樹並立西方圍一丈二尺東樹一丈四尺樹皮縮々有鱗贅如疊雲層壁尤美材也然恐神木而不能用之可惜

佐藤氏古墳

在津谷村有寺號安養山淨勝寺佐藤莊司妻所建也馬籠津谷兩村落老妻湯沐之地是以多寺院有一家牌子其銘奥性院勝信（文治五年八月四日七十七歳）光明院昌蓮吉祥院次信（文治元年二月十九日卅六歳）清光院忠信（文治二年九月廿二日卅四歳）有古墳左次信右忠信藏釋迦像湛慶作也

按是後人附會作爲之甚者也次信萬世之忠臣代主將命而快戰死者其日子乃元暦元年三月十八日海陸接鋒之事兒童走卒亦暗所記得也忠信奮死于京師是亦併芳野獨留之志而世人盡所識也豈足信此舊牌哉

信夫館

在飯塚村是亦莊司假館擬鄕里而呼其名矣有溫泉出館下（同名古壘在小泉西北馬籠村是亦莊司居之）

御嶽

在山田津谷邑境山下有寺號金峯山金剛寺上建子守宮社昔莊司老妻所擬芳野勝手神也

淨福寺

在小泉村山號寶壽是亦莊司夫婦所建也

瀧不動

在荒戸濱釋文覺所護持也有寺號入月山金鷄寺藏彌陀像是亦文覺作也

夫寺院之於稱號也多皆卑俚凡拙出于俗口

文章者也如今及讀此號始驚其風雅矣上下
俱足清賞而所以發麗藻之文字也不知出乎
何人之語乎恐蘭若不稱其名矣

波多權現

在赤岩村緒方三郎惟良所建也毎歳晚秋廿八
日振神輿于氣仙沼釜前祭之社中藏惟良佩刀

赤岩館

同村熊谷小次郎直家仲子平藏直宗者古壘也

直宗古墳

在新城村號金仙山寶鏡寺直宗所建也其墳墓
亦在寺中題曰熊谷平三直宗之墓貞應二年七
月六日立之 貞應二年乃後堀河帝元年壬午也

平八幡

在同村義家朝臣東征之時所勸請下野下八幡
也 下八幡不見神書可疑

朝來湖

在月館村古館中往時一宵而出此湖以訓音相
近而誤呼曰氣仙沼或曰斯地亦古昔氣仙沼郷
内也以赤岩新城月館鹿下雄原唐桑數村而屬
于氣仙沼寛永中改屬於本良郡而至今愈其湖
俄然夜中出郷人未知之朝來乍見之取今晨始
見之義而稱朝來湖云

大悲閣

在氣仙沼本郷有寺號海岸山觀音寺源義經爲
鬼一法眼息女所建也其像行基作息女所護持
也或曰義經朝臣所持也有義經牌子

七襞嶺

在小泉村其山高大群山糾紛層巒横臥奔馳跨
亘斧鉞長坂在其間崎嶇羊腸左右山嶺各數千
丈自嶺上至澗底而曲直縈回嶺分澗裂其形勢
也似衣服之有疊襞而與佗山大異仍土人名之
曰七襞山

接兵原

同村山中有幽閑曠平之地田束峯山兩嶽妖客

時々集會于茲而撫劍接刃把戈舞兵以爭其神速飛騰之術之處也仍有此名

按世人喜說寄怪好聞妄誕者多此地之於鄉說亦兪夫天地之間皆有常數而出豈常數之外者有生出來之理哉矧如夫天狗之妖物非人而同形非禽而生翼天吳生出若此之異物哉是皆釋門役徒之屬好說而惑人聞者亦喜且夫神姦物怪婦人女兒聞之而驚愚昧不省迷之而信自是旋而至幽魂妖怪報應祟咎之疑前篇所擧若摠七郎妻值十一夫而不遇也彼也不解出己之性行不好却以爲笠作之祟咎及己身焉夫愚騃之惑凝獸之恐雖士大夫勇猛者不免況彼女子從來不省值不遇而懼其冥福宜哉彼笠佛豈能專人之禍福耶自佛氏言之亦觀音之爲德元以慈悲哀憐而爲主然不加之以其心而待寡婦却與不幸而及顚沛哉於是乎須知其祟咎不出于彼笠作而皆出己而自取其禍害也是等之類咸所以不學文盲自致者也

波止上鹽竈

波止上乃村名是乃往昔階上郡之地也後人誤其文字失舊名者也闕瀕海之地設煮鹽之場其地也白沙渺々綠水漫々天和三年癸亥始所興也登時鄉老三內作內相議曰自古吾州煮鹽之制與他邦異故其利亦微如今擇天下之好鹽播州明石冠于諸邦不如招其人于此師其制習其術以成功逞利矣仍往播州請師來具傳其制焉於是馬籠邑人三內金山下司芳賀傳內郡長熊谷太兵衞氣仙沼市人市兵衞東幌羽市郎兵衞清水川市長喜三郎歌津邑人仲右衞門邑長市郎兵衞同邑久內權兵衞者凡十人俱富家各出財貲力償費用計功勞擇其處于此濶方六町七反二十四步縱横其瀦町畦其溝引潮水于其內設臺壺（漉海水漉潮曰之臺壺）凡六百八十區每年令黄金五十

六兩二分備薪木料煑舍十餘間傍搆長屋四十間謂之有井（以海水滿而有貯故曰之有井）深可五尺這裡貯潮水俾樋通于煑舍而常備無潮水空乏之煑舍中有釜深二寸五分有土脚高二尺五寸長七尺六寸廣五尺六寸屋後有暴釜（煖海水而投釜故言）其制法先令鹵沙乾之有日爾後盛之臺壼汲其汗池潮水而洒灑彼乾沙以其滴水而屢汲之去貯諸有井舍時々通之于煑舍先投之暴釜煖其冷寒者且注之煑釜又釜中使曲鉤十五莖釣釜石（釜元非鐵器並輕石數片錬石灰而合之則老圓均平掌以不洩也）又令薪木漫火燃之釜中乾則漸々凝出始爲鹽尤倍便利之工者也

釜前灣

以此地稱氣仙沼焉延喜式文德實錄所稱氣仙郡是也後來移郡失地剩誤其訓易其字是以彌違故地謬舊稱者多其西南乃氣仙沼驛是乃古商舶輻輳之津也如今也所集會者釣舟漁船之外皆魚鹽奔走之徒也鄕黨稱之細浦其南有鳴窟

鳴洞窟

在驛東洞口向西北三間餘洞中豁然下有碧潭鑿于東南深奥不可知潭底不可測石梁巖柱奇狀怪態各爲人物禽獸器用之象其中有起者有臥者有如向者有如背者種々色々千體萬貌不可以物名不可以詞盡土人以爲佛陀菩薩之所現也每歲暮春三四月之際洞中必有琴瑟簫鼓之音是乃聖衆來降奏音樂之時也故曰之音鳴洞鄕俗元癡獃愚蒙常信佛怖鬼故有此說夫潮汐之往來必有定度唯當暮春之初海水遠去水脈亦盡乾是以潮候亦與常時異故依潮汐之來去盈虛以隨觸石盈科之進退而洞中自然有此聲響如此者聽者不達于此仍驚其奇候

大島神社

在氣仙沼海上周廻五六里白銀盤上一青螺也鳴洞東北二里餘上有叢祠土人謂島明神是古

之大島神社也延喜武藏之牡鹿郡今屬之本吉
其山曰龜峯

善逝堂
同處有寺號東龜山醫王寺後醍醐帝元應二年
所建也土人曰之島藥師

彌陀堂
在折立濱有寺號通華山鹽前寺像運慶作也文
祿二年妙海者所建也

虛空藏堂
在柳津村行基作也有寺號萬海山寶行院神龜
三年所建也

牡鹿郡 附小田郡

四十五代聖武帝天平九年四月戊午國大掾正七位下日下部宿禰大麻呂鎭牡鹿柵見玉造多賀下

四十六代孝謙帝天平勝寶五年八月癸巳陸奥國人大初位下丸子島足賜牡鹿連姓

四十七代廢帝天平寶字四年正月丙寅於陸奥國牡鹿郡跨大河凌峻嶺作桃生柵奪賊肝膽

同年十月己亥陸奥國牡鹿郡俘囚外小初位上勳七等大伴部押人言傳聞押人等本是紀伊國名草郡片岡里人也昔者先祖大伴部直征夷之時到於小田郡島田村而居焉其後子孫爲夷被虜歷代爲俘幸頼聖朝撫運神武威邊拔彼虜庭久爲化民望請除俘囚名爲調庸民許之

十一月癸巳陸奥國桃生郡人外從七位下牡鹿連猪手賜姓道島宿禰

同十一年三月丁亥牡鹿郡大領道島大楯每凌侮伊治公呰麻呂以夷俘遇焉呰麻呂深銜之時

按察使紀朝臣廣純建議造覺鼈城以遠戎候因率俘軍入大楯呰麻呂並從至是呰麻呂自爲內應唱誘俘軍而變先殺大楯率衆圍按察使廣純攻而害之

四十五代聖武帝天平二十一年五月庚寅陸奥國者免三年調庸小田郡者永免

五十代桓武帝延曆八年八月己亥勅陸奥國入軍人等今年田租宜皆免之兼給復二年牡鹿小田新田長岡志太玉造富田色麻加美黑川等一十ヶ郡與賊接居不可同所故復年己下小田郡

閏五月甲辰賜私度沙彌小田郡人丸子連宮麻呂授法名應寶入師位出金山神主小田郡日下部深淵外少初位

按授法名應寶入師位於是始詳此朝有不告之公朝而入佛者則書私度沙彌私度者蓋計之已之義也有據其法者則賜此入師位師乃貴之々義也甚乎哉帝之好佛信法委身于浮圖用心于異端也故立此位定此制以勸歸佛者之多豈治天下者事務也乎哉

神名帳曰牡鹿郡十座大二座小八座 零羊崎神社名神大 香取伊豆乃御子神社 伊去波夜和氣命神社 曾波神社 拜幣志神社名神大 鳥屋神社 鹿島御子神社 大島神社 久集比奈神社 計仙麻神社大島神社今屬之本吉郡計仙麻同誤文字而書氣仙沼

小田郡一坐小 黃金山神社

五十六代清和帝貞觀元年正月甲申朔授陸奥國正五位上勳四等計仙麻神五位下勳四等志波彦神勳五等拜幣志神勳六等零羊崎神從五位上勳四等志波姬神並從四位下從五位下計仙麻大島神從五位上志波彥乃宮城郡志波姬乃栗原郡外共當郡

石卷城址

在門脇村好日山頭往時葛西三郎清重居城也世々相繼至左京大夫晴信天正中所沒收

好日山 山頭有愛宕神社

城頭南山是也東南則大洋洲渚與天接西北則群山村落倚地連皆入于登臨之目中舟子棹郎欲出商舶則先登峯頭下潮勢而計晴雨之候察水色而試風波之變仍土俗曰日和山訓之比與利俗間以天外風靜海上波穩之日而曰之日和乃好日之義也頃年僧鳳山開寺院于山中而號好日山海門寺

石卷海門

來神河流滔々流入于海門其河源出于南部大岳經膽澤江差等處々郡縣村落縈回屈曲而臻茲地南郊之於逢隈北郡之於來神是封內之巨川也斯地也市店連屋漁家比隣商賈群集農工雜居繁華輻輳殆若江都海濱商舶之出入漁艇之來往日夜泛々朝夕囂々賣買不乏交易不虛生財之有便貨殖之有利廼與攝州大坂越前敦賀筑紫博多出羽酒田同胥朒土產豐饒之富天下第一之津也

鹿島神社

在門脇日和山麓神名帳所載鹿島御子神社是也鄉人不知舊社以尋常祭之

衣袖渡口

石卷北市有住吉神祠午頭天王菅神愛宕小社相並來神河流滔々于社前是乃往水門大瓜村落之津古之衣袖渡也古木回岩遶社後白沙翠汀連橋畔春時之花秋樹之紅尤可愛之地也

新後拾遺戀一　相摸

みちのくの袖のわたりのなみた川こゝろの內に流れてそすむ

歌枕

入道攝政家百首　從二位行家卿

もしほ草渡部

なみた川淺き瀨そなきみちのくの袖のわたりに淵はあれとも

家集　重之

あふくまにきりたてといひしから衣そての
わたりに夜もあけにけり

さねかたの君おやにをくれてなけくとき

家集　　　小大君

そこは淵ふちは瀬ならぬなみた川そてのわ
たりはあらしとそおもふ

夫木　　　寂念法師

しるらめや袖のわたりはしくれしてみちの
おくまてふかき心を

烏帽石

住吉社畔華表前灣有一巨石高六尺南北廣三尺東西九尺其象似烏帽子上建天女宮其下有碧潭（行家所詠乃此淵也）潭上水渦自然回旋成紋若卷物相似故鄉人石稱烏帽石潭呼石旋俗間謂近曲卷回旋之義也仍爲地名舟行之處乃衣袖渡也商舶漁舟亦多繫于此

御所曲隈

鷲峯山下多福院以北山間曰御所入江御所貴家之美稱所以爲禁闕柳營王子公孫居宅之夕也入江者水隈空濶之地也建武中後醍醐帝親王避寇于此地北朝莫敢知之者親臣日野日下某從親王于此鄉居焉故土人推尊稱之御所後人指其遺蹤曰御所曲隈二臣子孫亦下民間而今猶存（今稱日下源左衛門與隱市店）

按親王乃第八宮義良親王後奉稱後村上院元弘三年爲奥州大守土人傳而避寇者誤矣且不謂皇居之地仍擧古書以證之

太平記廿卷曰爰に奥州住人結城上野入道道忠と申ける者參內して奏し申けるは國司顯家卿三年の間に兩度まて大軍を催して上洛せられ候ひし事は出羽奥州兩國皆國司に從て凶徒其隙を得さる故也國人の心未變さる先に宮を一人下し進らせて忠功の輩には直

に賞を行はれ不忠不應の族をは根を切葉を枯して御沙汰候はんにはなとか攻從へては候へき國の差圖を見候に奥州五十四郡恰も日本半國に及へり若兵の數をつくして一方に屬せは四五十萬騎も候へし道忠宮を挾み奉りて老年の首に兜を戴く程ならは重て京都に攻上り會稽の耻を雪めむ事一年の内をはつくし候ましく申けれは君を始奉りて左右の老臣悉此議けにも然るへしとそ同せられける是に依て第八宮今年七歲にならせ給ふを初冠めさせて春日少將顯信を輔弼とし結城入道道忠を衞尉として奥州へそ下し進らせられける

第八宮諱義良即後村上帝也

鳩嶺雜事記云應安元年三月十一日住吉御所崩御御年四十一奉號後村上院云々據此逆于延元三年則當十一歲

此勢皆伊勢大湊に集て船をそろへ風を待けるに九月十二日宵より風やみ雲收り海上殊に靜りたりけれは舟人纜を解て萬里の雲に帆を飛はす兵船五百艘宮の御座船を中に立て遠江天龍灘を過ける時に海風俄に吹あれて逆浪忽に天を卷翻す或は檣を吹おられて彌帆にて走る船もあり或は梶をかき折て廻流に漂ふ船も有暮れは彌風惡く成て一方に吹も定らさりけれは伊豆の大島女郎湊かめ河由比濱津々浦々の泊に舟を吹よせられぬはなかりけり宮の御船一艘漫々たる大洋に放たれてすてにくつかへらんと見へける處に光明赫奕たる日輪御船の舳に現して見へけるか風俄に取て返し伊勢の國神風の濱へ吹もとし奉る（太平記説）神皇正統紀云奥の御子義良又東へ向はしめ給ふ少將顯信朝臣中將に轉し從三位に叙し陸奥介鎭守將軍を兼てつ

かはさる東國の官軍悉彼節度に隨ふへきよしを仰らる親王儲君に立せ給ふへきむね申聞せ給ひ道の程も忝かるへし國にてはあらはさせ給へとなん申されし異母の御兄もあまたまし〳〵き同母の御兄も前東宮恒良親王成良親王まし〳〵しにかくさたまり給ひぬるも天命なれはかたしけなし七月の末つかた伊勢にこえさせ給ひて神宮に事のよしを啓して御船のよそひし九月の始纜を解れしに十日の比の事にや上總の地を近くより空の氣しきおとろ〳〵しく海上あらくなりしに又伊豆崎といふ方に漂せしにいとゝ浪風おひたゝ敷なりてあまたの船行方しらす侍りけるに御子の御船はさはる事なく伊勢海につかせ給ふ顯信朝臣はもとより御船にさふらひけりおなしかせのまきれに東をさして常陸國なる由比の海に着たる船侍き方々に漂ひし中に此二の船はおなしかせにて東西に吹わけける末の世には珍らかなるためしにこそ侍へき儲の君に定らせ給ひて例なきひなの御すまゐも如何と覺しに皇大神のとゝめさせ給ひけるなるへし後に芳野へ入せまし〳〵て御目の前にて天位につかせ給ひしかはいとゝ思ひ合られて貴ひ侍かな

元弘日記裏書云延元三年閏七月廿五日義良親王并入道一品親房顯信等率東軍下向勢州八月十七日解纜九月十一日於伊豆崎遇大風數船漂沒親王顯信等船歸着勢州上野入道忠艤此御船入道一品船着常陸國訖

關城裏書云親房船着常陸國内海其後居住同國關城云々

尊澄法親王尊良親王第一宮着御遠江國井伊城花園宮着御四國牧宮同著臨西國可有御下向鎭西云々

按尊良親王既自殺於金崎今所謂一宮者蓋尊良第一子矣牧宮蓋懷良乎

新葉集三延元三年秋後村上院かさねて陸奥へくたらせまし〳〵けるにいくほとなく御船伊勢國篠島といふ所へ着たるよし聞へしかは勅使として参りたりけるに此度大風斜ならすして御供なりける舟とも多く損しけるを同し風のまきれに御船はかりはことゆへなく此國へしも着給ふ事しかしなから大神宮の御はからひたるよし神つかさとも悦ひ申けれはやかて此よし奏し侍ける次てに

前大僧正頼意

神風や御船よすらん沖津風たのみをかけていせの濱邊に

按後村上院九十九代後光嚴帝應安元年戊申崩御考之正統紀則元弘三年癸酉六歳東行見正統紀及頼義序中爲出羽守護建武元年甲戌夏七歳立親王延元元年丙子九歳春還于京師而加元服于禁闕任陸奥大守同三年戊寅十一歳春還于京師在于吉野宮秋七月之勢州此時欲東征遇難風而歸于伊勢篠島同四年己卯十二歳入于吉野秋八月望受禪然則國人指元弘癸酉延元戊寅任國之間號御所者也

吉野先帝御墓

海門驛東南有古刹日月光山日輪寺今改日輪山多福院置大日春日做造也寺背有青山々下有古石墳高五尺廣二尺餘其半腹題曰吉野先帝御墓右旁有延元五年左畔霜月十四日文字相傳天皇訃至于奥州親王親臣慘怛之餘所建之陵墓也

太平記廿一卷南朝の年號延元三年八月九日より吉野主上御不豫の御事有けるか次第におもらせ給ひ八月十六日の丑刻に遂に崩御あり吉野山麓藏王堂の艮なる林のおくに圓

丘を高く築て北面に葬奉る
吉野拾遺云八月始比より先帝秋の霜に侵されさせ給ひけるか兼て時をもしろしめしけるにや同十五日の夜親王を後村上左大臣經忠公の亭に移し奉らせ給ひ三種の御寳を譲りおはしまし御行末の事いと細かに仰置れて御劍と法華經とを左右の御手に物し給ひいさよひの月と共に雲かくれさせ給ひけるに附從奉りし人々は唯闇路に迷ふ心地なんし給ひける御姿を改め奉りて如意輪寺の御堂の後の方におさめ奉る
按本書云延元三年(北朝暦應元年)八月十六日後醍醐帝崩而天正本神皇正統紀紹運錄常樂記元弘日記裏書神明說皇年代略記關城書裏書東寺長者補任櫻雲記等云延元四年(興國元年)(北朝暦應二年)八月十六日帝崩歴代皇記保暦軍記李花集云興國二年(北朝暦應三年)崩矣諸實錄互相違獻難取一決今通考諸書以推其實所謂延元四年崩者爲得矣以何言之新葉集載延元三年九月十三夜吉野行宮後醍醐帝御製和歌二首由此見之所謂延元三年八月後醍醐帝崩者訛也亦考園大暦云正平六年(北朝觀應二年)吉野帝十三回忌云々因考之自延元四年至正平六年實十三年則延元四年崩者明矣然則保暦間記李花集歴代皇紀作興國二年亦誤也(李花集稱延元五年即興國二年)李花集又載宗良親王興國二年八月十五夜倭歌其意追悼去年秋後醍醐帝崩也且後村上帝延元四年十月即位改元由是見之延元不當有五年蓋李花集誤四字作五也且天龍寺釋志重傳云(出禪林諸祖傳)暦應己卯(延元四年)秋八月吉野上皇仙去云々又尊氏奉弔後醍醐帝願文楮尾書暦應三年十一月廿六日乃百十日追福文也且毛利家北條家西源院南都天正本及紹運錄皇年代略記

神皇正統記元弘日記裏書東寺長者補任云帝崩時年五十二因考之帝以正應元年生文保二年踐祚時年三十一據此則延元四年今實五十二矣事理符合是以作延元三年或興國二年者其爲謬而以延元四年八月十六日爲得矣

同書云同十月三日大神宮へ奉幣使を下され第七宮天子の位につかせ給ふ

神皇正統紀云第九十六代天皇諱は義良初名憲良後醍醐天皇第八御子御母准三宮藤原廉子（新待賢門院）此君妊まれさせ給はんとて日を抱くとなん夢に見申給ひけるとそされは數多の御子の中にたゝなるましきとそ兼てより聞えさせ給ひし元弘癸酉（按元弘三年）東の陸奥出羽の固にて赴せ給ふ甲戌夏（按建武元年）立親王丙子春（按延元元年）都にのほらせまし〳〵給ひて內裏にて御元服加冠は左の大臣なり即三品に叙し陸奥大守に任せさせ給ふ同戊寅（按延元三年）春又上らせ給ひて芳野宮にまし〳〵しか秋七月伊勢にこえさせ給ひける重而東征ありしかと猶伊勢に歸りまし〳〵けり已卯歲三月（按延元四年）又吉野に入らせ給ふ秋八月中五日禪を受て天の日嗣を受傳へおはしますと云々

按此地題御陵曰延元五年延元乃二年而無五年此歲乃南朝興國元年庚辰北朝曆應三年也斯時列國多事兵亂不止故道路亦多難是以遐荒之地不知南朝改元用舊時年號如此也

羽黑社

在石卷村後鳥羽帝文治中秀衡所以勸請羽州羽黑神也

牧山大悲閣

在海門村石卷河東大山古杉老樹鬱蓊有寺號鷲峯山長全寺其像所得于海底秘不許見之前

佛乃惠心作也有駒犬是亦古作右方有不動像慈鎮開基也或曰田村麻呂建悲閣于此地及篭峯富山雖阻其地山勢之突兀也如鼎足相峙

零羊崎神社

牧山乃古零羊崎地也後世佛氏熾昌所以稱社號易地名而失舊蹤者往々兪此地亦其一處也每年以四九之月八之日爲祭時郷黨大群集奉神輿于海門水汀其行神鉾二白幣二神職者各白衣騎馬其次役徒三騎奉神輿其下市人三騎修祭禮于海濱還此時商賈自佗邦來會蓋以賣買交易大有利于此市也然土俗以爲觀音祭祀也佛而奚設神輿備幣帛哉不知往時祭祀之儀式自然遺其地而有此設矣

山頭景致東南乃梅溪鳳山之二刹鹿牝渡波之村落兒潭罟竹之水灣網字多曝之島嶼接大洋而森茫西北乃石卷門脇大曲紅井蟒田廣淵洲江沙涯大瓜眞野水湖高木等之民屋界曠野而浩蕩尙遠望遊觀之佳境也

常行堂

在海門驛東牧山坂口元祿中安釋迦文殊普賢中央惠心作左右慈覺所造也爲法華常行之所也

文殊閣

在同村有寺號伊原山鳳山寺永祿年中開基也經石磴而登閣上後山多紅樹山下有幽徑古杉森々入寺院尤清閑之地也

梅溪寺

在牧山以東後圓融帝永和中僧天全所開號兩峯山是亦僧少客稀而寂寞之精舍也畔有小寺號萬年山松岩寺土御門帝文明九年僧高養開基也

龍嶺奇石

海門東井内北牧山々下林中有巨石高二丈餘登此則綠苔路滑芳草露深上有喬木三兩株枝

瘁葉疎下有奇石擁樹根其狀磊磈如架平板横亘磐上長大者濶可三尺或二尺餘其平廣者長或可三丈或可四丈其末若犬牙長短相並出石背可登而坐可蹈而度鄉人曰之龍嶺奇石

憩息石

在大瓜村農家邊其石黃赤義家朝臣東征取途于此聊憩于石上後人曰休息石然義家東征之日無經歷于此地之義

藤花潭

藤原之江流分井內處有深潭往昔潭上有藤蔓直亂河上横于東西花時如掛紫琉群魚潑々呑落花而洋々焉潭影移花堪賞其佳趣鄉人謂之藤花潭

祭矢石

潭邊有細石磊々滿水汀義家軍士投矢而祭河伯其矢化石鄉俗曰之祭矢石

鹿牝洞窟

海門以東牧山以南石巖高峻下有一洞窟洞口可二丈其中窈窕空豁可容數十人炎天極著亦洞中有風而凄凉使肌寒氣生栗洞裏暝然昔亦黑其深奥不可知焉達井內山溪龍尾山鄉人曰洞窟其地往昔有牝鹿常往來與牡鹿會故稱鹿牝邑

牡鹿古松 遊鹿石

在嶺崖村其地也群山相連高嶺相峙嶺上多青松其中東嶺別有一樹龍形馬鬣異衆松往昔有牡鹿愛其牝屢到鹿牝邑歸來呦々哀鳴于此松下其聲尤悲聞者起幽情仍曰之鳴鹿松後來慕其牝而遂殪于此郡人益哀之瘞于松下以留其迹自是號其郡縣曰牡鹿郡松下有石是乃麀鹿攸伏牡鹿攸遊曰遊鹿石其旁有一斷岩其狀自然相似佛像曰之不動石畔有古松根圍已一丈五尺上頭枝葉繁茂可愛可坐

淨峯寺

在高木村山上建三社有寺号蓬萊山淨峯寺傍有古石墳二基高三尺八寸廣二尺題曰文永十年癸酉十月廿七日一基三尺廣一尺餘弘安九年丙戌九月日文永龜山帝十四年弘安後宇多帝十二年

曾波神社

在福田村青山臨深潭來神河流遶山下嶺上有蒼松千株連南北是古曾波神社址也郷人徒傳其名而稱之

眞野萱原

在眞野村有寺號舍那山長谷寺寺僧曰同名寺號封疆中有四大田沼津岩沼此地併爲四區上有大悲閣雲慶所造寺中像亦同作門外有小池芦葦悽々黃芦俗呼曰茅萱故自古稱之眞野萱原於和歌而頗得佳名或曰此地秀衡舊移泊瀨悲閣爾後平小三郎者依賴朝命再興之攝津大和近江有同名然攝州以浦池菅草山吹等和州以萩花江州以曲隈浦洲等各不同唯奥州以萱稱之

藻鹽草まのゝかや原　をもかけ　霜池

笠女郎贈大伴宿禰家持歌

萬葉三新千載戀壹

陸奥之眞野乃茅原雖遠面影爲而所見云物乎

續古今戀　權大納言顯朝

また見ねは俤もなしなにしかもまのゝかやはら露けかるらん

玉葉夏　定家朝臣

露わけむ秋の朝氣は遠からて都は幾日まののかやはら

同秋下　藤原秀長

分侘ていつく里ともしらすけのまのゝかやはら霧こめてけり

新拾遺雜上　大江忠房

冬かれの眞野のかや原ほにいてゝ俤見せておける露かな

新續古今秋　中務卿宗尊親王
ふる郷の人のおもかけ月にみて露分あかす
眞野の萱原

玉吟　家隆
いまはまた眞野のかや原明くれし都に遠き
あらしふくかな

家集　頓阿法師
露にたに亂れやすきを白玉のまのゝかやは
ら秋風そふく

新六帖　衣笠内大臣
霧ふかきまののかや原面かけのほの見しよ
りそ身をははなれぬ

同　俊頼朝臣
夜もすからまののかやはらさら〳〵と池の
みきはも氷しにけり

歌枕名寄云右一首今案云眞野池者先達歌枕攝津國之眞野立之如今俊頼者若於奥州眞野歟但異本眞野菅原云々然者攝津國眞野池無相違歟暫就萱原木先載之

洞仙寺
在桃浦號三國山洞仙寺光孝帝仁和元年僧全虎者所開也元年一作四年

大悲閣
在給分濱長一丈木佛得之多曝海汀而所建也有寺號觀持山地福院

東奥瀛
謂黒崎海上金華島外或曰浦宿渡波之間也有一島曰之鵜島見順德帝叡吟中是也

千五百番歌合に
新古今戀四　定家朝臣
たつね見るつらき心のをくの海は汐干のか
たのいふかひもなし

續古今雜上　順德院御製
憂し逆も身をはいつくに奥の海の鵜のゐる

岩も浪はかくらむ

續後拾遺戀二　常磐井入道前太政大臣

尋てもあたし心のおくの海の荒きいそへは
よる舟もなし

同　後鳥羽院御製

我爲はつらき心のおくの海のいかなるうら
のみるめかるらん

嘉元二年百首

新千載冬　前中納言爲相

よを寒みつはさに霜やをくの海の川原の千
鳥更て鳴なり

新續古今戀四　左大臣

をなしくはおもふこゝろの奥の海の人にし
られてしつみはてなん

題不知　陸奥

夫木海　よみ人しらす

をくの海汐干のかたのかたおもひ思ひやゆ
かむ道のなかてを

建保四年百首　従二位家隆卿

冬さゆる夜はつくしるしをくの海の河原の
千鳥川うらむらん

爲相

おくのうみやえそか岩屋の煙たにをもへは
なひくかせやふくらむ

後九條

我かたはそむきの島の人なれはしらすこゝ
ろのおくのあらうみ

陸奥山(ミチノクヤマ)　今曰之金華山

此地古小田郡稱陸奥山今屬牡鹿郡號金華山
去鮎川東十餘町其山高峻突兀高八十丈島廻
三十二里山形五峯峯轡六十八區溪澗亦四十
八谷山頂立天女堂有寺號曰金華山大金寺自
島汀到鮎川江濱已二十三町四十間(或曰五十町)自
江畔至華表十町四十間自華表至岩下六十四

間自山顚至岸下二十三町
按此地古所謂陸奥山延喜式所載黄金山神社是也然後世合其地于牡鹿郡稱其山于金華山改號易名俾其地失名區換舊稱安佛像立淫祠永沒古往神社々號焉皆是浮圖役徒之壟所以逞其術固其誕而惑世誣民之久臻此者也然州人國俗惘然無知之者矣故具考古書舉左證以記往昔之事實于下云

天女堂　土人曰辨才天堂

在山頂自水汀至此七町餘不詳何人建立之也置多門及不動像釋文覺所藏也　天女事見下

神明神社

在天女堂南自水汀七町藏大般若一部秀衡所寄附也堂以東峯頭有愛宕祠

龍藏權現

在峯頭自海汀四十八町社東有岩洞號大匣小匣中藏水火玉龍藏神號不見神書蓋是亦浮屠所祭之淫祠乎

孔雀明王池

山下有一池孔雀明王時現于水上
甚乎哉人之說怪也孔雀明王元是妄誕矧今現見其池上乎何以一人無見其實體者而徒傳之口碑哉然人信世傳者苟可嘆哉

水晶輪塔

白石英之所化高十有餘丈在山半腹往昔有雷擊而折其半沈海底去其形質六稜珍觀之奇物也舊說曰開闢之始三輪明神以四椿築之鍊黄金造此巨島天照大神之正魂留主姫鎭座今所謂天女是也

地祇本紀上曰若此幸與共議聚金煉成磐石立於國邊海中而爲維乎國椿此島春秋美咲金銀花今在奥國金華山是也
按此說出大聖經疑是後人附會爲之詞者歟
續日本紀曰四十五代聖武帝天平十八年丙戌

秋九月癸亥從五位下百濟敬福爲陸奥守

同二十一年己丑春二月丁巳陸奥國始貢黄金於是奉幣以告畿內七道諸社 已下始出金考證

按是歳七月二日禪天位于高野姫改元于勝寶曰之孝謙天皇

夏四月甲子朔 天皇聖武幸東大寺御盧舍那佛像前殿北面對像皇后太子並侍焉群臣百僚及士庶分頭行列殿後勅左大臣橘宿禰諸兄白佛三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命盧舍那像能太前仁奏賜部止奏久此大倭國者天地開闢以來爾黄金波人國用理獻言波有登毛斯地者無物止念部流仁聞看食國中能東方陸奥國守從五位上百濟王敬福伊部內小田郡仁黄金在奏氏獻此遠聞食驚伎悅備貴備念久波盧舍那佛乃慈賜比福波倍賜物爾有止念閇受賜里戴持日百官乃人等率天禮拜仕奉事遠挂畏三寶乃太前爾恐毛无久奏賜波久止奏云々

授從五位上百濟王敬福從三位外與之者凡三十人

乙卯 先是丁未改天平感應元年陸奥守從三位百濟王敬福貢黄金九百兩

五月庚寅陸奥國者免三年調庸小田郡者永免

閏五月甲辰陸奥國介從五位下佐伯宿禰全成鎭守判官從五位下大野朝臣横刀並授從五位上大掾正六位上餘足人獲金人上總國人大部大麻呂並從五位下左京人无位朱牟須賣外從五位下私度沙彌小田郡人丸子連宮麻呂授法名應寶入師位治金人左京人戸淨山大初位上出金山神主小田郡日下部深淵外少初位下 此時帝使家持獻歌見于下

四十六代孝謙帝天平勝寶二年夏五月辛丑以從三位百濟王敬福爲宮內卿 自是爲常陸守

四年春二月丙寅陸奥國調庸者多賀以北諸郡令輸黄金其法正十四人一兩以南諸郡依舊輸

布（産金之後貢金之制於是可見定其法也）

五年秋八月癸巳陸奥國人大初位下丸子島足賜牡鹿連姓

故事談曰天平十九年乙亥（乙當作丁字蓋誤也）九月廿九日始奉鑄東大寺大佛　同廿一年己丑正月四日陸奥守從五位上百濟王敬福進黄金九百兩本朝出來黄金之始也依之敬福授從三位畢同四月十八日改爲天平勝寶元年是去正月始出來黄金之故也　同年十月廿四日奉謝大佛已畢三ケ年之間奉鑄八ケ度也高五丈三尺五寸云々去七月二日天皇（聖武）出家而八年五月二日太上法皇崩春秋五十七

事迹考曰金華山産黄金文獻通考所謂東奥州産黄金是也

大明一統志日本部曰奥州産黄金

歌林良載奥州金花山事

すへらきの御代さかえんとあつまなるみちのく山にこかねはなさく

右聖武天皇の天平感寶元年にみちの國の小田と云山にして始めて金をほり出し侍りし時大伴家持長歌をよみて奉りし其反歌三首の一つなり是によりて年號も感寶の二字をくはへられ侍る

藻鹽草山部陸奥山（わうしうこかね花さく　すへらきの御代さかへ）ん

金山（奥州したひか下になくとりのこゑた　にきかんなにかなけは鹿かつら）

按山名古昔稱陸奥山延喜之時曰黄金山後呼金華山而到今故擧世識舊名者少矣矧於小田郡則決然無言之者也然不詳何代合之牡鹿郡何人稱之金華山之義焉想夫家持詠歌之後摘金華二字稱之金華山而不用舊名者的矣今讀良栽詞則直稱金花山焉然則此時也以其好文字世上廢舊名而用新稱者於是乎可視是以世無得而稱往時之名者尤可

惜但如地祇本紀後人傳會實可疑

賀陸奥國出金詔書歌一首　短歌

右天平感寶元年五月十二日於越中國守館大伴宿禰家持作之

万葉十八

葦原能美豆保國乎安麻久太利之良志賣之家流須賣呂伎能神乃美許等能御代可佐禰天乃日嗣等之良志久流伎美能御代御代之伎麻世流四方國爾波山河乎比呂美安都美等多弖麻豆流御調寶波可蘇倍衣受都久之毛可禰都之加禮騰母吾大王能毛呂比登乎伊射奈比多麻比善事乎波自米多麻比弖久我禰可毛多能之氣久安良牟登於母保之弖之多奈夜麻須爾鷄鳴東國能美知能久乃小田在山爾金有等麻宇之多麻敝禮御心乎安吉良米多須氣天地乃神安比宇豆奈比皇御祖乃御靈多須氣弖遠代爾可々里之許登乎朕御世爾安良波之弖安禮婆御食國波左可延牟物能等可牟奈我良於毛保之賣之弖毛能乃布能八十伴雄乎麻都呂倍乃牟氣乃麻爾麻爾老人毛女童兒毛之我願心太良比爾撫賜治賜婆許巳乎之母安夜爾多敷刀美宇禮之家久伊餘與於母比弖大伴能遠都神祖乃其名乎婆大來目主登於比母知弖都加倍之官海行者美都久屍山行者草牟須屍大皇乃敝爾許曾死米可敝里見波勢自等許等太弖丈夫乃伎欲吉彼名乎伊爾之敝欲伊麻乃乎追通爾奈我佐敝流於夜能子等毛曾大伴等佐伯氏者人祖乃立流辭立人子者祖名不絶大君爾麻都呂布物能等伊比都雅流許等能都可佐曾梓弓手爾等里母知弖劍太刀許之爾等里波伎安佐麻毛利由布能麻毛利爾大王能三門乃麻毛利和禮乎於吉弖且比等波安良自等伊夜多弖於毛比之麻左流大皇乃御言能左右乃乎一云聞者貴美　一云貴久之安禮婆

準百七句

反歌三首

大夫能許己呂於毛保由於保伎美能美許登能
佐吉乎(一云能)聞者多布刀美(一云貴久之安禮婆)
大伴能等保道司牟於夜能於久都奇波之流久
之米多底比等能之流倍久
須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知
能久夜麻爾金花佐久

按續日本紀聖武天平二十一年記作勝寶元年二月於貢金處又改記天平二十年又其二月丁未改爲天平感寶元年云於孝謙紀二年又書天平勝寶歌林良材作感寶歌枕名寄作勝寶視者尤考之可矣

歌枕名寄云右賀陸奥國出金詔書歌并短歌天平勝寶元年五月十二日大伴宿禰家持作之

同書貫之集 按記者以道山字而爲陸奥山故擧此

玉鉾のみちの山風寒からは形見かてらにきなんとそおもふ

右陸奥守平よりすけ朝臣のくたり侍るに橘のすけなはか將束をくるとてくはへける歌となん今案云玉鉾のみちの山風は只是路次の山風歟然而陸奥下向に送遣し云々故暫載之又陸者是道也不可有相違歟

金山 稱曰こかね山

八雲御抄

つくしなるにほふ子ゆへにみちのくのかとり乙女のゆひしひもかは

洞院左大臣攝政

散つもる木葉を更に吹返しそてもやすめぬみちの山かせ

夫木戀 鎌倉右大臣

こかねほるみちのく山にたつ民のいのちもしらぬ戀もするかな

同金部 殷富門院大輔

咲そめし金の花はすへらきの光とひらくは

しめなりけり
家集みちのく山　陸奥
同雜山部　光俊朝臣
陸奥の山をそかひに見渡せは東のはてや八重の白雲

此歌は康元元年十一月かしま社にまうて濱に出て逍遙するに丑寅にあたりて雲の絶間より山のほのかに見えたるかれはみちの國になん侍るなと申けれははるかに聞ける程におもひしられてよめると云々

歌林良材にそかひの所におひすかひたる事をそかと云うか菊もそかひきくなり

康元元年丙辰の八十八代後深草即位十年也

按石巻津及封内海濱業商舶者常諺曰舟行之往來詳其地理方維也常州犬吠崎與吾東海金華山方隅實相向焉爾後考奥州出金之事實嘗疑古書説得之小田郡陸奥山州人説出之牡鹿郡金花山事實同地名異於是屢問之人遍索之地未嘗得小田郡陸奥山之地者焉訝之也有年于茲一日及讀夫木集光俊朝臣歌并詞書而併考之商舶者之語渙然氷釋怡然理順於是始知古之陸奥山乃今之金華山而後來併小田而屬之牡鹿郡者斷然而分曉也後人須以此歌詞而左證也是乃和歌者流之所未詳焉吾州人之所未知焉得之累年錬漉考索之間矣仍擧此以永傳之後

奥州始出黄金説　源義和

夫黄金之於資用天下之珍而實皇天所以降此寶貨而敦厚乎我民生者苟非貴重之物哉本朝古昔未產此物焉故以日國之土產方物而貿易之于異域以備資用其不周徧充滿而匱乏少寡之義可識察矣是以人而切重之家而愼貯

之量入爲出故財恒足矣當聖武之朝而天地之精華始凝于此時生黃金于東奥以充國光于萬邦焉想夫上天后土所以令我國示此嘉瑞啓此多福而救人也偏爲善也輕致豐饒于生民之祥也豈是東奥一國之幸耶其厚澤溢于列國旋及天下後世者實非廣大悠遠哉於是乎上下宜重其永錫仰感天意俯謝地德之厚矣是全非因天皇之德化而致之幸斯時所以天錫始降地氣稍開者愈然天皇不解修其德而報天應之義妄取長途于南都而致恭敬于佛榻自是三年之間八易冶鑄其費不可枚擧焉爾後入浮屠而汚天位未幾而崩不協其天心之實嚴然夫貨財之爲寶能充資用得便利者無如此一物矣況至從所欲而得其志願則恰若火之始燃泉之始達常人之性貪婪之意無息時是以資用日費人心益驕泰不愼其天賦不憚其神賜用之如土塊聚之如丘陵酷致耗費而終亡身喪家者往々皆因其所欲之自由也是亦所以其作俑起于天皇者豈不哀哉

按地祇本紀説妄誕假託剰擧金華之號者所以出于神代焉夫金華之二字產金之後摘家持歌句之七字而用山名者也豈大古豫有此文字而家持用之詠詞乎於是亦此書之僞作當以知道也

湯山寺

在十八成濱號大金山四條帝仁治元年所建也

古石墳

在鮎川濱高一丈三尺廣一尺二寸題曰正安三年十月十二日爲祖父大祥忌所建也後伏見帝辛丑也

供養石

在飯子濱高七尺五寸廣一尺五寸上安十三佛像下述供養旨趣記曰應永二年乙亥十月日後小松帝十三年也

多曝島

長十八町曠一里餘周廻二里十町餘去金華山西南已可七里浮海上而波濤之奔騰乎石崖岩畔也如曝白練焉

綱沚

其水汀平處曰長渡長一里有半廣十三町周廻三里四町業漁鰕故挂魚罾設笭箵阻金花島已五里

江島

長七町餘廣三町半周廻二十四町去金華島已五里在東北

出島

長一里四町廣六町餘周廻二里二十一町去金華島西北已六里二十四町

右四區放遠流人之地也

氣僊郡

神名帳曰氣仙郡三座並小　理訓許段神社　登奈孝志神社　衣太手神社

五十五代文德帝仁壽二年七月辛未陸奥國衣多家神理計段神並授從五位下

大悲像

在矢作村號長谷山觀音寺長九尺六寸右方虛空藏左毘沙門共八尺五寸運慶作也

金剛寺

往時在高田村號如意山今移之今泉驛後字多帝寛平中大江千里所建也藏空海自畫像

大悲像

在小友村有寺號鶴頭山常隆寺置千手像長四尺右虛空藏左毘沙門各二尺運慶作秘殿而無開帳

蛇崎城

同村及川掃部綱重者居館也

大悲閣

在猪川村有寺號龍福山長國寺大同年中田村麻呂所建也有上梁文曰佐狩郷龍福山長國寺江瀨兵庫守平朝臣重矩者元龜三年二月十一日再興之

大悲閣

在横田村有寺號千手山淨光寺長一尺定朝作

本宿館 三日市城

同村日野右馬允者居之其一城子遠江居之

彌陀堂

在世田米村有寺號貴寶山光勝寺本尊運慶作長二尺

大悲兩閣 共一安産

在今泉村有寺號生妊形山泉藏寺藏嵯峨伏見宸翰具教定雅道風中將姬辨慶慈覺等鳥迹

五葉神社

在上有住五葉嶽上羊腸盤旋登者甚艱大同中田村麻呂所建不許女子婦人之登山上有池畔有石往昔有老婆犯禁壓死此石號老婆石

山王神社

在同處岳麓斯地多獼猴曾言神使令也六月望每歲獼猴群集登山岳而相與拜神祠有古猴長可三尺佩一刀而登登山人有不淨而來者則必振佩刀而追其人人怪之

天狗窟

在岳外東北郷俗曰諸奧院多岩窟翠崖青壁下有一凋洞有岩扉而苔深路黑曰之天狗窟

樋口古壘

在同村松田大隈者居館也

有住古城

同村千葉內膳者居處也

米崎古館

在濱田村葛西族臣千葉阿波廣朝者居之葛西黨赤族之日戰死于黑川郡大谷

多賀館

在唐船村江畔千葉長門居城

御崎神社

在唐桑村有寺號御崎山龍巖寺花園帝正慶二年戊申三月十五日阿部休信者建之未詳祀何神郷俗禱舟行平安也然則是海若神矣

斯地往古桃生郡也後屬氣仙郡至永祿中復屬於本吉郡古老相傳唐桑村往時謂之諏訪莊此地也左尾崎濱以北而向海南故曰尾崎神社此地之形勢崎嶇盤旋而實如龍蛇之曳尾俗呼曲岸頭而曰崎故獨稱尾崎明神後郷黨崇奉神德易之以御字加美名謂之御崎神社

或曰神名帳陸奥國桃生郡日高見神社有之且日本紀景行二十七年武内宿禰自東國還奏言東夷之中有日高見國擊可取也仍使日本武尊從上總轉入陸奥國蝦夷悉慴蝦夷既平自日高見國還云今按尾崎神社舊在桃生郡且有桃子之故實矧又有陰陽兩神垂跡之著然則兩神乃伊弉諾伊弉册之所化乎

神社右方有陽沼陰沼兩祠左方有神明熊野兩祠

土人言此地不許食薇蕨神嘗託曰我常寓薇蕨而護郷黨依此言而忌食之又不許坐菅席以神明常坐此草上也

神祠祭禮式孟春七日薦饌十日引歲繩而薦酒十一日奉幣謂之刀立神事方言十二十三兩日郷黨献酒自十四日至元夜各社參上元日未剋薦饌及黃蘗又薦神酒三尊及雪魚石決明岸魚各串之炙戌刻張灯火于社左右把松明而燒燎火于庭奉幣三加之庭上氏人納之社中後頒神酒其禮數九獻而畢薦神樂至鷄鳴而止

陽池陰池

社北二町餘斷崖絕壁數千丈其形勢截然高大神彫妙鐫殆駭矚其中有短狹者有長曠者碧潭

涵藍怒瀾覆雪其奇怪不可勝言自是以西有翠岩數仭上戴兩泓北曰陰池南曰陽池澄鮮玲瓏水底透徹是乃往昔神明垂跡之地也傍建小祠鄉黨言棹郎舟子釣徒漁人値風浪及其危急之時禱救于神則海上忽見鯨鯢出沒波瀾稍退暴風頓息得平安而還是乃神明之所以顯然而救人之效驗也仍海濱甚崇鯨魚妄不許食之

降臨石

斷岩上有巨石石上方正大古神明降臨于海濱所坐之神石也

節奏灣

斯地（社南二町餘）沙汀渺々石磯磊々翠瀾雪浪自然有聲如絲竹管籥之音相似故曰節奏灣

鹿蹄石

水濱石上印馬蹄而認往古神明之蹄跡故曰之馬蹄石舟人漁子會危急于風浪則神明駕白馬而救災厄之應今猶有見之者也

馬蹄石

在社後往古神明常駕白鹿今認其脚址

修禊水

鳥井左旁一細流是往時修禊之處也

守倉神　田束神

共在社邊林中司五穀守神倉者神代倉稻魂保食神也

幸神祠

本社西六町餘有小祠曰幸神幸者妻也守夫妻婚合之神也其邊有本社華表

尾崎藪澤

去本社十餘町有一藪澤多桃樹春時花開而結子但未及熟而子盡墮相傳神愛惜其種子之移于他鄉而俾子不能實也稱澤上山謂之退魔山

蛭島

在社北田中此地蛭子形色與尋常異背上有黑點而青不嚼人夫蛭之爲蟲能嚼人嚼則血流血

流則穢於是神恐嚼人而穢祭田故鉗其口也

一宮王子

鳥井傍有石其形質也上下廣而中段狹有黒紋理如蛭相似郷人以爲神化之著也仍稱一宮王子神代考記云蛭水蟲之名本草水蛭蛭兒腹生之始體嬬弱畢竟陰陽不順故此神始生支體不具此蟲之形相似故順風放之世所謂西宮夷三郎是也此石亦甚同形質一者數之始宮者崇之詞王子者幼兒之稱親王之義蛭兒元始生之兒故取義于此而號一宮王子

蛭兒棚岩

在一宮王子傍棚者供物之具海人漁父捕魚必供此岩上而祭之故名之

斯地神甚忌死穢不得立石封墓仍葬之他方海濱

雷神社

本社以北三町餘稱赤越明神

白幡明神

本社西北五町餘不詳祭何神已上皆御嶋之地

文石灣

去唐桑村落五六町其地也壁立千仞岩崖疊石波濤洗汀沙上多文石其文理或青碧或黄赤尤足可愛玩矣人蓄之盆池設之假山以珍焉

黒石灣

去文石灣可三里曰之馬波濱沙上多細石一片如黒豆一片似胡麻彷彿恰奪眞好事之徒是亦爲佳翫之娯焉

地福寺

在大田濱有湛慶作地藏背後記曰嘉元四年三月廿四日胸上記曰長祿四年九月廿七日長尾小三郎之光識

梶原堂

在石濱建保五年十月廿四日鎌倉若宮僧東遊所建也有影中頼朝卿左右梶原父子

東館壘
在高田村是亦千葉安房枝城也
二日市城
同所今野介九郎者居館也
廣田城
在廣田村和田掃部者居之
末崎城
在末崎村武田丹後者居城也
田茂山館
在田茂山村小澤右京者居之
根城
同村千田九兵衞者據之
高館壘
在綾里村千田大學者居之已上七區城主戰死于深谷之役倶葛西舊臣也
平館
同村新沼太郎左衞門者居之

梘館
同村今坂遠江者居館也
平田城
在越來內村只野民部者居之天正中與千葉安房戰死于南部遠野城
吉濱館
在吉濱村新沼薩摩者據之
迎館
在唐丹村及川土佐居之是亦戰死于遠野役
松館
在日比市村新沼安藝綱淸居之同役相與戰死
坪城
在竹駒村佐々木安藝居之是亦戰死于深谷之役
內館
外館
在矢作村千葉玄蕃居之

同村千田因播者據之

奥羽観蹟聞老志巻之九 終

奥羽観蹟聞老志巻之十

仙臺 佐久間義和著

磐井郡

神名帳曰磐井郡二座並小 配志和神社

儛草神社

八十二代後鳥羽帝文治五年八月二十四日以伊澤磐井牡鹿賜之葛西三郎清重命平泉郡内撿非違使所事云以此考則當時蓋以平泉而號之郡乎

夫木集 よみ人しらす

もろ人はいはひの里にまとゐしてともにちとせをふへきなりけり

梅嶺悲閣

在山目驛口有寺號羽黒山信盛寺一條院正暦元年三月十七日所建也此地多古梅仍號之

碎玉瀑布

在五串村直下二丈餘廣六尺餘翠濤分巉岩白練界青山最足致壯觀也

磐井川

今之一關川是也

後冷泉帝康平五年癸卯九月五日安倍貞任自將精兵八千見官兵少來襲小松柵（衣川北也）源義家義綱奮戰自午至酉貞任遂敗走退磐井川武則以敢死八百追北逐亡且俾銳兵五十人潛入貞任軍擧火而相應急擊之貞任兵大擾亂自相蹂躪武則頻追之不止自高梨宿追之衣河關其間僵死如亂麻貞任走入衣河館（高梨地未詳焉）故事談曰六條坊門北西洞院西に有堂號三輪堂件堂は伊豫入道頼義奥州俘囚討夷之後所建立也佛は等身阿彌陀也頼義造立此佛恭敬禮拜して往生極樂必引導し給へと申けれはうなつかせ給ひける十二年之間戰場死亡之者隻耳を切集て乾して皮古二合に入て持て上たりけるを件堂の土壇の下に埋と云々仍耳納堂と云也みのわ堂とは僻事也（三輪蓋誤耳納者也）

按頼義朝臣乃源家正統之巨擘一世之雄何緣恐冥禍臻玆耶就令雖殺人盈野於義戰而行天誅則何懼之有六一居士所謂彼壯勇其中心茫然無所守而然也者信矣木佛豈當點頭哉妄誕之甚不足取之主將丈夫者讀此則其心術之凡陋卑拙可恥之至也

衣川

一作衣河今從續日本紀

今屬之膽澤郡然衣河館等在當郡故依舊收之

水源有二一則出膽澤郡須川岳麓一則出同郡下風山下經增澤大平石納等數村渾曰之衣川其末又合磐井川也

桓武帝延曆八年三月辛亥諸國之軍會於陸奥多賀城分道入賊地五月癸丑勅征東將軍曰見比來奏狀知官軍猶滯衣川去四月六日奏你三月廿八日官軍渡河置營三處其勢如鼎足者自

爾以還經二三十餘日未審緣何事故致此留滯連居而不進未見其理夫兵貴獨速未聞巧遲又六七月者計應極熱如今不入恐失其時已失其時悔何所及將軍等應機進退更無間然但久留一處積日費粮貯之所怪唯在此耳宜其滯由及海軍消息附驛奏來

人物史曰阿都麻一名衣川袈裟母洛人居奥州衣川又歸于洛故世人號衣川老嫗阿都麻嫁源渡而當世之美婦也時遠藤武者所盛遠竊見彼妻之美神氣蕩喪不知所持遂欲劫其母爲媒母恐召其娘泣語之娘謂不從之則殺母不孝從之則捨夫不義不孝不義我生不如死乃諾曰請入我室殺我夫然則我爲君執箕箒某夜浴臥者我夫也証頭髪之濡而刺之盛遠大喜投暗直入刺其夫獲首提出而撿之乃婦之首也盛遠感婦之貞潔而且悔且泣祝髪爲僧改名文覺年十八然爲婦營塚名曰戀塚

一日讀衣川節婦傳至我爲君執箕箒某夜浴臥者我夫也證頭髪之濡而刺之不含書而不歎也噫記者不全知貞女節婦之志實出于天理之公而不容些私意人爲于其間焉謾弄筆徒作文字耳彼女也素至孝至貞豈始有私意而計之耶苟其情出至誠惻怛渾然天理不可息者故就其人心之安者也如此若發也所記則謀計私意之尤者豈有此言哉且縱苟一時爲欺其人之術而告以執箕箒之約刺濡髪之夫而爲之詞則約似許其爲婦之義與夫渾然出者天地霄壤何同日之譚哉想彼節婦也及聞說盛遠之言而斷於孝心節義也決然于其心矣何遑以私意謀計而容其間以欺人哉彼淫夫固惑心于婦也深彼亦及聞刺濡髪之者之言也何遑計其眞僞之分擇其夫妻之際耶一味信殺其人而未嘗致疑于其婦也必矣今試下筆記之則言曲請刺沐髪之者矣如此則

上以是安毋之心下以是善己之操也於是乎始綱常維立天理亦全予爲節婦甚惜記者立詞之不好焉故附于此云

列女傳曰京師節女者長安太富里人之妻也其夫有讐人欲報其夫無道徑聞其妻之仁孝有義乃劫其妻之父使要其女爲中譎父呼其女告之女計念不聽之則殺父不孝聽之則殺夫不義不孝不義雖生不可以行于世欲以身當之乃且許諾曰旦日在樓上新沐東首臥則是矣妾請開戶牖待之還其家乃告其夫使臥佗處因自沐居樓上東首開戶牖而臥夜半讐家果至斷頭持去明而視之乃其妻之頭也讐人哀痛之以爲有義遂釋不殺其夫按斯人亦異域同情可併考也仍附于此

拾遺戀一　よみ人しらす

袂より落るなみたはみちのくのころも川とそいふへかりける

新古今　源重之

衣河見馴し人のわかれにはたもとまてこそ浪はこえけれ

左京太夫顯輔家歌合に

新勅撰戀一　法性寺入道前關白太政大臣

人しれす音をのみなけは衣川袖のしからみせかぬ日そなき

前參議範永家歌合に隔川戀

新後撰戀三　藤原親盛

妹かすむ宿のこなたのころも川わたらぬおりも袖ぬらしけり

新後拾遺雜中　清原元輔

淺からすおもひ初てし衣川かゝる瀨にこそそてもぬれけり

新千載雜下　よみ人しらす

題しらす

そむきても世にすみ染のころも川かはるし

るしのなき身也けり
　　　　　　　　　　　　　兼　昌
夏たつとしるしもみえす衣川いつも舟よる
うらしなけれは
　六帖　　　　　　　　　　貫　之
身にちかき名をそ頼みし陸奥の衣の川とみ
てやわたらん
　家集　　　　　　　　　　元　眞
音にのみ聞わたりつる衣川袂にかゝるこゝ
ろなりけり
　六百番歌合　　　　　　　隆　信
はるかなる程とそ聞し衣川かた敷袖の名に
社ありけれ
　拾玉　　　　　　　　　　幕　下
黒染といふにてしりぬ衣川きよき名そ立み
ちのくまてに
　玉吟　　　　　　　　　　家　隆

衣川けさ立わたる春かせにとちし氷もとけ
やしぬらむ
たか袖につゝむ螢のころも川おもひあまり
て玉ともゆらん
　永承五年十一月俊綱朝臣家歌合水鳥
夫木集　　　　　　讀人しらす
衣川妻なき鴛の聲きけはまつ我袖そさえま
さりけり
　松近河といふことを衣川陸奥
同川類　　　　　　西行法師
ころも川汀によりてたつ浪は岸の松かねあ
らふなりけり
　　　　　　　　　俊頼朝臣
數ならぬ我身はよるの衣川きつれは人のま
つかへすらん
　十月十二日平泉にまかりつきたりけるに
雪降嵐はけしくことのほかに荒たりけり

いつしか衣川見まほしくてまかりむかひて見けり河の岸につきて衣川の城しまはしたることとからやうかはりて物をみる心ちしにけり汀氷てとりわけ寒けれは

西行法師

とりわきてこゝろもしみてさえそ渡る衣川見に來たるけふしも

衣郷

未詳其地或曰參河國也以歌考之則或然矣但據六帖中書王詠吟而收于茲

夫木里類　　鷹司院按察

いまよりの霞もさこそ立ぬらん衣の里に春し來ぬれは

爲忠朝臣家參河國名所歌合衣里

平　爲盛

夜をかさね深山立出る杜鵑衣の里にきつゝなくなり

六帖題御歌紅梅衣のさと陸奥

中務卿みこ

わきも兒か衣の鄕の梅の花さそくれなゐの色に咲らむ

意尊法師

春過て夏のひとへになりなから衣のさとは名社かはらね

駒形嶺　一稱多和枝嶺

在高館古河衣館東北以其山在長部村中鄕人今曰之長部山斯地往昔安倍賴時植白櫻一萬樹於三十餘里者乃此峯巒也來神河流遶山下與衣河同派西行集所賞多和枝嶺者迺此山也東史曰兼海陸三十餘里之間並植櫻樹至四月殘雪無消仍號駒形嶺

みちの國ひらいつみにむかゐてたはしねと申山の侍りことの木はすくなきやうにさくらのかきりみえて花の咲たるをみて

よめる
西行法師
きえもせすたはしね山のさくら花よしのゝほかにかゝるへしとは
山家集
おくになを人見ぬ花のちらぬあれや尋をいらん山ほとゝきす

櫻川

來神河流過平泉館下川也往時遶駒形山下每春艷陽之時櫻花一萬株爛熳于峯頂風光漸去飄零日飛此時滿川如雪河流變色仍稱之櫻川如今其地爲野田尤可惜（或指衣關小流者非是）

衣河館（今曰高館）

在平泉村東安倍賴時所築曰之衣河館文治中民部少輔基成居此館義經自殺于玆世稱高館是也上有義經古墳々畔有一櫻樹今猶存焉是乃往時之舊物也傍有兼房墓天和中我前大守綱村君建祠堂祭義經幽魂

桓武帝延曆八年六月庚辰征東將軍奏佽膽澤之地賊奴奧區方今大軍征討剪除村邑餘黨伏竄殺害人物又子波和我僻在深奧臣等遠欲薄伐運粮有難其從玉造塞至衣川營四日輜重受納二ケ日然則往還十日依衣川至子波地行程假令六日輜重往還十四日從玉造塞至子波地往還廿四日也

東史曰豫州在民部少輔基成朝臣衣河館文治五年閏四月晦日泰衡襲其館豫州兵悉敗績豫州入佛堂害其妻子後自殺（夫人乃川越太郎重賴女死時廿二女子四歲義經卅七歲）

同八月二十五日賴朝令千葉六郎大夫胤賴之衣河館召前民部少輔基成父子委身于下東降胤賴九月二十七日賴朝歷覽賴時衣河遺蹤

同六年二月十一日千葉新介敗大河次郎兼任于衣河館

今詳考東史或記歷覽賴時遺蹤或記敗兼任

于衣河館按義經東行之時秀衡別搆營稱之
高館而往年賴時舊館此時猶存者可視

賦高館古戰場

高館聳天星似冑衣川通海月如弓義經運命紅
塵外辨慶揮威白浪中 出本朝一人一首

吉次居宅

在衣川北舊礎猶存焉吉次奥州大賈往昔在京
師而會牛若于鞍馬寺約東行携之至于平泉秀
衡相喜賞之以貨財及第宅此其遺址也

柳營館

其址今在高館東北輝非陣營東來神河東俗曰
之柳御所義經東行改義行在東奥吾義顯見東史
其常居乃柳營館也然是高館乃賴時舊館而基
成相繼而居焉衣河館者往時舊名也

和泉城

遺址在中尊寺西阻衣川是乃往時貞任族兄成
道所據之古壘曰之琵琶柵後秀衡第三子泉三
郎忠衡居于此城仍曰之泉城
按此城去高館以西可十町康平中號琵琶柵
文治中忠衡居之同五年夏六月廿二日自殺
先義經自盡已五十日

東史曰三男忠衡家在于泉屋之東

按往昔之舊墟問之鄉導渾不詳地理方角來
歷事實花時問之別人則又異其對殊其地豈
此處而已哉處々皆僉故所記其中或依其所
告之可信或據其所見之可證而舉其大略于
此庶幾俟其識者而歸至當矣於他郡方所亦
僉前條柳營館亦細考之不分明者多想秀衡
迎義經之東行而新設居第者蓋此柳營館也
泰衡攻而所弑者高館也然義經先是不與基
成可同居焉故平日在柳營館斯地狹隘因豎
其受泰衡大兵也移居于高館者歟但基成居
賴時舊館而義經自盡于別館歟是亦不分曉
後人考定之

隊峯一臺峰
在下黑澤村泰衡張陣而相戰之地也

衣關（コロモガセキ）
去高館一町餘山下有小關路是古關門之址也東史曰此地昔時西界白河關東限外濱行程十餘日於其中間立關門名曰衣關
一説曰衣關在伊澤郡白鳥村曰鵜木其傍有關山明神今曰之關門宅是乃往時通行之道路而今廢其地也高關關門左則隣高峻右則通長途南北層巒相峙險隘之地

藻鹽草衣關奥州　こへわつらふ　さくら　時鳥　月　なみた

後撰雜一　よみ人しらす
たゝちともたのまさらなむ身にちかき衣の
關も有といふなり

道貞忘れて侍りける後みちの國の守にて
くたりけるにつかはしける
詞花別　和泉式部
もろ共にたゝまし物をみちのくの衣の關を
よそに見るかな

建保六年歌合冬關月
續後撰冬　順徳院御製
かけさゆるよはの衣の關守はねられぬまゝ
の月をみるらん

旅の歌の中に
續拾遺旅　大藏卿行宗
都いてゝ立かへるへき程ちかみ衣の關をけ
ふそこえぬる

同　衣笠内大臣
たひ人の衣の關をはる〳〵と都へたてゝい
く日きぬらん

寶治百首歌奉りける時寄關戀
同戀五　前參議忠定
跡たへて人もかよはぬひとりねのころもの
關をもる涙かな

五十首歌

續千載賀　贈從三位爲子

行人もえそ明やらぬ吹返す衣の關のけさのあらしに

新續古今別　藤原顯綱朝臣

東路に立るをたにもしらせねは衣の關のあるかひもなし

嘉元百首歌奉し時旅

夫木集春部　前中納言定家

さくら色によもの山風染てけり衣の關の春のあけほの

洞院攝政百首花

同春　大納言經成卿

花の香をゆくてにとめよ旅人の衣のせきの春のやまかせ

親隆一寂然法師

杜鵑衣の關にたつね來てきかぬうらみをかさねつるかな

嘉元百首歌奉りける時旅

津守國助

たひねする衣の關をもる物ははる〳〵來ぬるなみたなりけり

堀河百首　藤原顯仲朝臣

白雲のよそにきゝしをみちのくの衣のせきをきてそ越ぬる

光臺院入道五十首

夫木下同　正三位知家卿

さくら色の衣の關の春かせに忘れかたみの花の香そする

近衞院因幡光俊女

紅葉ちる衣の關をきて見れはたゝかたつまをそむるなりけり

嘉應二年十月法性寺殿歌合關路落葉

土御門內大臣

ちりかゝる紅葉の錦うへに着て衣の關をす
くるたひ人

衣川の關の長のおはしけるときゝて

重　之

むかしみし關守みれは老にけり年のゆくを
はえやはとゝめぬ

家集には衣の關のおさありしよりも老た
りしをと有

小々妄十題百首　寂蓮法師

やまかつの結てかへるさゝめこか衣の關と
あめをとをさぬ

新葉集　爲忠

露結ふそてを衣の關路とやうらゆく月も影
とゝむらん

龜井松

去高館西北二町餘田中有古墳是乃龜井六郎
重保戰死之地後人葬之以爲一堆塚上植一青
松曰之龜井松

鈴木墓

去龜井松西北三町餘在田上鈴木三郎重家戰
死之地也郷人葬于茲或曰兼房墓也

辨慶堂址

在衣關以西山頭往昔有一堂藏武藏坊辨慶像
其堂今荒廢遺像在大日堂或曰此地乃重家墓
所也

善逝閣址

往昔在中尊寺坂上曰之阿伽堂藥師堂亦荒廢
今移其像于中尊寺中

辨慶手植櫻

在同處餘一老櫻樹是乃辨慶手自所栽培也至
近歲頭半枯槁唯存半身焉故着花亦少

八幡神祠

往時在中尊寺以南田畔今移之坂上

出佛嶺

八幡西南有一山天和元年辛酉郷人鑿其地得佛像三軀于山下其佛乃彌陀藥師觀音像檀金也今安之中尊寺善逝堂

善逝閣

在中尊寺西阿伽堂佛也長丈六雲慶所作也

中尊寺

在中尊寺村號關山中尊寺堀河鳥羽兩朝勅願所也堀河帝長治二年乙酉奥羽押領使左將辨富任卿奉勅至東奥傳中尊毛越經營詔于御館清衡至鳥羽帝天仁年中稍落成焉以精舍在衣關而號關山輪奐富麗頗極其美今盡荒廢纔存寺院本文左將蓋左少辨乎

東史曰寺塔四十餘宇禪房三百餘宇清衡管領六郡之時草創之自白河關至于外濱行程廿餘箇日其道路每町立笠卒都婆圖畵金色阿彌陀像計當國中心立基塔于山頂寺院中央有多寶寺安置釋迦多寶像於左右中間開關路爲旅人往還之道文治五年九月十七日源忠所註末篇其記錄次第附各區之下

釋迦堂

安一百餘體金容即釋迦像也己下皆載本文

兩界堂

兩部諸尊皆爲金色木像也

二階堂

高五丈本尊長三丈金色彌陀脇持九體丈六也　按右三區及佛像今己亡

金色堂

上下四壁内殿皆金色堂内排三壇悉螺鈿也安阿彌陀三尊二天六地藏定朝作是乃天仁二年己丑所立藏三代尸者是也

按金色堂如今土人所謂光堂者是也在經堂東南堂柱各圖胎藏界大日十二軀彫螺鈿細紋堂内盡金色中構三壇各上置佛像壇下皆三代之屍也左壇乃基衡右秀衡前壇清

衡也後水尾帝寬永中黃門君時修補之次命人發而點撿焉淸衡棺長六尺曠二尺裹之以白綾漆其上納雄劍一口幷鎭守府將軍印璽基衡裹之以白絹朱其上襯白衣表錦袍秀衡亦同之藏和泉三郞忠衡首函高二尺方一尺五寸黑漆壇上佛像中立者彌陀是乃定朝所作觀音勢至相並于其前多門持國兩立六地藏擁後共雲慶所造也今暗與東史記合其佗今所藏有藥師二軀共丈六有大日一軀共運慶所造外有珍藏者一曰秀衡鑿刀長一尺六寸廣一寸二分二曰用大刀（誤衡府太刀者）長一尺六寸出秀衡棺中三曰義經自殺刀（長九寸五分）

鎭守社

崇敬日吉社于南勸請白山宮于北（共東史文）白山社今在光堂以北日吉社今廢

大日堂

在光堂南堂中所藏多佛像是乃往昔所置于新御堂之大日俗呼曰生膚大日末佛肌膚溫々如生人雲慶作也往昔遇兵燹其焦痕往々有矣釋迦湛慶作文珠普賢雲慶作千手觀音俗工也辨慶像之事見于前條（大日如來試其肌膚凄然冷也豈然哉妄誕之甚者也）

老婆杉

在白山西北岸上樹圍三丈六尺八寸聳參昂霄枝葉蓊鬱婆娑土人稱之老婆杉

鐘樓

在光堂東北懸鐘有銘文字半滅不分明厚三寸徑二尺三寸其銘曰

仰考平泉中尊寺草創歲序長治二年春藤原淸衡忝賜堀河鳥羽勅詔之靈場也爰建武四年回祿成阿闍薩埵賴榮勵推鐘利正志于茲誌

關山曉鐘　覺無明眠　鷲嶺晚風　拂煩惱塵　摧伏魑魅　感降靈仙　悲極六通

下達九泉　剣輪轂苦　鯨音無邊　普配
聖賢　四化父母　利物心堅　鑄施金錢
銘加鏤字　永不朽傳
康永二年大歳癸未七月日　鑄師散位藤原
助信　願主權律師頼榮　大旦那左近將監
平親家　大旦那當國大將沙彌義慶
右鐘銘其文章不足取之以今所存擧其說云
按長治二年乃堀河帝十九年己酉建武四
年光明帝元年丁丑康永二年同帝七年癸
未

辨才天堂址

在鐘樓西往昔有一池々中有一島置辨才天
今已荒廢爲麥隴

憩息松

鐘樓東北有老松義經倚此松根憩息之地也
今猶存

天神祠

在經堂西北謂一夜白髪神東史西方北野天
神者是也見鎮守事下

經藏堂

在光堂西北今曰之經堂搆八架置三代所寄
附一切經也藏經函廣七寸長一尺五分高三
寸五分黑漆螺鈿利弗阿眼曇論上帙之八字
于蓋上不詳文字義理三代共藏一切經一部
紺紙金銀泥淸衡紺紙金泥基衡宋本黃紙秀
衡寄附也東史經藏一庫藏宋本一切經乃此
本也
堂中所藏佛像多文殊一軀長二尺五寸駕獅子其
右于闐王把轡進大上老人手拂子立其後左
善哉童子棒一匣從佛陀婆里一作波利取錫杖于
後但運慶作最精妙有面目梲發而太如見生
人大日像同作外彌陀藥師大日若干軀在架
上千手觀音二十八部衆同作其妙殆逼眞基
衡安齋堂者也東史毛越寺下所記千手堂本

像二十八部衆各鏤金銀者是也 事見于下

歷代珍藏一曰水火珠徑二寸六分二曰九條袈裟以藕絲織之黃而揚黑色往古五臺山文殊所寄附物也三曰龍牙長三寸八分廣三寸五分色靑黑

金雞峯

中尊寺東南有高峯秀衡擬之駿州慈峯且埋金雞一匹於峯頭号金雞山乃是地也

熊野神址

衣關東南在池上村中阪上往時神社在山下田中石礎猶存神竈十二口在水田中徑二尺深一尺六寸不詳何爲設此器焉

右十四區共中尊寺裡舊地但考東史所記則或存或亡亡者以今廢而爲例存者直記其下後世遷堂社于佗者擧其地而別記事實方所其佗以東史中尊寺下所附而記之以爲往時之考證焉毛越寺已下亦倣此

源顯家卿所納願文者一篇藏中尊寺仍擧全文載于此

中尊寺供養願文 眞筆本書珍藏寶庫

延元柔兆之歲小春下元之日書 後醍醐帝宸翰

延元々年丙子十月十五日也

敬白

奉建立供養鎭護國家大伽藍一區事

三間四面檜皮葺堂一宇在左右廊廿二間

莊嚴

五彩切幡卅二旒

三丈村濃大幡二流

奉安置丈六皆金色釋迦三尊像各一體

右堂宇則芝栭藻井天蓋寶網嚴飾協意丹艧悅目佛像則蓮眼菓脣紫磨金色脇士侍者次第圍繞

三重塔婆三基

莊嚴

金銅寶幢卅六流（旒列十二流）
奉安置摩訶毘盧遮那如來三尊像各一體
釋迦牟尼如來三尊像各一體
藥師瑠璃光如來三尊像各一體
彌勒慈尊三尊像各一體
右本尊座前瑜伽壇上置八供養之鈴杵立八方色之幡幢儀軌次第莫不兼備
二階瓦葺經堂一宇
奉納金銀泥一切經一部
奉安置等身皆金色文殊師利尊像各一體
右經卷者金書銀字挾一行而交光紺紙玉軸合衆寶而成卷漆蓮以安部帙琢螺鈿以鏤題目文珠像者憑三世覺母之名爲一切經藏之主廻恵眼照見運智力以護持矣
二階鐘樓一宇
懸廿鈞洪鐘一口
右一音所覃千界不限拔苦與樂普皆平等官軍夷虜之死事古來幾多毛羽鱗介之受屠過現無量精魂皆去他方之界朽骨猶爲此土之塵毎鐘聲之動地令寃靈導淨刹矣
大門三宇
築垣三面
反橋一道廿一間
斜橋一道十間
龍頭鷁首畫船二隻
左右樂器大鼓舞裝束卅八具
右築山以增地形穿池以貯水脈草木樹林之成行宮殿樓閣之中度廣樂之奏歌舞大衣之讃佛乘雖爲徼外之蠻陬可謂寺内之佛土矣
千部法華經
千日持經者
右弟子運志多年書寫之僧侶同音一日轉讀之一日充一部告盡千部聚蚊之響尚成雷千倍之聲定達天矣

五百卅口題名僧
右揚口列十軸之題名盡五千餘卷之部帙安手
捧持開紐無煩以前善根旨趣偏奉爲鎭護國家
也所以者何弟子者東夷之遠酋也生逢
聖代之無征戰長屬明時之多仁恩蠻陬夷落爲
之少事虜陣戎庭爲之不虞當于斯時弟子苟資
祖考之餘業謬居俘囚之上頭出羽陸奥之土俗
如從風草肅愼挹婁之海蠻類向日葵垂拱寧息
三十餘年然間時享歲貢之勤職業無失羽毛齒
革之贊參則無違因玆乾憐頻降遠優奉國之節
天恩無改已過杖鄕之齡雖知運命之在天爭忘
忠貞之報國憶其報謝不如修善是以調貢職之
羨餘拋財幣之涓露占吉土而建堂塔冶眞金而
顯佛經經藏鐘樓大門大垣依高築山就窪穿池
龍虎協宜卽是四神具足之地也蠻夷歸善豈非
諸佛摩頂之場乎又設萬燈會供十方尊薰修定
遍法界素意盡成悉地捧其全分奉祈
禪定法皇蓬萊殿上日月之影鎭遲巧德林中霧
露之氣長齊金輪聖王玉扆無動
太上天皇寶算無涯
國母仙院麻姑比齡林慮桂陽松子併影三公九
卿武職文官五畿七道萬姓兆民皆樂治世各誇
長生爲御願寺長祈
國家區々之誠天高聽卑
綸綍依請供養遂思寶曆三年青陽三月曜宿相
應支干皆吉延囑一千五百餘口僧讚揚八萬十
二一切經金銀和光照弟子之中誠佛經合力添
法皇之上壽弟子生涯久浴恩德之海身後必詣
安養之鄕乃至鐵圍砂界胎卵濕化善根所覃勝
利無量敬白
天治三年三月廿四日弟子正六位上藤原朝臣
清衡敬白
件願文者右京大夫敦光朝臣草之中納言朝
隆卿書之而有不慮之事及紛失之義爲擬正

文忽染疎毫耳

鎭守大將軍 花押

按延元乃後醍醐重祚延元元年丙子也天治三年乃崇德帝大治元年丙午也蓋改元當在三月之後也故及于此乎寶曆年號考之無所見蓋指天治三年是亦祝賀之詞而猶言鳳曆堯曆者乎敦光乃藤原宇合之後式家儒明衡子敦基第一世之學者也朝隆未詳想當時能書之人大將軍乃奧州國司北畠中納言源顯家卿自所書今收之寺院

一日讀此願文歎曰甚矣清衡之好佛佞僧也於是乎費許多之貨財盡無量之富麗且夫敦光身居學生之職而黨如此妄意顯家亦位當經濟之任贊此不善相雷同相荷擔相唱和遂貽其臭後世此皆所以出上無風敎下無學術也嗚乎清衡幸享此大國處此富饒而其可急者專建學立師在愛人撫民散財富國然不務于茲而却厚于彼矣若夫移好佛之心而易信道崇學之志則以所費之貨財或設學校或施才能倣唐虞三代之道則其多福天幸亦不可量焉惘然昏于是矣自深信浮圖甚怖冥禍也一生心術之寓處終身志意之趣處不超禱佛覓幸諂僧脫罪好利逞欲之外是以至子孫及從者不明于君臣上下之道不知孝弟忠信之實旋及後裔而終身弑國亡矣後人宜不監濫觴于此願文耶

又曰荒川氏世建寺院僧舍藏佛像經論不可枚擧焉可謂能修冥福能散貨財矣自俗眼窺之自凡心計之俱是求多福得積善之術而須屋愈潤身益富有無窮之榮也然子孫不保其身喪其家身弑國亡爲天下之大僇何哉祖先以來甚怖死生誇富貴故多年造立佛塔僧宇極厥富麗奢侈己臻茲雖然由來不知有仁義故替先王之法其政道之所出皆因無智妄作自是心術之所依準爲利爲名所謂徒善徒法

者是也嘗謂唯委身以奉佛盡財而修善則足以脩身齊家治國禳災格瑞矣烏虖迂哉是猶緣木而求魚也於是令一國臣子者慣專懷利欲而逞私意妄借上無禮焉是以秀衡沒後愁涙未拭墓土未乾上下反亂國中失禮剩其子弟戾亡父之遺訓疾賢弟之忠誠弑義經而唱賴朝也嗚呼令彼輩自幼信道崇學則自然知上下之禮義一味重君臣之大義縱令是之時關東有誅罰之命謹對言義經君之於臣我所天之人且有功于君而無罪況又於亡父之託乎縱强蒙伏誅之命豈忍負天而逞弑逆欺父而廢遺言耶但某等非護持保愛之志厚于義經君於幕下亦天倫之難息者且夫彼君之於幕下也多年嘗險阻艱難之味處撥亂回治之勞而一日不能寧處此時幕下宛然于安居無事之間而得天下於衽席上者皆義經君之力而幕下之所以詳知也言天理則傾倒其家富

責其身宜褒賞愛護之人也如何用一時姦臣之讒而忽忘骨肉之愛離天倫之親而欲重加殺伐之責焉更恐須仰以達天心俯以愧人倫取譏于海內貽臭於後世也謹請垂照察維幸甚若臣等之微忠不達復降高命則以豫州君踏北海而去猶被加大兵則不得止而當高城深池以竢罪于私第之死矣靡佗矣如此致志則賴朝亦感悟彼至忠秉彝之心忽起羞惡之情頓發庶幾罷其兵乎然則上與賴朝之良心下救義經之急難逞亡父之遺言全自家之赤心者也奥羽之君臣一人不及于此故致師大軍而鳴其罪焉夫自古得道者多助失道者寡助奥羽之精兵不爲少山河之防禦不爲緩焉然群臣不親其上不死其長咸畔其主而泰衡遂爲鳥有身亦殺臣手可謂天誅之所不容也於是乎舉世而責泰衡之不臣其罪尤不足以贖之然世人唯知泰衡之不臣而未詳其不臣

之心實蔑祖先之不學也清衡久領大國而階諂富貴且身生于東夷而不知先王之道故一國之士民不知孝弟忠信禮義廉耻之義雖所知者情欲利害之私耳故泰衡亦安貪婪無飽之情而利關東廿吉之命於是乎遂失上下之禮蔑臣子之大節焉若夫向以仁道而治國令子弟臣僕教之以人倫知入以事父兄出以事長上則何至茲有子所謂其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也宜乎哉若夫政道自古出于學術者則人倫明於上而民親於下矣縱不得止而受征伐奥羽忠臣義士皆知趣難死節之重而足以拒關東兵然則遞四世可至萬世而享國以君誰得族滅拂地哉宜乎哉荒川氏之亡也有國者不可以不鑑乎此焉

毛越寺址

其址在毛越村中號醫王山毛越寺是亦鳥羽帝勅願所基衡建之復酷極富麗正親町帝天正元年癸酉爲野火燒亡後盡荒廢纔餘班神叢祠一班（作字多[illegible]）社中藏雲慶作彌陀熊野像八軀往時三山神像也

東史曰堂塔四十餘宇禪房五百餘宇基衡建之

圓隆寺址

其址在嘉祥寺址北今荒廢九間四面石礎猶存外爲池塘綠水悠々金堂五階塔南大門（六間八間）三區址共在其傍

東史曰金堂號之圓隆寺以紫檀赤木爲之內安丈六藥師及十二神將雲慶所造鏤玉以照瞳

又有佛像基衡令雲慶造之三年而成基衡施其勞以黃金百兩鷲羽百尾徑七間水豹皮六十餘枚安達絹千匹希婦細布二千端信夫毛地摺千端而贈之雲慶其餘產出生海物竭寄悉怪焉別寄生美絹三艘雲慶曰嘉貺之厚俱

足可貴也特美絹甚愛之基衡重寄三艘時其精妙之言盈乎洛中後達　天聽鳥羽帝甚惜東出基衡忠之閉戸斷漿水已七日以禱之且歎之九條關白殿下達諸　上聞有勅許而遂基衡素願

按安達絹希婦之布信夫毛地摺共是奥州佳產古今人之所稱也後來其制絕而無見之者矣於毛地摺顯昭嘗記當時稍得之遍昭寺簾箔緣也然或千匹或二千端維多顯昭亦與基衡先後不多同時矣見之希而得之少耶若前以貢而多傳于世後不貢而少人間乎可疑

東史曰文治五年九月十七日寺僧源忠已講心蓮等至幕下旅館以清衡已下三代造立堂舍之事聞之乃令親能朝宗聞所其訴焉於是幕下感賞尊信佛法之如此賜一篇書榜諸圓隆寺南大門伴寺僧見之曰平泉寺領者宜任先例所寄附也堂塔縱雖及荒廢之地至佛性燈油之勤則地頭等不可致其妨者也次記衆徒所注中尊寺毛越寺無量院等寺塔注文

昔武王克商封比干之墓釋箕子之囚表商容之閭散鹿臺之財發鉅橋之粟以賑貧弱甿隷罷兵西歸歸馬華山之陽放牛桃林之野倒載干戈包之虎皮車甲衅而藏之庫府示天下不復用是乃亂後所示泰平安堵萬世之標準也爾後漢高祖克秦而入咸陽召父老曰苦秦苛法久矣忽除之約法三章諸吏衆庶皆安堵如故秦民大喜而持牛羊酒食獻饗軍士是亦後世可法之善政也可謂撥平之急務矣賴朝臨凱旋之日速出令反其旄倪止其重器謀於奥羽衆宜置主而後去也然不及此剩不悟妖僧之欺已計利而信其妄語却感賞尊信如此其厚嗚乎迂哉夫泰衡之喪國自父祖已來以淫佛佞僧營

堂宇連僧房而爲急不及愛民救人之政是
以天心離人望反遂赤其族賴朝不明於此
義黨已之所好而以暴易暴也欲撥亂撫民
者切所以可監戒也

羅漢石

在池塘南汀或作僧石或作雙右石形如浮屠
相並而立談偶語

講堂

藏胎藏界大日今已廢

常行堂

在班神祠下其堂荒廢舊地乃今柳坊舍是也

法華堂

藏千手像二十八部衆慈覺作今已亡

二階總門　鐘樓　鼓樓　經藏

正親町帝元龜四年燒亡（是歲改元天正）
東史曰毛越寺下記曰額乃九條關白堂內色
紙形參議教長卿所書也是亦不傳

吉祥寺

去柳坊舍可百步往昔號金輪山吉祥寺盡荒
廢其址僅存
東史曰摸洛陽補陀洛寺觀音以爲生身靈象
故別造丈六像藏之腔中

酒泉

在金輪山下往昔有酒泉出于茲

千手堂

堂已廢藏其像于中尊寺經堂見于前篇
東史曰二十八部衆鏤之以金銀

鎭守社

今已荒廢
東史曰鎭守建總社金峯山于東西

嘉祥寺址

是亦荒廢其址在彌陀堂南湛綠漪而爲池塘
東史曰嘉祥寺基衡所經始未及落成基衡已
死因秀衡繼父志以遂造立置丈六藥師四壁

並三面畫所法華廿八品大意

七重塔址

在嘉祥舊址西古礎猶存

觀自在王院

基衡妻所建今盡荒廢舊地在圓隆寺址東北其址盡爲池塘

東史曰號大阿彌陀堂銀壇而高欄乃磨金也四壁畫洛陽靈迹名區

小阿彌陀堂

基衡妻所建毛越村中坂上一茆堂是往昔之址也

東史曰兩宇共基衡之妻（宗任之女）所建也障子色紙形參議教長卿筆迹也

堂中藏雲慶所造新御堂彌陀及毛房（一作脩草）所作燈臺二興堂前有鐵塔一基圍五尺六寸其銘有奉安置平泉觀自在王院池中島奉納六十六部妙典塔婆云々文和第四亥月上旬勸進法眼定舜金剛幸芝故法印幸秀等四十九字消滅已甚故不分明文和四年乃後光嚴帝元年壬辰也

轉鐘嶺

在圓隆寺址西南往時中尊毛越兩寺以一鼎鐘而爭論之不決一僧嘗言試令鼎鐘轉自峯頂以落下地而決之果轉之得中尊寺地今所存是也

錦戸館址

吉祥寺址北有古壘址是乃國衡高衡古館也

東史曰館事秀衡金色堂正方並于無量光院北搆宿館號平泉館西木戸有嫡子國衡家同四男隆衡宅相並（十六區其毛越地）

無量光院址

在高館東南曰之新御堂今盡荒廢舊礎猶在往時大日像今移之中尊寺見前篇大日堂下

東史曰無量光院號新御堂秀衡擬宇治平等院

而所建也置丈六阿彌陀堂中四壁圖觀經大意又有遊獵圖秀衡親筆也

三重寶塔址

東史曰院内莊嚴悉摸宇治平等院是亦荒廢

東史曰文治五年十二月奥州無量院侍僧助公者以罪爲虜至鎌倉仍令梶原景時糺問之對曰某素無異心此秋九月舊主泰衡過河田叛逆落舊恩者孰不哀痛哉時維十三夜季秋佳月之期也然朦朧不見月矧亂後敗國之夜乎此時感慨追憶頻生焉不堪懷舊斷腸之情不覺發哀吟曰

昔にもかへらぬ夜半のしるしとて今夜の
月もくもりぬるかな

其所述鬱情如此夫念舊主慕往事是亦人情之難止者就令實有復讐之志是臣子迫切之情也况某嘗無有反心傍人不察依一首悲歌而罪某以異心焉豈其然哉景時聞其言忽發感心聞諸幕下幕下亦優其哀吟乃免囚虜還之舊里云

按助公一首之悲吟不虞而得罪將就湯鑊焉可謂不幸之甚者也然此哀音之發元出於戀舊主感往事之赤心矣故景時乍感之幕下亦賞之乃得赦而反故國也是併所以因和歌之德者豈可不崇哉於是亦可視人心之不可止者自然相感之實矣

嘉樂館址

其地在新御堂來神河西高館東北秀衡常居也祖父淸衡舊居江刺郡餅田鄉豐田館堀河帝康和中遷此地往時來神河流過長部山下道路在河東架長橋而來往後來流于西畔亦後洪水瀰漫失館下地

東史曰無量院東門搆一郭號嘉樂館秀衡常居所也泰衡相繼而居焉者乃是地也

平泉館址

在平泉村中新御堂西高館南今盡荒廢已爲墟

東史曰金色堂正方並于無量光院之北搆宿館

號平泉館西木戸（地名）有嫡子國衡家同四男隆衡宅相並之三男忠衡者在于泉屋（地名）之東無量光院東門構一郭號嘉樂秀衡常居所也泰衡相繼爲居所焉觀自在王院南大門南北路東西及數町造替宿倉町又建數十宅高屋西南北有數十宇車宿

又曰文治五年八月廿日賴朝出葛西郡（此時以葛西爲郡名）赴平泉征泰衡于諸所

同月廿一日泰衡迎擊賴朝于栗原三迫而不克賴朝經松山路而至栗原

廿二日賴朝自玉造郡經葛西郡到平泉時大雨泰衡逃亡于多賀波々城昨日經平泉燒其館去之比內郡唯餘一倉廩於西南隅

同日令葛西三郎清重小栗十郎重成闢其府庫得紫檀廚子數脚納以牛玉犀角象牙笛水牛角紺瑠璃笏金沓玉幡金華鬘蜀江錦直衣無縫夏衣金鶴銀造瑠璃燈爐南廷百各盛金器其佗錦繡綾羅類頗多

廿六日投一封書於陣中去今親能讀之曰豫州君事亡父所容隱而泰衡未嘗黨焉故奉命討之而有功然今無罪而忽受征伐於是去居館而竄山林若有仁惠而許成敗于兩國則當就家臣列而受其命不幸不納則請滅死罪而處流刑矣只仰照臨耳置報于比內郡內則依是非而致歸降矣衆議紛々實平曰試投報書俟之其地伏兵以執之以問其在處然未議決

九月二日賴朝出平泉之廚川至志波郡陣岡蜂社

同十二日自陣岡歸廚川

同十八日秀衡第四子本吉冠者高衡降

同廿二日歸平泉留滯六日

同廿三日賴朝令豐前介實俊鄕導觀無量光院及處々遺蹤細問其故墟實俊曰往昔御館權太郎清衡自繼其先（亘理氏）荒川太郎武貞家後領伊

澤加美江刺稗枝志波磐手六郡居江刺郡豐田城以康保年中相攸　平泉遷居於此館而三十三年及清衡卒也基衡相繼領奧羽又三十三年而卒秀衡相繼而繼絕興廢幸任鎭守將軍全握兩國權于掌中官祿如此超父祖榮耀如彼及子弟可謂克享國日厚又三十三年而卒三世凡九十九年所造立之堂舍亦不可枚擧云

按康平元年戊戌後冷泉帝十三年其五年壬寅貞任伏誅然實俊云康保中遷平泉距義大與年數不相合今考大概康保元年甲子乃村上帝十八年至康平五年貞任伏誅九十九年至寛治五年武衡伏誅百九年豈夫然乎想是記者誤康和字而爲康保者也年號聲音本相似矣以其出處考則清衡舊亘理權太夫經清子而以康平四年辛丑生安倍賴時之外孫也明年壬寅賴時伏誅經清亦亡於是其母携經清子清衡而嫁清原眞人武則生武衡家衡二子亦寛治五年辛未伏誅後武則嫡子荒川太郎武貞養清衡繼其家保安三年壬寅六十一歲而卒盖享國實三十二年言三十三年者擧其大數耳然則康保實誤康和字者也

同廿四日賜膽澤磐井牡鹿于葛西三郎清重命平泉郡撿非違使所事

同廿八日賴朝發平泉從軍二十八萬四千人十月朔至多賀國府廿四日歸鎌倉經歷已九十四日自文治五年八月廿日至此記賴朝東征大略

同六年二月十一日泰衡舊臣大河次郎兼任與千葉新介戰于平泉不克

建久六年九月三日賴朝命平泉宮社寺院修造事於葛西兵衞清重伊澤左近將監家景

土御門帝承元四年五月廿五日命陸奧國平泉伽藍興隆之事

州人傳言曰昔平泉有異人號清悅自言本是洛陽之產也嘗從豫州君東行臻斯邦値泰衡弑豫

侯来落魄降民間仍時々説舊事多與世傳者異也以劍客所稱經歲月聊容貌自若如壯年郷人怪問之曰多年顏色亦不減舊時非金石之質而壽考今如此請聞其故答曰我先君爲景時所譖蹭蹬至茲邦秀衡善愛護新設居于高館待之甚厚是以上下寧處平日多暇一日與同輩携釣竿漁獵于衣川行々窮水源茫然忘路遠近恰若迷于武陵忽見老父釣石磯因與之話終日漸及斜陽日將沈于山西老父曰樂只釣魚之遊也不思今日與二三子優遊偸閑於此恨晨光之熹微矣我居幸在近請携二三子歸不堪辭從老父行未幾有一巖洞延登于堂回首不見花人自炊羞饌傍置一赤肉食之其味殆所未知於人間也二客怪而不食焉老父曰客莫異之是乃人魚者也嚼之令人其壽萬三光予聞此言悦而食之懷其餘笑譚移晷已及黄昏辭謝期他日相揖去不覺出前路重来覓其處惘然不可復得焉想是地仙之徒而所謂仙境者歟予食肉來稍覺壯健聞者驚寛永之比猶見于人間後來不知所終所説文治舊話記得存于俗間焉（按自文治年中至寛永中己四百六十餘年）

神社考曰奥州有殘夢者自字曰呼白又自稱秋風道人不僧不俗風顛狂漢自曰與僧一休友善得其禪要又時々與人語以元暦文治之事而言其時義經爲何事辨慶爲其事誰某作此事與平氏戰于某其話殆如親見之者人怪而詰之則曰我忘之矣浮圖天海及松雲者遇殘夢殘夢好枸杞飯食之海亦喫之與人語曰殘夢長生不速事而服枸杞飯故也人怪之曰彼蓋常陸坊耶海聞而喜之人送枸杞海受爲茶飯餌焉海之言曰任意隨時而勿急勿速緩々慢々是延壽命人或信之云（按是乃略勞勞于清悦事其人同而其傳異乎）

又云若狭國有號白比丘尼者其父一旦入山遇異人與倶到一處殆一天地而別世界也其人與一物曰是人魚也食之延年不老父携歸家其女

子迎歡而取其衣帶因得人魚於袖裏乃食之蓋肉芝之類乎女子壽四百餘歲所謂白比丘尼是也按所得乎父人魚與清悅人羹略相似

又曰越前國有大男者入深山伐木渴甚會巨木孔内注坊有水便低頭飲之其味清淡殆非人間水也遂得數百年之壽云

達谷窟 或作田谷巖屋

去平泉西南十餘里在達谷村今曰之山王窟桓武帝延暦二十年坂上田村麻呂建九間四面堂于岩窟中置毘舍門百八軀年々亡失今所存者一尺餘小像慈覺作也 詳岩屋堂下

東史曰文治五年九月廿八日幕下自平泉赴多賀國府路有一青山問之號田谷窟是田村麻呂利仁等將軍奉綸命征夷之時賊主悪路王并赤頭等搆塞之岩室也其岩洞前途至于此十餘日隣外濱也坂上將軍於此窟前建立九間四面精舍令摸鞍馬寺安置多門天號西光寺附水田寄文云東限北上河流南限磐井河西限窩王岩屋北限牛木長峯者東西三十餘里南北二十餘里云

人物史利仁傳曰利仁勇力絶衆輕捷如飛醍醐朝當關東盜賊起奉勅往捕之會天大雪利仁夜潜兵襲其落賊果無備大克斬首萬級威名大震又迫奥州夷賊起利仁拜鎭守府將軍征討之軍所至著克功名速成而還朝廷賞之

百將傳曰藤原利仁者延喜之世率兵討奥賊風雪之夜乘敵無備撃平之

巖窟堂

岩下洞中搆長樓長九廣七間 曰九間四面者非也今現存 設架于岩窟而造之往時置多門百軀今所存有毘沙門吉祥天女禪尼師童子等僅二十餘軀其餘堂中有丈六不動共慈覺作也

岩面佛

堂南赤壁高可三丈岩面有畫佛相傳義家朝臣

東征之時以弓弰畫之壁遺跡今猶存

掛手松

斷岩上有一偃松往昔悪路王掛手于松枝而窺義家朝臣著也

右二條誤田村麻呂事而稱義家者非也

西光寺

在岩窟以北號眞鏡山西光寺往昔田村麻呂所建有水田寄文見于前

蝦蟇池　九葉楓樹

共在岩窟樓前不詳事實池畔有楓樹其葉九裂

掛鬘石

去岩窟北十町餘溪流溶々有一石巖高可三丈青蘚鎖石面緣苔疊畫紋斷岩截然而不可攀緣焉上有老樹可愛往昔悪路王取掠劫之女鬘而掛之樹也故號石曰掛鬘石

待姫瀑布

石岩北三町餘有小瀑布奔流邊兩石巖奇狀殊可愛悪路王徒當時入搢紳貴族巨室富家窺閨深窓竊處女愛姬來者多其中有葉室中納言某女幽艷國色寵異尤渥父君母堂悲慕哀痛殆欲毀生焉於是令親臣索之東奥得物色于斯地而通意于女君謀脱去矣仍女君請催逍遙于春山是乃欲託遊宴而伺其間也賊不悟計策携女君及衆姬而賞春光于綠野其地多櫻樹稱白櫻原女君欲令親臣潜居于瀑布下待賊醉臥而走焉仍勸醉於罇前忘歸于花下賊甚酩酊不覺陷謀中而酣睡女君膝上女君乘其熟眠走出至于其地親臣負之渉嶮艱微行歸帝城賊眠稍醒追逐終不及焉後世土人曰之待姫瀑布

白櫻原

去瀑布東南四町餘往時悪路王携女君所醉臥遊宴之地也其地往昔山櫻數百株花時爛熳春光奇絶鄉人稱白櫻原今也亡

二王門址

在原上以西往時西光寺二王門址也

神樂岡

其地未詳考事實則近乎達谷也
田村麻呂傳曰坂上田村麻呂者刈田麻呂子也仕桓武帝拜征東將軍以久在奧州多軍勞也又當延曆二十年奧州賊高丸起于達谷窟大鈔國中遂發到駿州清見關田村奉詔討之高丸怖而引去田村追到東奧大屠其窟殺高丸於神樂岡斬其黨惡路王國中大平
日本後記曰延曆廿一年四月庚子田村麻呂等言夷大墓公阿弖利爲盤具公母禮率種類降秋七月甲子使田村麻呂來夷大墓公二人從八月丁酉斬夷大墓公阿弖利爲盤具公母禮等此二虜者並奧地之賊首也無嘗記高丸惡路王事唯見人物史田村麻呂傳又釋書延鎭傳言逆賊高丸而未及惡路王赤頭事唯東鑑責賊主惡路王並赤頭等搆棄之岩窟也其抵牾異同何哉然擇其正者則日本後紀乃實錄也與諸書不相合尤可怪
元亨釋書曰延鎭報恩法師之徒也居清水寺與坂上將軍田村遇因爲親友將軍奉勅伐奧州逆賊高丸語鎭曰我承皇詔征夷不假法力爭得不辱命公其加意焉鎭諾高丸已陷駿州次清見關聞將軍出師退保奧州官師與賊交鋒官軍矢盡于時小比丘及小男拾矢與將軍將軍異之已而將軍親射高丸而斃於神樂岡獻首于帝城將軍先請鎭曰因師護念已誅逆寇不知師之所修何法哉鎭曰我法中有勝軍地藏勝敵毘舍門我造二像供修耳將軍便說二人拾矢事乃入殿見像奇瘢刀痕被其體又泥土塗脚也將軍大驚奏事帝加敬焉
按田村麻呂勇敢武毅天下古今人之所膾炙也是以屢東征討逆命殪夷賊想夫於其密謀計策亦可推識焉然察其心術之所因不過假

威力于觀音憑擁護于多門是以毎々倭佛誤僧而或建堂院或造佛軀以媚其冥福於是乎國家之耗費風俗之習弊不可枚擧焉是皆兒女子老婆子之所貴而非豪傑丈夫之所美焉烏乎其心術之拙不足以稱矣奚有益於家國耶然後世以道不明教稍廢也未知其功烈之如彼卑動自王公至庶人以爲英雄將帥之可宗之人也今極其所出之本根大概皆不外乎此何以此望名譽於將來哉且夫延鎭乾口焦舌對斯人安誕欺罔之甚及田村信而不疑也自其眼者視之則恰若嬰兒幼孩之追風蝶弄竹馬矣故於田村事實前後屢言之以戒後之庸愚云

室根權現　以下稱東磐井

在下折壁驛北山高二千丈跨折壁大原奥玉三邑曰之室嶺山有寺号室嶺山滿德寺山上有神祠元正帝養老二年九月十九日鎭守將軍從三位兵部卿大野朝臣東人之所建也今置十一面觀音像山上有慈覺護摩堂趾呼之以權現今言權現明神者蓋多正不之神也

按此神不詳祀何神今言置觀音像則易神號者明矣其他郡中多神號所安者乃佛像所司者乃浮屠役徒之輩也東人亦往昔之英豪而其所置之眞僞雖未可知若有之則其蠱惑如此胡不明于此而遺此臭名乎凡世之侯伯守牧不解其非於是乎穢神名欺民人者往々兪不覺陷無智妄作之罪焉豈可不愼哉

深山權現

在神祠東相傳花山帝正和二年壬子九月十九日奥州守護葛西刑部大輔平晴信所建也今家族千葉飛驒守胤常祭之是亦正觀音像也

剡矢明神

在針子村後冷泉帝治暦中乙巳歳義家朝臣征夷賊之時自所射矢剡々然能殪之後人建社祭

其征箭曰之剣矢神是亦實空海作觀音也

羽山權現

在同村文德帝仁壽三年癸酉慈覺作藥師佛也

幌羽權現

在幌羽村有寺号金峯山法德寺相傳安閑帝朝始祀之紀州陽成帝元慶六年壬寅飛騰來于此地土人建叢祠祭之崇德帝天治元年甲辰飛去于羽州爾後正親町帝天正十年壬午復帶光而入于神殿時藤澤城主若淵近江守秀信者新建宮社々中藏細川越中守所納緣起是亦置釋迦文珠普賢此神抑何神哉屢飛揚者實如所傳則是乃邪神也是亦後人附會年月等以迷人者可見

觀音寺　牛石工藤祐經子犬王丸所立或曰在鳥海村

在澁民村號有次山藏雲慶作觀音春日作文珠厨子上記建武二年字

舞草神社

在舞草村山稱白山嶽有寺號吉祥山東城寺平城帝大同年中田村麻呂東征之時所建是亦置馬頭觀音土人仍呼觀音堂

按舞草乃所載神明帳而聊不可混雜之宮社也刺史牧主當恐其靈威仰其神德矣然後世謾神蔑鬼易之以佛像陰竊神名而陽託社號遂使鄉黨州閭之人直稱之觀音堂併失其神去然世人蓋恬不怪神職者不能質焉是以所載延喜式之神社大半亂其眞矣其地也今所存者纔十ヶ一亦無有之偶雖存者其混汚如此是皆以神道不明人道不正而釋氏徒之輩乘其間以佛軀往々安之宮社而或假之名或竊之號遂奪其地以汚神明焉噫可歎哉有爲之侯伯有志之君子不可不言焉

妙現堂

在鳥海村嵯峨帝大同中每州建此堂其一也置彌陀藥師觀音妙見摩利支天像有古鰐口記曰

後醍醐帝元德二年己巳爾後有上梁記曰正親町帝永祿四年一曰小松帝應永四年爲鳥海筑館天狗田中川四郷鎭守也禁女婦參詣

折居權現

在中川村千葉掃部所建其所置則釋迦文殊普賢也

燈明權現

同村不詳何神且今置大日像有上棟文記曰後奈良帝天文中所建也

深山權現或曰八幡

在大原本郷有寺號慈照山八幡寺後冷泉帝治曆中義家朝臣東征之時所建也置湛慶彌陀

濁水湖

在濁沼村往昔池水汨々未嘗有清澄之日故有此號今也湖水已涸有巨石立壠中土人呼曰箱石

千廐舊址

在千廐村往昔秀衡飼馬于此馬廐地今存焉其數已及千匹故爲地名古人所謂乘心塞淵騋牝三千者可併考

彌陀堂

同村運慶作也有上棟文紀曰後花園帝永享六年甲寅正月廿六日石見入道者建之

熊野神祠

在長坂驛建久四年癸丑千葉介賴種建之

薩埵閣

在松川驛藏笙歌佛於大悲閣中有上棟文記曰後奈良帝天文十一年壬寅葛西臣横澤平重持所建也笙歌佛乃佛氏所謂二十五菩薩者是也

仙翁山

在佛坂村有寺號鷲嶺菴安善逝像運慶作也其地非凡境實地仙栖遲之地也仍號此

天衣松

同村往昔天女遊于此地掛羽衣于松上其松今

猶存

鉄五輪

在涌津八幡社中記曰龜山帝文永五年戊辰二月廿五日沙彌西信建之

花流泉

在清水村相傳秀衡煮茶之石泉也其水清冷可愛且上有花樹香風吹花則瀬湲皆紅也仍有此名

瀧門寺

在猪岡村號威光山後光嚴帝貞治元年壬寅古山良空所開也傍有小瀑布

山吹城

在大原村大原播摩守平信光其子飛驒守信茂葛西治部大夫親信二男冒其氏或曰葛西氏信胤之子也其子肥前守茂光共天正中守此城同十一年四月十九日信茂卒五十一歳同十七年十月廿三日茂光卒卅七歳長子千代竹丸相繼居此城千葉分流也天正十八年八月十四日千代竹丸自殺于深谷役時十四歳我黃門君令栗野大膳大條長三郎守其城千代竹有弟某者藤澤太郎左衛門爲養嗣共弟長親者肥後守重行養之以爲嗣子同村新山城主龜掛川三郎右衛門鳥海城主及川美濃川又城主及川長門守松山城主及川豐後天狗田城主及川新右衛門伊澤城主千葉掃部介月館城主及川隱岐清閑唐梅城主千葉刑部長坂諏訪山城主中津山三郎右衛門猪澤根城主及川遠江守金雞城主千葉遠江守兼義下折壁上折壁城主千葉右馬允中館城主岩淵兵庫頭元秀曾慶村共千葉大原家臣天正十八年八月十四日沒于深谷黨事

膽澤郡

四十九代光仁帝寶龜七年十一月庚辰發奥州軍三千人伐膽澤城

同十一年二月丁酉陸奥國言欲取船路從遣賊比年甚寒其河已凍不得通船今賊來犯故先可塞其寇道仍須差發軍士三千人取三四月雪消而水汎溢之時直進賊地因造覺鱉城（此城地今不存焉）於是勅曰海道漸遠來犯無便山賊居近伺隙來犯遂不伐攘其勢更强宜造覺鱉城得膽澤之地兩國之息無大於斯

五十代桓武帝延曆八年六月庚戌征東將軍奏副將軍入間宿禰廣成左中軍池田朝臣眞牧前軍別將安倍猨島臣墨縄等議三軍同謀並力渡河討賊約期已畢由是抽出中後軍各二千人同共凌渡比至賊師夷阿弖流爲之居有賊徒三百許人迎逢相戰官軍勢强賊衆引遁官軍且戰且燒至巣伏村將與前軍合勢而前軍爲賊被拒不得進渡於是賊衆八百許人更來拒戰其力太强官軍稍退賊徒直衝更有賊四百許人出自東山（今地名本於此）絶官軍之後前後受敵賊衆奮擊官軍所排別將文部善理進士高田道成會津壯麻呂安宿戸吉大件五百繼等並戰死總燒亡賊居十四村宅八百許烟器械雜物如別官軍戰死總二十五人中矢二百四十五人投河溺死一千三十六人裸身游來一千二百五十七人別將出雲諸上道島御楯等引餘衆還來於是勅征東將軍曰省北來奏云膽澤之賊總集河東先征此地後謀深入者然則軍監以上率兵張其形勢嚴其威容前後相續可以薄伐而軍少將軍還致敗績是則其道島等計策之所失也於善理等戰死及士衆溺死者則惻隱之情皆切于懷

同庚辰征東將軍奏你膽澤之地賊奴奥區方今大軍征詩剪除村邑余黨伏竄殺略人物云々

同七月丁巳勅征東大將軍紀古佐美等曰得今

月十日奏狀所謂膽澤者水陸萬頃蝦虜存生大兵一擧忽爲荒墟餘燼假息危若朝露至加軍軍船解纜舳艫百里天兵所加前無强敵海浦窟宅非須人烟山谷巢穴唯見鬼火不勝慶快飛驛上奏云云

同十年二月乙未授遠田押人外從五位下贈外從七位下文部善理外從五位下善理陸奧國磐城郡人也八年從官軍至膽澤率師渡河官軍失利奮而戰死故有此贈焉

同二十一年正月丙寅遣從三位坂上大宿禰田村麻呂造陸奧國膽澤城己（下日本後紀）

戊辰勅官軍薄伐闢地瞻遠宜發駿河甲斐相摸武藏上總下總常陸信濃上野下野等國浪人四千人配陸奧膽澤城

同年四月庚子造陸奧國膽澤城使田村麻呂等言夷大墓公阿弖利爲盤具公母禮率種類降（先是阿弖流者見八年之紀大墓公亦其後裔乎）

同七月甲子造陸奧國膽澤城　田村麻呂來夷大墓公二人並從

同八月丁酉斬夷大墓公阿弖利爲盤具公母禮等此二虜者並奧地之賊首也斬二虜時將軍等申云此度任願返入招其賊而鄕執論云野性獸心反覆無定儻緣朝威獲此軀師縱依申請敢還奧地所謂養虎遺患也即捉兩虜斬河內國椙山

五十四代仁明帝承和八年三月癸酉陸奧國膽澤公毛人等並借授外從五位下皆由國司褒譽也（續日本後紀）

八十二代後鳥羽帝文治五年八月二十四日以伊澤磐井牡鹿（凡三郡）賜葛西三郎淸重

同六年三月十五日使伊澤左近將監家景爲奧州刺史居宮城郡多賀峯城仍以高森爲氏焉

神名帳曰膽澤郡七座（並小）　磐神社　駒形神社　和我叡登擧神社　石手堰神社　膽澤川神社　止々井神社　於呂閉志神社

栗駒山

土人曰之神駒嶽山岳峻嶮西跨仙北東蟠奥州栗原磐井之高山而西根長澤桃園永德寺數村遶山麓也絶頂曰大日嶽其亞者曰駒形半腹有叢祠曰神馬社往古有神馬而常遊山岳死後瘞之峯頂立祠祭之故稱神馬嶽神名帳所謂駒形神社是也其山極峻至晚夏宿雪猶不消其殘雪之狀自然爲奔馬之勢而如具首尾耳鬣脚蹄之形人以爲是乃神妙之所現于此也如今望之近郊山頭則果如其言於是爲地名於歌林亦所稱山間有岩窟濶三尺高一丈長二間許內藏銅臺置馬首佛(一尺四寸)大日(一尺五寸)虛空藏一里餘而山下有往昔寺址平城帝大同中慈覺開基号滿德山寶福寺今荒廢隣大岳而有山曰赤澤山山上有鉄駒二長四寸又有鉄佛負兩翼土人曰之天狗佛其在山頭渾其山岳地形非凡境焉

夫木集　山類　くりこま山　山城又陸奥

藻鹽草　わうしう　朴木　まくら　紅葉　きし

大和物語にすゑなはの少將のむすめ右近久しう音もせてある人のきしをなんをこせたりける返しに　夫木集にわれをはかりに思ひけるかな歌枕君とはかりにおもひけるかな

くりこまの山にあさたつきしよりもかりにはあはしとおもひし物を

となんいひける

又故兵部卿のみこのほかの大納言のむすめにすみ行けるにれいのおまし所にはあらてひさしにおましˇしきてさとのこもりてかへり給ひていと久しうわたり給はさりけりかくての給けるかのはしにしかれたりし物はさなからありやとりたてやし給ふらんとなんありける返事に

しき返すありしなからの草まくらちり

のみそゐるはらふ人なみ

とある　をんな

から衣たつをまつまのほとこそは我し

きたへのちりもつもらめ

とありけれはおはしましてヌうらへなん

かりしにゆくとの給ひけれは返事に

みかりするくりこま山の鹿よりもひとりぬ

る夜そわひしかりける

六帖歌枕

夫木集

みちのくのくりこま山の朴の木は花より葉

こそすゝしかりけれ

朴木枕

同　人丸　松葉集

みちのくの栗駒山の朴の木のまくらはあれ

と君か手まくら

事無草

同

くり駒の山にはいとゝ年ふれと事なし草そ

生そはりける

同　よみ人しらす

いかて我くりこま山の紅葉はを秋ははつと

も色かへて見ん

屛風栗駒山なる人の家に女とも紅葉見る

に　よしのふ朝臣

紅葉するくりこま山の夕陰をいさ我宿にう

つしもてみむ

心月寺

在上葉場村號稲荷山往昔有富家掃部介者其妻貪婪且頗多嫉妒遂生化鬼物死乃葬于寺中後掃部介亦死寺東北有古墓存彼夫婦食盤二器方一尺二寸朱内黒外金縁又藏蟒牙二片藏古笈一荷高廣共二尺傍一尺三寸脚三寸龜

井六郎重清東行所貧者也

泉涌宅

在下姉體村此乃掃部介居宅以富潤屋如源泉涌出而曰之泉涌宅舊址今猶存

蝮蛇湖

在北葉場村掃部介妻一日飲此池水而變化鬼物忽入池中死爲蝮蛇而棲于此郷黨怖之自是毎歲以婦人而爲牲焉土人曰之蝮蛇湖

四柱址

在郡鳥村去池畔不遠一郷村落以女備牲而爲例焉軍次兵衞義實者當其備仍買一女子其名曰小夜設架于四柳樹饌之牲而俟池蛇出女子信觀音日讀大悲經此時轉讀數回以其功德而蛇蝎解獸苦脫畜身忽得佛果女子亦脫死而無恙後人稱設架地曰之四柱址同村有瘞死蛇地曰之蝮蛇塚

土人言小夜乃古稱松浦作與姫者義實買之筑紫而臻茲邦者也其所經過志田郡稻葉村有偏葉芦者按神社啓蒙曰佐與姫社在播磨國佐與郡所祭之神一座引峯相記曰肥前國松浦郡有女名松浦佐與媛大伴辰彦女大伴佐提彦妻也彼彦爲渡唐出松浦川湊于時佐與媛登松浦山正嶺遙望佐提彦船々漸去行不堪別思拔出頭巾而振之仍此山号頭巾麾山或曰佐提彦遂不歸而死于唐佐與媛聞以悲歎泣血之餘來而死此地云故祭以爲神也其說如此非奥州事蓋彼義實所買女子小夜稱呼適與此合故附會于此誇之乎猶以豐州之山路而牽合刈田之故事也讀悲經而免孔亦妄誕之甚者并蝮蛇之事而其僞妄也

鎮守八幡神社

在八幡村平城帝大同年中田村麻呂所建也藏弓矢鞭策今已亡唯存雄劍一（長一尺）一藏檀金彌陀一軀賴朝護持之佛也有緣起不足取之

東史云文治五年九月廿一日頼朝自厨川之平泉路經伊澤郡鎭守府於是親奉幣八幡宮號第二殿瑞籬是田村麻呂爲征東夷下向時所奉勸請崇敬之靈廟也彼卿所帶弓箭及鞭策納之寶庫仍殊欽仰向來可被禱奉乎云

奈良山大悲閣

在相去村仁明帝嘉祥三年慈覺所開運慶作此地往昔江刺郡地今屬之伊澤云

文覺墓

在相去驛口高雄寺文覺東行寂斯地未詳其事實

日高妙見

在鹽釜村日日高妙見嵯峨帝弘仁三年所建爾後頼義秀衡等所再興也

寺中所珍藏者多一曰本尊佛唐土挾持乃韋馱天摩利支天二曰十七佛空海書三曰聖德太子像自工四曰大日像聖德親筆五曰心經空海六曰墨畫觀音牧溪七曰假面翁慈覺八曰彌陀惠心九曰不動行光書十曰畫鷺雪村十一曰林泉圖雪舟古法眼元信十二曰黄魯直書十三曰茶碗礫茶壺共高麗十四曰螭龍角十五曰蟒牙役徒多寶院者司之

衣川

舊屬磐井郡今屬膽澤郡故依舊收之磐井郡又載之此事詳于前篇磐井郡

衣瀑布

在衣川村高七丈二尺廣十三間餘奔流爲雷碧潭染藍古人云千尋白浪轟着壁萬丈銀河舞翠巒紫色噴成三伏雪餘波流作万年深能寫來者

濯衣潭

在瀑布下土人相傳空海濯衣于此地或曰往古有仙女遊千此地曰濯羽衣于水流仍有衣川名東坡瀨玉亭詩所謂壁間青玉峽。飛出兩白龍。亂沫散霜雪。古潭摸青空。餘流滑無聲。快瀉双石硤

者是也

小松館

同村近瀑布有古壘址永承之役貞任叔父官照者所守也

康平五年八月源頼義將兵分七隊攻小松柵其兵所謂武貞貞頼秀武頼貞麾下及武則武忠武道等也深江是則大友員季亦率敢死兵二千力戰于宗任八百騎官兵殆危也清原武道以奇計迎擊大敗之宗任逃走頼義遂拔小松柵

同年九月貞任伺官兵少率精兵八千攻小松柵武則敗之貞任走衣川

月山社

同村後土御門帝文明十七年建之上棟記曰文明十七年田野勘四郎者所立也（或曰長治中清衡所建也）

石神

同村高六尺有雌雄石郷人以爲神祭之有寺號荷石山松山寺是亦文明三年辛卯三月僧鉄牛者所開也

雲際寺

在同村仁明帝嘉祥中釋巨岳者所開其寺院往昔在午局山仍號午局山雲際寺今改明光山雲際寺中有義經牌子曰義經通山公

輝井屯地

在衣川以西白虎山東泰衡家臣輝井太郎高直張屯地也

善逝堂

在上衣川村仁明帝嘉祥中慈覺所建也

霧岳絶頂

在同村往昔夷賊潛居之地常往來于達谷以爲姦惡東西有不測之壑南則層巒入雲北則崎嶇窈窕長川曳練曰之麻衣川山頂平夷斷岩千尺容易不能登焉故曰之霧山絶頂山下多窟洞可容數百人而猶有餘皆往昔夷賊姦黨所竄之地也

酢川岳

跨奥羽兩境西北大岳也有溫泉杜詩曰西丘崚嶒竦處尊諸峯羅立似兒孫安得仙人九節杖拄到玉女洗頭盆車箱入谷無歸路箭括通天有一門稍待秋風涼冷日高尋白帝問眞源者是乎

清和帝貞觀十五年六月己未授溫泉神從五位下

白鳥古館

在白鳥村安倍頼任第八子白鳥八郎行任居館也天正中岩淵伊賀守者居之

小山古館

在小山村伊澤大森城主樫山伊勢守子九郎者居所也

永澤城

在加澤村九郎弟五郎者居之

劍池

在永德寺村有寺号報恩山永德寺後光嚴帝延文中僧道溲者所開有釋迦像唐作也藏雄劍長八寸號分浪三條小鍛冶宗近作也往昔有火災古劍自脱匣飛入于寺前池中爾來稱分浪劍池曰劍池

山田氏墓

在下衣川村此地往時乏溝洫憂旱魃有年於茲郷有山田次右衞門者有高志平日以善行所稱見一郷每歲苦炎天欲引衣川河流而灌之田畝郷黨會言先是有行之者必死于神祟焉彼曰豈有鬼神而疾救郷患之義哉若有其神爲祟則請受之以代郷黨而死強引之用溝洫而無恙自是年々致秋成次右衞門沒後一郷感其志立碑志以祭之其志曰

膽澤郡下衣川邑山田次右衞門者本江刺郡黒石邑之產也瘠土溝洫乏而近村常懷旱魃之憂雖行於衣川之流民俗稱有鬼神之祟遂不果焉山田氏懷如傷之思有年一朝憤起而誘水流開溝洫于時寛文三年之秋也超年而土功成發枝

奏之悦敢無爲鬼神之祟延寶元年秋九月十六日山田氏行年五十八年而歿然後玆年七周年也村民至今終不能忘其勞記事實刻碑希遺於後世云

延寶七年九月十六日　桑名松雲誌之

按夏樂只西湖覽勝志曰桃花港其上爲石堰橋閘水以防杭民之旱者俗語云放湖水一尺可救杭田萬畝蓋湖流皆從是港而出居民賴之想夫山田氏有利鄕黨而有補後世者相同桃花港益于杭民矣故附于此

江刺郡

神名帳江刺郡一座小　鎭岡神社

門岡大悲閣

在上門岡村去窟堂二里半有大山曰國見山山陰乃南部封疆也有悲閣是乃慈覺所開也

稲瀬津渡

門岡男山々下相去村渡口也如今津渡非舊時之地古渡乃去河流而有村落曰樓鐘宅是古之渡口也土人所傳有西行歌考山家集不見其歌

西行法師

みちのくのかとおか山のほとゝきすいなせのわたりわけてなくらん

黑石精舍

在黑石村其山高峻其徑峻沮石徑磊落其石多黑色如漆是以爲地名好人用之硯石々印有寺号大梅拈華山圓通正法寺光明帝貞和二年釋道元六世無底良韶開基也其地備七堂伽藍以

越前吉祥山永平寺能登諸岳山總持寺並此地爲曹洞三區本寺
佛殿安如意輪像長一尺八寸佛工春日所造釋迦文殊普賢當廡作客殿彌陀如意輪安阿彌作有影堂鐘樓天井蟠竜狩野氏所畫建白山熊野山神愛宕黒石明神小社以爲鎭守寺前有古梅樹横斜蟠根尤可愛
寺院多珍藏愛染長一尺五分毘首羯摩作釋迦左右十六羅漢雪舟飛龍觀音雪村觀音左右山水牧溪開山自畫像贊 後光嚴帝宸翰 宮野法印墨迹 虚堂書 龍虎畫藝阿彌 花鳥二軸 龍虎梅竹共亡名氏 夢想靈石 墨迹二
唐板古文金剛經二 紺紙金泥法華經一部
藕絲袈裟 七寶香爐 古銅香爐桃寶 古銅龜鶴香爐三具足燭臺 玻璃水器 七寶花瓶
唐風呂釜 唐鉢 青磁皿 古筆書畫 茶竈
法螺 玻璃茶碗 龍子 聖賢扇 拈香板二片
香合 柱杖 拂子
山中多佳境 花立坂寺院西北十町餘 蓮臺岩寺西七八里峯頭有石蓮華其石畫白石英 瑞鹿墓寺西一町餘往古有白鹿常迎良詔相馴 長江流寺前碧流 黒石岩寺西北三里餘有巨石其色黒如漆 菩提坂寺西北二里餘 靈犬塚寺前以南一町餘塋開山所蓄犬 蛇形石在佛殿前形勢似伏蛇 瑞鳥峯靈犬塚南有古杉三法鳥常啼 水晶山寺南五里餘山上多水晶所謂白石英 怪石嶺山坂多異石 老婆杉寺畔有古杉不詳幾星霜根圍三丈

善逝堂

在同所有寺號妙見山黒石寺有堂曰山中藥師
平城帝大同中所建堂宇坊舍飛騨内匠斧斤也
五間四面木佛坐像慈覺作
院中有珍藏 藥師八軀慈覺 地藏同 不動十軀
聖觀音共雲慶 日月光菩薩 十二神將 株作

観音　賓頭盧　観音　鬼子面二 慈覚

龍門瀑布

黒石 在黒石驛口有寺號龍門山藤春院

大悲閣

同村號遮那王山長谷寺慈覺所開佛像長五尺
運慶所作也

黒田助 大悲閣

同村有寺號黒田山千養寺千手像長六尺慈覺
作開基亦同

羽黒權現

在羽黒堂村有寺號羽黒山千手院有古銅観音
開基亦同

刀八毘沙門

在淺井村有寺號用明山智福寺多門像七尺餘
是亦斧斤開基同前

巖谷堂毘沙門

在片岡村有寺號岩谷山多門寺開基造作亦同

寺中藏鈴木三郎重家笈

重染寺

同村有寺號岩谷山重染寺鈴木三郎父重保爲
重家建之有古石墳土人其山稱重染山

角掛 大悲閣

在角掛村有寺号大森山大林寺嘉祥中慈覺所
開安十一面長七尺運慶作也

玉崎大悲閣

在汶丸村有寺號玉崎山玉泉寺開基亦同前安
十一面長六尺運慶作也今已亡

北山観音閣

在下口内村号金寶山盤藏寺安千手馬頭十一
面三像開基造作共慈覺有上梁文記曰當山千
手堂嘉祥三年庚午叡山三世慈覺所開有額長
三尺廣一尺其文字曰水月道場是亦慈覺所書
篆字也往昔藏大般若經存者已二百七十卷今
像運慶所作也

青溪悲閣

在輕石村嵯峨帝弘仁二年慈覺所建也寛文四年僧惠鑒者再興之題一偈曰

善哉示現普門境三十三身恒互融山色巍々裂妙相溪聲瀝々演心空應機端坐晴林外擁物來鑑荒草中將謂馬郎看不見金沙灘上月圓通

男兒石

同村高九尺曠四尺五寸厚八寸碣首題圓相有延文六歳大歳辛丑十月二日孝子敬白十六字

延文後光嚴帝年號改元康安

女子石

長四尺廣三尺號鳴聲石撃之則爲聲如鐘古昔石畔有悲閣曰鳴石觀音今已亡兩區不詳事實傍有寺號音石山西光寺珍藏古畫羅漢十六軸

國見大悲閣

在下門岡村有寺號金福山頂岳寺仁明帝嘉祥三年慈覺所開神宮佛宇頗多僧房已七百餘宇山頭安十一面慈覺作今已亡爾後改宗于眞言稱國見山極樂寺所存僅五字土人曰國見山

毘沙門堂

同所有寺號國見山滿福寺堂乃飛驒工所造像慈覺作脇持二天倶梨伽羅運慶作山下有獨鈷泉是亦慈覺所穿也

釋迦堂

同所是亦慈覺開基釋迦文殊普賢共坐像運慶作寺中藏慈覺文字有六大無碍覺月生死長夜五相三密念覺無明眠十九字不可曉

大悲像

在同村安樂寺隱岐院護持之像也

斯地有佳境其西南　口吸峯　瘴癘坂　妻神溪　男岡山　女溪口　滴岩　葛覃嶺　圓峯巒　歩方岳　寶塔山　其東北　戸木峯　別離壇　畵屏岩　午玉山　珊瑚嶽　拄杖泉　劍潭

在川谷村往昔得雄劍于潭底長可一尺今藏之役徒家今也水涸流絶潭亦亡

豐田古館

去窟堂十餘町在餅田村東西五十七間南北三十九間安倍頼時之婿亘理權大夫經清居城也貞任亡滅後移居于平泉康平中經清亦戰死其子清衡二歳與母爲虜頼義朝臣令其母再醮之羽州清原眞人武則生二子武衡家衡是也與清衡爲異父兄弟焉先是武則令荒川太郎武貞繼其家武則爲奥羽採題職東武貞及其子眞人眞衡繼荒川家時武衡家衡恨其甥眞衡據仙北金澤城反王命義家朝臣奉勅攻之眞衡勤王師其子小太郎成衡戰死于此役於是以兩國守護職附之清衡（是時稱御館權太郎）以不與異父弟也賞之以奥六郡依舊卜居此城繼實父墟後徙平泉者也

東史曰頼朝卿問奥羽故事於豐後介實俊對曰昔泰衡高祖父藤原清衡以繼父荒川太郎武貞後領伊澤加美江刺稗枝志波磐手六郡卜居于江刺豐田城康平後相攸遷平泉基衡秀衡相繼至泰衡亡滅云

高水寺址

在豐田館卯寅今廢

東史曰頼朝卿猶逗留蜂社其邊有寺曰高水寺稱德帝勅願所有一丈觀自在菩薩鎭守乃走湯權現小社乃道祖神清衡所勸請也社後有大槻以射雙鏑箭祝之還

白旗池

同所頼義立白旗而飲馬于池畔後人爲地名

古戰場

在片岡村康平中官兵屯地接兵處也

掛角松

在角掛村往昔筑紫產菊池四郎兵衛者住于此携一白鹿常遊松下有時其鹿掛角于松枝而睡地名出于此小松帝應永三十年僧正岩者開寺

日瑞德寺

今閲江剌郡中所在堂舍寺院凡二十宇其間慈覺開基者十四區其餘每郡頗多雖佗方亦僉且所安像亦大半自所造胡奚如此夫多耶慈覺之學術於其廣才博智者元無間矣唯所好所能者開基造佛以極巧著妙而驚人劫俗者不知天下其幾千萬數也弘法亦僉考兩漢半日之事業往來諸國經歷于海內汲々遑々脚底未伸尻跡未煖不奔走于東方則或西不驅馳于南方則劫北其中經營造作殆遍於天下矣執斧而手稍疲舉刀而指已屈一生區々役々于索隱行怪之中而何遑試阿字念止觀之工夫熟乎此哉然王公大人及士大夫及凡陋卑俗不解此義凡聞大師之號則妄恐見二僧之術則大崇不辨眞僞不擇是非皆雷同僞之醜焉言其由則所以出世教不明人道不正王公信之士庶崇之而至此極也今及見開基造作之多忽有歎于此而聊質其弊焉豈疾其固而遑非議者耶識者辨之

奧羽觀蹟聞老志卷之十 終

奥羽觀蹟聞老志卷之十一　上

仙臺　佐久間義和著

名稱類外集

此篇在吾太守封疆之外得稱名地勝蹟者復釆古歌及諸家之説輯備參考矣然以地理方隅之不詳而未遑盡分郡縣村落云

伊達郡

阿津賀志山　事迹考作厚樫山

在貝田驛東光明寺村邊事詳刈田嶺門下

東史曰後鳥羽帝文治五年七月十九日頼朝卿帥數千騎發鎌倉赴于陸奥國欲征藤泰衡也泰衡搆要害于前途以異母兄錦戸國衡將二万兵守伊達郡阿津賀志山搆五丈湟于阿津賀志國見宿間澱逐隈河流令金剛別當父子將千餘騎以拒幕下

國見澤

國見山尤大高山聳路西其下乃國見澤也國見宿者乃今貝田是也

同年八月七日頼朝卿到伊達郡國見澤

葛松原

在桑折驛西松原村北或曰笠石松林也

夫木集　西行法師

よの中の人には葛の松原とよはるゝ名社うれしかりけれ

阿武松原　一作逢松林

在桑折驛東南宮崎村正東

皇后宮にて人々戀歌つかふまつりける時よめる

金葉戀下　太宰大貳長實

みちのくのおもひしのふに在なから心にかかるあふのまつはら

あふの松原陸奥　又はりま　又つくし

夫木集　正三位季能卿
はりまかた恨ても猶たのむとや末にありて
ふあふの松原

抑關
在桑折驛北泉田村西南謂之繁絍山山下乃往
昔關址也
家集關路歸雁　おさへの關陸奥
夫木集　源仲正
雲路にもおさへの關のあらませはやすくは
雁のかへらさらまし
同　よみ人しらす
稀に來て戀もつきぬにいそきゆく人をおさ
への關もすへなん

抑池
繁絍山下有池塘是乃抑池也　右兩區在玉造郡同名事詳其下
題しらすみちのく　よみ人しらす
おもへとも人目をつゝむなみたこそおさへ
の池となりぬへき哉

憩休松
在貝田驛西往昔實方中將東行倚此松根而憩
息之地也古松猶存

下紐關　伊達大木戸
在貝田驛西南國見山下往古有關門禦人土人
曰之伊達大木戸
新續古今　左大將公名
立かへり又やへたてんこよひさへ心もとけ
ぬ下ひもの關
六百番　季經朝臣
あひ見しと思ひかたむる中なれやかくとけ
かたき下ひもの關
橘爲仲朝臣みちの國の守にてくたりける
に太皇大后宮の大盤所よりとてたれとは
なくて
詞花別　太皇大后宮甲斐

東路の遙けき道を行めくりいつかとくへき
したひもの關

新後拾遺戀一　大中臣能宣

現とも夢とも見えぬ程はかりかよはゝゆる
せ下紐の關

信夫郡 一作篠生

先代舊事本記曰信夫國造志賀高穴穗朝乃十二代御世阿支國造同祖久志伊宇命孫久麻直定賜國造

天皇本記二十三代清寧帝五年二月天皇詔以物部木蓮子連遣東海陸奥諸國分大國出州分大郡出縣自陸奥出津輕會津篠生出羽定撩國造規荒縣主別紛宮田首田分別弗憎屯倉至此御代國事分明

天孫本紀猿田彦大神奉兩命即考歷勲背御矣將八十武神發於五瀬國踏動八雲路光耀鳴震以至於篠忍岡

四十四代元正帝養老二年夏五月乙未割信夫等五郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥國信夫郡人外正六位上文部大庭等賜姓阿部信夫臣同郡人外從八位下吉彌侯部足山等七

人賜姓上毛野鍬山公同郡人外初位上吉侯部
廣國賜姓下毛野靜屈
五十代桓武帝延暦元年五月乙酉陸奥國人外
大初位下安倍信夫朝臣東麻呂等獻軍粮授外
從五位下
五十三代淳和帝天長七年十月己未山階寺僧
智典造建陸奥信夫郡寺一區名菩提寺預定額
寺例
五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未陸奥國信
夫郡擬主張大田部月麻呂賜姓阿倍陸奥臣
神名帳曰信夫郡五座大一座小四座　鹿島神社
黒沼神社　東屋沼神社名神大　東屋國神社
白和瀨神社
歌林良栽にみちのくの信夫郡にもちすりと
てかみをみたしたるやうにすりたる物をし
のふもちすりといふなり
千載集右大將兼長春日の祭の上卿に立侍け
る供に藤原の範綱か六位に侍けるにしのふ
すりの狩衣をきせて侍ける
東史曰藤基衡賻信夫毛地摺千端于佛工雲慶
云
故事談神社部云宗形宮内卿入道師綱陸奥守
にて下向の時基衡押領一國如無國威仍奏聞
事由申下宣旨擬撿任國中公田之所忍郡者基
衡藏之先先不入國使而今度任宣旨擬撿任之
間基衡件郡地頭犬莊司季春に合心して禦之
國司猶帶宣旨推入之間已に放火及合戰畢守
之方被疵者巨多基衡かくはしつれ共背宣旨
討國司事依恐存招季春云依無先例難追返國
司背宣旨之條非無違勅之恐いかゝすへきと
云云季春云今仰は兼而皆存知事也主君之命
依難奉背於一矢者射候畢然者君者不知食之
體にて已れか頸を召可被進國司之許也其上
は定無爲に候歟云云基衡乍拭涙諸して基衡

か於守云基衡一切不知事候郡地頭凡俗無先例白山之狼藉候於今者不及子細季春すてに召取畢早賜御使於其前可刎頸云云依之國司遣撿非違使所目代季春已持出たり四十餘計の男肥滿美麗なるか積を雁水干小袴に紅葉を着たり打物取たる者二十人計圍遶之切手は氣仙の彌太郎と云者也出立擬切額之間大莊司云切損給な刀は何れと問けれは切手云日比次郎太夫が大津越そと云けれは扨は心安しといひてきられけり部類五人同切之大津越とは人を引すへて切るに左右の臂のうへを中骨不懸切を云也基衡季春を惜て我は不知之樣にて猥に搆女人之沙汰之體再三遣妻女を國司館乞請させけり其請料物凡不可勝計沙金も一萬兩と云云守不聽之遂切畢云云。

一日讀故事談得信夫郡大莊司季春忠死之一事慨然泣血如雨嗚呼季春眞之忠臣也基衡又何心耶欲免己之罪惡而行一不義殺一不幸於己則苟偸生免死而安顏厚焉不義無道孰甚焉宜哉子孫遂爲烏有赤其族也然季春之忠死世未嘗知之唯無沒于册子中於是甚恨之然幸其事實在此書擧之以旌彼忠誠于世識者念茲

藻鹽草第二時節部云奥州信夫郡には今年のこもを刈りてかりやをつくりてふきはしめそのゝちこもをかると云

按此地產黃鷹見能因歌

信夫

女のもとにまかりたるにはやかへりねとのみいひけれは　よみ人しらす

後撰戀三

つれなきをおもひしのふのさねかつらはてはくるをもいとふなりけり

皇后宮にて人々戀歌つかうまつりけるに
よめる　　　太宰大貳長實
金葉戀下
みちのくのおもひしのふにありなから心に
かゝるあふのまつはら
千載戀一　　　大中臣定雅
我床はしのふのをくのますけ原露かゝりと
もしるひとそなき
新古今秋上　　　前右大將賴朝
みちのくのいはてしのふはえそしらぬかき
つくしてよ壺の石文
續拾遺戀一　　　爲家
いかにせむ戀ははてなきみちのくのしのふ
はかりにあはてやみなむ
玉葉戀一　　　家隆
いかにしてゆきてみたれんみちのくの思ひ
しのふのころもへにけり

同　　　源三位行能
身にあまるおもひやそらにみちのくのしの
ふかひなく立けふりかな
新千載秋上　　　從三位爲子
秋かせにみたれにけりな陸奥のしのふには
あらぬ萩か花すり
夫木　　　能因法師
陸奥のしのふのたかを手にすへてあたちの
原をゆくはたか子か
續古今　　　中務卿親王
みちのくのしのふのおかの冬こもりかりに
もしらしおもふこゝろを
信夫奥
千載戀一　　　大中臣定雅
わか床はしのふのをくの眞菅原露かゝりと
もしる人のなき
千五百番歌合に

續後撰戀一　前大納言忠良
跡たえぬ誰に問ましみちのくの思ひしのふ
のおくのかよひ路
文治三年百首歌の中に
新後撰春下　定家
尋はやしのふのおくのさくらはなかせにし
られぬ色やのこると
治承二年太政大臣家歌合
夫木春　俊成
惜きかなたれかきくらんみちのくのしのふ
のをくのうくひすの聲
論三種菩提心行影心
同尺敎　西行法師
おもはすはしのふのおくへ來ましやはこえ
かたかりし白河の關
六百番歌合　家隆
おもひやる心はくゑの嶺こえてしのふのお
くをたつね入らむ
行意
陸奥のしのふの山のおくとてもおなしけふ
こそ春は立らん

信夫山
福島驛北突兀峯巒是所謂信夫岳也上建羽黒
權現神祠群山相峙層嶺相連
むかし陸奥國にてなてうことなき人のめ
にかよひけるにあやしうさやうにてもあ
るへき女ともあらす見えけれは
新勅撰戀五載之詞書みちのくにゝまかりて女につかはしけると有之
伊勢物語第十五　業平朝臣
しのふ山忍ひてかよふ道もかな人のこゝろ
のおくも見るへく
暮聞郭公といへるこゝろをよみ侍ける
千載戀　二品法親王守覺
ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山夕ゐる雲

のそこになくなり

同戀二　　　　　　　　　　祝部成仲

君戀ふる涙しくれと降ぬれはしのふの山も
色つきにけり

同　　　　　　　　　　三條院前常陸

いかにせむしのふの山の下紅葉しくるゝま
ゝに色のまさるを

春日社の歌合に落葉といふことをよみ奉
りし

新古今冬　　　　　　　　　七條院大納言

はつしくれしのふの山の紅葉はを嵐ふけと
はますや有けむ

忍戀のこゝろを

同戀二　　　　　　　　　　清輔朝臣

人しれすくるしきものはしのふ山下はふ葛
のうらみなりけり

和歌所歌合に忍戀のこゝろを

同　　　　　　　　　　　　雅經

きえねたゝしのふの山の岑の雲かゝるこゝ
ろの跡のなきまて

千五百番歌合に　　　　　通光

限りあれはしのふの山の麓にも落葉の上の
露そ色つく

刑部卿頼輔歌合し侍けるによみてつかは
しける　忍戀

新勅撰戀一　　　　　　　俊成

いかにしてしるへなくとも尋みんしのふの
山のおくのかよひ路

同雜四　　　　　　　　　寂蓮法師

しのふ山木の葉しくるゝ下草にあらはれわ
たる露の色かな

洞院攝政家春百首歌に忍戀

續後撰戀一　　　　　入道攝政左大臣

道絶てわか身にふかきしのふ山心のおくを

しる人もなし
題しらす
續古今冬　中納言
冬さむみしのふの山の谷水は音にもたてすさそ氷るらん
同戀一　定家
戀わひぬ心のおくのしのふ山露もしくれも色に見せしと
寄雲戀といへるこゝろを
續拾遺戀一　高階家成
いはてのみしのふの山にゐる雲や心のおくを猶へたつらむ
新後撰秋上　寂蓮法師
おもひあまる心の程もきこゆ也信夫の山のさをしかの聲
同戀一　兵部卿有敎
我ならぬ忍ふの山の松の葉も年經て色に出るものかは
同三　光俊朝臣
しのふ山岩根の枕かはす共下ゆく水のもらさすもかな
續千載夏　皇后宮
たつねはやしのふの山のほとゝきす心のおくのことやかたると
同秋下　關白内大臣
露しくれいかにみちてかしのふ山木木のこのはの色に出らん
光明峯寺入道前攝政家の三十首歌の中
同戀四又續後拾遺　山階入道左大臣
恨ても戀ても露そこほれけるしのふの山の葛の下かせ
同雜下　前大僧正良覺
我なから心の海も見るはかりしのふの山に宿もとめてむ

新千載戀一　典侍親子朝臣
つらからむ心のおくは見てもうしよしやしのふの山の通路

同雜上　源頼遠
誰になをしのふの山のほとゝきす心のおくのことかたるらむ

新拾遺戀一　土御門院小宰相
もらすへき隙こそなけれ忍ふ山しのひてかよふたにの下水

同　兼好法師
しのふ山又ことかたに道もかなふりぬるあとは人もこそしれ

同　俊成
人しれぬ思ひしのふの山風に時そともなき露そこほるゝ

同三　權大納言宣明
此暮も音になたてそ忍ふ山心ひとつの嶺のまつかせ

建保三年名所三百首　定家
新後拾遺春下
岩つゝしいはてや染るしのふ山心のおくの色をたつねて

貞和二年百首歌　前大納言爲定
同戀一
通ひ路のなきにつけてそ忍山つらき心のおくは見えけり

同　明魏法師
しられしな忍ふの山の初しくれ心のおくにそむる紅葉は

同　前大僧正義運
行かよふ心あれはとなくさめていとゝしのふの山の下みち

同　前大僧正滿意
隙そなきしのふの山の夕時雨いはて年ふる

袖のなみたに

同　俊成

尋いらん道もしられぬ忍ふ山袖はかりこそ
しほり成けれ

左兵衛督直義

うちとくる心のおくも見えぬ日にしのふの
山そへたて成けり

名所百首歌合　順徳院御製

都には花もちりあへすみちのくのしのふの
山は春風の頃

同　家隆

人とはぬ軒のしのふの山の端にその色とな
く春雨そふる

建久二年左大将家歌合鳥部　定家

しのふ山あたちのおくにかふわしのそのは
はかりや人にしらるゝ

藻鹽草鳥部三山の鶯

忍ふやまこさはのおくにかふわしのその
羽はかりや人にしらるゝ
跡見えてきりふにのこるえくひにそとや
なるわしの人をしもしる
またはよにはねをならふる鳥もあらし上
見ぬ鷲の雲の通ひち

御集

夫木集　中務卿みこ

しのふ山霞の内のうくひすも人にしられぬ
音をや鳴らん

同　歌枕俊成卿女　皇大后宮大夫俊成

をのれのみ春とやひとりしのふ山花にこも
れるうくひすのこゑ

建保三年名所百首

同　順徳院御製

なけやなけしのふの山のよふこ鳥つゐにと

まらぬ春ならすとも

同

同　正三位家衡卿（松葉集定家）

しのふやまみたれて花はほころひぬ限しら
れぬ匂ふはるかせ

同

同　正三位知家卿

歸るかりおしむ心のおくもしれしのふの山
に道をたつねて

同　従三位家隆卿

春ふかき忍ふの山の岩つゝしいはねと色に
しるき頃哉

百首歌思絶戀しのふ山　信夫郡

同　民部卿為家

人しれす通ひし跡はしのふ山しけりはてた
る道芝のつゆ

古今詞百首

同　隆祐朝臣

うへに見ぬ思ひの色のした染にたゝにしの
ふの山のくちなし

建長七年顯朝卿家千首歌合寄梨戀

同　信實朝臣

戀ふるまはくるしき物をよの中にあはれし
のふの山なしもかな

千五百番

同　参議雅經卿

たつねはや五月こすともほとゝきすしのふ
のやまのおくの一聲

文治六年五社百首照射

同　皇太后宮大夫俊成

ますらをは鹿に心をかけつゝやしのふのや
まに夜をあかすらむ

同　従三位家隆卿

ともしする人やしるらん忍ふ山しのひてか

よふおくのおもひを

寶治十首歌合　忍久戀

同　山階入道左大臣

したにのみ忍ふの山のいはこすけいはてお
もひの年そへにけり

洞院攝政家百首

同　俊成卿女

はかなしやしのふの山のゆふけふりきえな
む後のあとのしら雲

平政村朝臣

秋來れは忍ふのやまに鳴鹿も人にしられぬ
妻やこふらん

文治二年百首　前中納言爲家卿

しのふやますそ野の薄いかはかり秋の盛を
おもひわふらん

千五百番　寂蓮法師

思ひあまる心の程も聞ゆ也しのふの山のさ
をしかの聲

元文六年小野宮歌合忍戀

同　従三位家隆卿

谷川のこほるにつけて忍ふ山猶うき物は松
のゆふかせ

寶治十首歌合

同　大藏卿有家卿

我ならぬしのふの山の松の葉も年へて色に
出る物かは

歌枕　家隆

歸る雁惜む心のおくもしれしのふの山に紅
葉たつねて

拾玉　慈鎭

いかにせむ忍ふの山に跡たえて思ひいれと
も露けかるらん

いかにせむ忍ふの山をこえかねてかへるみ
ちには又まよひぬる

定家

戀詫ぬ心のおくの忍ふ山露も時雨も色を見せしと

家隆

玉吟

ちらすなよいくえもつゝめ春霞しのふのやまの花の木末は

範宗

建保百首

春深き忍ふの山の岩つゝしいはねと色にしるきこゝろを

康光

しのふ山嶺のさくらやちりぬらんふるすにかへる谷の鶯

兼宗

六百番歌合

戀ゆへに憂世をすてゝかくれなはしのふのやまや住家なるへき

隆信

夢をたにまたふみも見ぬ忍ふやまふかき戀路をいかて尋ん

信夫里

友則かむすめみちの國へまかりけるにつかはしけり

藤原滋幹女

後撰別

君をのみしのふの里へゆくものを會津の山の遙けきやなそ

橘爲仲朝臣

新古今秋上

あやなくもくもらぬよひをいとふかなしのふの里の秋の夜の月

西行法師

新勅撰戀一

東路のしのふの里にやすらひて名社の關をこえそわつらふ

俊成卿女

續後撰戀一

いかにせむ忍ふの里に跡たえておもひ入とも露のふるさを

爲氏

新後撰夏

いまは又しのふの里の忍ふにもあらぬさつきのほとゝきす哉

續後拾遺戀一　八條院高倉

いはぬまは人こそしらねみちのくのしのふの里にしめは結てき

新千載戀一　後醍醐院御製

うかりける忍ふの里のしるへ哉かよはぬ中にまよふちきりは

後九條内大臣家歌合秋曉望　奥しのふの里陸

夫木集　從二位家隆卿

有明の月の光も鳥の音もえやはしのふの里の秋かせ

寶治元年百首

同　兵部卿隆親卿

徒に露やおくらん人しれすしのふの里のおくの篠原

同　慈鎭

夏の夜の月は清見か關に見る秋はしのふの里に詠めむ

光臺院十二首

同　前中納言定家卿

時鳥しのふの里にさとなれよまた卯花の五月まつころ

正治二年百首歌

同　權僧正公朝

みちのくのしのふの里の秋風にもちすり衣打もたゆます

百首歌　里盧橘

同　隆祐朝臣

おもひやる昔も遠きみちのくのしのふの里に匂ふたち花

家五十首

同秋風抄　光臺院入道二品のみこ

色ふかく誰もしのふの里の名を山ほとゝき

すなく〳〵そとふ
　　　　　　　　　　光俊
里の名も忍ふときけは山吹の花さへいはぬ
色に出ける

信夫森 森一作杜

藻塩草わうしう ほとゝきす 納涼 よふことり 下草 紅葉 しくれ

しのふ名にそへて

女にしのひてかたらふこと侍けるをきこ
ゆる事の侍けれはつかはしける
　　　　　　　　　　左兵衛督隆房
いつくより吹くるかせのちらしけむ誰もし
のふの杜のことの葉

中納言行平いゑの歌合に

新勅撰恋　　　　　　よみ人しらす
住里はしのふの森の時鳥此したこゑそしる
へなりける

続拾遺恋四　　　　　順徳院御製
ことのはも我身しくれの袖のうへにたれを
忍ふの杜のこからし

新後撰恋一　　　　　前関白太政大臣
しられしなさてもしのふの杜の露もれてな
みたのそてに見えすは

続後拾遺恋一　　　　為氏
ちらはうしゝのふの杜の下紅葉おもひかね
ては色にいつとも

新拾遺恋一　　　　　義詮
露も先色にやいてんおもふともいはてしの
ふのもりの下草

同　　　　　　　　　法橋東承
しられしなしのふの森の下草に置そふ露は
結ほゝる共

同　　　　　　　　　尊円親王
ちらすなよしのふの杜のことのはに心のお
くの見えも社すれ

新後拾遺夏　　順德院御製
なけやなけ忍ふの杜のよふこ鳥つゐにとゝめむ春ならすとも

　　後照香院關白
つゝみえぬなみたなりけり時鳥聲をしのふの杜のした露

同秋下　　藤原行房朝臣
たつねはやしのふの杜の夕時雨いかにそめてか色にいつらん

同雜上　　前中納言家兼
ほとゝきすをのかさつきの頃たにも何と忍ふの杜になくらん

　　顯昭
すゝしさを楢の葉風に先たてゝしのふの杜に秋や來ぬらん

　　國親
いつしかとしのふの杜のしのすゝきひもとく秋に成にける哉

信夫浦

藻鹽草奥州　人めやくしほあまのたくなはあみ　人しれぬけふりくしのふにゆふけふりをくはあまのもしほ火

　　千五百番歌合に栲繩

新古今戀二　　二條院讃岐
うちはへてくるしき物は人めのみしのふのうらの海士のたくなは

　　歌合しけるにたひのこゝろをよめる

同旅　　入道前關白
日をへつゝ都しのふの浦さひて浪より外の音つれもなし

燒鹽

新勅撰戀一　　家隆
人しれすしのふのうらにやく鹽の我名はまたき立煙哉

續後撰戀二　　同

尋はやけふりを何にまかふらん忍ふの浦の
海士のもしほ火

續千載戀一　　源　兼氏
人めのみしのふの浦にをく網の下にはたえ
す引こゝろかな

續後拾遺戀　　前大納言經繼
ひとしれす忍ふの浦による浪の名に立へし
と思ひやはせし

新千載戀一　　式部卿恒明親王
しらせはや信夫のうらの筌の緒の思ひたゆ
たふ心なかさを

正三位隆教
いかにせむしのふの浦の興津風かけても袖
の色にいてなは

新拾遺戀一　　邦世親王
人しれぬしのふの浦の夕けふり思ひたつよ
り身はこかれつゝ

建長六年歌合信夫のうら
夫木　　雅光卿
おもひつゝいくとせ浪に朽ぬらん信夫のう
らの海士のたくなは

百首歌合五首中
同　　藤原爲顯
ひとしれす昔しのふのうら千鳥友なふ跡に
音こそなかるれ

弘安元年百首　　法印定圓
ふみそめて今も忍ふの浦千鳥あとつけなみ
やこゝろあるらん

御集　　後鳥羽院
きのふまて信夫のうらの秋の風けふあらは
れて浪もよせけり

信夫原 或作二信夫河原一
歌枕裏書云今按二考萬葉第七一曰問答
佐保河爾鳴成智鳥何師鴨川原乎思努比益河

上
人社者意保示毛言目我幾許師奴布川原乎標
結勿謹
此歌只寄河原戀慕之心歟歌枕原部立之條如
何但家隆卿八條院高倉里歌以此本歌詠標結
可思之
洞院攝政家の百首にしのふ戀をよめる
續古今戀一　　家隆
人めのみしのふか原にゆふしての心のうち
に朽やはてなむ
夫木集
御集原上露しのふかはら　陸奥
後一條入道關白
新拾遺秋上　岡屋入道前攝政
あらはれて露やこほるゝみちのくのしのふ
かはらに秋風そふく
百首歌奉りし時しのふ戀

新後拾遺戀一　源守法親王
なとり川音になたてそ陸奥のしのふか原は
つゆあまるとも
信夫伏拜
今福島河南坂也前篇信夫河原乃是也下見萬葉歌
藻鹽草夫木六帖　信實朝臣
みちのくのかものかはらの伏拜みふるきの
あふち蔭もなれにき
古歌集中問荅詠鳥歌重出
人社者意保爾毛言目我幾許師奴布川原乎標
結勿謹
信夫渡口
みちのをくへまかりけるにしのふの郡と
いふ所にはやう見し人を尋ければその人
なくなりけるときゝて
後拾遺雜一　能因法師
あさち原荒たるやとは昔みし人をしのふの

わたりなりけり

信夫岡　河内或武藏

　草花をよめる

續古今秋上　　　　　　　　　　　　俊恵法師

何事をしのふの岡のをみなへしおもひしほ

れて露けかるらん

　堀河百首しのふの岡　陸奥

夫木岡　　　　　　　　　　　前齋宮河内

しほるとも知人もなき袂かな是やしのふの

おかの陰草

　つゝしを

同　　　　　　　　　　　　　頼圓法師

何事をしのふの岡の岩つゝしいはて思ひの

色にいつらん

　戀の歌中　　　　　　　　　源　季茂

ひとめのみしのふの岡の眞葛原いつあらは

れてうらみそめまし

拾玉　　　　　　　　　　　　　慈鎭

我戀はしのふの岡に秋暮てほにいてやらぬ

しのゝを薄

信夫瀑布

　弘長元年百首しのふの瀧　陸奥

夫木　　　　　　　　　　　後九條内大臣

人しらぬ道に先たつ涙こそしのふの山の瀧

となるらむ

信夫文字摺

土人言、文字摺石今在湍上河上山口村小倉寺

畔、往昔好事者磨麥葉于石上、則見所思之人影

近郊麥隴爲之就蕪、故農夫惡之壓倒其石而埋

于土中、其石猶存焉

有安西某者桑折之產也、說文字磨石曰、其石

東西一丈一尺六寸南北六尺九寸七分地上

高南畔一尺七寸北邊六尺二寸前大守堀田

豆州君招僧麟祥院于洛妙心寺、其僧名鰲雲

記之以立石其記曰陸奧國信夫郡毛知須利石始稱其名不知何時其說亦未詳也只恐萬世之後人不知其斯石故表而立碑於石傍云元祿九年丙子夏五月仲旬福島太守紀正虎表焉右碑詞文字頗拙義理不通況亦其事實不分明乎惜哉令博洽者記之則識古之遠猶視今之近也豈不遺憾耶

假名字例第四曰忍文字摺字古書作綟鈙（巨鈙金切音鈙同持止也）說者曰未詳みちのくのしのふもちすりといへるは源融公也もちすりは信夫の名物衣に文を摺たる也然文字摺と可書也と云說あれ共只又衣の總地に摺と云心歟

歌林良材曰しのふもちすりの事

みちのくのしのふもちすり誰ゆへにみたれんとおもふ我ならなくに

右陸奧國の信夫郡にもちすりとて髮を亂したるやうに摺たる物をしのふもちすりといふ也

伊せ物かたり

かすかのゝわかむらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられす

右武藏野の若紫とこそいひならはしたれと是は春日の里にてよめる歌なれは春日野の若紫とつゝけ侍りむさしのはけふはな燒その歌をも古今には春日野と書かへたりおもふ所なるへし

千載

おもへともいはてしのふのすり衣心の內に亂ぬるかな　　賴政

同

みちのくの忍ふもちすり忍つゝ色には出し亂もそする　　寂然

淸輔

きのふ見し忍ふのみたれ誰ならん心の程
そ限しられぬ
右此歌は宇治左大臣の末子に中納言大將兼長冬の春日祭の使にたち給ひし供の人々色色の花を折てきらめきける中に前右馬助範綱の子清綱か信夫すりの狩衣を着たりけるか心有て見えけれは前左京大夫次の日範綱かもとへいひやりける歌也末の世にもおかしき事は出來にけりとなん
袖中抄第九しのふ文字すり
みちのくの信夫文字摺たれゆへにみたれ
んとおもふ我ならなくに
顯昭云しのふもちすりとは陸奥の信夫郡と云所にもちすりとてみたれたるすりをするなり考伊勢物語云むかしをとこうゐかうふりしてならの京春日の里にしるよししてかりにゐにけりその里にいとなまめいたる女はらから住けりかのをとこかいま見てけりおもほえすふる郷にいとはしたなくてありけれは心ちまとひにけりをとこの着たりけるかり衣のすそをきりて歌をかきてやるそのをとこしのふすりのかり衣をなんきたりけり
かすかのゝわか紫のすり衣しのふのみた
れかきりしられす
となんをひつきていひやりけりつゐておもしろき事ともや思ひけん
みちのくのしのふもちすり誰ゆへに亂れ
初にし我ならなくに
といふ歌の心はへなり昔の人はかくいちはやきみやひをなんしける
私云武藏野のわか紫とていひならはしたるに是はかすか野とよめり奈良の京かすかの里なれはたよりありむさし野は事はなれた

りかのむさし野はけふはなやきそといふ伊勢物語の歌も古今には春日野とあり思へる所あるへし

無名抄に云忍ふもちすりとはみちの國の信夫の郡にみたれたるすりをこのみすりけるとそ云つたへたる所の名をやかくそのすりの名とをつゝけてよめるなり遍照寺の御簾のへりにもすられてありしを四五寸はかりきりとりて故帥大納言の清和院の御簾のへりにまねはきてありしかは世人見て興せし此頃はみなやりとられてうせにけるにや

童蒙抄云もちすりとはみちの國の信夫郡にすり出せるなりうちちかへてみたれかはしくすれり遍照寺のあしすたれのへりにてあり

私云先年に民部卿成範卿左京大夫脩範卿なとにいさなはれて西山の寺めくりし侍りしに遍照寺に詣て侍しかはかの母や御簾はみくりのつると中物にてしのふすりのへりみなうせて侍らさりしかはをの〳〵みすをおりつゝもてかへり侍しか父中納言大將兼長冬の春日祭の使にて下り給し供に人々いろ〳〵の花を折てきらめきけり中に前右馬助範綱か子清綱かしのふすりのかり衣を着たりけるかこゝろありてみえけれは故右京兆次日範綱かもとへ

　きのふ見ししのふもちすりたれならん忍ふのみたれかきりしられす

よの末におかしき事はいてきにけり

東史曰基衡贈忍文字摺千端于佛工雲慶云

古今戀四　河原左大臣

みちのくのしのふ文字摺誰ゆへに亂そめにし我ならなくに

堀河院御時百首歌奉りける時ともしの心

をよみ侍ける

千載夏　　　　　　　　　　　　前中納言匡房

ともしする宮城か原の下露にしのふもちすりかはく夜そなき

客衣露重といへる心をよみ侍ける

同旅　　　　　　　　　　　　　前大僧正覺忠

たひ衣あさたつをのゝ露しけみしほりもあへすしのふもちすり

同戀一　　　　　　　　　　　　從三位頼政

おもへともいはてしのふのすり衣こゝろの内にみたれぬるかな

　　　　　　　　　　　　　　　寂然法師

みちのくのしのふもちすりしのひつゝ色には出しみたれもそする

右大將兼長かすかの祭に上卿に立侍ける供に藤原範綱か子清綱か六位に侍けるにしのふすりの狩衣をきせて侍けるをおかしく見えけれは父の日範綱かもとへさしをかせ侍ける

千載雜上　　　　　　　　　　　左京大輔顯輔

きのふみししのふもしすり誰ならん心のほとにかきりしられす

續後拾遺戀一　　　　　　　　　後法性寺入道

君にかくみたれそめぬとしらせはや心の中にしのふもしすり

同　　千五百番歌合　　　　　　前大納言兼家

いつまてかおもひみたれてすくすへきつれなき人をしのふもちすり

同戀　　　　　　　　　　　　　藤原井信

我爲に憂をしのふのすり衣亂ぬ色やこゝろなるらん

新後撰戀一　　　　　　　　　　常磐井入道前太政大臣

色見えぬ是やしのふのすり衣思ひみたるゝ

そてのしらつゆ

同　後嵯峨院御製

心のみ限しられぬみたれにていくとし月を
しのふもちすり

續後拾遺戀一　御製

いつのまにみたるゝ色の見えつらんしのふ
文字摺ころもへすして

新後拾遺戀一　藤原藤經

こゝろこそ絶ぬ思ひにみたるとも色にない
てそ忍ふもちすり

同秋上　頓河法師

宮木野の朝露わけて秋萩の色にみたるゝし
のふもちすり

後のいろは歌戀部

外集　定家

みちのくのしのふもちすりみたれつゝ色に
も戀は思ひそめてき

光明峯寺入道攝政家歌合行路見戀

夫木　從二位家隆卿

しられしなしのふの衣ゆきすりの人めはか
りにみたれわふとは

家集戀歌中

同　同

移り來し心の色そみたれつゝひとりしのふ
のころもへにけり

久安百首名所硯箱

同　前參議親隆卿

人しれすすれはくろますみちのくの信夫の
もしも何にかはせむ

六百番歌合

同　隆信

衣〱に移りし色はあたなれと心そふかき
忍ふ文字すり

磐手信夫是亦古來相連續之詞

續古今雜下　右大將賴朝

陸奥のいはてしのふはえそしらぬかきつくしてはつぼの石ふみ

新千載戀一　前内大臣

人しれぬ袖のなみたやみちのくのいはて忍ふの山のした水

續後拾遺別　大納言師氏

別路はけふそ限とみちのくのいはてしのふにぬるゝそてかな

信夫鷹下歌共見于前篇然以鷹類集載于此

人々によませ侍ける百首の中に

續古今戀一　中務卿親王

陸奥の信夫の鷹の冬籠りかりにもしらしおもふこゝろを

夫木　能因法師

みちのくの信夫の鷹を手にすへて安達の原をゆくはたか子そ

建久二年左大將家歌合鳥部　定家

信夫やまあたちのをくにかふわしのその羽はかりや人にしらるゝ

佐藤莊司館

上飯坂村西在天王寺中野村之間稱大鳥城鄉人謂之丸山城有寺號瑠璃山吉祥院醫王寺修禪宗莊司父子古墓牌子有之奥將院鐵山宗眞莊司元治墓銘也長五尺廣一尺七寸厚一尺光明院玉華呂蓮婦人墓也長五尺廣二尺六寸吉祥院八過次信次信墓也長七尺五寸廣二尺六寸厚五寸傍有元曆元年三月十八日字請光院劍勝忠信忠信墓也尺寸相同寺中藏義經笈辨慶親筆大般若一卷唐鏡燕子等

或曰莊司古墓在出羽白岩田間有寺號彌勒寺後山謂之丸山城

夫中華之有諡法也以其文字而千載之後分

明考其人一生之心術功業可謂的實嚴明者也本朝欽明帝以降王公大人士庶凡下化異教是以人之於身後必也委身於佛氏假手於浮屠於是乎其名號大亂其字義頗戻其道理併亡其人之心術功業也尤甚矣夫忠信之於仕途其盡其所使之道致死於至忠兒童走卒亦能知之然見此墓銘卑俚凡俗失之之中復失其義實可惜哉

憂思山

福島西南有一山郷人稱吾妻嶽是乃於和歌而號憂思山者也

六帖　赤人

見てもおもひみすてもおもひ大かたは我身ひとつは物おもひの山

六百番歌合　顯昭

年をへてしけるなけきをこりもせてなとふかゝらぬ物おもひのやま

箭筈嶽

在吾妻岳東土湯邑西北

安達郡

東史曰藤基衡贈安達絹千匹於佛匠雲慶云

安達

　大歌所御歌

古今

みちのくのあたちのまゆみ我ひかは末さへよりこしのひ〳〵に

　八月駒迎をよめる

後拾遺秋　源縁法師

陸奥の安達の駒はなつめともけふあふさかの關まてはきぬ

　按往古良馬出于此地而備貢獻者可見

小一條右大將になつき賜ふとてよみてそへて侍りける

同雜三　源重之

みちのくのあたちのまゆみひくやとて君に我身をまかせつる哉

按藤忠平乃昭宣公基經子實賴師輔父也醍醐帝延長五年奉勅上延喜式五十卷村上帝天暦三年正月辭大政大臣致仕八月薨年七十歳贈正一位封信濃侯諡貞信公號小一條或稱枇杷左大臣是也

かたらひ侍りける人のもとにみちの國より弓をつかはすとてよみ侍ける

同雜五　藤原實方朝臣

みちのくのあたちの眞弓君にこそ思ひためたることもかたらめ

　按往時此郷出良弓用之邦國者也

宇治前太政大臣白河にて見行客といふことを

堀河右大臣

關こゆる人にとはゝやみちのくのあたちのまゆみ紅葉しにきや

　寶治百首歌奉ける時寄弓戀

續後拾遺戀三　後深草院辨内侍
陸奥のあたちのまゆみ末つゐにあらぬかた
にもひくこゝろかな

風雅戀三　三條院藏人左近
是や此あたちのまゆみ今こそはおもひため
たることもかたらめ

光明峯寺入道前攝政家十首の歌合に同心
を

新拾遺戀五　後堀河院式部卿典侍
人はいさあたちのまゆみをし返し心の末を
いかゝたのまん

同　中國入道前太政大臣
我になひく契なりともたのまれしあたちの
まゆみあたしこゝろは

新後拾遺冬　法印守遍
かひなしやはや七十にみちのくの安達のま
ゆみ春にあふとも

同戀四　藻壁門院但馬
今はたゝあたちの眞弓ひくてにもかはる心
の程そしらるゝ

名所百首　定家卿
そなたより嵐や空にいそくらんあたちのま
ゆみ春は隣りと

順徳院御製
霜はけさあたちのまゆみちりはてゝのこら
ぬ色を何たのむらん

最勝四天王院名所御障子阿立原
従二位家隆
狩人のあたちのまゆみ末たはみよるやをし
かの秋の紅葉は

安達原野　一作阿立原
阿武隈上流經此原野而過其河東謂之安達原其地有巨石長一丈石面可六七尺土人呼曰白檀相傳義家朝臣征東夷時躡木履而登石上射

而殲夷賊賊徒甚畏之去今履痕存于石上
按白檀鄕老說如斯怪其妄說若實然則右大
臣從三位光俊等詠紅葉零落之句可謂非乎
蓋曩昔之喬木化爲石乎外國亦多此類矣且
夫詳歌句及實方辨內侍左近典侍等所言則
眞爲鄕里所出之良弓焉想夫白檀亦造弓之
木乎未可知俟識者可辨之
石東南印三足址于原上義家射于石上從者走
拾其矢之痕也一步阻十六七町曰三步原
藻鹽草あたちの原　わうしう こもれる　くろつかに鬼 まゆみ 紅葉
霧しくれ　鹿
拾遺戀四　よみひとしらす
みちのくの安達の原のしらまゆみ心こはく
も見ゆる君かな
みちの國のあたち野に侍ける女に九月は
かりにつかはしける
新古今戀五　源重之
おもひやるよその村雲しくれつゝあたちの
原に紅葉しぬらん
嘉元百首歌奉りける時
續後拾遺冬　贈從三位爲子
なこりなきあたちの原の霜枯にまゆみちり
ゆくころのさひしさ
題しらす
夫木冬　能因法師
陸奥の信夫の鷹を手にすへて安達の原をゆ
くは誰か子そ
最勝四天王院障子に安達原
新續古今秋　定家
しくれゆくあたちの原の薄霧にまたちりは
てぬ秋そのこれる
名所百首歌合　家隆
武夫のあたちの原の白眞弓ひくてもやすく
暮る歲かな

生駒を

夫木春　後徳大寺左大臣

安達野の野澤のますけもえにけりいはゆる駒のけしきしるしも

最勝四天王院名所御障子 一後鳥羽院百首

同秋　如願法師

安達野の秋風そよくむら薄憂物とてや鹿のなくらん

久安百首

同　前参議親隆卿

あたち野の尾花かくれにほのみゆる薄やしかのしるし成らん

建保三年名所百首あたち野

同冬　正三位忠宣卿

安達野も雪降にけり狩人のひかぬ眞弓の末たはむ迄

同秋　寂蓮法師

をしかなく安達の原は紅葉して色にかはらぬたけくまの松

建保三年名所百首歌

同冬　正三位家衡卿

しくれゆく安達の原の白まゆみしらす木の葉は散はてぬらん

物名

續後拾遺　観意法師

分詑ぬ露のみしけき安達野をひとりかはらぬ袖しほりつゝ

新撰六帖

朝霧のたな引みれはあたち野のまゆみ色つくしくれさへふる

黒塚

安達原上有二堆塚往昔那智東光坊阿闍梨祐慶者抖擻假宿于此地主婦繰焉深更采薪山中祐慶怪之時其亡而見房中積骸如山驚而出走

追レ之急祈レ慶以レ法術脱二去其塚一猶存二居宅址一也
みちの國名とりの郡黒塚といふ所に重之か妹あまたありと聞つけていひつかはしける

みちのくの安達の原の黒塚に鬼こもれりときくは誠か

拾遺雜下　　平　兼盛

大和物語にかねもりみちの國にて閑院の三のみことの女にありける人黒つかと云所に侍ける其娘ともにをこせたりける

みちのくのあたちの原のくろつかに鬼こもれりときくはまことか

といひたりけりかくてそのむすめをえんといひけれは親またいとわかくなんあるいまさるへからんおりにをといひけれは京にいくとて山ふきにつけて

花盛過もやするとかはつなくゐての山ふきうしろめたしも

といひけりかくてなとりのみゆといふ事を恒忠のきみの女よみたりけると云なん此塚のあるしなりける

おほそらの雪のかよひ路見てしかなとりのみゆけは跡はかもなし

建保百首　　從三位行能

わかためは是やあたちの黒塚に冬草かけて人はいりつゝ

夫木

新六帖　　爲家

安達野の原の黒塚鬼こめてこゝろにくくもよを過さはや

同

百首歌讀　　寂蓮法師

こせりつむ春の山田の黒つかにあたちのま

夫木

ゆみ霞たなひく

吾田多良嶺　作吾田多良野

是乃二本松西嶺也土人稱之二本松岳夏六月望日祭之郷黨守夜終宵群集末詳祭何神也

歌枕名寄云安太多良嶺範兼卿類聚部野立之

或抄云嶺也云云

藻鹽草十七あたゝら野あうしうすむしか

能因歌枕云あたゝらね有神峯也

寄弓

陸奥之吾田多良眞弓著絲而引者香人之吾乎事將成

陸奥國相聞往來歌

安太多良乃嶺爾布須思之能安里都都毛安禮波伊多良牟爾度奈佐利曾爾

譬喩歌

美知乃久能安多太良末由美波自伎於伎氐西良思馬伎那婆都良波可馬可毛

奥羽觀跡聞老志卷之十一　下

仙臺　佐久間義和著

安積郡

延喜式續日本紀及和名集作安積萬葉集作安積香或作朝香新古今序並和歌本紀作淺香今從續日本紀

四十四代元正帝養老二年五月己未割安積等五郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥國安積郡人外從七位下文部直繼足賜姓阿部安積臣

四十九代光仁帝寶龜三年六月丙申陸奥國安積郡人文部繼守等十三人賜姓阿部安積臣

五十代桓武帝延暦十年九月癸亥陸奥國安積郡大領外正八位上阿部安積臣繼守賜外從五

位下以進軍粮也
五十四代仁明帝承和十年十一月庚子陸奥國安積郡百姓外少初位下狛造子押麻呂戸一烟改姓爲陸奥安達連
神名帳曰安積郡三座 大一座 小二座 宇奈己呂和氣神社 名神大 飯豐和氣神社 隱津島神社
五十六代清和帝貞觀十一年三月庚午授陸奥國從五位上宇奈己呂別神正五位下
同十二年十二月丙戌陸奥國安積郡人矢田部今繼大部淸吉等十七人賜姓阿部陸奥臣

安積山

日和田以北有高山其山形如一圓丘嶺上有一樹靑松臨山頭則近鄕入于吟眸是乃安積山也
八雲御抄第五安積山尾張或は伊勢國又末の住に俊頼はあさくはをいへるに病ならしゆへにこりてあざかやまといふへしと俊成は不可然と也影さへみゆる山の井は此あさか山也にこりていふへきなり
夫木集山部安積山 陸奥
有由緒雜歌 緒一作縁
万葉十六
安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國
右歌傳云葛城王遣于陸奥國之時 八雲御抄此間有國字作國司字則意尤備焉 司祗承緩怠異甚於時王意不悦怒色顯面雖設飮饌不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝而詠其歌爾乃王意解脱樂飮終日
甚矣好色之能移人歌詠之能起人也諸兄奉敕而遠游焉可謂嘉賓上客之可敬者也不可不馳驅奔走然國司及緩怠上以輕王命下以謾縉紳其犯上之罪惡不可免焉諸兄之暴怒宜哉於是始覺其不恭而出一女子以解憤恚于一觴一詠之間以謝罪可謂克成得其術矣其事雖似元出乎枕變然非

徒以尤態諛容而取其媚悦其旨趣出于情欲難止者而以優游涵詠述其志是亦不幾樂而不淫者乎於是諸兄亦至憤怒忽消融無些子之凝滯乎肚裏者所以實爲和歌之德也故得其性情之正者男女自然之本心也是以後世貴難波津之詠及此歌而擬歌學之父母其志意之所寓宜乎哉

詠歌本紀曰日本武皇子伏日高見國至忍生國時國首等奉饗而爲事踈大王不喜已欲物餘采女春姫知無爲而好乃進取奉觴奉上文酒調曲謠之大王解情致平均

采女春姫

淺香山影勝見苦焉山之井之淺磨者人乎惟生物歟只

按古來以此歌爲橘諸兄東行時采女之所詠焉於古今序亦兪自是以來和歌者流及天下後世公然解其事實毋其和歌也然今載之本紀而以日本武尊而易葛城王以采女春姫而爲奉觴女其事實其詠歌則同而其人其名則異於是乎蒙潜惑焉耳

市原王歌一首

万葉八

待時而落鐘禮能雨令零收朝香山之將黃變人不知

按右歌載新拾遺秋部令零收作雨灑爲讀

貫之か古今集序に淺香山のことの葉は采女の戯よりよめりかつらきのおほきみを陸奥へつかはしたりけるとき國のつかさともおろそかなりとてまうけなとしたりけれとすさましかりけれはうねめなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにそおほきみのこゝろ解にけり

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

色葉集二十八
あさか山かけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは
葛城の王のみちの國へくたり賜ふに或國乃祇承の司のまうけおろそかなりとて王心よからす是によりて釆女王の御ひさをたゝきて此歌をうたふに王の御心とけて快なりぬとかけりされは古今假名序あさか山の詞は釆女の戯よりよみ出てと有是を大和物語には見山非下大納言の娘をうとねりなるもののぬすみて安積郡あさか山にこもりて家をつくりすへて里にいてゝ物を求てくはせありくに出て二三日こさりけれは待詫て出て山の井に影を見れはありしかたちにもあらすいと〳〵おそろしけなりけりさて此歌を木にかきつけて池にいりて死にけりをとこ歸りていとあさましとおもふに山の井なりける歌をみておもひに死にけり世のふる事になむ有けるとは物語のひか事なるへし

世をのかれて後修行のつゐてにあさか山をこえて侍けるに昔の事思ひいて侍てよみ侍ける　蓮生法師

續
古への我とはしらしあさかやま見えし山井の影にそあらねは

按蓮生乃宇都宮彌三郎逃世而爲浮圖其於仕官高車駟馬之榮旗旄導前騎卒擁後夾道之人相與駢肩累迹瞻望咨嗟其榮達者亦抑幾許哉今取路于往日之江山也顧己則顏色憔悴形容枯槁其所著者草鞋竹杖孑立孤行實所以不勝人情者也於是乎興無窮之感慨生若干之舊懷焉彼之入浮屠雖未詳其由至時世之變化人間之盛衰

則盡寓諸一篇之詠焉故俾人讀之則復發無限之哀情矣可不悲痛哉

續古今雜下　前內大臣

八雲立道はふかきをあさか山あさくも人のおもひけるかな

續千載戀二　爲氏

影をたにいかてか見まし契こそうたてあさかの山の井の水

人に賜はせける

續後拾遺戀一　光孝天皇御製（仁和御製）

淺かやま朝ゐる雲の風をいたみたゆたふこころわれはもたらし

古今序の詞にてよみ侍ける歌の中に

新千載雜中　僧正榮海

しき島のみちのおくなるあさか山ふかき心をいかてしらまし

淺香山

六帖

あさか山かたみの谷にかけこもりわか物おもひはるゝまもなし

歌枕曰今按云霞谷所名歟不詳

夫木春　曾根好忠

淺ましや安積の山のさくらはなかすみ籠てもみえすもあるかな

結緣經百首

同　少將內侍

あさか山あさきなからも山の井の影見る水にゆくほたるかな

仁安三年歌合

同　常陸丸

いかなれはあさかの山のあやにくに紅ふかくもみちしぬれは

安積里

堀河百首　師頼卿

小夜中に思へはくるしみちのくのあさかの
里に旅ねしてけり
歌枕曰此歌金葉沼ト云云堀河百首一本里ト云
云仍里載之

安積沼

在日和田西去安積山西亦二里餘其池塘廣二町餘如今不生菰蒲却生蓮者多

宗久紀行に白河より出羽の國へこえてあこやの松なと見めくりつゝみちの國あさかの沼をすく中將實方朝臣下られけるに此國にはあやめのなかりけれは本文に水草をふくとあれはいつれもおなしことなりとてかつみにふきかへけると申つたへ侍るに寛治七年郁芳門院の歌合に藤原の孝兼か歌にあやめくさ引手もたゆくなかき根のいかてあさかの沼に生けんとよめるは此國にもあるにやと年月ふしんにおほえしかは此たひ人に尋しに當國にあやめのなきにあらすされともかの中將の昔くたり給ひし時何のあやめもしらぬしつか軒端にはいかて都のおなしあやめをはふくへきとてかつみをふかせられけるよりこれをふき傳へたるとかたり侍しかはけにもさる事も侍るにやとしるしつけ侍りぬ

萬葉四中臣女贈家持歌作花勝見
娘子部四咲澤ニ生流花勝見都毛不知戀裳摺可聞

八雲御抄云薦の註にみちの國に花かつみといふたゝかつみともをみなへしさく澤に生ふる花かつみといへり是は中臣女に家持か遣す歌非陸奥如何可尋盧根はひかつみもしけきと同し事也

藻鹽草第二時節部五月五日奥州に菖蒲を

はふかすこもをふくとなり是をかつみふきといふなり昔はみちの國にあやめのなかりし故也陸奥國安積の沼にあり

又かつみ薦奥州にかくいふ也と云云又はかつみ草共いふなり花かつみかつ見るあさかの沼にかきるへきと云說有不可用之いつくにもあめり

無名抄下五日かつみをふく事ある人云橘爲仲陸奥國の守にてくたりける時五月五日家ことにこもをふきけれはあやしくて是をとふその時莊官云此國には昔より今日菖蒲ふく事といふ事をしらすしかるを故中將のみたちの御時けふはあやめふくものをたつねてふけと侍りけれは此國にはしやうふなきよしを申侍けり其時さらは安積の沼の花かつみといふ物あらはそれをふけと侍しよりかくふきそめて侍なりとそいひける中將のみたちといふは實方の朝臣也

故事談曰彼國依無菖蒲五月五日水草は同事とてかつみを被葺けり其後國習にて今如斯

新撰陰陽書云五月可葺水草云云

袖中抄第四かつみふき

　陸奥の安積の沼の花かつみかつみる人の戀しきやなそ

能因か歌枕云かつみとはこもをいふこも花をはなかつみといふ無名抄云かつみといへるはこもを云也かやうの物も所の名も所にしたかひてかはれるか伊勢にあしをは濱荻といへるかことくに陸奥にこもをかつみといへるなめり五月五日にも人の家にあやめをはふかてかつみふきとてこもをそふくなり彼國にはむかし菖蒲の

なかりけるとそうけたまはりし此頃はあさかの沼にあやめをよめるはひかことゝも申しつへし　私云故六條左京兆は申されしは橘爲仲か任肥後守盛房か下向して歌枕共の事申しける陸奥には菖蒲なし五月五日にはかつみふきとてこもをなむふくといひける也而郁芳門院の根合に孝善かよめる

あやめ草ひくてもたゆく長き根のいかてあさかの沼に生けむ

此歌無別難して持になりぬ又俊頼入二金葉一華如何とこそは侍しか江記には右方の人々淺鹿沼間在二陸奥一自レ京一月之路也不レ可レ逢二今日事一所レ引之菖蒲定黄損歟云云此難ははへりけれとも判者は左歌はあさかの沼によせて根をは引く手もたゆくなかしと讀たる事たかひたる心地すれ共すかた歌めきたれは持と申と云云判者右方人難レ加二他難陸奥菖蒲と云難は不出來歟童蒙抄云あの國の風俗にてかつみとはこもをいふなりむかしあやめなかりけれは五月五日にはかつみふきとてこもをふく也橘爲仲任にこもをふきけれは腹たちてみをこなひてふかせける在廳のものをめし出して見れは年老頭白き者にてありいかて年のみよりてかゝることはせさするそといましめけれは中將の御館の御時菖蒲やさふらはさりけん安積の沼のかつみをそふくへきよしさふらひけれは其後かく例になりてつかまつる也といひけれは爲仲止て引入にけりとそかたりつたへたりされは實方の中將の時よりふくなるへし私云彼國にかつみふきと云事あなりけれは信夫郡に今年のこもをかりて御館にかり屋をつ

くりてふきはしむ其後にこもかるとかや
五月五日の事にはあらすそれは菖蒲をそ
ふきはへるなり是は宮内卿師綱朝臣の説
也陸奥司にて下向せる人なり慥事歟可信
之此かつみふきをあしきさまにとりなし
て盛房か語けるか但かの中將はみちのく
の所々歌枕見む爲に中將にかへて任也仍
云陸奥中將さる心なれは菖蒲なくはあさ
かのぬまのかつみをふけとも申されけん
任國のあいた金吾將軍か合戰出來て國中
散々水驛云々又彼國にて逝去畢旁以遺恨
然而數寄の名をとゝむるやさしき事也又
萬葉にはこもとよめる歌おふしかつみと
よめる歌はすくなし

　をみなへしさくさはに生ふる花かつみ
　都もしらぬ戀もする哉

綺語抄云はなかつみとはあしの花をいふ
又こもの花をいふともいへり散木集云は
なかつみといへることをある人のよみた
りけるをいかにいふことそとたつねけれ
はようもしらぬことをしりかほにいふと
きこえけれは心の内におもひける

　鴨のゐる玉江に生ふるはなかつみかつ
　よみなからしらぬ也けり

といふあしのはなといふことはきかす

古今戀四　よみ人しらす

みちのくの安積の沼の花かつみかつみる人
に戀やわたらむ

色葉集花かつみとはこもの花也こもをは
かつみといふ也

宮内卿經長かかつらの山莊にてさみたれ
をよみ侍ける

金後拾遺夏　藤原範永

・五月雨に見えしをさゝの原もなしあさかの

沼の心地のみして

郁芳門院根合にあやめをよめる

金葉夏　藤原孝善

あやめ草ひく手もたゆく長き根のいかてあさかの沼に生けむ

故事談第二郁芳門院根合之時右方有五丈之根云云件の根備前國爭古斗の狹戸にある似菖蒲物の根云云凡菖蒲根長不過丈也前例最長根は杜若なり云云

百首歌の中に旅宿のこゝろをよめる

同雜上　參議師頼

さ夜中におもへは悲しみちのくのあさかの沼に旅ねしてけり

夫木集堀河院御時百首又此歌家集云みちのくの安積の沼の邊に京より人來てとまれりと有作者大納言師頼と有

右歌載前篇中下據金葉沼說重收于此

最勝四天王院の障子にあさかの沼書たる所

新古今夏　雅經

野邊はいまた淺香の沼に刈草のかつみるままにしける頃哉

關白左大臣家百首に見戀

續古今戀一　今上御歌

契をはあさかの沼とおもへはやかつみなからも袖のぬるらん

同

同　定家

うしつらしあさかのぬまの草の名にかりにもふかき江には結はて

百首歌奉りける時沼螢

新千載夏　爲氏

刈てほすあさかの沼の草のうへにかつみたるゝはほたるなりける

題しらす

同戀三　權中納言公雄

花かつみかつみても猶たのまれす安積の沼の淺きこゝろは

續後拾遺戀三　源信明朝臣

花かつみかつ見る人のこゝろさへあさかのぬまになるそ悲しき

戀歌の中に

新續古今戀五　賀茂遠久

契のみあさかの沼のあやめ草ふかきうらみに音社なかるれ

名所百首　順徳院御製

人こゝろあさかの沼のうすこほりかつみなからにきえやはてなん

同　定家朝臣

いかにせむあさかの沼に生ふときく草葉につけて落る涙を

同　家隆朝臣

根をふかく我こそおもへ人こゝろあさかのぬまの春の若草

建保三年名所御障子和歌　定家

ふみしたくあさかの沼の夏草にかつみたれ飛しのふもちすり

俊頼朝臣

あやめ草安積の沼に風吹はをちの里人そてかほるなり

良玉　能因法師

君か爲なつけし駒そみちのくの淺香の沼にあれて見えしを

家集　俊頼朝臣

春駒はあさかの沼にあさりしてかつみのした葉ふみしたくなり

六帖

常陸なる安積の沼の玉藻こそひかは絶すな
我は絶せし
歌枕云右詠安積沼于常州可怪
村上の御時國々の名高き所々を御屏風の
繪にかゝせ給ひて　あさかの沼　なこその關
家集前出詞を以て重出ス　信明
はなかつみかつみる人のこゝろさへあさか
の沼になるそ詫しき
御屏風　あさかのぬま　うましま
家集　忠見
月やとるあさかの沼の水清みよるも秋のな
ひくをそみる
大入道殿御賀の御屏風歌　あさかのぬま　まかきか島　すゑの松山
家集　兼盛
沼水も氷にけらし來しかたの山路も今は絶
やしぬらん

みちのくにのあさかのほとりに京よりく
たれる人たちとまれり　夫木集には東宮女御賀御屏風歌と有
同　元眞
音にきくあさかの沼の朝ほらけたえぬけふ
りは名のみなりけり
最勝四天王院名所御障子　後鳥羽院御製
夫木集
篠わけしあさかの沼の花かつみかつ見る夢
のあくる程なき
建保三年名所百首あさかの沼
同　兵衛内侍
はなかつみかつ道たゆる鴎鳥のあさかの沼
に水馴そめけん
貞應二年當座百首名所菖蒲　民部卿爲家卿
同
菖蒲刈あさかのぬまにましりてもかつみに
しるき夏虫のかけ

同風　　　　　　　　　　　　　　　　　　　信實朝臣

花かつみかつみたれゆく浪風に露やあさかの名に通ふらん

題しらす　　　　　　　　　　　よみ人しらす

同秋

草枕夢は絶ぬるみちのくのあさかの沼の鴫のはかせに

家集　　　　　　　　　　　　　　小大君

くるしきに何もとむらんあやめ草朝香の沼に生ふとこそきけ

堀河百首　　　　　　　　　　　　紀伊

五月雨の隙なき頃は水まさりあさかの沼の名にやたかはむ

後堀河百首　　　　　　　　　　　大進

いかにせむあさかの沼の淺ましやかつみる人にあらぬこゝろは

建保百首下同　　　　　　　　　　定衡

淺からぬあさかの沼の花かつみかつみる色そ出にけるかな

俊成卿女

契こそあさかのぬまの花かつみかつみる色に露そこほるゝ

忠定

つらきをも憂をもしらぬ心かなあさかの沼のかつみなからに

知家

心さしさこそ安積の沼に生ふるかつみるほとはわすれ知るゝ

範宗

人心あさかの沼のかつみてもあかぬやふかきこゝろなるらん

行宗

いかにせむあさかの沼のかつみてもぬるゝは袖のならひ成けり

拾玉　　　　　　　　　　　　　　　　慈鎮

尋來てあさかの沼のかきつはた色はかりこそふかく見えけれ

安積山その山井に忘れ水あさくもそてをぬらすころかな

あやめとるしつの菅笠ならすめり安積の沼の雨の夕暮

淺香山井歌枕作安積井　近江有同名

去安積山西一里餘今市村中有小池爲廢井久後人恐失陳迹也以竹籬圍之纔存其地鄉人曰之山井

藻鹽草山井所山の井との丶字有ても又山井はあさき事にいへりされはあさくは人をおもふなといへる又結手の雫ににこる山の井のといへり又あさかの岩井奥州

大和物語に昔大納言のみむすめいといとううつくしくてもたまへりけるをみかとに奉らんとかしつき給ひけるに殿につかうまつりけるうとねりにて有ける人いかてか見けん此娘を見てけり顏かたちいとうつくしけにけうらなるをみてよろつのこともおほえす心にかゝりて夜るひるわひしくのみ覺えて病になりにけれはせちにきかすへきことなんあるといひけれはあやし何事そといひて出たりけるをさるこゝろまうけしてゆくりもなくかきいたきてぬすみて馬にのせて陸奧國へよるともいはすひるともなくにけてゐにけりあさかの郡安積山といふ所にいほりを作りて此をんなをすへて里にいてゝ物なんともとめてくはせつゝ年月をへにけり此をとこゐぬれはたゝひとり物もくはて山の中にゐたれはかきりなくわひしかりけりかゝるほとにはらみにけり此をとこ物もとめにいてゝゐにけるまゝに四五日こさり

けり待詫て立いて丶山の井に影をうつしみれはありしかたちにもあらすあやしきさまになりにけり鏡もなけれは顔のなりたらんやうもしらてありけるに俄にみれはいとおそろしけなるをいとはつかしとおもひけるさてよみたりける

淺香山影さへみゆる山の井のあさくは人をおもふ物かは

とよみて木に書つけていほりにかへりてしに丶けりをとこものなんともとめて歸れはしにてふせりけれはいとあさましと思ひてけり山の井なりける歌を見てかへり來て是をおもひしに丶かたはらにふせりてしに丶けりよのふることになんありける

橘成季古今著聞集に昔大納言なりける人の御門にたてまつらんとてかしつきける女をうとねりなるものぬすみてみちの國にいにけりあさかの郡あさか山に庵結て侍ける程にをとこ外へ行たりける間に立出て山の井に容をうつして見るにありしにもあらす成にける影をはちて歌を書つけてみつからはかなく成にけると大和物語に記せり

按右歌與采女之所唱歌其詞同而其事實大異也所舉之亞相亦不知何人且不詳何代焉古今叙言淺香山之詞出於采女之戲言然則往昔有此故事而後采女誦所傳世之古調乎公子前者歟想若和歌本紀說至采女作歌焉日本武尊前奉觴者又可怪可驚

古今戀五　よみ人しらす

山の井の淺き心もおもはぬをかけはかりのみ人の見ゆらん

あひ侍ける人の久しう消そこなかりけれはつかわしける

後撰戀一　紀のめのと

影たにもみえす成にし山の井は淺きよりま
た水や絶にし

返し

同　平　貞文

淺してふことをゆゝしみ山の井はほりしに
こりに影は見えぬか

山の井の君につかはしける

同雜二　讀人しらす

音にのみきゝてはやましあさくともいさく
み見てん山の井の水

戀のこゝろをよめる

金葉戀下　右兵衛督伊通

山の井の岩もる水に影みれは淺ましけにも
成にけるかな

よをのかれて修行のつゐてにあさか山を
こえ侍けるにむかしのことをおもひ出侍
てよみはへりける

新勅撰旅　以山井詞重出　蓮生法師

いにしへの我とはしらしあさか山みえし山
井の影にしあらねは

同戀一　待賢門院堀河

袖ぬるゝ山井の清水いかてかは人めもらさ
てかけを見るへき

戀の歌の中に

續後撰戀五　興風

淺からむ事をたにこそ思ひしか絶やはつへ
き山の井の水

續後拾遺釋教　信實朝臣

山の井にあかす影みる外にまたあまれる水
をくみはにこさし

弘安元年百首歌奉りし時

新後撰戀四　院大納言典侍

くやしくそ結初けるそのまゝにさて山の井
の淺き契りを

戀の歌とて

五葉戀一　　藤原宗緒朝臣母

影はかり見しをかことの契にて結はぬ中の
山の井の水

百首歌奉りける時

續千載戀五　　藤原大納言爲世

山の井もまさるみかさにこるらし影さへ
見えぬさみたれの頃

戀の歌の中に

同　　待賢門院堀河

山の井の淺き心をしりぬれは影みんことは
おもひたえにき

同戀一　　前大納言爲氏

影をたにいかてかみまし契こそうたてあさ
かの山の井の水

題しらす

同戀四　　源邦長朝臣

山の井の淺きなからもたのみしは影見しま
ての契り成けり

戀の歌の中に

同　　平貞熙

契りしも拔山の井の忘れ水忘れし後は見る
影もなし

新千載戀三　　壽成門院

たのむへき方こそなけれ山の井の底の心を
くみてしるにも

新拾遺戀二　　冷泉前太政大臣

せきとむる山井の水の影にたに見すは袂を
しほらましやは

續古今戀二　　平親隆

見るからに人の心そくまれぬる岩井さため
し山の井の水

同四　　芬陀利花院前關白

ふかゝらぬ契なからの影たにもなと山の井

は見えす成けむ

三百六十首　陸奥岩井

夫木集　曾根好忠

水草生し淺香の岩井夏くれはあまてるかけのすきかてにする

百首御歌　慈鎮

結ふ手にきえぬ思ひや山の井の流れにすたく螢なるらん

家集　前中納言定家

手馴つゝすゝむ岩井のあやめくさけふは枕にまたや結はん

信明

そほつともこゝにくらさむ山の井の戀しき人のかけやみゆると

源氏若紫部に御文にもいとねんころにかい給てかの御はなちかきなんなほ見給へまほしきとて例の中なるには

あさか山あさくも人をおもはぬになと山の井のかけはなるらん

御返し

右

くみそめてくやしときゝし山の井のあさきなからや影を見るへき

磐瀬郡

先代舊事本紀石背國造志賀高穴穗朝御世二十代景行故建許侶命功建彌依米命定賜國造
四十四代元正帝養老二年正月乙未割白河石背會津安積信夫五郡置石背國
四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳磐瀬郡人外正六位上吉彌侯部人上賜姓磐瀬朝臣大國造道島島足之所請也
神名帳磐瀬郡一座小桙衝神社
五十六代清和帝貞觀五年十二月庚戌陸奥國磐瀬郡人正六位上勳等吉彌侯部豐島賜姓陸奥磐瀬臣其先天津彦根命之後也同六年六月己亥陸奥國岩瀬郡權大領外正六位上磐瀬朝臣長宗借叙外從五位下
同七年十一月己卯陸奥國磐瀬郡大領外從五位下磐瀬朝臣富主授外從五位上

磐瀬社

在須賀川驛口右邊山上建鎌足神社

よみ人しらす

みちのくのあさかの事を人とはゝいかゝいわせの森はこたえむ

會津郡

舊事本紀曰二十三代清寧天皇五年天皇詔以物部木蓮子連遣東海陸奥諸國分大國出州分大郡出縣自陸奥出津輕會津篠生出羽定擦國造規郡縣主別紛宮田首田分別弗揩屯倉至此御代國事分明

四十四代元正帝養老二年五月乙未割會津等郡置石背國

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奥國會津郡人外正八位下文部庭融等二人賜姓阿倍會津臣

五十代桓武帝延曆八年六月庚戌入間廣成池田眞牧安倍黑繩討賊時別將會津壯麻呂已下戰死

神名帳曰會津郡二座 大一座 小一座 伊佐須美神社 名神大
蠶養國神社

會津山

在猪苗代湖東蒼嶺亘南北而白雲遶山腰積翠聳青空是所謂磐梯山也嶺上見焦烟湛湖水碧鱗疊紋山下有毒石觸之者乃死土人曰之殺人石蓋殺生石之屬乎

友則かむすめのみちの國へまかりけるにつかはしける

後撰別　君をのみしのふのさとへゆくものを會津の山のはるけきやなそ　藤原滋幹女

千五百番　法橋顯昭

ほくしかけ鹿にあい津の山なれはいるにかひあるたつをなりけり

題不知　會津山陸奥　よみ人しらす

夫木集　しをりしてゆかましものをあい津山入よりまとふ道をしりせは

堀河院百首　仲實朝臣

會津山すそ野の原にともしするほくしにひをそかけあかしつる

色葉集十一ともしとは照射とかけり五月闇のめさすともしらぬ夜野山に火を燃てやなくゐより二三尺計長き串に火を燃てやなくゐさしくして鹿の目をあはするをねらひてゐるをいふなりほくしとは其火をともすくしくしひち井さきかゝりの名也

藻塩草會津裙野　奥州　しのふの里　ともし鹿

會津嶺

前所謂磐梯山是也特出二諸山一峻極高大故稱二會津嶺一

藻塩草　わうしうあい津ねのくにおさを云

陸奥國歌

万葉十四

安比豆禰能久爾乎佐杼抱美安波奈波婆斯努比爾勢牟等比毛牟須婆左禰

會津里

夫木集　藤原宗國

かひなしや尋來たれとみちのくの會津のさとも名のみ成けり

會津關

藻塩草　奥州　夫木集　會津の關國不二分明一

會津の關

夫木　俊頼朝臣

くることに會津の關も我といへはかたくなしてもぬるゝそてかな

會津川

藻塩草會津川　奥州　異說出羽

六帖

心にもあらてわたりし會津川憂名を水にうつしつるかな

猪苗代湖水

近于若松篠山地在磐梯山下尤大湖也

鹽井

若松米澤境有大山土人稱六十里踰殊嶮嶺也山頂生鹽出于樹根左右但出于右者多涌于左者少出者取之不盡汲而無竭於中華亦四川雲南鹽井之類似羅褒以鹽井富者也

諏訪神社

在若松城中爲鎭守祀健御名方命乃大已貴命子與信州諏訪同社畔有神石高六尺廣可三尺以竹籬圍之有人問之則石對曰唯呵祭之以醴酒

羽黑神社

勸請出羽羽黑所祀乃稻倉魂也

養蠶社

在城下市店每歲蠶事既畢分繭稱絲效功以獻神喜式所謂蠶賣國神社是也

白河郡

前代舊事本紀第十白河國造志賀高穴穗朝御世天降天田都彥命十一月世鹽伊乃己自直定賜國造

同代五十有三年秋八月丁卯朔天皇欲巡狩日本武尊所平諸國冬十月從海路己而幸常陸尙到白河關 此時世已有關門備可見

四十四代元正帝養老二年五月乙未割常陸國之石城標葉行方宇太亘理菊多六郡置石城國割白河石背會津安積信夫五郡置石背國

四十五代聖武帝神龜五年四月丁丑陸奧國請新置白河軍團又改丹取軍團爲玉作團並許之

四十八代稱德帝神護景雲三年三月辛巳陸奧國白河郡人外正七位上文部子老賜姓阿部陸奧臣同郡人外正七位下靱繼人賜靱大伴連

五十四代仁明帝承和三年正月乙丑詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戶

二烟以應國司之禱採得砂金其數倍常能助遣
唐之貲也
同十年十一月庚子陸奥國白河郡百姓外從八
位上勳等狛造智成戸一烟改姓爲陸奥白河連
同帝嘉祥元年五月辛未陸奥國白河郡大領外
正七位上賜姓阿部陸奥臣
神名帳曰白河郡七座大一座小六座　都都古和氣神
社名神大　伊波止利和氣神社　白河神社
八溝嶺神社　飯豐比賣神社　永倉神社
有都都古和氣神社
五十五代文德帝齊衡二年二月癸丑以陸奥國
永倉神列於官社

關山明神

乃都都古和氣神社是也往時關山去今新宮東
可二里松杉鬱鬱峙于白河城外驛口
今社地在白坂奥野之疆建兩社以爲關山神焉
有二寺右曰和光山豐神寺陸奥地也左曰寳壽
山正願寺下野地也右額黄檗徒高泉所書也
神社啓蒙曰白川都都古和氣神社在陸奥白河
郡一宮紀曰大已貴命男味耜託彦根命也
十二代景行帝巡狩到此關門事見前篇
四十九代光仁帝寳龜十二年十二月丁巳陸奥
鎭守將軍從五位上百濟王俊哲言已等爲賊被
圍兵疲矢盡而祈桃生白河等神一十一社乃得
潰圍自非神力何存軍士請預幣社許之
五十四代仁明帝承和八年三月癸巳奉授陸奥
國勳十等都都古和氣神從五位下餘如故

白河關

如今詳關山之地理關門之左右則高山也道路
之通行則狭隘之地也雖未能極山谿之險至于
控阨險要束制咽喉之設則足以爲保障奥羽之
國也縱令受大軍于茲支之關下之坂口張堅陣
于前後進精兵于左右則豈容易得犯其險隘敗
・其利兵乎不知往昔何人選防禦之術而闢關門

于斯地以固關東之變乎可謂精于兵法熟于地利之人也和歌皆咏古關門者也

みちの國のしら河の關こえ侍けるに

拾遺秋　　　　　　　　　　　　　　平　兼盛

便あらはいかてみやこへつけやらんけふしら河の關はこえぬる

白河院にて花を見てよみ侍ける

後拾遺春上　　　　　　　　　　　民部卿長宗

東路の人にとはゝやしら川の關にもかくや花はにほふと

たちはなの則光みちの國にくたり侍けるにいひつかはしける

同別　　　　　　　　　　　　　　中納言定頼

かりそめの別とおもへと白河のせきとゝめぬはなみたなりけり

みちの國にまかりくたりけるに白河關にてよみ侍ける

能因法師

みやこをは霞と共に出しかと秋風そふくしら河のせき

著聞集能因都に在なから此歌を出さんこと念なくとおもひて人にもしられす久しく籠居て色くろく日にあたりなとして後みちの國のかたへ修行のつゐてによみたりと披露し侍りける

白河院鳥羽殿におはしける時をのことも歌合し侍けるに

卯花をよめる

千載夏　　　　　　　　　　　　　藤原季通

見て過る人しなけれは卯花のさけるかきねやしらかはのせき

嘉應二年法住寺殿の殿上歌合に關路紅葉といへる心をよみ侍ける

同秋下　　左大辨親宗

紅葉はのみなくれなゐに散ぬれは名のみなりけりしら河の關

源三位頼政

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉ちりしく白河のせき

無名抄云頼政歌俊惠撰事下建春門院の殿上の歌合に關路落葉といふ題に頼政卿かくよまれて侍りしを其度此題の歌あまたよみて當日迄おもひ煩て俊惠をよひて見せられけれは此歌はかの能因か秋風そふく白河の關と云歌に似て侍りされとこれは出はへすへき歌也かの歌ならねとかくもとりなしてんとへしけによめるとこそ見えたれにたりとて難とすへきさまにはあらすとはからひけれはいま車さしよせて乗られける時貴房のはからひを信してさらは是を出すへきにこそ後の科をははかけ申へしといひかけて出られにけり今度此歌おもひのことく出はへして勝にけれは歸りてすなはち悦いひつかはしたりけるとそ見所有て爾か申したりしかと勝負聞さりし程はあふなくよそにてむねつふれ侍りしにいみしき高名したりとなんこゝろはかりは覺侍りしとそ俊惠かたり侍りし

羇中歳暮といへるこゝろをよめる

同旅　　僧都即性

東路も年もすゑにや成ぬらん雪降にけるしら河の關

續古今秋　　寂蓮法師

逢坂をこえたにはてぬ秋風に未こそおもへしらかはの關

同　　藤原秀茂

都出て日數は冬に成りにけりしくれて寒き
白河の關
同　　　　　　　　　　　　從三位行能
おなしくは越てや見ましゝら河の關のあな
たの鹽釜のうら
東の方にまかりけるにおもひの外に日數
つもりて秋にもなりにけれはよめる
續拾遺旅　　　　　　　　　津守國助
しら河の關までゆかぬ東路も日數へぬれは
秋風そふく
同　　　　　　　　　　　　觀意法師
夕暮は衣手寒き秋風にひとりやこえむしら
河の關
みちのくにゝまかりてよみ侍りける
新後撰旅　　　　　　　　　藤原賴範女
音にこそ吹と聞にし秋風のそてになれぬる
白河のせき

玉葉旅　　　　　　　　　　法師住辨
こえ來ても猶末遠し東路のおくとはいはし
しらかはの關
續千載秋上　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成
月を見て千里の外をおもふにもこゝろそ通
ふしら河のせき
同旅　　　　　　　　　　　源邦長
秋風はおもふかたより吹そめて都戀しきし
らかはのせき
關雪を
續後拾遺冬　　　　　　　　大江貞重
別にしみやこの秋の日數さへつもれはゆき
のしらかはのせき
をみころも
同物名　　　　　　　　　　津守國助
みやこいてゝ日數おもへは道遠みころもへ
にける白河の關

堀河院の百首歌にせき

同旅　祐子内親王家紀伊

こえぬよりおもひこそやれみちのくの名になかれたるしらかはの關

同　源兼氏朝臣

かきりあれはけふ白河の關こえてゆけはゆかるゝ日數をそしる

新千載旅　證空上人

光臺に見しはみしかは見さりしを聞てそ見つるしらかはの關

みちの國へ修行してまかりけるに白河の關に留りて所からにや常よりも月おもしろく哀にて能因か秋風そ吹と申けんおりいつなりけんとおもひ出て名殘おほけれは關屋の柱に書付ける撰集詞にはあつまのかたへ修行し侍りけるに白河のせきにて月のあかゝりけれは關屋の柱に書付侍りしと有

山家集又新拾遺旅　西行法師

白河の關屋を月のもる影は人のこゝろをとむるなりけり

さきに入て信夫と申渡りあらぬものことにおほえてあはれ也都出て日數思ひつゝけゝれは霞と共に侍ることの跡たとるまて來にける心ひとつも思ひしられてよみけり

同

都いてゝ相坂こえしおりまてはこゝろかすめしゝら河の關

新拾遺旅　丹波忠守朝臣

今宵こそ月に越ぬれ秋風の音にのみきくしら河のせき

羈旅

同　後九條前内大臣

秋かせにけふしら河の關越ておもふも遠し
ふるさとの山

同　　大藏卿高博

かへるさは年さへ暮ぬ東路やかすみてこえ
しらかはのせき

新後拾遺旅　　左大臣

都をは花を見すてゝ出しかと月にそ越るし
ら河の關

關旅を

新續古今旅　　平　光俊

逢人もまた白河の關こえて秋かせふくとた
れにつてまし

寄關戀　　源滿元朝臣

へたてゆく人の心のおくにこそ又しらかは
の關はありけれ

夫木集

建保三年名所百歌めしける時

名所百首下同　　順徳院御製

たよりあらは都へつけよかりかねもけふそ
越つるしらかはの關

定家朝臣

白河の關のせき守いさむともしくるゝ秋の
色はとまらし

家隆朝臣

しら河の關のもみちのからにしき月に吹し
く夜半のこからし

名所御障子和歌　　定家卿

くるとあくと人を心にをくらせて雪にもな
りぬしらかはのせき

はこかたの磯にて雪にのほるに

家集　　源　重之

しら河のせきよりうちはのとけくていまは
こかたのいそかるゝかな

建仁元年影供歌合關路鶯

夫木集　従三位家隆卿

雪の色はまた白河のせきの戸に明ほのしるき鶯のこゑ

治承二年右大臣百首霞

同　俊成卿

あふさかにけさは來にけり春霞夜半にや立ししらかはの關

南北百首

同　慈鎭和尚

音羽やまけさの霞をかき分て心そかよふしらかはのせき

嘉應元年歌合

同　皇太宮后大夫俊成

しら川の關と散敷花みれは苔の莚はうつもれにけり

光臺院入道二品親王家五十首關路花

同　西園寺入道太政大臣

山さくら花の扃を明そめて風も留らぬしら河のせき

歌林歌合關路落花

同　前大僧正覺惠

影をたに留めて花は散にけりかひこそなけれ白河の關

建仁二年五十首關路花

同　俊成卿女

すくる春月日は花もしらせけり秋かせ吹し白河のせき

土御門內大臣家歌合

同　前中納言定家卿

夕つく夜入ぬる影もとまりけり卯花咲る白河の關

建保三年名所百首

同　正三位忠定卿

染あへす木の葉や落る秋の霜けさ白河のせ

きの嵐に

最勝四天王院名所御障子に

同　　俊成卿女

そことなく山路は雪のうつむまて名をたの
み來し白河の關

同

同　　後久我太政大臣

しら河の關の秋とは聞しかとはつ雪わくる
山の邊の道

名所歌合白河關

同　　藤原忠隆

浪かゝる末の松山みゆる哉雪ふりそむるし
ら河の關

家集に關路雪白河の關陸奥

同　　式部卿爲家

みとりなる松の木末に雪とちておのか名し
るき白河のせき

同　　後京極

あけぬより春の霞も立やせむこよひはさす
なしらかはの關

時節類方角部ひつしさる

藻鹽草　　兼輔

みちのくの白河こえてわかれにしひつしさ
る／＼ゆけとはるけし

堀河百首

同　　中納言師時

しら川のせきにや秋は留るらむてる月影の
すみわたるかな

秋風抄　　慈鎭

月をおもふえそか千島に秋かけてかつ／＼
こよひ白河の關

かせたちし秋より冬に年越てけふは花みる
しら河のせき

詠藻　　俊成

色々の木の葉に道もうつもれて名をさへたとるしらかはのせき

雪の浪岩こす瀧と見ゆるかな名に流れたる白河のせき　為氏

白河の關の主の宮はしらたかよにたてしちかひなるらん

夫木集　西行法師

おもはすはしのふのおくへ來ましやは越かたかりししらかはのせき

同　後鳥羽院御製

ゆきにしく袖に夢路も絶ぬへしましたしら河の關の嵐に

建保百首下同　定衡

みちのおくしらぬ山路を尋てもゆふきりふかししらかはの關

俊成卿女

なにとなくあはれそふかきゆくかたもまたしら河の關の夕霧

兵衛内侍

あはれさはいつくをはてと白河の關吹こゆる秋の夕かせ

康光

行末もまた霧ふかき夜をこめてたれしら川の關路越らん

宗久紀行にありかさためすまとひありきし程にむろの八島なとも過て身にしみ侍りき春より都を出侍りしに又此秋の末に此關を越侍りしかは古曾部の沙彌能因か都をは霞とともに出しかと秋風そふくしら河の關と詠しけり實となりけりと思ひあわせられ侍りかの能因は此歌の為に猶その境にいたらてよめらんは無念なりとて東へくたりたるよしにてしはしこもり

ゐて此國にてよみけると披露しけるとかや一度はうるはしくくたりけるにや八十島の記なといふ物を書置て侍りたけたの大夫國行か氷のひんかきけんまてこそなくとも此所をはいさゝか心遣さうして過へかりけるをさも侍らさりしこそ心おくれしに侍りしか

都にもいまやふくらんあきかせの身にしみわたる白河のせき

和泉式部墓

在石川驛中郷人曰之下泉

按和泉式部父越前守正四位下大江雅輔母ハ越中守保衡女上東門院侍女後嫁和泉守道貞仍稱和泉式部其女乃小式部内侍共於和歌得閨秀之佳名胡奚終于東陲邊地耶其墓ハ乃在洛東北院尤可怪

磐城郡

舊事本紀石城國造　志賀高穴穂朝坂連許呂命定賜國造

四十四代元正帝養老二年五月乙未割石城等六郡置石城國

四十八代稱德帝天平神護二年十一月己未以陸奥國岩城宮城二郡稻穀一萬六千四百餘斛賑給貧民

同神護景雲三年三月辛巳磐城郡人外正六位上丈部山際賜姓於保磐城臣大國造道島足之所請也

五十四代仁明帝承和七年三月戊子陸奥國磐城郡大領外正六位上勳八等磐城臣雄公遄跡戎途忘身決勝居職以來勤修大橋廿四所溝池堰廿六所官舍正倉一百九十宇宮城郡權大領外從六位上勳七等物部己波美造私池漑公田八十餘町輸私稻一萬一千束賑公民依此公半

並假叙外從五位下

按雄公已波美之爲人也克舍已而救人逞自力而奉公義可謂有補益于國家之人也後世爲法之則其功績亦不可量焉然徒沒于篇中而無識之者矣且夫兩郡有司吏民讀之仰其志則庶幾於職分亦足以盡其所守也嗚呼善人哉

同十年十一月己亥陸奥國磐城郡大領備外從五位下勳八等磐城臣雄公書生黑川郡大領外從五位下勳八等靱伴連黑成並授從五位上褒公勤也

夫人之處世雖一旦得之無其實則竟失之而無見其所成就焉若惹虛名者則久而必衰矣雄公向以善蒙稱譽今已四歲未嘗變初志功業不衰焉重賜美名矧又以書生見舉宜哉功烈之傳于今也黑成亦想好人也

同十一年正月辛卯陸奥國磐城郡大領外從五位下勳八等磐城臣雄公戸口廿四人男十四人女十人磐城臣貞道戸口十人男七人女三人磐城臣弟成戸口四人男三人女一人磐城臣秋正戸口三人男二人女一人賜姓阿倍磐城臣

同帝嘉祥元年五月辛未磐城國擬少毅陸奥文部繼島賜姓阿倍陸奥臣

神名帳曰磐城郡七座並小　大國魂神社　二俣神社　温泉神社　佐麻久嶺神社　住吉神社　鹿島神社　子鍬倉神社

五十六代清和帝貞觀五年十月戊子陸奥國无位八牡姫小結温泉神授從五位下

菊田郡

舊事本紀曰道奥菊田國造輕島豐明御代坂道許男命兒屋主乃禰定賜國造

奈古曾關

常陸陸奥邦疆相傳大古素盞雄尊東征登此山頭經此地而號名古曾關後人山上立宮社祭牛頭天皇以素盞雄垂跡之地也六月望日行祭禮矣其地也關山下而爲關門焉高七丈餘長三十四間濶三間餘南常州多河郡青野村是乃太田備中守資重領北奥州菊田郡關田村内藤右京亮領地東常州九面邑是乃商舶輻輳之地民屋百餘軒漁家亦相雜相去關山五町餘九面以南山外乃平形海濱去九面三町餘是亦江村五百餘軒備中守封境西乃高山過山中六七町有往昔之關趾今通行之道後人所關而非古昔之地其下曰名古曾坂此地往昔多櫻樹五十年前枯槁盡爾後領主祖父内藤左京亮義泰植百餘株今所存纔三十餘株

寛平の御門御くしおろさせ給ひての頃御帳のめくりには人はさふらはせ給ひてちかうもめしよせられさりけれは書て御帳にむすひつけゝる

後撰戀一　　小八條御息所

たちよらは陰ふむはかりちかけれと誰か名こその關をすへけん

按寛平御門乃宇多帝也在位僅十年倦萬機屈政務而退朱雀院昌泰二年己未三十歳而落飾以仁和寺益信爲戒師焉是謂寛平法皇子曰身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也又曰君子無不敬也敬身爲大身也者親之枝也敢不敬與不敬其身是傷其親傷其親是傷其本傷其本枝從而亡故自天子至庶人壹是皆以脩身爲本然今尊爲天子富有四海人間之至極何以加之哉帝

弗思之妄棄天位輕脫袞冕如今以崇高巨得之身而忽入浮圖俾身體髮膚至毀傷之極尤可痛恨也夫有天地而有男女乃生稟之本人倫之始也於是乎天子諸侯已下各設之有制度而備其數焉因茲而人道立天性全今身爲浮屠而猶未免在深宮而近于媚態矣故令后妃夫人發咨嗟詠嘆之怨者抑是何義耶是皆不能脩其身所以出淫佛歸法之非心也可不監戒哉

春は東より來たるといふこゝろをよみ侍りける

後拾遺春上　源師賢朝臣

東路は名社の關もあるものをいかてか春の越てきつらむ

金葉戀下　源俊賴朝臣

名こそてふことをは君かことくさを關の名そともおもひけるかな

陸奥にまかりける時名社の關にて花の散けれはよめる

千載春下　源義家朝臣

ふくかせを名こその關とおもへとも道もせにちる山さくらかな

一日閲源君陸陽侯名社關之詠吟而審其意味蓋亦游優厭飫之氣象也實風壇雅藻之作而固一世之雄也豈魏武橫槊之勇而已乎哉就想斯時蠻夷猾夏東奥大亂仍以陸侯有承天之器而奉勅祇役帥王師而征實天下之大事也夫將帥之於軍旅事之成敗得失兵之利鈍勇臆命之死生存亡咸所以繫于主將而是亦天下之重任也且夫客路之勞勞途程之漫漫其間細馬馳驅山野暴露辛苦艱難抑幾何哉何遑及歌曲詠吟之娯耶况又時臨天下之大事身處天下之重任乎然侯在武門而稱海内之英雄且學江師而聞羣賢之遺法智謀兼

備勇敢秀衆華夷畏之如神於是視賊也猶弄
嬰兒使兵也猶運指掌故雖過關山險阻之地
肚裡悠然而於其愛風光之情亦靄然而生於
是乎不得止而乃發吟興且對落花之飄零也
遂寫品題而朗吟去聞者愕然驚其勇壯風雅
之度量矣自是都下相傳美之人知家藏剩五
條三位收之撰集以上達　叡聞天下後世足
以識從容不迫之氣象觀大膽勇猛之良器矣
烏虖依一首之咏吟而著無窮之識趣焉往昔
程夫子說易曰凡師之道威和幷到則吉也是
不幾所謂威和並到者也非耶又有言曰帥師
總衆非衆所尊信畏服則安持得人心之從又
曰才謀德業衆所畏服則是也是皆足以備于
斯侯矣宜哉敗夷虜于坎險之中致太平于轂
卒之間令聞廣譽偏天下後世可視其實矣
或曰於侯之和歌也有似通曉其意而實則未
理會者其說之詳可得而聞也荅曰予素非知
倭歌者如何得句解字釋哉然試推其理而考
其旨則略似有可領會其大意者矣夫關之爲
言閉也扃也所以譏其異物察其利害而禁非
常也故有禦之而剽掠顚越者則必加其禁錮
致其刑戮者也豈忍宛然坐視其暴逆哉是乃
所以設關之爲名也今山花之値春風而飄零
落盡者猶行旅之値禦人而剽掠顚越也尤不
可不加其禁也雖然不能以閉扃專制彼春風
而微微習習却委其飄零使山花空滿于行路
上豈非失閉扃之實者哉故痛擧其關也不關
之實而益質空名之罪也如此可謂能述惜風
光之情而却罪關之不稱其名者也向尊敬有
詩曰留春不用關城固花落隨風鳥入雲其大
意與侯倭歌相似西行吟杜鵑句中有言曰須
專鳴聲乎山田杉下也侯意亦在此專字是以
天下後世所爲絕唱也

新勅撰戀一　　小町

見るめかる海士のゆきゝの湊路に名社の關
も我すへなくに
西行法師
東路のしのふのさとにやすらひて名こその
關をこえそわつらふ
續後撰夏　よみ人しらす
ほとゝきすなこそのせきのなかりせは君か
ねさめはまつそきかまし
實方朝臣陸奥の任に侍ける比五月まてほ
とゝきすきかぬよし申て都にはきゝふり
ぬらん杜鵑關のこなたの身こそつらけれ
といへりける返事につかわしける歌
新後撰戀三　後嵯峨院御製
きく度に名社の關の名もつらしゆきてはか
へる身にしられつゝ
戀の御歌の中に
玉葉戀三　一品資子内親王
夢路には名社の關もなしといふに戀しき人
のなとか見え來ぬ
同三　和泉式部
名社とは誰かはいひしいはねとも心にすふ
る關とこそ見れ
同五　安嘉門院四條
さてやさは越にしものを今更にまたは名社
の關守そうき
前右近大將頼朝朝臣都に上りて侍けるか
あつまへくたりなむと申けるころつかわ
しける
續千載旅　前大僧正慈鎭
東路の關に名社の關の名は君をみやこにす
めとなりけり
返し
同　前右兵衛大將頼朝
都には君にあふさかちかけれは名社の關を

人のれうに　　中務

まつ人のとを〳〵みこそ詫しけれ名社の關に今はさはらし

なこそのせき

みちのくの名こその關に來にけれときくきく猶もこえぬへき哉

名古曾關　　信明

名こそ世に名社の關は行かふと人もとかめす名のみ也けり

奈古曾山　見名寄歌枕

是乃關山也前所謂名社坂之山也

亭子院御時歌合名社の關　陸奥　　貫之

おしめともとまりもあへす行春を名社の山の關もとゝめす

九面濱

關山東濱多文貝細石設盆池尤可愛

西行法師

九面や浪打よせて道もなしこゝをなこそのせきといふらん

岩崎郡　按乃岩城地下楢葉亦標葉之誤也

此郡名及楢葉郡亦不見古來郡名

四倉濱

在田綱村近于女濱有善逝堂土人曰之波立薬師其堂飛驒内匠所斧斤也

西行法師

みちのくの野崎のうらに旅ねしてしはし夢みん波立の寺

久濱

近于楢葉郡古日之好見濱

和泉式部

駒なつむ岩城の山をこえ過て介もこのみの濱にかもねん

佐波古御湯

相馬領曰之湯本驛西南有大嶽曰三箱山古之佐波古山是也三箱文字土人誤佐波古者也其山下有温泉是乃佐波古御湯也喜式温泉神社是也

物名

拾遺　　よみ人しらす

あかすしてわかるゝ人のすむさとはさはこのみゆる山のあなたか

藻塩草五　　同

よとゝもになけかし君をみちのくのさはこのみゆとゐはせてしかな

女濱

一名小名濱有鹿島神社神名帳鹿島神社是也

住吉館

岩城判官居城是也建住吉神祠是亦喜式所記住吉神社也

標葉郡

四十八代稱徳帝神護景雲三年三月辛巳標葉郡人正六位上文部賀例努等十人賜姓阿部陸奥臣是亦島足之請也

五十四代仁明帝嘉祥元年五月辛未標葉郡擬少領陸奥標葉臣高生賜姓阿部陸奥臣

神名帳曰標葉郡一座小　苕野神社

標葉境

堀河百首　　顯中

東路のしねはさかひにやとりして雲井にみゆるつくば山かな

奥羽観蹟聞老志巻之十一　終

遠きとをしれ

新千載戀三　右大將道綱母

こえ詫る相坂よりも音にきく名社はかたき
關としらなん

新拾遺戀二　贈從三位爲子

きくもうしたれを名社の關の名そ行相坂を
いそくこゝろに

前大納言隆房

いかに又こゝろひとつの通ひ路も末は名社
の關となるらん

新續古今戀一　前大納言爲氏

いとはるゝ我身名社の關の名はつれなき中
やはしめ成らん

歌枕　俊頼朝臣

東路の名社のせきのよふこ鳥なにゝつくへ
き我身なるらん

堀河百首　下同　權僧正永縁

相坂は越にしものを今はたゝなこその關の
名こそつらけれ

大納言師頼

立別れ廿日あまりに成にけりけふや名社の
關をこゆらん

顯仲

遙々と尋來にけりあつま路に是や名社のせ
きとゝふまて

河内

戀詫てきのふもけふも越へきに名社の關を
誰かすへけん

建仁元年歌合

夫木集　家長朝臣

東路はなこその關ときくからに人くといと
ふうくひすのこゑ

久安百首

同　待賢門院

行やせむゆかすやあらまし東路のなこその
せきによふこ鳥哉

同　讀人しらす
東路の名こその關に生なからなほ人まねく
はなすゝきかな

同　忠盛朝臣
春風を名社の關の遁さくらけふいく日にか
たつねきつらん

同　前右兵衛督爲教卿
關時鳥といふことを
なけやいま遠方すくる時鳥名にはなこその
關といふとも

同　後九條内大臣
寶治二年百首
夢路にもなこその關やつゝくらん我身にか
よふ面影そなき

同　基俊
名にしおはゝ名こそといふと我妹に我けふ
こさはゆるせ關守

同　兼昌
都人戀しきまてに音せぬはなこその關にさ
はるにやあらん

拾玉　慈鎮
みちのくや春まつ島のうちかすみしはし名
こその關路にそみる

千五百番歌合　顯昭
かへる春思ひやるこそくるしけれなこその
關の夕暮のそら

小侍従
かくはかり名こそのせきとおもひける人に
心をなにとゝゝめん

新葉集　文貞公
ことさらに名社の關を相坂の山のあなたに
誰かすへけむ

非賣品

昭和三年八月二十日印刷
昭和三年八月廿五日發行

編輯兼發行者　宮城縣名取郡岩沼町南館下參番地
鈴木省三

印刷者　東京市芝區金杉新濱町拾貳番地
和田助一

印刷所　東京市芝區金杉新濱町拾貳番地
單式印刷株式會社

發行所　宮城縣仙臺市勾當臺通貳拾八番地
仙臺叢書刊行會